
アナザー：ロミオとシンデレラ

目白皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナザー：ロミオとシンデレラ

【Nコード】

N5419V

【作者名】

目白皐月

【あらすじ】

拙作『ロミオとシンデレラ』のレン視点バージョンです。他に、ミクなどの視点が入ります。ピアプロに掲載しているものと重複投稿になります。

注意書き

この作品は、doriko様の「ロミオとシンデレラ」を題材に、黒刃愛様が作成したPVにインスピレーションを受けて、私が書いた小説『ロミオとシンデレラ』の、レン視点バージョンです。レン以外に、ミクなどの視点が入ります。

もともとは頭の中を整理するために書いていたのですが、割とまとまって一つの作品としても読めると判断したため、掲載することにしました。

基本的に話の中身は『ロミオとシンデレラ』と同じです。

こちらを先に読んでも問題はないと思いますが、個人的には『ロミオとシンデレラ』を読んでから、こちらを読んだ方がいいかなとは思いますが。

大丈夫？

その日、俺は前から楽しみにしていた舞台を見るために、劇場に行っていた。ミュージカル、『RENT』の来日公演。映画を見てからというものの、実際の舞台を見てみたくてたまらなかつた。

初めて見た『RENT』は、想像以上に素晴らしかった。特に「オーバー・ザ・ムーン」の前の曲では、音が空から降ってくるんじゃないかと思った。ラーソンは空から落ちてくる雪を、音で表しかつたんだろう。きつとそうだ。

上演が終了した後も興奮が冷めないの、あれこれ考えつつロビ―を歩く。なんでラーソンはあれ一作で死んでしまったんだ。もっと長生きしてくれていたら、どんな作品が生まれていただろう。ああでも、あのタイミングで亡くなったから伝説となった部分も大きいし、伝説になったからこそこうして俺が見るチャンスもあったわけ、でも、やっぱりもっとたくさん作品を……。

そんなことを考えていると、肩に誰かがぶつかった。……人が多い。ちよつと立ち止まって、俺はそんなことを考える。やっぱりそろそろ外に出るか、そう思った時。

俺の視線のちよつと先で、大きな鞆を持った男が俺ぐらいの年の女の子を追い越そうとした。はずみで、鞆が女の子の背に勢いよく当たり、女の子はそのまま倒れこんでしまう。俺が声をあげる間もなく、男はさつさと行ってしまい、後には倒れた女の子だけが残されていった。……気づけよ、ほんくら。

女の子は倒れたまま起き上がれずにいる。……倒れるところを見てしまった以上、放っておくわけにも行かないか。俺は近寄って、女の子に声をかけた。

「大丈夫？」

女の子が振り向いてこつちを見た。あれ……この子、知ってる。同じクラスの巡音リンさんだ。こんなところで会うとは思わなかつ

ただ。

「……あれ、巡音さん？ どうしたの？」

俺は膝をついて彼女の隣にしゃがんだ。向こうはびっくりした表情でこっちを見ている。

「ごめんなさい。誰だったかしら？」

「……えーと。確かにまとも話をしたことはないけど、クラスメイトなんだから、憶えててくれよ。それはちょっとないんじゃないか？」

「同じクラスの鏡音レンだよ」

巡音さんは俺を見て、考え込む表情になった。

「ああ、ごめんなさい。制服じゃないと感じが違うんでわからなかったの」

そういうもんか？ 俺だって巡音さんの私服姿見たの初めてだけど、すぐわかったけどなあ。……そういうことをあれこれ言っても仕方がないか。

「ふーん……で、どうしたの？」

「転んだ拍子に足をくじいたみたい」

「立てそう？」

「……多分」

巡音さんはそう答えたけれど、表情を見る限りじやかなり辛そうだ。一人で立つのは無理だろう。俺は彼女に手を差し出した。

「俺につかまりなよ」

巡音さんは俺の手を取ろうとして、ためらった。なんで遠慮してるんだらう？

「遠慮しなくていいって。足、相当痛いんですよ？」

俺がそう言くと、巡音さんはちよつと考えて、それから俺の手を取った。俺は巡音さんの片腕をつかみ、自分の肩に回して、それから彼女を引き上げて立たせた。

巡音さんはまだ遠慮しているのか、あまり俺の方に体重をかけようとしなない。別に巡音さん支えたぐらいで、潰れるほどヤワじゃない

いんだけどな。

「じゃ、俺に体重かけて」

「え……？」

どうも意志の疎通が上手くいってない感じがする。このままというわけにもいかないの、俺は巡音さんを支えながら歩いて、ロビーの椅子のところまで行くと、そこに座らせた。さてと、こういう時は冷やすといいんだけど……。

「ちょっと待ってて」

そう言うと、俺は巡音さんの返事は聞かずに歩き出した。ロビーの先に、ジュースとか売ってる売店があったはずだ。

売店に行くと、俺は「足を痛めた女の子がいるので、氷をわけてもらえませんか？」と頼んでみた。すると、「あら、それは大変ねえ」という言葉と共に、あっさり氷をビニール袋に詰めて渡してくれた。……言ってみるもんだ。

氷の入ったビニール袋を持って、俺は巡音さんのところに戻った。「ほら、これで足冷やしなよ」

巡音さんはビニール袋を受け取って、足首に当てた。見るからにほっとした表情になる。俺もちょっと安心した。

「ありがと。どうしたの、これ？」

「その売店でもらってきた。足痛めて歩けない子がいるって言うて。……巡音さん、これからどうする？」

さすがに彼女の自宅まで支えていくってのは無理があるし、俺にはこれ以上の治療とかはしてやれない。休日だから病院とかも閉まってるだろうし……。そんなことを考えていると、巡音さんがはっとした表情になった。

「迎えが来る予定になっているの。だから、そこまで行ければいいんだけど」

そういや、巡音さんの父親って半端なく大きな会社の社長なんだっけ。学校にも、運転手つきの車かなんかで送り迎えしてもらってたはずだ。初めて見た時は驚いたもんだ。そんなものが存在してる

なんて思わなかったしな。多分、その車が迎えに来てるんだろ。

「迎え？ そう言えば、巡音さんのところって確かすごかったよね」
巡音さんは困った表情でうつむいてしまった。……ありゃ、しまった。こういうことを指摘してはいけなかったらしい。

「じゃ、そこまで送ってくよ」

「え……いいわよ。鏡音君に悪いわ」

別に遠慮しなくてもいいんだけどなあ。俺が言い出したんだし。

「けど、その足じゃ歩くのも辛いんじゃない？ 俺なら平気だから気にしないでいいよ」

巡音さんはしばらく悩んでいたが、結局のところ承諾した。

「本当にいいの？」

「くだい。男に二言はない」

俺はもう一度巡音さんを支えて、立ち上がらせた。と、座席の上
に何かが残っている。

「巡音さん、プログラム忘れてる」

巡音さんがプログラムを拾う。表紙には『ロミオとジュリエット』
と書かれている。……シェイクスピアか。

俺は巡音を支えて、出口へ向かった。劇場の外に出ると、そんなに離れていないところに、巡音さんが言っていた車が止まっている。
車に近づくと、運転手らしき人が血相を変えて駆け寄ってきた。

「リンお嬢様っ！ どうなさったんですか！」

「……転んで足を捻ったの。歩くのが辛くて困っていたら、助けてくれたのよ」

「そうですか。お嬢様がお世話になりました」

運転手さんが頭を下げる。……えーと、なんか反応に困るな。

「困った時はお互い様ですから。気にしないでいいですよ」

我ながら言っていることが変だ。とりあえず、巡音さんを車の後部
座席に乗せる。さてと、これでもう大丈夫だよな。

「それじゃあ、また明日学校で」

そう言って、俺は巡音さんと別れた。

舞台が終わった後、CDショップやら本屋やらに寄ったので、家に帰った時はちよつと遅くなっていた。

「ただいま」

帰宅すると、姉貴はちょうど台所で夕飯を作っているところだった。

「あ、レン、お帰り。舞台はどうだった？」

「言葉にできないぐらいすごかった。姉貴、晩飯は何？」

「今日は餃子よ。まだちよつと時間かかるから、もう少し待って」

「じゃ、俺はその間に風呂洗って沸かしとくよ」

俺の家はいわゆる母子家庭な上に、母親が去年から海外赴任しているの、現在この家で生活しているのは俺と姉貴の二人だけだ。

といつても、姉貴は社会人だし、俺も高校生だから、生活にそんなに不都合はない。面倒ではあるけれど。家事も大体折半して二人でやっている。例えば晩飯作りなら、月、水、金が俺。火、木、土が姉貴。日曜は週ごとに交代。食器洗いは作らなかつた方の担当。掃除は各自の部屋以外は、一階が姉貴、二階が俺。洗濯は姉貴、風呂洗うのとゴミを出すのは俺。こんな具合だ。もちろん、個々の都合もあるから、いつもこうつてわけじゃないけど。

風呂を洗って沸かした後、部屋に戻って買ってきた雑誌を広げていると、下から姉貴が「ご飯できたわよ」と声をかけてきた。階段を下りて下の部屋へ行く。

二人で晩飯を食べていると、姉貴が、不意にこんなことを言ってきた。

「そう言えば、今日スーパーで珍しい人に会ったわよ」

「誰？」

「えつと……ほら……あの子よあの子」

「それじゃわかんないよ」

「名前が出てこないのよ。あんたが前につきあつてた子」

「ユイか。……よく憶えてたね」

別れてもう一年以上になるんだよな。それにしても、姉貴はよくユイのことがわかったな。世の中には服装が変わっただけで、誰だかわからなくなる人もいるのに。

「ああ、そうそう、ユイちゃんだった。向こうが声かけてきたのよ。レン君は元気ですかって」

「へえ……」

俺は反応に困って、適当な返事をする。一年近く前に別れた相手のことなんか、今更持ち出されてもなあ。

「あんた、冷たいわねえ」

姉貴はそう言っただけをしかめた。

「……どういう反応をすりゃいいんだよ」

「普通他に何か訊くことあるんじゃない？　元気そうだった？　とか」

「……じゃ、元気そうだった？」

「とってつけたように訊かれてもねえ……」

おい。俺がむっとすると、姉貴は笑い出した。

「冗談よ冗談。元気そうだったわ」

「そりゃ良かったね」

俺がそう言うと、姉貴はちよっと考え込むような表情になった。

「……復縁とか期待しないんだ」

「向こうが俺を振ったんだぜ」

ユイは中学の時の同級生で、三年の文化祭の時に告白されてつきあうことになった。確か、ずっと好きだったとか言われて。けど、あいにくと二人が進学したのは別々の高校だった。それでもしばらくはつきあっていたが、結局、ユイは自分の高校で別に好きな人ができたとかで、俺たちは別れることになった。

「『やっぱりあなたが一番だったと気づいたの』とか、言ってほしかったりしないの？」

「何それ」

そう答えると、姉貴はちょっと呆れた表情になった。

「……そういやあんた、別れた時あんまりシヨックそうじゃなかったわよね」

「別れ話切り出される前から、そうなるんじゃないかって気はしてた。少し前から、一緒にいてもあんまり楽しそうじゃなかったし」
「気持ちのなくなったユイを引き止めたいとは思えなかったし。だから別れ話にもすぐ同意したんだっけ。」

「……そういうあっさりした態度、向こうは不満だったかもよ」

「そう言われても」

どうしろっていうのさ。

「ま、確かに。こればかりはどうしようもないしねえ」

そう言って、何故か姉貴はため息をついた。……なんだよ。と思ったが、姉貴と喧嘩してもしかたないので、俺はこれ以上あれこれ口を挟むのはやめた。

次の日、俺が登校すると、巡音さんはもう来ていて、自分の席で本を読んでいた。左足には包帯が巻かれている。昨日あんなことがあったせいか、ちょっと気になるな。俺は彼女に声をかけてみることにした。

「おはよう、巡音さん」

巡音さんは顔を上げてこっちを見た。……少し驚いているみたいだ。昨日のことがあるまで、普段ろくに話もしたことがなかったんだから、しょうがないかもしれない。

「あ、おはよう、鏡音君」

「足の具合はどう？」

巡音さんは、視線を自分の左足に落とした。

「捻挫で全治一ヶ月って言われたわ」

「じゃ、当分大変だね」

「骨を折ったわけじゃないわ。大丈夫よ」

巡音さんは淡々とそう言ったけど、それでも結構辛いんじゃないだろうか。それに色々不便だろうし。

「まあ、そりゃそうだけど……」

「昨日はありがとう」

「気にしなくていいよ。ところで、何読んでるの？」

巡音さんは、本の背表紙をこちらに向けた。「椿姫」と書いてある。あ、これ、中学の時に読んだ。……父親の方と間違えて借りるというバカをやらかしたせいで。最後まで読んだけど、正直言おうと大して面白くなかった。何故かつまらなければ止めるという選択肢が、当時の俺にはなかったんだよな。

「『椿姫』か」

「ええ」

女の子はやっぱりこいうのが好きなのかな。昨日見てたのも『ロミオとジュリエット』だったし。うちの姉貴みたいに、B級映画を笑いながら見るのは珍しい部類に入るんだろう。そんなことを考えていると、後ろから明るい声がかかった。

「リンちゃん、おはようっ！」

「あ、ミクちゃん」

同じクラスの初音ミクさんだ。確か彼女も大きい会社の社長令嬢だとかで、同じように車で送り迎えしてもらってる。初音さんの従弟のクオは俺の一年の時から友達で、色々とは話は聞いているが、本人と喋ったことはあんまりない。……そっぴや、初音さんと巡音さんって仲良いんだっけ。ここにいたら邪魔かな。

「じゃ、俺はこれで」

巡音さんにそう言って、俺は自分の席へと戻った。

大丈夫？（後書き）

色々考えたのですが、結局こちら（レン視点バージョン）も平行して掲載していくことにしました。

作中で言及されているレンの元カノはオリジナルキャラです。もしかしたら同じ名前の亜種とかがいるかもしれないですが、全く関係ありません（すいません、亜種には詳しくなくて……）ので、ご了承をお願いします。

ミクの興奮

その日の朝、登校したわたしの目に入ったのは、信じられないような光景だった。何かあって？ リンちゃんが、同じクラスの鏡音君と話をしていたのっ！ これが驚かずにいられますか！

……と言うと、大抵の人は「そのどこが信じられないわけ？ 同じクラスなんだから話ぐらいするでしょ？」って思うかもしれない。けれど、リンちゃんに関してはそれはありえないのだ。何しろリンちゃんは、がちがちにガードが固い。リンちゃんの育った家庭を考えると仕方がないんだけど、とにかくもう固い。相手が男の子だとそれはもつと顕著で。わたしはリンちゃんと幼稚園の頃からのつきあいだけど、小学校高学年になった頃から、リンちゃんは自分からは、全く男の子と話さなくなってしまった。じゃあ、話しかけられた時はどうかって？ 大抵は口ごもっちゃってまともに返事できない。わたしの家には現在、わたしと同じ年の従弟のクオ。これはあだ名で、本名はミクオ が同居していて、リンちゃんが遊びに来た時にクオと顔をあわせることもあるんだけど、やっぱり話せずにいる。

わたしがリンちゃんにおはようと声をかけると、鏡音君は自分の席に戻って行ってしまった。

「ねえねえリンちゃんっ！ 今話してたの鏡音君でしょ？」

「そうだけど」

リンちゃんはちょっとわたしの勢いに困ってるみたい。でもこれだけは譲らないもんね。絶対に鏡音君と話してた経緯を聞きださなくちゃ。

「いつ仲良くなったの？」

わたしがそう尋ねると、リンちゃんが昨日起きたことを話してくれた。リンちゃんが劇場 リンちゃんの趣味は観劇だ で転んで足をくじいてしまい、困っているところに鏡音君が通りがかって

助けてくれたのだそうだ。さっき話していたのも、足のことを心配
していてくれたらしい。

「そんなすごいことがあったんだ……」

それはさておき、これってなかなかいい状況じゃない？ そうい
う「困った状況」だったから、リンちゃんのガードが一時的に外れ
たんだわ。思ってもみないチャンスかも。

「別にすごくないわ。ただの捻挫よ」

「怪我の話じゃないんだけどな……というか、鏡音君は意外といい
人だったのね」

鏡音君はクオの友達だけど、クオは家に友達連れてこないから

わたしもお父さんもお母さんも、遠慮しないで連れて来いって言
ってるんだけどね わたしは鏡音君のことはよく知らないの。

「ミクちゃんは、鏡音君のことよく知ってるの？」

「わたしはそうでもないけど、クオが仲いいのよ。一年の時同じク
ラスだったし、部活も一緒だから」

クオは、似合わないことに演劇部に入っている。今年の学祭では、
結構目立つ役を舞台で楽しそうにやっていた。……何て役名だった
かしら。人間じゃなかったことは憶えてるんだけど。「人間を滅ぼ
せ！」って舞台上で叫んでたっけ。

もつと話していたかったけれど、始業のベルが鳴ってしまったの
で、わたしは席に戻った。先生が入ってきて、あれこれと話を始め
る。でも、わたしの頭の中は、思いついた計画のことではいっばいだ
った。

リンちゃんのガードが外れるなんて、数年に一度あればいい方だ。
しばらくは継続しているだろうし、これはチャンスっ！ この機会
に二人をくつつけるのよっ！ それがわたしの使命だわっ！ でも、
わたし一人じゃ難しいわね。クオにも手伝ってもらわなくちゃ。

昼休みに、わたしはクオにメールを打った。相談したいことがあ

るので、学校が終わったらいつもの喫茶店に来てくれって。え？家で話せばいいじゃないかって？だって、できるだけ早くこの話しかかったんだもの。家に帰るまでなんて待てないわよ。

学校が終わると、わたしは鞆をつかみ、喫茶店へと向かった。：クオはまだ来ていない。でも、もうじき来るだろう。わたしは奥の席に座った。

しばらく待つと、クオが入ってきた。

「あっ、クオ！」

手を振ると、クオはわたしに気づいてこっちにやってきた。向かいの席に座って、メニューを見る。しばらくするとウェイトレスさんが注文を取りに来たので、クオはアイスコーヒー、わたしはアイスココアを注文した。このお店のココアは、クリームがたっぷり入っていて美味しいの。

「で、なんだ？ 相談したいことって」

「あ、うん。あのさあクオ、鏡音君と仲いいよね？」

「なんだよいきなり」

クオはちよつとむっとしてるみたい。どうしたんだろう。とはいえ、この目的のためには、クオの機嫌なんかに構ってられない。わたしは質問を続ける。

「調査よ調査。クオ、鏡音君って、今つきあっている人はいる？」

まずは彼女の有無を確認しないとね。お膳立てしといて実は彼女がいました、じゃ、リンちゃんやんが傷ついちゃう。あ、でも、つきあってる人がいたらどうしよう。さすがに別れさせるのはちよつと、ね………いませんように。

一方、クオはますますむっとしてるみたい。

「今はいいはずだけど。去年の今頃に彼女と別れたって聞いてから、新しいのができたという話は聞いてないし」

前はいたけど、今はいないのね。なかなか悪くない話。クオの口ぶりだと、深刻な失恋って雰囲気でもなさそうだし。今頃淋しさが身にしみてるかも。

「じゃあ今フリーなんだ。ね、前の彼女と別れた理由って何？」

「なんでそんなこと訊くんだよ」

「だって知りたいんだもん。浮気性だったりすると困るし」

浮気症だとか、彼女に暴力振るうとか、金銭関係のトラブル抱えてるとか、そういう性質の悪い男をリンちゃんに近づけるわけにはいかないもんね。

クオは、不機嫌と困惑が入り混じったような表情で、わたしの質問に答えてくれた。

「なんか……相手の子に別に好きな人ができたらしい。学校が違うからつきあいの継続が難しかったんじゃないのか。詳しいことは聞いてないから俺も知らない」

割とオーソドックス、というかもすごく普通の理由ね……。まあでもそんなもんか。それに、下手に失恋の傷引きずられても困るわ。

「じゃ、浮気とか暴力とかじゃないのね。まあ、真面目そうだし大丈夫だと思ったけど。これならOKだわ」

リンちゃんの彼氏として。鏡音君は外見もいい方だし、成績も良いし、リンちゃんと並んでも見劣りしないわ。よし合格。

「何がだよ。おいミク、自分一人で納得してないで、俺にちゃんと説明しろ」

おっとっと。クオにもちゃんと話をしなくちゃね。これから協力してもらうんだから。この計画には、クオの協力が必要不可欠なんだし。

と、クオが不意に深刻な表情になった。どうしたのよ。

「なあ、ミク……。お前、もしかして、レンのことが好きなのか？」

は？ やだなあクオったら、どうしてそうなるのよ。思ってもみなかったことを訊かれたせいで、わたしは笑い出してしまった。ありえなくい。そりゃ、確かに鏡音君は見た目いいけど、わたしの好みとは外れている。

「え？ 嫌だ違うわよ」

あれ、クオ、怒るかと思っただらほつとした顔してる。どうしたんだらう。

「じゃあ何が『これならOK』なんだ」

あ、いけない。ちゃんと説明しないと。

「鏡音君とリンちゃんの仲を取り持ってもOKってこと」

わたしがそう言つと、クオは今度は啞然とした顔になった。何もそんなに驚かなくてもいいじゃない。

「どこからそういう話が出てくるんだ」

クオはわたしたちとはクラスが違うので、あの朝の風景は見えない。というわけで、わたしは力を込めて説明することにする。

「今日ね、リンちゃんと鏡音君が話をしてたの。それを見てわたしはぴんと来たのよ」

「……何が」

クオ、どうしてそう興味なさそうな反応なの？ わたしにとつてこれは一大事なのよ！？

「あの二人は絶対お似合いだったって！」

こぶしを握つてわたしはそう断言した。でも、クオはしらけた表情をしている。……もう。

「なんでそこでお前が盛り上がるんだよ」

クオはそんなことを言ってきた。

「え、だって、高校生活勉強ばかりじゃ淋しいじゃない？ リンちゃんが彼氏を作るチャンスをものにしてあげるのが、親友の務めつてもものでしょ？」

ちよつと、クオつてばどうしてそこで呆れきつた表情するの？

全くもう、クオはリンちゃんの抱えてる事情知らないし、仕方がないのはわかつてるけど、ちよつと面白くないわ。こうでもしないと、リンちゃんは恋愛する前にあのお父さんに結婚させられてしまう。

「お前だつて彼氏いないじゃないかよ。他人の世話焼く前に、自分をどうにかしたらどうだ？」

しかも、しかもだ。クオつたら、こんなことを言い出したのだ。

「しょうがないじゃない！ わたしにつりあうようないい男がいないんだから！」

このわたしがつきあうんだから、わたしのことを世界で一番お姫様扱いしてくれる人じゃないと。これだけは譲れないわ。というかクオだつてわたしの好みは知ってるはずなのに、なんでこんなこと言うのよ？

クオはむすーとした表情のまま、アイスコーヒーを一口啜った。

「それにしても……お前それだけの理由で、レンに巡音さん押しつける気か」

……ちよつと、それ、どういう意味！？ 久々本気で怒ったわよ。クオだったら、リンちゃんのことをなんだと思ってるの！？

「クオ……それ、どういう意味？」

わたしは冷たい口調でそう言つて、クオを睨んだ。クオが椅子の上でじりつと後ずさる。さすがにわたしが本気で怒ってることがわかったみたい。

「ミ、ミク……そんな怖い顔するな」

悪いけど、返答次第によつちや許しちやおかないわ。

「『レンに巡音さん押しつける』って、どういうつもりで言ってるの？ リンちゃんはわたしの友達よ？ クオは、リンちゃんをそういうふうに通ってるの？」

わたしがクオを睨んでいると、クオはたじたじになりながら、こんなことを言い始めた。

「い、いやだからさ……レンの気持ちはどうなるんだよ？ 互いの気持치가大事だろ。レンにせよ巡音さんにせよ、好みは逆かもしれないぞ」

賭けてもいいけど、クオ、もともとは違つこと考えてたでしょ。でもまあいいわ、勘弁してあげる。

「それは……まあそうだけど……」

クオは、見るからに安心した様子をしている。甘いわね。計画に

協力はしてもらおうよ？ さっきわたしを怒らせたんだから、これは当然の代償よね。

「でも、うまくいくかもしれないでしょ？」

わたしの勘は、あの二人はうまくいくと告げている。

「可能性がないとは言わないが……」

「じゃあやるわよ」

クオをさえぎり、わたしはぴしやりとそう言った。

「何を」

「二人の仲を取り持つの！」

クオ、できることなら協力したくなさそう。でも、逃がすもんですか。

「クオ、手伝ってくれるわよね？」

声にプレッシャーをにじませてそう言う。絶対に承諾してもらいますからね。

「……わかったよ。で、俺は何すりゃいいんだ。言っとくけど、レオンを巡音さんときあうよう説得するのは無理だぞ」

ふっふっふ、かかった。

「そんなこと頼まないわよ。あのね……」

わたしは早速、クオに作戦を説明し始めた。

ミクの興奮（後書き）

やっぱりハイテンションなミクは書いていて楽しい。

何故ならそれこそが恐怖だから

土曜日の夕方。俺が自分の部屋で課題を片付けていると、携帯が鳴った。かけてきたのは……クオカ。

「もしもし」

「よう」

「どうした？」

「ああ……えっと、お前、明日暇か？」

なんか歯切れ悪いな。いつもならもつと立て板に水みたいに話すのに。

「暇だよ。晩飯作らないといけないから、それまでだけど」

晩飯当番以外の予定は入ってない。遊びにでも行こうってのかな。

「そっか。だったら、明日、俺の家に来ない？」

「え？」

俺は思わず訊き返してしまった。こいつ、今、何て言った？

「だからさ、明日、暇なら俺んちに来ないかって言ったんだよ。映画のDVDでも見ようぜ」

変だな。クオの奴は両親が海外赴任中で　ぶっちゃけ、これが俺とクオがすぐ意気投合した理由の一つだったりする　現在は従姉の初音さんの家で生活している。そのせいか、クオは基本的に誰かを自宅に呼ばない。だから、一緒に映画のDVDを見ようとかゲームをしようなんて話の場合、クオの方が俺の家に来る。なんだ？　何があつた？

「映画？　だったら映画館行こうぜ。面白そうな新作が確か今日からだったぞ」

「……それもいいけど、やっぱり明日は俺んちにしようぜ」

やっぱりなんか変だぞ。俺が携帯を握ったまま考え込んでいると、クオはこんなことを言い出した。

「そうそう、レン。例の奴買ったんだぜ。お前が見たいって言うて

たゾンビ映画」

「『ブレインデッド』？」

そりゃ見たい。前から見たいと思いつつ機会が無かったんだよ。

「折角だから俺んちで見ようぜ。ホームシアターあるし」

へえ、初音さんそこにはホームシアターがあるのか。それでゾンビ映画見るのも楽しいかも。

「じゃ、そうするか」

なんか変だなと思いつつ、俺はクオの誘いに乗ることにした。

クオの家　　ってか、初音さんの家か　　に行くのは初めてだ。

住所を確認してついた先は、聞きしに勝る豪邸だった。ああ、これじゃあ……家に人呼ぶの、確かに嫌かも。

インターホンを押すと、クオが出てきた。っていうか、門から家までが広い。ここは本当に日本かと突っ込みたくなる。

「よう、来たな。入れよ」

「一応、挨拶とかした方がよくないか？」

「ああ、今日は伯父さんも伯母さんもいないんだ。いるのは俺とミクと、お手伝いさんとかだけ」

……だから呼んだのかな？　まあいいや。あれこれ突っ込むのはやめとこう。

「ホームシアターがあるのはこっちだ。ついてこいよ」

俺はクオの後について行った。クオが一つの部屋のドアを開けて中に入り、そこで立ち止まる。……あれ。

クオが開けた部屋には確かにホームシアターが設置されていた。さすが金持ちというか、部屋の壁一つがスクリーンになっている。周りの音響機器も高そうだ。スクリーンから離れたところにゆったりしたソファと背の低いテーブルが置いてあって……そこに女の子が二人いる。……初音さんと巡音さんだ。もしかして、かちあった？

「あれ、ミク。お前、なんでここにいるんだ」

「あ、クオ。今日はリンちゃんと映画を見ようと思って」
「ちよつと待て。今日は俺がホームシアター使う日だぞ」
「そんなの聞いてな〜い」

俺のしている前で、クオと初音さんはもめ始めた。巡音さんの方に視線をやると、ソファに座ったまま、困ったような表情で二人を見ている。

「何言ってるんだミク。俺、昨日ちゃんと話しただろ」
「聞いてないってば」

「お前、先週もホームシアター独占してただろ。今日は譲れよ」

「え〜、嫌〜。折角リンちゃん呼んだんだし」

「やかましい。こつちだつて都合があるんだよ」

……何やってんだこの二人は。と、その時、巡音さんがおずおずと口を開いた。

「ミクちゃん……。わたし、今日は帰ろうか？」

そうだよな、こんな状況見たら帰りたくもなるよな。

「ダメっ！ リンちゃんがクオに遠慮することないのっ！」

すかさず叫ぶ初音さん。……こつちいうキャラだったのか？ けど、二人の喧嘩を見ていると楽しくないぞ。それは巡音さんも同意見だろう。

「あ〜、じゃあ俺が帰る」

「レン、帰るんじゃないっ！ 俺をこの状況で一人にするなっ！」

今度はクオに止められてしまった。どうしろっていうんだよ。巡音さんを見ると、困ったような表情のまま、今度はこつちを見ている。どうしよう、と言いたげだ。それはこつちが訊きたい。

俺と巡音さんが内心で頭を抱えていると、初音さんが立ち上がった。

「……ちよつとクオと話をつけてくるから、リンちゃんはここで待ってて。帰っちゃダメだからね」

……なんだか怖いぞ。クオ、もしかしたらすごく苦労してたのか？
「レン、俺が戻ってくるまで勝手に帰るなよ」

そう言っつて、クオは初音さんと部屋を出て行った。なんだよ、そんなに一人になりたいくないのかよ。とはいえ、こつ言われるとさすがに帰れない。

というわけで、俺は巡音さんと二人つきりで部屋に残されてしまった。巡音さんを見ると、相変わらず困つた表情のまま、視線を宙にさまよわせている。えーと……。

「……いつも、あなの？」

俺は、とりあえず浮かんだ疑問を口にした。

「え、いつもつて？」

言葉が足りなかつた。

「クオと初音さん」

「大体あんな感じかな」

へえ。初音さんつてクオと一緒にだとあなるのか。結構意外だ。

「大変だなクオも。あ、そつち座つてもいい？」

立ちつぱなしで待つてんのもあれだしな。巡音さんが頷いたので、俺はソファの少し離れた位置に座つた。

「あの二人、どれぐらいで戻つてくると思つ？」

数時間単位でもめられても困る。ま、さすがにそれはないか。

「さあ……わたしも、あんなに派手に揉めてるのは初めて見たし」

巡音さんは首を傾げた。見当もつかないらしい。

「クオの奴一体何やつてんだか……。そついや巡音さん、足の具合はどう？」

「まだ痛いけど大丈夫よ」

「巡音さんは、初音さんとは仲いいの？」

「ええ。幼稚園の頃からのつきあいだから」

「そりゃ長いね」

ここで話が途切れてしまった。えーと、何だか気まずいな。何か適当な話題、適当な話題……。

「巡音さんたちは、今日は何見る予定だったの？」

映画の話題なら無難だろう。

「え？」

「いやだからさ、映画。俺とクオはホラー見る予定だったんだけど、そっちは何を見る予定だったのかなって思って」

「聞いてないの。ミクちゃんは『楽しみにしてて』としか言わなかったし。でも、多分ラブコメじゃないかな」

クオとは真逆の趣味だなあ。女の子らしいっちゃ、らしいけど。

……って、初音さんのこと話してると巡音さん、感じ違うな。

「初音さんはラブコメが好きなのか。クオはああいうの苦手みたいだけど」

「そうなの？」

「前そういう話をしてたよ。あれじゃ度々揉めてるだろうね。巡音さんは？」

軽い気持ちでそう訊いてみる。……なんでそこで固まるんだ？

俺、別に変なこと訊いてないよな？

「だから、ラブコメとかが好きなの？ それとも悲恋物の方がいい？」

具体的な質問の方が答えやすいかと思って、訊き方を変えてみる。

「え……」

やっぱり固まったまんまだ。そんな緊張するようなことか？ 俺、映画見る人間なら誰でも訊くようなこと訊いただけなのに。

「単純にどっちが好きなのかって話なんだけど。あ、どっちも好きなの？」

「……………」

「この前『ロミオとジュリエット』見てたし、『椿姫』読んだりしてたから、巡音さんって悲恋物が好きなのかって思ってたんだよね」

……何喋ってんだる俺。と、巡音さんがようやく口を開いた。

「あれは、たまたまそういう組み合わせになっただけで……」

えーと、そんな悲痛な表情をしないでくれますか。俺がいじめてるみたいじゃん。……さっきみたいにした方が可愛いのに。

「……………巡音さん、俺何か悪いこと訊いた？」

気になったので更にこう訊いてみる。

「え？」

戸惑い半分、困ってます半分って表情で訊き返された。……どうなってるんだろ。

「あ……いや……」

俺も返事に困ってしまった。そして、二人とも無言になってしまったまま、時間だけが過ぎていく。……さすがに結構しんどいぞ。クオの奴何やってんだ。

どれだけ経過しただろうか。ようやく、ドアが開いた。

「ごめんね、二人とも。待たせちゃって」

初音さんとクオが戻って来た。助かった……。巡音さんの様子をつかがうと、向こうも明らかにほっとしている。

「ミクちゃん、お帰り」

初音さんは明るい。隣のクオは仏頂面だ。

「とりあえずクオとは話がついたから」

初音さんはそんなことを言った。どう話がついたんだろう。

「で、結論は？」

俺は初音さんに訊いてみた。

「うん。今日のところは四人で揃って映画を見ようって」

……へ？ どうしてそういう話になったんだ。思わず巡音さんの方を見ると、向こうもびっくりしている。そりゃそうだよな。って
いうか……。

「クオ、お前、それでいいの？」

恋愛映画嫌いだよ。

「しょうがねえだよ。レン、悪いが今日はつきあってくれ。俺、この状況で一人になりたくない」

別にホームシアターにこだわらなくても、今からでも俺の家に行くとか、選択肢はあるだよ。けど俺がそう言う前に、初音さんがソファにやってきた。

「というわけだから、詰めて詰めて」

初音さんが巡音さんを軽く押したので、巡音さんは俺の方に向かって席を詰めた。初音さんが巡音さんの反対側の隣に座る。クオはDVDのパッケージを開けて、プレイヤーの開閉スイッチを押した。「じゃんけんでわたしが負けたから、最初の映画はクオが選んだ奴だけど、リンちゃん、辛抱してね」

「ミク、お前、一々うるさいよ」

クオはえらく不機嫌だ。DVDをセットすると、リモコンを片手に戻ってきて、初音さんの空いている側の隣に座って、再生ボタンを押した。って、ちよつと待てよクオ。お前、この状況で『ブレインデッド』見る気が？ どう考えても女の子と一緒に見る映画じゃないだろ。画面が汚いって評判な上に、使った血糊の量でギネスブックに載ってる映画だぞ。

……もしかしたら初音さんたちもホラー好きとか？ あ、これ、『ブレインデッド』じゃないや。『ドーン・オブ・ザ・デッド』だ。さすがのクオも『ブレインデッド』と一緒に見る気はなかったらしい。……これもゾンビ映画だけど。

前に一度レンタルで見たことあるけど、やっぱりホームシアターだと迫力が違うな……なんてことを思いながら、冒頭の女の子ゾンビが襲ってくるシーンを見ていた時だった。突然、隣からすごい悲鳴があがった。

「いやああああっ!」

びっくりしてそつちを見る。初音さんが悲鳴をあげていた。あれれ。巡音さんも画面を見るどころじゃなく、初音さんを見ている。

こんな反応するってことは、初音さんってホラーが全くダメなタイプ？ クオ、お前、何考えてんだ。俺と巡音さんはどっちも啞然として、悲鳴をあげる初音さんを見ていた。

「クオのバカっ！ 変態っ!」

初音さんはいきなり立ち上がってクオに飛びかかると、その首を勢いよく絞め始めた。うわあ……。

「何考えてんのよっ! 信じられないわっ!」

「……………」
「あんなグロい映画見せるなんてっ！ クオの悪趣味悪趣味悪趣味っ！」

「……………」
「いや、こんなのまだ序の口で、この後もつとすごいシーンが……なんて言ってられる状況じゃないな。とりあえず、俺はリモコンを手にする、停止ボタンを押して画面を消した。消えたら落ち着くかなと思って。でも、初音さんは相変わらず叫びながらquoの首を絞め続けている。」

「ねえ、巡音さん」

「何？」

「初音さんって、ホラー苦手だったりする？」

「……………」
「……そう言えば、わたし時々ミクちゃんと映画見るのだけど、ホラーは一緒に見たことがないわ。わたし、ホラー映画って見たの、これが初めて」

「……」
「なんか今引つかかる台詞があったけど、今はquoを助けてやらな」と。口から泡ふきかけてるし。俺は立ち上がると、初音さんの肩を軽く叩いた。

「初音さん初音さん、それくらいで勘弁してあげて。quo、白目むいてる」

「初音さんははっとした表情になり、quoの首を絞める手を離れた。えーと……………」
「今、quoの頭がソファの腕木にぶつかって、なんだか鈍い音がしたような……………」。

「……………」
「……っというか、quo、動いてないぞ！？」

「きゃ〜っ、quo、しっかりしてっ！」

「初音さんはもう一度quoに飛びつくと、今度はquoを激しく揺さぶり始めた。その度にquoの頭がソファの腕木にぶつかって、鈍い音がする。……………」
「なんとというか、背筋が寒くなってきたぞ。」

「ねえ、ミクちゃん……………」
「そっとしておいてあげた方がいいんじゃないの？」

たまりかねたのか、巡音さんがおずおずと口を挟んだ。

「リンちゃんっ！ クオが起きないっ！ どうしようっ！」

初音さんはクオを放り出すと　また鈍い音がしたぞ　巡音さんに勢いよく抱きついた。巡音さんが初音さんの頭を撫でている。

……もしかして、ここの家これが日常茶飯事だったりするんだろうか。

「えっと……多分大丈夫よ」

巡音さんはそう言っているが、本当に大丈夫かこいつ？　俺はクオの傍らにしゃがみこむと、頬を軽く叩いてみた。

「お〜い、クオ。生きてるか？」

「う……」

クオは首をさすりながら起き上がった。さすがにちよつとほっとしたぞ。救急車を呼ぶような事態にならなくてよかった。

「ほら、ミクちゃん。ミクオ君は大丈夫だったから」

巡音さんが初音さんにそう言っている。

「悪いが……全然大丈夫じゃねえ……ミク……俺を殺す気が……」
それはそうかも。

「クオ、良かった！　生きてたのね！」

初音さんはそう叫んで、今度はクオに抱きついた。巡音さんはほつとした様子で、そんな二人を見ている。

「誰の……せいで……死にかけたと……」

「あーん、クオ！　ごめんなさいっ！　わたしがやりすぎたわ！」

これは一応いい光景と呼んでいいんだろうか。……俺にはわからない。

というか、映画は？　クオも息を吹き返したので、俺は訊いてみることにした。

「で、映画はどうする？」

「ホラーは嫌よっ！」

初音さんの即答。確かに、これじゃあ俺もホラーを見る気にはなれない。今のクオの臨死体験は、下手なホラーより怖かった。

「じゃあ、初音さんが見たい映画を見るということで。それでいい？」

巡音さんの方を見ると、頷いた。クオを見る。

「もうそれでいいよ……」

それが、クオの返事だった。諦め半分、疲れ半分という顔をしている。あんなことがあったんだから仕方ないか。

「じゃあわたしのお薦め映画を……」

初音さんが立ち上がって、プレイヤーにDVDをセットした。そして、映画上映会は再開したのだった。

昼食やら休憩やらを挟みながら、俺たちは結局映画を二本見た。

どっちも初音さんのお薦めのラブコメ映画。クオはずーっと仏頂面をしていたが、女の子二人は楽しそうだった。一本目はともかく、二本目の映画は音楽の使い方が面白かったな。

映画を二本見終わると、巡音さんは「門限があるから」と言って帰って行った。初音さんも自分の部屋に引き上げてしまい、ホームシアタールームには俺とクオが残された。さて、と……。

「俺もそろそろ帰るけど、クオ、ちよつといいか？」

「なんだよ」

「今日見れなかったホラー映画、借してくれ」

結局『ブレインデッド』は見れなかった。

「ああ、別にいいぜ。今日は悪かったな。ミクと鉢合わせしちまったせいで、お前までラブコメ映画につきあわせちまって」

「やっぱりこいつ、なんか変だ。ちよつと確かめよう。俺がクオを正面から見つめると、クオはたじろいだ。」

「……なんだよ」

「訊きたいことがあるんだ。クオ、お前、俺に何か隠してないか？」

クオは、なんとというか、わかりやすいほどに派手にうるたえた。

「……な、何だよいきなり。そ、そんなことないだろ」

お前、嘘つくの向いてないよ。演劇部なのになあ。……思わず派手なため息が出る。

「お前さあ、その態度だけで『はい、俺は何か隠してます』ってバシてるよ?」

クオがむっとした表情になる。だが、俺はクオが口を開く前に、先を続けた。

「そもそも、昨日の時点で変だと思ったんだよ。お前、あんまり自分の家　ってか、初音さんの家が　に人呼びたがらないだろ。なのに今回に限ってはやけにしつこかったし。何がしたかったんだ」

絶対何か魂胆があるはずだ。何を企んでいるのか知らないけど、正直、こういうのは面白くない。

「別に深い意図はねえよ」

そらつとぼけるクオ。あ、そう。それなら俺にも考えがあるよ。

「クオ。正直に全部喋らないと、この前の合宿でのこと、初音さんに話すぞ」

俺がそう言うと、クオの顔が引きつった。

「レン、あのことは言うなって言っただろ!」

「うん、だから、黙っててやるから、隠し事があるんならここで全部白状しろ」

クオは冷や汗を流しながら固まってしまった。……そんなにあのことばらされたくないのか。別に大したことでもないと思うんだがなあ。アニメ見て号泣するのって、そんな変なことでもないだろ。そりゃああの時、クオがボロ泣きしたせいで、みんな引いてたけど。

普段から初音さんの前で「『フランダーズの犬』!?　その程度のアニメでこの俺が泣くか」とでも宣言してるんだらうか。

「で、クオ、どうするんだ?」

「えーっと……誰にも、特に、ミクと巡音さんには絶対に言うなよ?」

「わかったからとつと喋れ」

俺がそう言うと、クオはうつむきながらぼそぼそとこんなことを

言い出した。

「ミクと一緒にホラー映画を見たかったんだ」

「……なんだよそれ」

理由になってないぞ。

「最後まで聞いてくれよ。ミクはホラー映画が嫌い、俺がホラーを鑑賞してる時は絶対よりつかない。そんなミクと一緒にホラーを見るにはどうしたらいいか！」

妙に力を込めてそう言うクオ。おい……そんなことの為に、わざわざ俺を引っ張りだしたのか？

「それで初音さんの予定を調べて、わざわざ巡音さんが来る日を選んで、俺を呼んだわけ？」

「だって一人だと逃げられるだろ。誰かいたら逃げづらいじゃないか」

巡音さんと俺は、初音さんを引き止めておくための障害物だよ。道理でひたすら帰るな言ってたわけだ。……アホらし。

「うまくすれば、ミクがきゃーって叫んで俺に抱きついてくれるかもって、思ったんだよ……悪かったな」

「……良かったな、夢が叶って」

実際、抱きついてはもらえたわけだし。というか、こいつ、普段からそんなこと考えていたのか。まあ、初音さんは可愛いし、クオがそういう気持ちになるのはわからなくもないけど。けどなあ、一緒に住んでるんだからもっと別のアプローチあるだろ。

大体理由には納得したが、これだけは言つとこう。

「ホラーが嫌いという人にホラーを見せるのは、はっきり言って悪趣味だよ。せめて、もっと大人しいのにできなかったのか？」

「ゾンビはホラーの王道だろ。お前だってゾンビ映画好きじゃねえか」

「ホラー苦手な人と一緒に見たいとは思わない」

他のジャンルはともかく、ホラーだけは苦手な人に下手に見せるもんじゃない。

「もう二度としねえよ。さすがの俺も懲りた。たく、巡音さんぐらいミクも落ち着いてくれりゃいいのに……」

「あれは落ち着いてたんじゃなくて、初音さんが騒ぐから画面に集中できなかったんだと思う」

初音さんが悲鳴を上げ始めてからは、巡音さんは初音さんの方ばかり見ていた。あんな大声で悲鳴をあげられたら、誰だってそつちを見るだろう。

と、クオが急に、妙なことを訊いてきた。

「お前、巡音さんのことどう思う?」

「何だよ藪から棒に」

いきなりそんなこと訊かれたって答えられるか。同じクラスとはいえ、一週間前までまともに喋ったことなかったのに。

「いいから答えてくれ」

……こいつ、また何かくるでもないこと考えてるんじゃないだろうな。

「クオは、巡音さんのことどれくらい知ってる?」

「あんまり知らん。ミクとは仲いいけど、俺はほとんど話したことないし」

「巡音さんの口ぶりだと、よく遊びに来てるみたいだったけど。それで全然話す機会ないわけ?」

よく一緒に映画見るみたいな感じだったもんな。クオはちょっと嫌そうな表情で、こう言った。

「だって俺あの子に用事ないし、たまに話しかけても黙り込んで、結局はミクが代わりに話すし。ミクも何だか俺に冷たいし。」

で、お前は巡音さんのことどう思うわけ? まだ質問に答えてもらってないぞ」

確かに巡音さんは人と話すの苦手みたいだけど……要するに、クオは巡音さんのことが邪魔なんだろうな。ついでだからもう一つ確認しよう。

「ごめんもう一つだけ教えてくれ。初音さんの方が、巡音さんの家

に遊びに行くことは？」

「ねえよ」

ふーん、そうか。それにしても……クオ、ちょっと大人げないぞ。自分が初音さんの一番になりたいからって、その親友を追っ払おうとするのはさ。というか、俺にどうしてほしいんだよ。

「で、お前いい加減に俺の方の質問にも答えるよ」

「何だったっけ？」

別に忘れてないが、ちょっとからかってみる。

「巡音さんのことどう思うのかって、さっきから何度も訊いてるだろ」

悪いけどお前に同意はしかねる。

「お前は俺にそれ訊いてどうしたいわけ？」

「レン！ 質問に質問で返すなよ！」

「だってお前の意図がわかんないし」

「ああもうっ！」

大体、自分の人間関係に俺を巻き込むなよ。この環境じゃ色々気苦労も多いのかもしれないけどさ。とばかりを受け取る身にもなってくれ。

「……お前の気持ちもわかんなくはないけど、そういうのはよくないと思うぞ」

「は？」

「じゃ、俺は帰るよ。あ、クオ。DVD」

クオがDVDを渡してくれたので、俺は家に帰ることにした。

何故ならそれこそが恐怖だから（後書き）

なんかリンパートと比べてずいぶんと長くなっちゃいましたね、この部分。

余談ですが、書いている私自身はゾンビ映画は苦手………というか、そんな好きでもないです。

ミクの不満

わたしが立てた作戦は完璧だった。まず、わたしがリンちゃんを「映画でも見ない？」と言って家に呼ぶ。そして同じ日に、クオがやっぱり映画を口実にして、鏡音君を連れてくる。後はわたしとクオが喧嘩をする振りをして、二人だけ部屋に残して出て行ってしまふのだ。これで、リンちゃんと鏡音君が部屋の中で二人っきり、という、非常に美味しい状況ができあがることになる。

クオはうまくいくわけないだろう、という態度を崩さなかったけれど、鏡音君を呼ぶことは呼んでくれた。なんでも、このために鏡音君の見たがっていた映画のDVDを買ったらしい。ありがと、クオ。

わたしもリンちゃんに電話をかけて話をする。こっちは簡単だ。リンちゃんは基本的に、わたしの誘いは断らない。二つ返事でわたしの家に来ることになった。

そして当日。わたしとクオは予定どおり、ホームシアタールームで鉢合わせして喧嘩した後、「話をつける」と言って、部屋を後にした。お二人さん、ごゆっくり。

「ところで、第一段階（二人を呼び出して、二人だけにする）はうまくいったけど、この後はどうするんだ？」

部屋で、クオはこう訊いてきた。

「適当なところで部屋に戻って、四人で映画を見ましょう。何も見ないと変だと思われるし。うまくいけばこれで更に親密度がアップするはずよ」

一緒に映画を見たら、きっと親近感とかも湧いてくるだろうし。クオも異論はなさそう。

「ミク、映画は何を見るつもりなんだ？」

「ラブコメよ。とびきりキュートな奴」

えりすぐりのを用意したもんね。可愛くて、ちょっと笑えて、う

つとりできるような奴。これを見たらきつとリンちゃんだつてその気になるわ……つて、クオ、なんで不満そうな表情になるのよ。

「先に俺が選んだ奴見てもいいか？」

「何？」

「ホラー映画」

「……ちよつと！」

「わたしがホラー嫌いって知ってるでしょ？」

クオは、なんでだか知らないけどホラー映画が好きだ。正直、わたしには理解できない趣味だったりする。あんな気持ちの悪い映画のどこがいいのかしら。

ところが、わたしが顔をしかめていると、クオはこんなことを言い出した。

「おい、ミク。お前、二人の仲を取り持ちたいんだろ。だったらホラーを見せた方がいい」

なんでそうなるのよ。

「どうして？」

「うまくいけば、巡音さんが怖がつてレンに抱きつくかもしれないぞ」

え……。でも、リンちゃんがそんな簡単に抱きつくかな……。

「うーん、でも……」

「ミク、アメリカじゃホラーはデートムービーの定番だ。きゃーっ怖いって抱きつかれたら、どんな男だつて悪い気はしないっ！」

妙に力を込めて、クオはそう力説した。ガードの固いリンちゃんも、幾ら怖くても抱きつくとはちよつと思いにくいんだけど、震えて怖がつたりしたら、男の人の目には可愛らしく見えるかもしれない。

「絶対ホラーの方が盛り上がるって！俺を信用しろ！」

正直、ホラーは嫌だ。でも、画面を見ないようにはしていれば大丈夫よね、きつと。

「うーん、なら、いいけど……」

クオ、ガッツポーズして喜んでいる。そんなにホラーが好きなのか？

「ミク、お前も映画が始まったら俺に抱きつけ」

「なんでそうなるのよ？」

「巡音さんがお前に抱きついたら困るだろ。先にお前が俺に抱きついておけばそれを防げるじゃないか」

「……………」

とりあえず、わたしはクオの頬つぺたを力いっぱい引っねっておい

た。

ホームシアターの部屋に戻ってみると、リンちゃんと鏡音君は気まずそうな表情で座っていた。…………おかしいわね。今頃談笑しててくれるはずだったのに。何か問題でもあったのかしら。

とにかく、今は映画よつ。そんなわけで、わたしはリンちゃんの隣に座った。わたしの隣はクオの為に開けておく。

そうして、クオが選んだホラー映画とやらを見ることになったんだけど…………正直、わたしにはとてもじゃないけど耐えられなかった。何なのよおっ！　なんでいきなり流血沙汰なおっ！？　ぷつぷつとキレたわたしは思わずクオの首を絞めてしまい、ホラー映画鑑賞はそのままストップになった。

まあそんなわけで、結局残りの時間はわたしが選んだラブコメ映画を見ることになった。…………クオは、ずーっと不服そうにしていたけれど、仕方がないでしょ。なんでホラーなんかが好きなのよ。

映画を見てお昼を食べて、もう一本映画を見ておやつ　ちなみに、おやつはリンちゃんが持ってきたケーキだ。相変わらず美味しかった　を食べると、リンちゃんは門限があると言って帰ってしまった。…………あそこのお父さん、異常に厳しいのよね。門限を破ったりしようものなら、リンちゃんは一ヶ月は外出禁止だ。うちのお父さんですら、リンちゃんのお父さんのことは「うーん、ちょっと、あの人はなあ…………仕事の上では問題ないんだが…………」と言っている。

わたしのお父さんがそう言うってことはよほどのことだ。実際、ああいうこともあったし。

ああいうことってのは何かって？ あれはわたしたちが小学校に入ったばかりの頃だった。わたしの家に遊びに来たリンちゃんに、わたしは当時ハマっていた少女漫画を見せた。リンちゃんもつと読みたいというので、わたしはリンちゃんに漫画を何冊か貸してあげた。リンちゃんは大喜びで漫画を持って帰り……。

そして、その夜。リンちゃんのお父さんが苦情の電話をかけてきた。娘に変なものを見せないでくださいって。言っておくけれど、わたしが当時読んでいたのは、小学校低学年向けの、たわいもない内容の漫画だった。過激な内容でもない。ほのぼのした、本当に普通の少女漫画。

次の日、リンちゃんはしょげかえって漫画を返しにきた。お父さんに、ひどく怒られたらしい。あんなくだらないもの見るんじゃありませんって。あんまりよね？ わたしは、リンちゃんがあまりに落ち込んでいるので、うちに遊びにきたときこっそり読めばいいよって言ったんだけど、リンちゃんは、あれ以来、漫画に手を触れなくなってしまった。

後でわたしは自分のお父さんから聞いたんだけど、リンちゃんのお父さんは、あの時、電話口で漫画の害について延々と喋り倒したらしい。あんなもの読ませるとバカになるとか、勉強しなくなるとか、子供のためにならないとか、そんなことだ。うちのお父さんは自分が漫画が好きなので、あくそのですかと聞き流していたらしいんだけど、リンちゃんのお父さんが「あんなもの読ませるなんて、お宅の教育方針はどうなっているんですか」と言った辺りで、さすがにカチンと来て、「それは、こちらへの戦線布告と受け取ってよるしいのかな？」と冷たい声で言っちゃったんだそう。それで向こうもお互いの立場　わたしのお父さんの経営する会社と、リンちゃんのお父さんの経営する会社は、大きな繋がりがあるので、トップ同士が喧嘩するわけにはいかないのだ　を思い出して、黙っ

ちゃったんだって。さすがはわたしのお父さんよね。わたしのお母さんは、お父さんはいつも自分をお姫様みたいな気分にならせてくれるって言うてるの。だから、わたしも、将来結婚するとしたら、絶対にそういう人がいいの。これは譲れないわ。

さてと、鏡音君も帰っちゃったし、作戦の第二弾を考えなくちゃ。何がいいかしらね？ クオももつと積極的にアイデア出してくれればいいのに。

ミクの不満（後書き）

一応、ホラーはデートムービーとしての需要はあります。

ブレインデッド

その日の夜、俺は晩飯の後で、姉貴に訊いてみた。

「今日、クオから映画のDVD借りてきたんだけど、姉貴も見る？」

「何借りたの？」

「『ブレインデッド』ゾンビ映画。ピーター・ジャクソン監督」

ちなみに、姉貴は変な映画が結構好きだったりする。弟の俺でも、姉貴の映画の趣味をはつきりとは把握していない。

「ピーター・ジャクソン……ああ、『乙女の祈り』の監督ね」

「姉貴……そこは『ロード・オブ・ザ・リング』の監督ね、って言うところじゃないの？」

「いちいちうるさいわよ。……そうね、私も見ようかな」

というわけで、食後は姉貴と二人で映画鑑賞会になった。

「何あの格好、ありえなくいつ」

「今切断した手、どう見ても作り物……」

「人間の解体シーンなんて、下手にリアルでも困るわよ」

「ひつどい親だなあ」

「主人公！ 変だつて気づきなさいよ！」

「神父さんがなんでカンフー？」

「これ……うるさいスジから冒流つて言われぬ？」

「この頃はまだ無名だから、チエックされてないんじゃない？」

「つていうかゾンビつて死んでるんでしょ？ 子供なんて作れるの？」

「俺に訊かないでくれよ」

「うわーっ……あのおじさん、実は強かったのね」

「主人公やっと思覚めたか……つて、遅いだろっ！」

「これつて一応ハッピーエンドなのかしらね？」

「じゃないの？ ゾンビはやつつけたし、うっとうしい母親は死んだし、恋人もできたんだから」

姉貴と二人で画面に突っ込みを入れながら見ていると、あつという間に映画は終わってしまった。何せ突っ込みどころがありすぎるでも、映画として見るとちゃんと面白い。ストーリーも、ちゃんと一本の軸が通してあるし。

「あゝ面白かった。こんなに笑えるゾンビ映画は確かに無いわ」

ビールを飲みながら、姉貴はそんなことを言った。

「姉貴はゾンビ映画って怖がらないよね」

「今日もけらけら笑いながら見ていた。」

「今のをどうやって怖がれというのよ」

「これだけ血と肉片が飛ぶんだから、気分悪くなる人はいると思うよ。グロがいきすぎてギャグになってるのは認めるけど」

「なんというか、ゾンビ物って作り物くさくて怖がる気になれないのよね。心理系だと確かに怖いと思うんだけど。で、どうしたのよ急に」

俺は今日、クオの家であったことを姉貴に話した。

「うーん……まあ、その辺りは個人差が大きいから。駄目な人は駄目なんじゃない？ 私の知り合いにも、ホラー映画って聞いただけで逃げ出しかねない人いるし。そいつ、男なんだけどね」

「それも結構すごいな。」

「姉貴は、その人にホラーを見せてみたいって思ったりする？」

「ちよつとは思うかな？ ま、実際にはやらないけどね。泣き出されたりしたら寝覚めが悪いでしょ」

「そりゃそうだ。今日、そういうことにならなくて良かったかもしれない。」

「姉貴はさ、映画のジャンルだったら何が一番好き？」

「ふと思いついて、俺は姉貴に訊いてみた。」

「難しいこと訊くわね……」

「姉貴は考えこんでしまった。」

「難しいか？」

「だって、面白いジャンルっていっぱいあるし。だから一番を選べ

と言われると迷うのよね。あんただって、SFとホラーとどっちが好き？ って訊かれたら返事に詰まるでしょ？」

「……確かに。じゃ、特に好きなジャンルをあげてみて、って言われたら？」

「特に好きなジャンル？ そうねえ、まずはアクション全般でしょ。それからコスチューム物もいいわね」

えっらい差がある組み合わせだな。

「ホラーも好きだし、最近はファンタジー物も面白いのが増えてきたし……」

姉貴は楽しそうにあれこれと作品の特徴を交えて話し始めた。うん……。

「どうしたのよ、難しい顔して」

「いやさ、今姉貴に、好きな映画のジャンルについて訊いたら、そうやってばーっと喋りだしただろ」

「訊かれたら大抵は喋るもんじゃない？」

だよなあ。じゃ、なんであの時、巡音さんはああいう反応だったんだろう？

「訊いたら黙られちゃったんだよ」

「誰に？」

「クオの家で会った初音さんの友達」

クオは何度か家に遊びに来ているので、姉貴はクオの家庭環境のことは大体把握している。

「あんまり言いたくないジャンルが好きだったんじゃないの？ ミ

リタリー映画とか」

「それって言いたくないジャンルになるわけ？」

「『フルメタル・ジャケット』が好きです、なんて男の子の前じゃ言いくいわよ。変人扱いされちゃう」

巡音さんは『フルメタル・ジャケット』を好きそうには見えないんだが……。っていうか、それは姉貴が好きな映画じゃないか。男の前でそれ言って変人扱いされた経験でもあるんだろうか。

「『椿姫』を読むような子なんだけど」

「別に両方好きでも変じゃないでしょ」

そりゃそうだが……あの時の反応は、そついう感じじゃなかったんだよなあ。

「そもそも『フルメタル・ジャケット』は不憫な映画なのよ！ 真面目なテーマを扱った作品なのに、リー・アーメイのおかげですっかりネタ扱いされてるんだから！」

俺が考え込んでいる間に、姉貴はなにやら熱を込めて喋り始めた。何も俺の前で熱弁しなくても……。やっぱり姉貴、誰かにドンピキされたんだろうなあ。

ブレインデッド（後書き）

名前が出てませんが、レンの姉はめーちゃんです。

今回かなり映画の趣味が変な人になってますが、これは今作だけの設定で、また別の作品では、違う趣味になってると思います。…多分。

ただ、今回、二人が見る映画は『ブレインデッド』でなきゃいけないんですが。

檻の虎に太陽を見せて

クオの家で映画を見てから、数日が経過したある日。俺は学校の図書室で『RENT』のサントラを聞きながら、歌詞をチエックしていた。この前見た舞台は字幕がいいかげんで、話の意味を取りづらかったんだよな。そんなわけでネット通販でサントラを購入したんだが、歌詞カードがついていなかった。幸い、歌詞を全部載せてくれているウェブサイトがあったので、そこからプリントアウトしてきたけど。

しかし、映画だとかなり曲がカットされていたんだな。「クリスマス・ベルズ」と「ハッピー・ニュー・イヤー」がカットされているのはもったいなさすぎる。映画じゃ表現しづらかったんだろうけど。

曲を聞きながら、ノートに思いついたことを書き留める。この辺りは台詞が交差していて聞き取りにくいな……ちよっと一息入れるか。プレーヤーを止めて……あ。

書棚の近くに巡音さんがいて、思い切り目があった。大体いつも真っ直ぐ帰ってるのに、こんなところにいるなんて珍しいな。

巡音さんはしばらくそのまま立っていたが、やがて、こつちへやってきた。声をかけられそうな気がしたので、俺は片方の耳からイヤフォンを抜いた。

「ここ……空いてる？」

図書室の勉強用の机は四人がけだが、俺は一人で座っている。他の三つは空いている。訊かれたので、俺は頷いた。巡音さんが俺の向かいの席に座る。そのまま、巡音さんは本を読み始めた。

……何読んでるんだろう。様子を伺ってみたが、本を机の上に置いた状態で読んでるので、タイトルがわからない。

「何読んでるの？」

気になったので、結局訊いてしまった。もちろん、声のポリュー

ムは落としている。ここは図書室だ。

巡音さんは本を立ててみせてくれた。『アグネス・グレイ』と書いてある。

「どういう話？」

「……さあ。まだ読み始めたばかりだから
そりゃそうか。」

「鏡音君は、勉強？」

今度は巡音さんの方が訊いてきた。違うけど。でも、こんなもん
広げていたらそう見えるか。辞書も置いてあるし。

「いや、これはただの趣味」

俺は印刷してきた歌詞を、巡音さんの方に差し出した。

「詩？」

「歌の歌詞」

俺はポケットに突っ込んでいたプレーヤーを取り出した。

「これのね。聞いてみる？」

俺は何気なくそう言った。巡音さんはしばらく考えてから
よく考え込む子だな 頷いた。

巡音さんにイヤフォンを渡し、彼女がそれを耳に差したのを確認
してから、曲の一覧を表示して、「レント」を選択する。舞台でか
かる長い曲はこれが最初だ。……あ。これじゃなくて、「シーズ
ズ・オブ・ラブ」の方が良かったかな。

「……ひゃっ！」

再生するやいなや、巡音さんはびっくりしたような声をあげて固
まってしまった。えーと……そんなショックを受けるような曲でも
ないと思うんだが。俺の方がびっくりだよ。

停止ボタンを押すと、巡音さんは強張った表情のまま、イヤフォ
ンを外した。

「……大丈夫？」

「ごめんなさい。こういうの初めて聞いたから、驚いちゃって」

ロックなんか別に珍しい音楽でもなんでもないとと思うんだが……

普段何聞いているんだろう。

「巡音さんは、普段はどんな音楽を聞いているの？」

「クラシックだけだ」

お嬢様というのはそういうものなんだろうか。でも確かこの前クオの奴、初音さんの誕生日プレゼントだとか言っていて、アイドルのCD買ってたよな。

「クラシックが好きなんだ」

「……多分」

おーい、返事になってないぞ。

ここで、俺はあることを思いついた。

「じゃ、ちよつとこれ、聞いてみてくれる？」

巡音さんはあんまり気が進まなそうだったが、もう一度イヤフォンを耳に差した。俺は曲の一覧から「ユア・アイズ」を選択する。

巡音さんは微妙に緊張した表情で、曲を聞いている。途中から「あれ？」と言いたげな表情になったが、最後の方で驚いたようにこう言った。

「なんでミミの名を呼ぶの？ ムゼッタのワルツでしょ？」

「あ……やっぱりわかるんだ」

『RENT』は、十九世紀のパリを舞台にした『ラ・ボエーム』というオペラの翻案だ。でもって、『RENT』の中でロジャーが何度かギターで爪弾いている曲が、『ラ・ボエーム』で使われている「ムゼッタのワルツ」という曲だったりするんだそうだ。最も俺は『ラ・ボエーム』を見たことがないので、どんな風になっているかはよくわからないし、原曲の「ムゼッタのワルツ」という曲も聞いたことがない。

すぐにわかってこう言ったということは、巡音さんは『ラ・ボエーム』を見たことがあるんだな。

「……かなり感じが変わっていたから、名前が出てくるまでは自信がなかったんだけど」

「作中でもそう言われるけどね。『それじゃムゼッタのワルツだっ

てわからないよ』って」

字幕では「パクリではありません」になってたりするけど。それじゃ意味が全然違うだろ。

巡音さんは、何がなんだかわからないという表情になった。あ、いけない。『ラ・ボエーム』のことは知っていても、『RENT』のことは知らないんだ。俺は『RENT』についてざっと説明した。「これ『RENT』っていうミュージカルの曲なんだよ。オペラの『ラ・ボエーム』を現代のニューヨークに翻案した作品。ちなみに、前に巡音さんと劇場で会った時に見たのもこれなんだけど。で、今のは主人公のロジャーが、最後の方でミニに歌う曲」

「ロジャー……ロドルフォのこと？」

「そうだよ」

一応あらずじとキャラクターはネットで調べたので知っている。

ロジャーはロドルフォ、マークはマルチェロ、モーリーンはムゼッタだったはず。

「どうしてロドルフォがムゼッタのワルツを歌うの？」

「さあ……何でだろう？ でも、三回ぐらいこのフレーズ弾いてるよ」

さすがにそこまではわからん。ラーソンが単に気に入っていただけかも。

「ロドルフォが、『わたしが街を歩くと、誰もが立ち止まって、わたしの美しさに見とれるの』って歌うの？」

巡音さんがそんなことを訊いてきたので、俺は想像して思わず笑い出してしまった。……そんなことを言うロジャーは嫌だ。いや、向こうは『RENT』を知らないから仕方ないんだけど。

「……さすがにそれはないよ。あくまでギターで弾いてるだけ。その台詞自体は別の曲にあわせて、ムゼッタに当たるキャラクターが歌ってるけどね」

「ムゼッタのワルツ」はバラバラにされて、『RENT』の中にちりばめられている。曲はロジャーがギターで爪弾き、歌詞はモーリ

ーンが全然違うメロディに乗せて歌う。タイトルだけを真似た「モ
ーリンのタンゴ」という曲もある。

「この曲の歌詞自体は『君こそが探し求めていた歌なんだ』とか、
そんな感じ」

「その台詞、『ラ・ボエーム』にも似たのがあるわ。『詩をみつけ
たんだね』ってみんなが言うの」

ロッカーのロジャーは、『ラ・ボエーム』では詩人だったよな。
映像ドキュメンタリー作家のマークは画家、ハッカーで教師のコリ
ンズは哲学者、ストリートドラママーのエンジェルは音楽家だ。

「へえ……『ラ・ボエーム』は見たことがないからなあ。一度見て
みたいとは思ってるんだけど」

さすがにオペラは敷居が高い。巡音さんにとってはそうでもない
んだろうけど。

「あ、ごめんなさい。携帯に着信入ったみたい」

巡音さんは鞆を開けると、携帯を取り出した。確認して、ちよっ
と残念そうな表情になる。

「誰から？」

「運転手さん。今日は車の調子が悪いから少し遅れるって、少し前
に連絡があつたの。で、今、迎えに来たって」

ああ、それで、図書室にいたのか。巡音さんはさようならを言っ
て、帰って行った。……あれ。読みかけの本は借りていけないんだ。

檻の虎に太陽を見せて（後書き）

どうでもいいことですが、このシーンでリンが読んでいる本のタイトルで、一時間ぐらい悩みました。いや、最初は別の本を設定していたんですが、その本だと、音楽の話そっちのけで本の話になりそうだったもんで……。

こういう、「創作の中に登場させる作品」って、セレクトが難しいんですね。大体いつもこれで悩みます。

作戦会議中のミク

わたしは現在、クオと喫茶店で作戦会議の真っ最中。作戦というのは当然、リンちゃんと鏡音君の仲を親密なものにするためのものだ。

同じクラスとはいえ、基本的に二人は全くといっていいほど話す機会がない。というより、リンちゃんはわたし以外と喋ることがほとんどないのよね。だから何としてでも、二人つきりにして、話をさせる必要がある。親密な関係になるのに一番必要なのはフランクな会話よっ。

「とにかく、どうにかしてもう一回呼び出したいの。クオ、何かいい案ない？」

クオはため息をついた。もう、なんで乗り気になってくれないのよ。

「なあ、ミク……もう止めようぜ、こんなこと」

わたしは、大きく首を横に振った。一度や二度の失敗で諦められますかっての。

「絶対に嫌」

そう答えると、クオは「しょうがないな」と言いたげな顔になって、今度はこんなことを言ってきた。

「そもそもレンの奴をお前んちに呼ぶのに無理があるんだよ」

どうして？

「だって、クオと鏡音君は友達でしょ？ 友達の家遊びに行くのって当たり前のことよね。クオはよく鏡音君の家遊びに行くじゃない」

「だからさあ、お前んちはお前んちであって、俺んちじゃないの」
そうしたら、クオはこんなことを言い出した。あのねえ。お父さんもお母さんも、家に預かる以上、クオは自分たちの息子だと思っ
て責任持って面倒見ますって、叔父さん叔母さんにそう宣言してる

んだけど。

「今はクオの家よ」

だから遠慮なんかしなくていいのに。クオってば、変なところで律儀なんだから。

クオは考える表情になった後で、今度はこんなことを言い出した。

「レンに怪しまれたんだよ」

「どういうことかしら？」

「怪しまれたって？」

「この前、なんでいきなり自分を家に呼んだのかって、しつこく訊かれた。何か魂胆があるんじゃないかって。考えてもみるよ、レンと知り合って一年半なのに、俺があいつをお前んちに呼んだの、この前が初めてなんだぜ」

うーん、鏡音君がそんなに察しがいいなんて、予想外だわ。伊達にトップクラスの成績は取ってないってことかしら。あれ、ちょっと待って。

問い詰められたってことは……クオ、まさか、全部綺麗さっぱり喋っちゃったんじゃないでしょうね？ わたしは思わずクオの顔をまじまじと見てしまった。

「クオ、まさかとは思っけど」

「誓って計画のことは喋ってない。適当にごまかしておいた」

即答するクオ。ほっ、良かった。喋られたら何もかも終わりだもの。それにしても、そうになると、なんかもつと上手な理由を考えないよね。

何かイベントでもないかな。……今は十月の半ばよね。

「そろそろハロウィンだし、パーティーをするってのはどう？」

「断言するが、そんな口実じゃ怪しまれるだけだし、あいつは来ない」

きっぱりとそう言うクオ。うーん、ダメか。リンちゃんならパーティーやるって言えば来てくれるんだけどな。

家に呼ぶのがダメなら……じゃ、家じゃなければ？

「うーん……わたしの家に呼ぶのが難しいとなると……あ、そうだわ。みんなでどこかに遊びに行かない？」

それだったら、もつとクオも口実を考えやすいかも。

「行くつてどこへ？」

「リンちゃんは門限があるし、あそこのお父さん、門限にはすぐうるさいのよ。近場じゃないと無理だけど」

移動は我が家の車を使えるから、かなり自由が利くはず。

「ゲーセンとか？」

そんな提案をするクオ。確かにクオはよく鏡音君と遊びに行ってる。クレーンゲームのぬいぐるみを、わたしにおみやげにくれたこともあつたつけ。でも、問題が一つ。

「リンちゃんをゲームセンターに誘うのは無理だと思う。ゲームやらないもの」

漫画類が全面禁止なリンちゃんの家だもの、当然、ゲーム類も一切禁止だ。ゲームセンターじゃ、鏡音君は大丈夫でも、リンちゃんの方を誘い出せない。

「じゃ、カラオケは？」

「それも厳しいと思う。リンちゃん、クラシックしか聞かないから、いまどきの音楽禁止ってのもどうかと思うんだけどね……。もちろんなアニメもダメだし、ライトノベルとかもダメ。おかげでリンちゃんは、普段はクラシックしか聞かせてもらっていないし、読ませてもらえるのは文学みたいな固い本ばかり。

「あんまり変なところだと、レンを引っ張り出すのが難しくなるぞ。一般的な高校生の遊べる場所じゃないと、確かに鏡音君がまた変に思うだろうなあ。えーっと、どこか遊べそうな場所は……」。

「……遊園地なんてどう？」

何も考えずに遊ぶのなら一番適任なはずだ。ここなら、何とかリンちゃんを説得する自信がある。

「遊園地か……それならいけるかも」

「でしよでしよ〜」

わたしは胸を張った。クオに呆れられちゃうかな。でも、これくらいいいでしょ？

「で、いつにする？」

「リンちゃんはまだ足の怪我が治ってないから、足が治ったら誘ってみる」

遊園地となると結構中で歩くから、捻挫が治ってなかったら辛いわよね。そうになると、来月になっちゃうなあ。まあ、果報は寝て待って言うし。これがダメならまた次を考えるだけよ。

作戦会議中のミク（後書き）

場所が喫茶店なのは……多分、ミクはクオと二人で喫茶店に入りた
いんだと思います。

芸術家の暮らし

その次の日の昼休み。俺は購買部でサンドイッチとおにぎりを買うと、校庭でそれを食べながら音楽を聞いていた。ちなみに今日も聞いているのは『RENT』のサントラだったりする。何度聞いても『RENT』の曲はいい。

食べ終わった後も、俺はずっと『RENT』を聞いていた。……あれ、誰か来たぞ。

顔を上げると、そこにいたのは巡音さんだった。どうしたんだろう。俺は耳からイヤフォンを外した。

「……巡音さん、俺に何か用？」

「あ、えっと……」

劇場で会ってから妙に縁があるが、そのおかげで、ちょっとは彼女のことがわかってきた。無口とか人付き合いが悪いとか言われているらしいが、実際のところは、ただ単に喋るのが苦手なだけのようだ。待ってればそのうちに話すだろう。

「それ、昨日と同じ曲？」

「そうだけど」

まさかそれ訊くためだけに、わざわざ来たわけじゃないだろうなあ。巡音さんはしばらくためらった後、手に持っていた紙袋をこっちに差し出してきた。

「これ……貸そうと思って。『ラ・ボエーム』のDVDなの」

……え？俺は紙袋を開けてみた。確かにDVDが入っている。パッケージはよりそう二人の男女の写真で たぶん、ロドルフォとミミだろう 『La Boheme』と書かれていた。

オペラってDVD出てるのか。知らなかったぞ。

「え……いいの？」

「見たいって、言ってたから」

わざわざ持ってきてくれたのか。へえ、なんというか……。

「じゃ、遠慮なく貸してもらおうよ。……あ、返すの、多分週明けになると思っけど、それでもいい?」

平日は他にやることあるから、見るのは週末になるな。

「ええ。……それじゃあ」

巡音さんは帰って行った。

土曜日の夜、晩飯の後で、俺は姉貴にDVDを見ていいか訊いた。俺の部屋にはPCがあるので、DVDならそれでも見れるけど、居間のテレビの方が画面が大きいから、できればこっちで見たい。

「何見るの?」

「オペラ『ラ・ボエーム』」

「……珍しいもの見るわね」

姉貴は驚いたようだった。ま、それは俺も認めよう。

「『RENT』の元ネタだから、前から一度見たいと思ってたんだよ」

「別にいいわよ。今日は特に見たい番組も無いし」

姉貴がそう言ったので、俺はDVDを持ってきて、プレイヤーに入れて再生ボタンを押した。姉貴も暇なのか、焼酎のお湯割りを飲みながら一緒に見始める。

パッケージの裏面によれば、これは外国の大きな劇場の公演を収録したものだそうで、最初に映るのはその劇場の外観だ。なんだか既に別世界って感じがするんだが……中も広いし、内装もえらく豪華。早いところ中身が見たいので、この辺りは倍速にしておく。

序曲(かなり明るい)の後で、いよいよ幕が上がって、オペラが始まる。セット凝ってるなあ。十九世紀のボロアパートの屋根裏がしっかりと再現されてる。ロドルフォとマルチエロの衣装も、いかにも当時の人が着てるみたいない感じだし。二人とも若者のはずなのに、役をやっているのがおっさんなのがひっかかるけど。どう見ても両方とも四十代だ。歌はさすがに上手い。普段聞く音楽とは全然違う

歌い方だけど、上手いのはわかる。朗々と響くというか、声量のあ
る歌声だ。

見ていると、『RENT』に登場したのと同じ台詞やシーンがち
よこちよこできてきて面白い。「オウムのソクラテスは天国に羽ばた
いていったのさ」は、「秋田犬のエビータは地獄に落ちたの」にな
ったんだな。ミミの「ロウソクに火を点けて」や、「みんなわたし
をミミと呼ぶの」もある。ロドルフォがミミの手に触れて「冷たい
手だね」もちゃんと入っている。第二幕でのカフェの前で物売りが
呼び交わすシーンは「クリスマス・ベルズ」にもあるし、子供が玩
具屋の後を追いかけていくのは、ヤクの売人の後をジャンキーが追
いかけていくシーンに変更されている。

一方で違うところも多い。コリンズとエンジェルに当たる、コッ
リーネとシヨナルはあんまり目立たない。ロドルフォとミミは一
目で恋に落ちるし、積極的なのはロドルフォの方だ。「僕が暖めて
あげましょう」とか言って、ミミの手さすってるし（『RENT』
では、ミミの方がロドルフォに抱きついて誘いをかける）……その
くせ第三幕では貧乏な自分と一緒にだと未来がないから、と、よくわ
からない理由でミミを捨てる。貧乏なのはどっちもどっちのはずな
んだが……。ムゼッタはマルチエロと一度はよりを戻すし、第三幕
の冒頭の牛乳売りのシーンは『RENT』には無い。気になってい
た「ムゼッタのワルツ」は、巡音さんが言うとおり、かなり感じが
変わっている。って、こっちがモトネタか。歌詞は冒頭部分のみ「
テイク・ミー・オア・リーヴ・ミー」と共通だけど、『RENT』
が喧嘩別れするシーンになっているのに対し、こちらではよりを戻
す。……なんというか、マルチエロだらしないな。これがいわゆる
「惚れた弱み」という奴なんだろうか。

一番違う印象を残すのは、やっぱり最後の幕切れだろう。病気で
死にかけている割に『ラ・ボエーム』のミミはよく喋るが、それは
まあ置いておいて、『RENT』ではミミは死なず、最後にみんな
で、「ノー・デイ・バット・トゥ・デイ」を歌い上げて賑やかに終わ

る。一方『ラ・ボエム』では、ミミは死んでしまい、ロドルフォが彼女の名を悲痛な声で呼んで、暗い音楽で幕切れとなる。

……うーん、俺はやっぱり『RENT』の方が好きだな。『ラ・ボエム』はなんというか、話自体がすごくあっさりしているというか、シンプルな感じだ。その割に長いけど、これは登場人物が同じことをずーつとだらだら歌ってるせいだろう。『RENT』の方が密度が濃くて、ぎゅっと濃縮されている感じがする。それに、『ラ・ボエム』の幕切れは正直好みじゃない。最後のカーテンコールを見ながら、そんなことを考えていた時だった。

「どんだけ、こいつはヘタレなのよっ！」

不意に姉貴が叫んだ。

「ヘタレって？」

「このロドルフォとかいう男よ！」

げっ、やばい。姉貴酔ってる。しかも悪酔い。普段は酔ってもケラケラ笑ってるだけで苦労しないんだけど、たまにこうなるんだよね……。オペラに集中してたせいで、姉貴の酒量にまで気を配ってなかった。焼酎の瓶、空になってるよ。

「なあにが『一番悪いのが僕の部屋の寒さなんだ』よ！ かつこっけちゃってさ。どうせ同じ貧乏人なんだから、最後まで傍にいてやんなさいっての！ バツカじゃないの。そんなんだから、あんたは死ぬ時も彼女の手すら握ってあげられないのよ」

参ったな……。こうなると姉貴は止まらないんだ。

「大体あんたに甲斐性つてもんがないからこうなるんでしょうがっ！ バイトの一つでもして薬代でも稼いできなさいっての！ あれこれ言うのはそれからになっ！」

「あゝそうだね」

俺は適当に流しつつ、DVDをプレーヤーから取り出してケースに閉まった。このままにしておいて、姉貴に借り物のDVDを壊されても困る。

「だあいたいこの脚本もおかしいのよっ！ なんでわざわざムゼツ

夕が『ミミは私と違って天使のような女です。だからお救いください』なんて言い出すわけ？ 自分の勝手な好みを押し付けてんじゃないわっ、どっちらけよっ!」

「それじゃ、俺はもう寝るから」

酔っ払った姉貴の相手をしてられる程、俺も暇じゃない。こういう時は放置しておくに限る。俺はDVDケースを抱えて、自分の部屋に戻った。

次の日の朝、俺が階下に下りていくと、姉貴が梅干を入れたほうじ茶を啜っていた。どうやら、派手な二日酔いになったらしい。

「あゝ、レン、おはよう……」

「おはよう、姉貴。二日酔い？」

姉貴はうなずいた。まだ顔が青い。

「私……昨日、何かした？」

「ひたすら大声でロドルフォの悪口言ってた」

姉貴はバツの悪そうな顔になった。

「んゝ、なんか、あれ見てたら腹が立つちゃって、気がついたらくいぐいやっっちゃってたのよねゝ。次の日は休みつてもあつたし」

「そんな怒るようなもの？」

ロドルフォがヘタレというのに異論はないけど、そこまでヒートアップしなくてもいいじゃないか。確かに、恋人が死ぬまでつきそつた、『RENT』の Korsins と比べるとなんだかなあと思うけどさ。

「舞台に乗り込んでって、あいつどついでやりたいたったわ」

そんなきつぱり言わなくても。っーか、姉貴は本当にやりそうで怖い。

「レンはあれ見てどう思ったの？」

「『RENT』との共通点とか相違点とか、色々見えて興味深かった」

「あんだ、本当に『RENT』好きねえ……」

どうでもいいけど、『RENT』のロジャーはもったかつこいいよな。もしかして、プッチーニがこれ発表した当時は、ロドルフォみたいなのがイケてる男だったんだらうか。

……幾らなんでもそれはないな、うん。

「姉貴は、今日はどうする？」

「ん、まだ頭痛いから家でゆっくりしてる。あんたは？」

「俺？ 俺は映画でも見に行ってくるよ」

折角の日曜だし、天気もいいし、家でくすぶっているのはもったいない。俺は冷蔵庫を開けて、昨日の残り物を取り出した。料理するのは面倒だから、朝飯はこいつでいいや。

「姉貴も食べる？」

「いい……食欲無いから」

「わかってんならそんなに飲まなきゃいいのに」

「うっさいわね」

姉貴は不機嫌そうにそう言った。これ以上刺激するとぶちきれんな。ここまでにしとこう。

芸術家の暮らし（後書き）

意外と、専門外の分野のことって気づかなかつたりするんですね。

最近はオペラといっても色々な演出がありますが、『ラ・ボエーム』
に関しては、奇をてらった演出というのは見たことがあります。
四回ぐらい見ますが、大体どれも同じような感じでした。

凍るか、燃え上がるか

月曜の朝、登校してきた俺は、学校の校門のところに、見覚えのある車が止まっているのに気づいた。あれは巡音さんのところのだ。見ていると、運転手さんが車から降りて後部座席のドアを開けた。車の中から巡音さんが出てくる。運転手さんは一礼して車に戻り、そのまま発進して行った。巡音さんは、校舎に向けて歩き出す。

「おはよう、巡音さん」

俺は、その背中に向けて声をかけた。巡音さんが振り向く。

「あ……おはよう、鏡音君」

……なんだか元気が無いような？ もともと淡々と喋る子だけど、今日はいつもにも増して淡々としている。昨日夜更かしでもしたのかな。

「週末にあれ見たんだ。巡音さんが貸してくれた『ラ・ボエーム』。俺はそこで言葉を止める。巡音さんが「どうだった？」と訊いてくると思ってた。

「そうなんだ……」

えーと。想像してたのとは全然違った反応が返って来たので、さすがにちよつと戸惑う。

「姉貴が暇だったらしくて一緒に見たんだけど、見ていたら姉貴が怒り出しちゃってすごかったよ。『こんのヘタレ男』って、ロドルフォのことを怒鳴りまくっちゃって。うちの姉貴、感情の起伏が激しいもんだから。何もそんなに怒らなくてもいいと思うんだけどさ。自分の感想よりも姉貴の反応の方がネタになりそうだったので、こつ振ってみる。驚くとか笑うとか呆れるとか、何か反応が出てこないかなと思ってる。

「……………」

無反応だよ。……よく考えてみたら、俺は巡音さんに自分の家族構成のことを話したことがなかった。いきなり知らない人の話を出

されて戸惑ってるのかな。

「巡音さんはどう思う?」

結局こう訊いてみる。まあ幾らなんでも巡音さんは、姉貴みたいに怒り狂ったりはしないだろうけど。

「……………お姉さんのこと?」

いや、姉貴のことじゃなくって。って、姉貴の話を出したのは俺の方が。

「そうじゃなくて、『ラ・ボエーム』のこと」

「プッチーニの代表作の一つよね。彼の作品の中では一番ロマンティックと言われている、現代でも人気が高いわ」

あのう……………。何その「オペラ手引書」の説明文みたいな台詞……………。

「俺が訊きたいの、そういうのじゃないんだけど」

巡音さんの返事は無い。……………要領を得ない会話に、さすがに俺もいらいらしてきた。

「だからさあ、巡音さんは『ラ・ボエーム』をどう思っているわけ?」

「……………」

何で黙るんだろう? 別にどんな反応が返って来ても驚きやしなainだけだ。何せ姉貴がああだったからなあ。巡音さんが姉貴と同じことを言うとは思えないし。

「何も評論家みたいなこと言わなくてもいいから。『こんな恋愛してみた』とか『ミニよりもゼツタの方がすてきだと思っ』とか、そんな単純なのでいいんだってば。なんならうちの姉貴みたいに『ロドルフォのヘタレ顔を洗って出直してきやがれ』とかでもさ。なんかないの?」

でも、巡音さんの返事はこうだった。

「別に……………」

「巡音さんには自分の意見ってものがないの?」

思わず、俺はかなりきつい調子でそう言ってしまった。言った瞬間、巡音さんがはじかれたように顔をあげる。……………やべっ。やっち

まった。

「そんなこと……訊かないですよ……」

俺の見てる前で、巡音さんが自分の肩を抱いて、震えだした。様子がおかしい。

「……巡音さん？」

「それに……そんな言い方しないでっ！ 言われても困るの！ わたしは……わたしはっ……！」

悲鳴みたいな声だった。俺は啞然として、巡音さんをみつめた。どうしちゃったんだ？ それに、ここは校門だよ。周りの視線が痛い。

「ちよつと巡音さん、落ち着いて」

俺は腕を伸ばして、巡音さんの肩を抑えた。まずは落ち着いてもらわないと。これじゃ話もできやしない。

巡音さんは目を見開いて、こっちを見ている。その身体がふらつとよるめいて……。

「ガラスが……」

「巡音さん？ ちよつと、巡音さん!？」

俺は倒れかけた巡音さんの身体を咄嗟に支えた。げ……気を失っちゃってるよ。おまけに真っ青だ。そんなに具合が悪かったのか？ まずいことしちゃったな……。

「巡音さん、しっかりして」

軽くゆすつてみるが、目を覚まさない。このままにはしておけないな。保健室に連れて行こう。

あの後、俺は通りかかった知り合いの手を借りて 幾らなんでも、気絶した人間を担いで歩くのは無理だ 巡音さんを保健室に運び込んだ。

「先生、巡音さんはどうしちゃったんですか？」

校医の先生に俺は訊いてみた。

「貧血でしょうね。この年頃の女の子にはよくあることよ」

そう言っただけ先生はため息混じりに、ベッドの上の巡音さんに視線を向けた。

「ただでさえ最近は、雑誌とかの影響で過激なダイエットに走っちゃって、そのせいでひどい貧血を起こす子が増えているのよね……」

「ダイエットが必要そうには見えませんか……」

そもそも、ダイエットなんてしてるのか？ 初音さんの家で会った時は、普通に食事してたけど。

「そういう子の方がダイエットに血眼になっちゃうのよ。全く、世の中の風潮にも困ったものね……」

……先生、何だか完全にダイエットのせいって決め付けちゃってるけど、せめて本人の口からダイエットしてるかどうかを聞いてから、そう言ってくれませんか。

俺は気を失っている巡音さんを見た。血の気が無いせいか、ひどく弱々しく見える。

「ところであなた、そろそろ行かないと、授業が始まっちゃうわよ」

正直言うともあんまり行きたくない。この状態の巡音さんを放っておくのは気が進まないし。

「……傍についてたら駄目ですか」

「あなたが残っていてもできることなんてないでしょう？ むしろ邪魔なんだから、早く行きなさい」

そこまできっぱり言わなくてもいいじゃないか……。俺は恨めしげに先生を見たが、向こうは全然動じていなかった。仕方ない。

「わかりました。行きます」

「わかればよろしい」

……なんかいらいらするな。

結局、巡音さんは教室には戻って来なかった。俺は昼休みに保健室に行ってみたが、校医の先生に「早退した」と言われてしまった。

状態をしつこく詮索するとまたあれこれ言われそうだったので、そこで引き上げる。

その日、俺は結局授業にも部活にも集中できなかつた。らしくないぞ、と、自分で自分に突っ込みを入れてみるが、事実なんだから仕方がない。

「……レン、お前、今日なんか変だぞ」

クオにまでそう言われてしまった。

「なあ、クオ。あのさ……」

「なんだよ」

「……やっぱいいや」

幾らなんでも巡音さんのメールアドレスは知らないだろう。初音さんなら知っているだろうけど、そのためにクオに初音さんに連絡してもらおうのもな……。

「言いかけたことは最後まで言えよ」

「大したことじゃないからいい」

「気になるだろ」

俺はちよつと考えて、違うことを訊いてみることにした。

「クオ、お前、なんで恋愛映画嫌いなんだっけ？」

露骨にはあ？ という顔をされてしまった。多分「本当に大したことじゃないな」とでも思っているんだろう。

「だって退屈じゃないか」

「そんだけ？」

「なんかずーつとうだうだやってるだけだろ、あれ。俺には理解できない世界なんだよ」

まあ、俺もそんなに面白いとは思わないけど。

「初音さんは好きそうなのに」

「ミクはなく、基本的に、可愛いしいもんが好きなんだよ。動物が出てくる映画とかも好きだぜ、あいつ。そっちならまだ見てられるんだけど、恋愛映画は、俺はパス」

クオの言葉を聞きながら、俺は巡音さんのことを考えていた。喋

るのが苦手なだけだと思っていたけれど、何かもつと別の問題を抱えているのかもしれない。

……って、人のことをあれこれ詮索すんのもなあ。

「レン、どうしたんだ。またぼーっとして」

「ちよつと考え事」

「悩みがあるんだつたら聞かせ」

「悩みってほどじゃない。ところでクオ、お前、ガラスって言われて何連想する？」

「なんだよ、今度は連想クイズか？」

クオは思い切り呆れた顔になったが、一応返事はしてくれた。

「ガラス……ガラスねえ。窓だろ、コップだろ、電球だろ……ぱっと思いつくのはこんなところか」

「うーん……」

確かにどれもガラスでできてるが……。なんか違うよな。なんで気を失う前に巡音さん、ガラスって呟いていたんだらう？

「ガラスの靴」

クオは突然、そんなことを言い出した。思わず顔をあげる。

「……へ？」

「『シンデレラ』だよ。ミクなら絶対そう言うね」

ああ、あれか。アニメにもなってる有名なおとぎ話だ。それもなんか違うなあ……。そんな、ロマンチックな雰囲気じゃない。

じゃあ、ガラスってどういう意味だ？

「うーん、そうじゃないんだよな……」

考えたが、俺にはわからなかった。

凍るか、燃え上がるか（後書き）

自分で書いておいて言うのもなんですが、この学校の校医の先生は頼りにならなそうです。

ミクの奇立ち

月曜日、登校してきたわたしは、リンちゃんの席が空なのに気がついた。……いつも、わたしより早く来るのになあ。お手洗いでも行っているのかな。

自分の席に座って、わたしはぼんやりしていた。普段はリンちゃんとお喋りしている時間。ちょっと手もちぶさた。

結局、始業のベルが鳴る時間になっても、リンちゃんは来なかった。お休み？ 心配になったわたしは、昼休みにリンちゃんにメールを送った。ついでにクオに、お昼を一緒に食べないかもメールしておく。

リンちゃんからもクオからも、すぐに返事がきた。リンちゃんからは「一度登校したんだけど、貧血で倒れて早退したの。連絡しなくてごめんね」と。クオからは「いいぜ。中庭で待ってる」と。リンちゃんに「大丈夫？ 無理しちゃダメだからね」と返信してからわたしは自分のお弁当と水筒を持って、中庭に向かった。

クオはもう来ていて、ベンチの一つに座っていた。わたしは手を振って、クオの方へと駆け寄り、隣に座った。

「今日は振られたのか？」

それが、クオの第一声だった。どういう意味？

「振られたって？」

「巡音さん。お前、いつも昼は一緒だろ」

どうしてクオはいつもいらないこと言うのかしら。

「クオ、振られたって言い方はないでしょ。リンちゃんはね、今日は学校休んでるの。具合が悪いんだって」

単なる体調不良ならいいけど……リンちゃんの話は、色々心配。プライバシーのこともあるし、クオに話すわけにはいかないけど。

クオは頷いて、お弁当箱を開けて箸をつけた。クオのお弁当箱、

いつ見ても大きいなあ。わたしのお弁当箱の倍くらいある。なんであんなに食べられるんだろう。

「具合が悪いつて、風邪か何か？」

「貧血だつて」

「それ、病気か？」

クオはそんなことを言い出した。わたしはクオの額を軽く叩いた。貧血を甘くみないでほしいわ。

「あのねえ、あれ、辛いんだからね」

「経験したことあるような口ぶりだな」

「わたしだつて、貧血になったことぐらいあるわよ
倒れるほどひどいのじゃなかったけど。」

「血の気多いの？」

「誰がよっ！」

「もう、クオつてば！ 女の子はね、色々と大変なの」

クオつて、どうしてこうデリカシーないのかしらね？ 困ったもんだわ。

この日は、クオは部活があつたので、わたしは先に帰った。演劇部の活動つて、結構長いよね。一人で待つていても退屈だし。

今日は家庭教師の先生が来ない日。……でも、宿題出てたな。先によつとこうつと。あ、わたしもクオも、家庭教師の先生に勉強を見てもらつてゐるの。やつぱり、学校の授業だけだと不十分だからね。一体一で教えてもらう方が、効率はいいし。

宿題を終わらせたけど、クオはまだ帰つて来ない。わたしは居間のテレビをつけて、音楽チャンネルにあわせた。あ、最近いいなと思つた人が出てるわ。

テレビを見てみると、クオが帰つてきた。

「あ、クオ、お帰り」

「おう、ただいま」

「ねえクオ、今ね……」

わたしは見ていた番組の内容について、クオに話し始めた。でも、そんなに話さないうちに、クオがわたしをさえぎった。

「ミク、ちよつといいか？」

「何？」

「お前、ガラスって言われて何を連想する？」

クオは、突然そんなことを訊いてきた。いきなりどうしたのかしら。うーん、ガラスねえ……。

「ガラスの靴！」

「やっぱこれでしょ。」

「それって『シンデレラ』だよな」

「決まってるじゃない」

他に何かあるというのよ。それにしても、クオったら、なんでいきなりこんなこと言い出したのかしら。……もしかして。

「ねえ、クオ。憶えてる？」

「もしかしてプレゼントの話？」

期待を込めてわたしはそう訊いてみた。でも、クオの返事は……。

「……なんでそうなるんだよ」

「……だった。しかも心底呆れた表情で。……何よそれは！」

「クオのバカ！」

わたしはそう叫んで、クオにクッションを投げつけた。ぼふつという音がする。そのままわたしは居間を飛び出すと、自分の部屋に駆け込んだ。部屋のドアを閉めると、机に駆け寄り、ジュエリーボックスを取り出す。わたしは箱の蓋を開けた。三段重ねのジュエリーボックスの、一番下の層の、区切られたスペース。そこに入っているものを取り出す。

金色のチェーンの先に、ガラスの靴が下がったペンダント。子供のお小遣いで買えるお値段のものだから、安っぽい。でも。

あれはわたしが小学生の時だった。ガラスの靴が欲しいって言うたら、クオがお土産屋さんで買ってきてくれたの。すごく嬉しくて、

ずっと大切にするって言った。

「……バカ」

なんで、くれた方は忘れてるのよ。言ってくれたらこれ見せて「
今でも大事に持ってるのよ」って、言おうって思ったのに。クオの
バカバカ！

ミクの奇立ち（後書き）

……これって、ミクとクオ、どっちに問題があるんだろう。

目覚める必要

「……何だこりゃ」

俺は思わず呟いていた。目の前にあるのは、巨大な茨の藪。そして、道はその茨の中に消えている。

「この先に行けっか？」

目の前の茨には、鋭い棘がびっしり生えている。こんなのに触ったら手がズタズタになりそうだ……そう思いながらも、俺は手で茨に触れてみた。……あれ。

茨はあっさりと崩れて消えた。なんなんだ、いったい。まあいい、先に行こう。進んだ先には、石を積み上げて作った建物があった。扉を開けて中に入る。がらんとした部屋の中には祭壇のようなものがあって、何かが乗っている。俺は祭壇に近づいた。

「……ガラスの棺？」

祭壇の上に乗っていたのは、透き通ったガラスの棺だった。当然中が透けて見える。棺の中には花が敷き詰められていて、誰かがその中に寝かされている。

「巡音さん？」

棺の中に入っていたのは、巡音さんだった。目を閉じて、全く動かない。これ……死んでるってこと？

俺は重い棺の蓋を持ち上げると、中の巡音さんを助け起こした。

あ、死んでるんじゃない。眠ってるだけみたいだ。

「巡音さん、起きて」

揺すってみたが、巡音さんは目を覚まさない。

「巡音さん、巡音さんってば」

……なんで起きないんだろう？俺は巡音さんを抱きかかえたまま、途方にくれた。あれ、ちょっと待て。このシチュエーションって、確か。

「……キスしろってことか!？」

昔話なんかでこういう話なかったっけ。お姫様が死人みたいに眠っていて、王子様がキスすると目を覚ますって奴。あれをやれっ
てか!？ いくらなんでも意識の無い女の子に勝手にキスできるか
っ!

「巡音さん、起きてくれ」

頬を軽く叩いてみたり、強く揺さぶってみたりするが、やっぱり
目を覚まさない。俺は額を押さえた。……やるしかないか。

「……ごめん」

一応詫びを入れておいてから もっとも、向こうは眠ってるん
だけど、俺は、巡音さんの唇に自分のそれを押し付けた。

唇を離してから、しばらくして。巡音さんが目を開けた。「キス
する」が正解だったのか……。巡音さんは、目を見開いてこっちを
じっと見ている。ざ、罪悪感が……。

「えーと……今のは起こすためにやったんであって、別に変な気を
起こしたわけじゃないから……その……」

「どうして……?」

うわ……今にも泣き出しそうだ。まずい。非常にまずい。

「いやだから、起こすためだってば」

「どうして、わたしを起こしたの? ずっと眠っていたかったのに」
「え?」

予想外のことを訊かれて、俺は返事に詰まった。

気がつくくと、目覚まし時計がやかましい音を立てて鳴り響いてい
た。……うるさい。起き上がって、目覚ましを止める。

あ……今のは夢だったのか。そりゃそうだよな。あれが現実だっ
たりしたら困るよ。しかし、何て夢だ。誰かに話したら笑われるの
は確実じゃないか。なんであんな夢、見たんだろう。

寝起きで半分ぼーとした頭のまま、俺は洗面所に行って顔を洗
った。……ちょっとはさっぱりしたな。居間に行くと、姉貴が朝食

を食べていた。

「おはよう」

「おはよう。……レン、昨夜夜更かしてもした？ 起きたばかりにしては疲れてるみたいだけど」

「なんか……夢見が悪くて……」

答えながら、俺は冷蔵庫を開けた。ハムが入ってる。ハムエッグでも作るか。ハムと卵を取り出し、フライパンを火にかける。

「夢ねえ……殺人鬼にでも追いかけられた？ それとも、誰か刺した？」

なんで姉貴の例えって殺伐としてるんだろう。そんなことを考えながら、俺はトースターに食パンを入れた。

「そういうのじゃないよ」

「じゃ、家が火事にでもなった？ あ、でも、火事の夢って縁起がいのよね、確か」

姉貴、その手の迷信は信じてないんじゃないかなかったっけ。

「違っつて。別にいいだろ、夢の話なんて」

あんな夢、話せるかい。一ヶ月はネタにされるに決まってる。あ、卵が焼けた。皿に移す。トーストとハムエッグと牛乳の朝食を支度すると、俺は姉貴の差し向かいに座った。

「……あ、わかった」

「何が」

「レン、正直に答えなさい。エッチな夢見たんでしょ？」

牛乳を飲んでいた俺は、思い切りむせた。いきなり何言い出すんだよ、姉貴っ！

「うわ……その反応。凶星だったのね」

「違っよっ！」

キスはしたけど、断じてそういう夢じゃないってば！

「別に恥ずかしながらなくてもいいわよ。そのくらいの年齢だったら、むしろ当たり前だってば」

「だから違っつて」

「あゝはいはい、そういうことにしておいてあげるわ」

姉貴はにやにや笑いながらそう言った。……完全に誤解されてるよ。全くもう。これ以上否定しても、姉貴は益々そうだと思うだけだろうな。話を変えよう。

「ところで姉貴」

「何？」

「眠ってるお姫様を王子様が起こす昔話って、何だったっけ」

小さい時に絵本かアニメであの手の話を見た記憶はあるんだが、タイトルが出てこない。姉貴は一応女だし、お姫様が出てくる昔話には、俺より詳しいだろう。

「何よ急に」

「いいから教えてくれよ」

「『眠り姫』？ それとも『白雪姫』？」

そう訊き返してくる姉貴。二つもあるの？

「どう違うんだっけ？」

「『眠り姫』は、出産のお祝いに招かれなかった妖精が怒って、お姫様が十五になった年に死ぬ呪いをかけるんだけど、別の妖精が呪いを弱めて、百年眠るだけにしてくれるの。十五の年に眠りについたお姫様は、茨に取り囲まれたお城で百年間眠り続けて、百年目に王子様がお城を訪れて、お姫様にキスすると呪いが解けて眠りから目覚めるのよ。」

『白雪姫』は、継母に美貌を疎まれたお姫様が捨てられて、七人の小人と一緒に暮らすんだけど、しつこい継母が白雪姫に毒の入ったリンゴを食べさせて殺そうとするの。でも白雪姫は死んだんじゃないって仮死状態になっただけで、ガラスの棺に入れて置いておかれてそこへ王子様を通りかかって、白雪姫を目覚めさせてあげるのね」

……混ざってるな、さっきの夢。茨とガラスの棺の両方がでてきたぞ。巡音さんが「ガラス」なんて言ったからだろうか。

「まあこれは有名なパターンで、更に細かいバージョン違いがあちこちに散らばっているんだけどね」。例えば『眠り姫』だと、グリ

△童話に収録されている『いばら姫』っていうのが一番有名で、今喋ったのがそう。ペロー童話の『眠れる森の美女』だと、前半はほとんど一緒なんだけど、えぐい後半が続いていたりするし」

「えぐい後半って？」

「ん〜確か、王子の母親がイカれてて、王子が留守にしている間に、お姫様と王子の間にできた子供やお姫様を食べようとするのよ」

「……なんだそりゃ。そんな危ない母親持って、王子大丈夫なのか？」

「血の繋がった孫を食うって……」

「料理人が気を利かせてかくまうから、実際に食べられはしないんだけどね。昔話って、結構子供を食べる話があるのよね。中には実の息子を両親が殺して食べる話もあるっていうし」

さらっと言わないでくれよ。

「それにしてもあんた、なんで朝から昔話のことなんか訊くのよ？」

「……いや別に。なんとなく」

「もしかして、夢に眠っているお姫様でもでてきたの？」

俺はもう一度、盛大に咳き込む羽目になった。

「あ……これまた凶星か」

「いやだから……」

否定しようとして、俺は「夢に眠っているお姫様がでてきた」は事実だということに思い当たった。お姫様っていうか、巡音さんだけ。そう言えば、夢の中ではドレスを着ていたような。

「ずいぶんとメルヘンな夢ねえ。で、あんたはお姫様が眠っているのいいことに、着てるものを脱がせたわけか」

「……なんでそこまで話が飛躍するわけ？」

キスしかしてないってのに……。姉貴は俺のことをなんだと思ってるんだ。

「夢見が悪かった、って言ったってことは、あまりいい夢じゃなかったってことでしょ。だから、眠っているお姫様をみつけて、着てるものを脱がせて、いざ本番ってところで目が覚めちゃったのかなと」

微妙な年齢の弟の前で、そんな生々しい話は止めてくれ。

「違うって。っていうか、姉貴こそ、どうしてそういう発想になるんだよ。そっちこそ欲求不満なんじゃないの」

「実際にあるのよ。眠っているお姫様に王子様が襲いかかって、妊娠させちゃう昔話が」

昔の人の考えることはよくわからん。それじゃあ王子は犯罪者じゃないか。

「犯罪だろ、それ。どう考えても」

「そうしないとお姫様が起きないから仕方がないのよ。まゝ私も、こんな変態王子には、蹴りでも叩き込んでやりたいとは思っただけだね」

妊娠と目覚めにどういう因果関係があるんだ？ あ……そう言え

ば。
「お姫様は、起きなくちゃいけないわけ？」

夢の中で巡音さんは「ずっと眠っていたかった」と言っていた。現実の巡音さんにそう言われたわけじゃないけど、何だか引っこかかる。

「は？」

「ずっと眠っていたいとか思ったりしないのかな？」

俺がそう言うと、姉貴は呆れた表情になった。

「あのねえ。ずっと眠ってるってことは、何も見えないし、何も聞こえない。美味しいものだって食べられないし、すてきな人に出会って胸をときめかせることもないってこと。そんなの、死んでると同じよ」

死んでると同じ、か……。

「レン、ところで」

「何？」

「考え込むのもいいけど、あんた、時間は？」

いけね。姉貴との話に没頭していて、時間のことを忘れていた。

急がないといつも電車、逃がしちまう。俺は慌てて朝食の残りを

片付けると、席を立った。

目覚める必要（後書き）

めーちゃんのツッコミがいろんな意味で容赦無かつたような。

作中で言及している「王子様がお姫様に襲い掛かる」昔話は実際に存在します。こちらのサイトに掲載されている「太陽と月とタリリア」という話です。こんなのとくつついて幸せになれるんだろうか……？（そう思っちゃう昔話って、結構多かつたりするのですが）
<http://suwa3.web.fc2.com/enkan/minwa/sleeping/00.html>

このサイトには色々な昔話が掲載されていますが、これを見た感じだと「キスで目覚める」というパターンは意外と少なくて、実際のところは「眠らせている原因を取り除いてやる」と目が覚める、というパターンがほとんどなんですね。やっぱりアニメの影響が大きいらしいなあ。

雪の中で咲こうとする花

何とか電車には間に合い、遅刻もせずに済んだ。ああ良かったと思いつながら教室に入る。……あ。

巡音さん、今日は来ているんだ。自分の席で、今日も本を読んでいる。もう大丈夫なんだろうか。

「おはよう、巡音さん」

声をかけると、向こうは驚いた表情でこっちを見た。弾みでぱたんと本が机の上に落ちる。……ガルシンの短編集ね。

「……おはよう、鏡音君」

そう言つて、巡音さんは視線を落とした。否応無しに今朝の夢が思い出されるが、俺は必死でそれを頭から追い払った。夢の話なんかされても巡音さんが困るだろう。ましてやあの内容じゃ……。

「貧血は、もう大丈夫なの？」

「……ええ、もう平気」

相変わらず下を向いている。こっち向いてくれないかなあ。

「この前は……その……ごめんなさい」
謝られてしまった。

「あゝ、気にしてないからいいよ」

俺の方が、具合の悪かった巡音さんを追い詰めちゃったみたいだし。

「でも……」

巡音さんは困った表情で、そう呟いている。放つとくと堂々巡りになるな。ここは……あ、でも、そろそろ先生が来る時間だ。

「それより巡音さん、今日、時間空いてる？」

「え？」

「良かったら、放課後、ちょっと話せないかな」

今日は部活は無いから、俺の方は時間が取れる。こんな朝のあわただしい時間よりも、放課後の方が話がしやすそうだ。

「話すつて……何を？」

訊き返されてしまった。

「大したことじゃないんだけど、巡音さんに訊きたいことがあって」

「……わたしに？」

「そう」

俺は頷いた。巡音さんは、相変わらず困ったような表情で、落ち着きなく視線を動かしている。悩んでいるみたいだ。

しばらくして、巡音さんは、こう口にした。

「多分、大丈夫だと思う……」

「それ、いいつてこと？」

巡音さんは頷いた。えーっと、じゃ、後はどこで話すかだ。人がうろつろしているようなところだと、落ちついて話せないだろうし……。

「じゃあ、放課後、屋上に来てくれる？」

あそこだったらあんまり人は来ないはずだ。巡音さんが頷いたので、俺は自分の席へと戻った。

うちの学校の屋上は、何故か鍵がかかっていなかったりする。俺は一年の時、ふっと思いついて屋上へ続く階段を上がって、扉の取っ手を軽い気持ちで回したら、開いてしまったのでひどく驚いた。

それ以来、休みの時間なんかにたまに来てみたりするが、あれ以来、ずーっと開きっぱなしだ。無用心といえば無用心だが、俺がわざわざ注進することもないしな。なんでそんなこと知ってるんだとか、言われたら嫌だし。

もっとも、ほとんどの人は屋上というのは上がれないものだと思っっているらしく、ここはいつ来ても誰もいない。まあそんなわけで、巡音さんと話をする場所をここにしたんだ。

屋上に来てみると、巡音さんはまだ来ていなかった。さっき、教室内で初音さんと話していたっけ。もうちょっとしたら来るだろう。

俺は屋上のフェンスにもたれて、空を眺めた。いい天気だ。

そんなにしないうちに、扉が開く音がした。巡音さんだ。ちょっと辺りを見回してから、こっちにやってくる。

「鏡音君、話って、何？」

俺としては色々訊きたいことはあるんだが、どういう順番で話したもんかな……。一応考えといたはずなんだが、本人を前にすると出てこない。

「あ、えーと……」

俺は鞆を開けて、中から巡音さんが貸してくれた『ラ・ボエーム』のDVDを取り出した。

「まずはこれ、返しとくよ。どうもありがとう」

巡音さんはDVDを受け取ると、自分の鞆に入れている。うつむいているので、表情はよく見えない。

「あの……巡音さん、二日前のことなんだけど」

俺はやっぱり、気になっていることを訊いてみることにした。

「巡音さん、倒れる前に『ガラス』って言ってたけど、何のことだったの？」

巡音さんは顔を上げると、怪訝そうな表情になった。

「わたし……そんなこと言った？」

俺は巡音さんの顔を見た。とぼけているとか、嘘をついているわけじゃなさそうだ。

「少なくとも俺にはそう聞こえたけど」

巡音さんは考え込む表情になって、それから首を横に振った。

「ごめんなさい……憶えてないわ」

貧血でふらついていたりした時だから、憶えてなくても仕方がないかなあ。こだわった俺がバカみただけで、人間たまにはバカもやるさ。巡音さんは何か考えるような表情で、フェンス越しに外を見ている。

「ガラスって、透き通っているから外が見えるのよね。だから、ガラスの中に閉じ込められたら、すごく苦しいと思う。外は自由に見

えるのに、自分は動けないから」

不意に、巡音さんはそんなことを言い出した。一瞬、曇ってるガラスもあるよと言いそうになったが、俺は口をつぐんだ。今は、茶化していい時じゃない。

ガラスの中か……今朝の夢で、巡音さんはガラスの棺に入っていた。

「その状態だと、眠っている方が楽だと思う？」

巡音さんは、俺の言ったことに驚いたみたいだった。ちょっと唐突すぎたかなあ。

「……多分、ね。眠っていれば、外は見えないから」

「何も見えないし、何も感じないんじゃない？」

って、姉貴は言ってたよな。そしてそれは死んでいるのと同じだって。

「だから楽なのよ。見えるけれど動けないのとは違うから」

「でもそれだと、死んでいるのと一緒にじゃない？」

「言いたいことはわからなくても……」。

「……一緒にかも」

巡音さんは淡々とそう言った。表情も無表情に近い。

俺が言うのもなんだけど、起きた方がいいと思うぞ。眠りっぱなしより。

あ、でも……。

考えてみたら、初めて、まともに巡音さん自身の意見というものを聞いた気がする。

「ちょっとほっとした」

「……え？」

「巡音さんの考えてること、初めてちゃんと聞いたから」

何も考えてないわけじゃないんだ。

「どうして鏡音君がそんなことを気にするの？」

巡音さんの質問。どうして……なんだか、放っておけない気がするんだよ。でも、それをそのまま言うのもあれだしなあ。

「単なる好奇心だよ」

巡音さんは、また困ったような表情をしている。

「あ……それと」

俺は鞆から、もう一枚のDVDを取り出した。ミュージカル『R
ENT』のDVDだ。

「良かったら、これ、見てみない？ 残念ながら映画版だけど」

舞台版のDVDは出ていない（注）映画は曲が幾つかカットされたり、シーンが変更されたりしていて、話が多少わかりづらくなっているから、できれば舞台の方が良かったんだが……こればかりは仕方がない。

巡音さんはDVDを受け取って眺めている。

「これ……鏡音君がこの前聞いていた曲のミュージカル？ 『ラ・ボエーム』が原案の」

「そつだよ」

巡音さんはもう一度、DVDに視線を落とした。そのまま、何やら考え込んでいる。……あれ？ なんか、変な表情してるけど、どうしたんだろう。

「……巡音さん？」

俺が声をかけると、巡音さんははっとこつちを見た。……何だろう。何かに怯えているみたいに見えるけど……。興味ないけど、それを直接口に出したら俺が怒るとでも思ってるんだろうか。そこまです見狭く無いよ。

「こつこつものには興味ない？」

「そつじゃなくて……」

視線が動いている。言いにくいことがあるみたいだ。

「言いたいことあるならはっきり言ってくれていいよ」

巡音さんはまだしばらく迷っていたが、やがて、意を決したように口を開いた。

「あのね……わたしとしては、これ、とても見てみたいんだけど……」

……」

だから貸してあげるって。だが巡音さんが言い出したのは、意外なことだった。

「わたしの家……この手のもの、全部禁止なの……」
え？

「……全部って？」
思わず訊き返す。

「漫画とか、アニメとか、ゲームとか……最近の音楽とか……」
巡音さんは伏し目がちに、小さな声でそう言った。ちよっと待て。何だその滅茶苦茶な禁止令は。じゃあ、巡音さんは普段どうしてるんだ？

「えーっと……それ全部禁止なの？ 何か条件ついてるとかじゃなくて、最初から全部？」

一応確認。巡音さんは頷いた。……信じられない。

そりゃ俺だつて「勉強するまでゲームはだめ！」とか言われたことなら、数え切れないくらいある。でもそれはあくまで「勉強するまで」であつて、やることさえやっておけば、漫画を読むのもゲームをやるのも自由だ。そのものを禁止されることはさすがに無い。
「そういうものは、悪影響があるって……」

ゲーム脳がどうたら、とか変な理屈こねてる学者の本でも読んでるんだろつか。

「俺の本音を正直に言わせてもらつと、巡音さんの親って、厳しすぎるというか、むしろ変だと思つ」

あ、結構きつい調子になつてしまった。巡音さんが、視線を伏せてしまう。参つたな。傷つけてしまっただろつか。

「……やっぱりそう思つ？」
あれ。予想したのと違う反応が来たぞ。

「やっぱりって？」
「わたしも……その、変じゃないかとは思つてただけど……。ミクちゃんの家は、どれも禁止じゃないし……。あまり話したことないけど、他の人もそうみたいだし……。でも、ミクちゃんの家はミクち

やんの家だから……」

おどおどと巡音さんはそう言った。

「要するに、これが我が家ルールなんだからそれに従ってるって、そう、言われているわけ？」

訊いてみると、巡音さんはまた頷いた。道理でいつもクラシックばかり聞いてたり、固い本ばかり読んでたりするわけだ。クラシックが好きだから、文学作品が好きだから、ってわけじゃなくて、それしか駄目だからか。しかし、巡音さんの親つてのも、よくわからないな。巡音さんが今朝読んだの、ガルシンの短編集だったぞ。あの作家、確か精神病院に出たり入ったりを繰り返したあげく、三十ちよいで自殺してるんだが……。正直、精神が不安定な時に読む本じゃないと思う。

「そういうわけだから……わたし、これ、借りて帰るわけにはいかないの。もし見つかったら、鏡音君にも迷惑がかかるし」

巡音さんはそんなことを言い出した。

「迷惑って？」

「……わたしがまだ小さかった頃の話なんだけど、ミクちゃんに漫画を貸してもらったことがあるの。そうしたら、それが見つかって……お父さん、ひどく怒って。ミクちゃんの家には電話をかけて……ひたすら苦情を……」

これは巡音さんにとっては思い出したくない思い出なのか、話すにつれて、どんどん声のトーンが下がっていった。ってちよっと待てよおい。そこまでやるのか、巡音さんの家。

「その時、巡音さんいくつだったの？」

「確か……小学校の一年生」

会ったことのない相手のことをどうこう言うのもなんだが、巡音さんの親つて、相当イカれているんじゃないだろうか。

しかしこうなると、これを貸すのは無理だな……。折角見たいって言うてくれたのに。うーん、何か打開策は……。

視聴覚教室には、再生機材があったな。でも、生徒だけじゃ使わ

せてもらえないだろうし……。初音さんの家は……。幾らなんでもこんなこと頼むのは、図々しすぎるよなあ。

「あのさ……巡音さん。だったら、いつそ俺の家に来る？」

結局俺が出した結論はこれだった。幸い、我が家ならやかましいことを言う人はいない。……姉貴にからかわれるかもしれないけど。「家って……」

こう言われたことがよほど意外だったのか、巡音さんは目を見開いている。

「だから、俺の家。友達連れてきてどうこう言われるような、うるさい家じゃないから。クオはよく遊びに来てよ」

ここで俺は一つ、問題点に気づいた。俺の家には親がない。つまり、下手をすると俺の家で、俺と巡音さんが二人つきりになってしまうわけ……。

……姉貴に頼んで、当日は家にいてもらおう。留守中に女の子と二人つきり、なんてことが後でバレたら、色々ややこしいことになる。やましいことが何もなかったにしても。痛くもない腹を探られるのはごめんだ。

巡音さんは考え込んでしまった。せかしてもしょうがなさそうなので、俺は巡音さんが結論を出すのを、黙って待つことにした。……断られるかもしれないな。それはそれで仕方がないか。

しばらくして、巡音さんが顔をあげた。結論が出たらしい。

「……本当に行つていいの？」

えーっと、これは、OKってことだよな。

「来るってこと？」

巡音さんはおずおずと頷いた。

「……日曜なら、なんとか、家を抜け出せると思つから……」

日曜ね。姉貴に確認取つとかないと。

「鏡音君の家って、どこにあるの？」

俺は手帳を取り出して、自宅の住所と最寄駅、電話番号、それから俺の携帯の番号とメールアドレスを書いた。それからそのページ

を破って、巡音さんに渡す。

「俺の家、ちよつとわかりにくいところにあるから、駅に着いたら電話して。迎えに行くから」

「……………ありがとう」

「ついでに巡音さんの携帯の番号とアドレスも教えてもらえる？もしうちの不都合があったら、連絡しないといけないから」

そう言つと、巡音さんはまた困った表情になった。えーと、もしやこれって……………。

「あの……………教えるのはいいけど、なるべくかけないでもらえる？」

「どうして？」

想像はついたが、一応訊いてみる。

「お父さん、わたしの携帯を調べることがあるから……………見慣れないアドレスがあったら、多分問い詰めると思うの」

巡音さんの親は、娘の一挙手一投足を監視してないと気が済まないんだろうか……………。どんな親だよ。

「だから、教えてくれたのは嬉しいけれど、わたしの方から携帯とかにかけることは、多分ないと思うの……………ごめんなさい」

いや、巡音さんが謝ることじゃないと思う。

巡音さんが自分の携帯番号とメールアドレスを紙に書いて渡してくれた。そんな事情があるんじゃないかけることはあまりなさそうだけど、一応自分の携帯に登録しておこう。

「それじゃあ、日曜日」

「ええ……………ありがとう」

そうして、俺は巡音さんと別れて帰宅した。

(注) 『RENT』は、現在、舞台版のDVDが発売されています。ですが、話の都合上、この作品の時間軸を「舞台版のDVDが発売される前」ということにしています。

雪の中で咲こうとする花（後書き）

都合は……大したことじゃないんですが、舞台版のDVDが発売されるちょっと前に、オペラ映画の『ラ・ボエーム』が公開されているんですよ。DVDを貸してもらわなくても、これを見に行けばいいじゃん！ となってしまうので、この話の時間軸は「映画版『RENT』公開後」→「映画版『ラ・ボエーム』公開前」ということになっています。

この次はレンの家訪問記になるわけですが……話の構想のまとめ方で少々悩み中です。それに長くなりそう……。更に章タイトルが浮かばない……と、考えなくてはならないことが多いのです。与太話ですみません。

来て一緒に歩こう

巡音さんと話をしたその日の夜、俺は姉貴に日曜の予定について訊いてみた。

「日曜？ 出かける用事も無いし、家にいるつもりだけど」

それが、姉貴の返事だった。

「じゃ、その日は家にいるんだ。俺、日曜に学校の友達を家に呼ぼうと思ってる」

「邪魔だから出かけててほしいってこと？」

「逆。家に来てくれ」

俺がそう言うと、姉貴は怪訝そうな表情になった。

「私がない方が、気楽でいいんじゃないの？」

呼ぶのがクオナならね。でも、巡音さんだもんなあ。

「その子、女の子だから。俺と二人つきりはまずいよ」

「女の子かあ。確かに二人きりは、まずいわね。……もしかして、新しい彼女？」

姉貴はそんなことを言ってきた。なんですぐそういう発想になるんだよ。

「……ただの友達だよ。一緒に『RENT』を見ようって話になって」

姉貴は、今度は呆れた表情になった。

「要するに布教活動の一環ってこと？」

布教って……もうちょっと言葉はないんだろうか。

「『ラ・ボエーム』を貸してくれた子なんだよ。『RENT』を見せるのはそのお礼。とにかくっ！ そういうわけだから、日曜は家にいてくれよ」

「いいわよ。どうせ家にいる予定だったし」

姉貴のにやにや笑いが気になったが、俺はそこで話を切り上げた。下手すると質問責めにされそうだったし。

って、どのみち、日曜に巡音さんが来たら、やっぱり質問責めにされるんだろうなあ……仕方ないか。

日曜日。電話を受けて駅へ出向くと、巡音さんは見るからに緊張した様子で俺を待っていた。何もそんなに……と思ったが、この前聞いた話からすると、ろくに外に出たこともないのかもしれない。

「巡音さん」

声をかけると、向こうはほっとした様子だった。

「あ……鏡音君」

「大丈夫だった？」

「……なんとか。親に嘘ついちゃったけど」

巡音さんはそう言っつて、視線を落とした。……嘘つかないと出てこないわけか。

「俺の家、こつちだから。ついてきて」

俺は巡音さんを連れて、自分の家に向かった。距離はそんなに無いんだけど、ちょっと道がややこしい。巡音さんの話を聞く限り、一人で歩かせたら迷子になるのはほぼ確実だろう。

ちゃんと後を着いて来てくれるかを確認しながら、道を歩く。まだ緊張しているのか、周りを見ている余裕もないみたいだ。

「着いたよ」

鍵を開けると、俺は巡音さんが中に入れるよう、ドアを支えた。

巡音さんが、「お邪魔します」と言っつて、家の中に入る。続いて俺も入り、鍵をかける。

「姉貴、帰つたよ!」

奥に向かつてそう呼ぶと、姉貴が出てきた。

「レン、お帰り。そちらがお友達？」

他の人がいると、姉貴、普段と言葉遣いが微妙に違つんだよな。

「そつだよ」

「初めまして、レンの姉のメイコです」

姉貴はそう言っって頭を下げた。

「は……初めまして。巡音リンです。鏡音君とは同じクラスです」
思い切り緊張した声でそう言っって、巡音さんが姉貴に頭を下げて
いる。

「……巡音？」

姉貴、え？ とでも言いたげだな。どうしたんだ。

「そうです……どうかしましたか？」

「昔の知り合いに同じ名字の人がいたから……もしかして、親戚か
何か？ 巡音ハクっって、いうんだけど……」

今度は巡音さんの方が驚いた表情になった。

「姉をご存知なんですか？」

へっ？ 今、巡音さん、姉っって言っつたよな。姉貴、巡音さんのお
姉さんを知っつたわけ？ 凄い偶然だ。

「え、姉っつてことは、あなた、ハクちゃんの妹なの？」

「あ……はい」

「やだ、嘘、信じられない。世間っつて狭いのねえ。まさか弟が、ハ
クちゃんの妹と同じクラスとは」

なんか妙に一人だけで盛り上がっつてるな。巡音さんは微妙に引い
てる。姉貴に怯えてるんじゃないといいけど。

「姉貴、巡音さんのお姉さんを知っつたの？」

「高校の時の部活の後輩なのよ。卒業してからずっつと会っつてないん
だけど。懐かしいな。ハクちゃんはどう？ 元気にしてる？」

へーえ。姉貴は高校時代、バドミントン部だっつた。てことは、巡
音さんのお姉さんもバドミントンやっつたたのか。

っつて、あれ？ 巡音さん引きっつつてる。

「あ……えーと、その……」

どうっつやら、訊かれたくないことだっつたらしい。困っつてるぞ。

「姉貴、お客さんを玄関に立たせっつぱなしにしとくの？」

俺がそう言っつと、姉貴ははっつとした表情になっつた。

「ああ、ごめんごめん。さ、あがっつてちょうっつだい」

姉貴が脇にどいたので、巡音さんはもう一度「お邪魔します」と言って、靴を脱いだ。あがってから、その靴をちゃんと揃えている。「俺たちは予定どおり『RENT』を見るから、姉貴、邪魔しないでくれよ」

「はいはい、わかったわ。じゃ、私は自分の部屋にいるから、用があつたら呼んでちょうだい。それと、お客さんには失礼のないようにね」

姉貴はそう言うと、二階へと上がっていった。あゝ、毎度のことながら疲れる姉貴だ。なんでいつも一言多いんだよ。

「巡音さん、こっち」

俺は巡音さんを連れて、テレビの置いてある居間へと入った。

「適当に座ってて。今、お茶を淹れるから」

巡音さんが座つたのを確認して、俺はお茶を淹れに台所へと向かった。

「緑茶でいい？」

「あ……うん」

普段あまり使わない来客用の急須と茶碗を取り出して、お茶を淹れる。お茶の入った茶碗を盆に乗せて、俺は居間へと戻った。

戻ってみると、巡音さんは、居間のサイドボードの上の家族写真を見ていた。俺が小学校の時に撮った奴。……家族全員が揃っている、最後の写真だ。

「どうぞ」

俺はそう言って、巡音さんの前にお茶を置いた。

「……ありがとう」

写真をまだ気にしてるみたいだ。何か引っかかることでもあるんだろうか。

「俺と姉貴と両親と、前に飼ってた犬。確か、旅行に出かけた先で撮ってもらったんだ」

「犬を飼ってたの？」

「ああ。去年死んじゃったけど」

あれ以来、犬を飼う気が起きない。

「巡音さんとは、ペットとかは？」

訊いてみると、巡音さんは暗い表情で首を横に振った。……ペツトも禁止かよ。

「あの……そう言えば、鏡音君のお父さんとお母さんは？ 家にいないの？」

あ、そっぴや巡音さんに、うちの事情を説明してなかった。今日は日曜だから、普通の家なら両親がいるよな。

「……うち、今、どっちもないんだよ。あの写真を撮ったちよつと後に、父親が交通事故で亡くなって……」

俺の言葉に巡音さんがショックを受けた表情になる。いや、そんな構えなくても。……ハードな話だから仕方ないか。俺も吹っ切るまでかなりかかったし。

「……それは……その……ごめんなさい。わたし、そんなことだとは思わなくて……」

巡音さんはうつむいて、聞き取れないぐらいの小さな声でそう言った。

「あんまり気にしないでくれ。実は……構えられるとこつちが辛くて、で、話戻すけど、そういうわけで、俺のところは母子家庭なんだ。で、母親の方は、去年から仕事で海外に行つてて、この家は実質上、俺と姉貴の二人暮らし。あ、夏と冬の休みの期間には、母さんも戻ってくるけど」

巡音さんは黙ってしまった。……空気が重い。気分を変えよう。湿っぽいのは苦手だ。

「この話はここまでにして、『RENT』を見ようか」

来て一緒に歩こう(後書き)

ルカ二十四、めーちゃん二十三、ハク二十一という年齢設定です。
(めーちゃんとルカさんはバーズデーがまだ来ていないので実際にはもう一つずつ下です) あれ、ハクって誕生日設定あるんですけど……。

あるのはただ、今日という日

『RENT』が始まると、巡音さんは真剣な表情で、画面に見入っていた。実を言うところとちよつとばかり、巡音さんには刺激が強すぎるんじゃないかなあと心配していたんだが 何せドラッグやエイズや同性愛が題材の作品だ 杞憂だったらしい。

『RENT』が終了した後、巡音さんは黙って画面を見ていた。集中すぎて気が抜けたらしい。……こういう時は、そつとしておこう。俺は立ち上がって、お茶のお代わりを淹れに行くことにした。……全部最初にこつちに持ってきておけば良かったかなあ。今更そんなことを考えても仕方ないか。俺は急須にお湯を入れて、居間へと戻った。

新しくお茶を入れた茶碗を目の前に置くと、巡音さんははつとした表情になって、こつちを見た。

「……ありがとう」

「どういたしまして。で、どうだった？ 『RENT』」

訊いてみると、巡音さんは考え込む表情になった。

「その……すごく、力強い作品なのね」

あ、巡音さんもそう思ったんだ。

「そう思う？」

「ええ」

『RENT』は、エネルギーに満ちた作品だと、俺は思う。ラーソンの最初の大掛かりな作品だから、ラーソンはこの作品に、ありつたけのエネルギーを詰め込んだんだろう。そのせいで、寿命が縮まったのかもしれないけど。

「『ラ・ボエーム』とは、同じようで全然違うから、ちよつと驚いたけど」

確かにそうとも言えるなあ。話の流れは基本的に一緒なんだけれど。

「『ラ・ボエーム』は恋愛だけに話を集中させていた感じがするけど、『RENT』では、生きていくことに焦点が当たってるから」
俺がそう言うと、巡音さんはまた考え込む表情になった。

「でも、今日だけをみつめて生きて行くっていうのは、何だか悲しい感じがするわ」

「そうかな？」

それだけ、ラーソンが生きていくことに前向きだったんだと思うけど。

「だって、過去も未来も見なくて、ただ、ここにある今だけを見つめて生きるんでしょう？　そうやって刹那の生に意識を集中させてしまえば、過去のこと未来のことも、思い煩うことはないわ。でも、そうしないと生きていけないっていう、その事実自体が辛い気がするの。そうやって結局、日々は過ぎて行くんだもの。積み重なってできた過去という時間を、全部見ないようにしちゃっていいの？　無かったことにできるの？　その人を形作るのが、過去なんじゃない？　それを忘れて生きられるものなの？　未来だってそうよ。見ないようにしたって、いつかは来てしまうわ」

巡音さんがこんなに喋ったのって初めて聞いた気がする。……それはさておき、俺は、巡音さんに言われたことを考えてみた。言いたいことはわからなくもないが……。

「確かにそういう側面もあるんだろうけど……ロジャーもミミもエイズだし、ああいう『死が目の前にぶら下がっている』状態だと、それこそ、今、巡音さんが言ったように、その日一日一日だけに、意識を集中させていかないと辛いのかも」

自分の人生が終わる音が、聞こえてくるようなもんだろうし。でも、それだけじゃあないと思う。

「でも、ラーソン　あ、このミュージカルを作った人なんだけどが考えていたことは、それだけじゃあないと思うな。このフレーズは最初、部屋に閉じこもっているロジャーをミミが誘いに来るシーンで使われるし、『悔やんでばかりだと人生を逃す』という歌

詞にもあるとおり、過ぎた時間に囚われないことを訴えたかったんじゃないのかな」

そう言うと、巡音さんはまた考え込んだ。それからしばらくして、巡音さんはぽつんとこう言った。

「ロドルフォは、結局、見たくなかったのよね」

「何を？」

「ミミがもうすぐ死ぬっていう現実。ロジャーも、きっとそう。自分もミミも、そんなにしないうちに死んでしまう。だからロドルフォは第三幕でミミと別れるし、春が来るのに別れるなんて、変なもの。ロジャーはギターを売ってサンタフェに引越すんだわ」
『ラ・ボエーム』のロドルフォは、ミミを想いながらも探そうとはしない。一方、『RENT』では、ロジャーはミミこそが探し求めていた存在だと気づき、ニューヨークに帰ってきてミミを探す。

ロドルフォは最後まで現実を見なかったけれど、ロジャーは現実に向き合ったんだ。だから、一度握ったミミの手を離そうとしないロジャーに対し、ロドルフォはミミが死んでしまったことに気づかない。

じゃあ、最後にミミが死なないのは、現実に向き合ったロジャーの為に、ラーソンが用意したハッピーエンドってことか？ そう考えると、つじつまがあうような気がする。

……こうやって、一つの あ、この場合二つか 作品について、意見を交換しあえるのっていいな。

俺がそんなことを考えていると、階段を下りてくる足音が聞こえてきた。……姉貴だな。邪魔はしないんじゃないかな。よかった。

「ちょっといい？」

部屋のドアを開ける前に、外からそう訊いてくる辺り、気は使ってくれているらしい。

「いいよ」

俺がそう言うと、姉貴は居間に入ってきた。

「姉貴、何か用？」

「あんたたち、お昼はどうするつもりなのかって訊きに来たのよ」
言われて俺は時計を見た。そういやもう十二時を回ってしまっ
ている。

「何、姉貴、作ってくれるとでもいうわけ？」

「……あんたねえ。まあ、そのつもりで下りて来たんだけどね。ス
パゲッティでいい？」

「作ってくれるんなら、なんでも」

この際、贅沢は言えない。

「巡音さんもそれでいい？ 姉貴の飯、一応それなりに食えるから」

「あのねえ……それが、作ってもらう側の言う台詞？」

呆れた声で姉貴がそう言ってくる。だって姉貴の料理って、下手
すると野菜ばかりどころかーっと入ってるし。姉貴の主張するところ
によると「あんたが作ると動物性タンパク質ばかりになるから、
こうやってバランスを取ってるの！」だそうだが……。

「あ……わたし、自分の分はお弁当持ってきたんですけど……」

おずおずと巡音さんが割って入った。

「お弁当？ そういやハクちゃんのお弁当は、いつも手が込んでた
わね……」

姉貴は唐突に回想モードになった。えーと、参ったな。巡音さん
は、お姉さんの話はあるにすぎないみたいなんだが……姉貴、
察してくれよ。よくわからないけど、何か洒落にならない状況かも
しれないんだから。

「でも折角来たんだから、少しは食べて行ってちょうだい」

「あ……はい」

姉貴は台所に行ってしまった。巡音さんは見るからにほっとした
様子。やっぱり、お姉さんのことは話したくないらしい。

「巡音さん、ちょっと待ってて」

俺は立ち上がると、姉貴の後を追って台所に行き、境の戸を閉め
た。姉貴は、ちょうどお湯を沸かしているところだった。当然、換
気扇がついている。……これなら、多分巡音さんには聞こえないな。

「姉貴」

「何？ 忙しいんだけど」

言いながら、姉貴は冷蔵庫からキャベツを取り出した。

「キャベツか。キャベツならいいけど、ブロッコリーはやめてくれ」

「あんた、わざわざそんなこと言いに来たの？」

あ……いけね。こんなこと言いに来たんじゃなかった。

「いや違う。今のはついで。巡音さんのお姉さんのことだけど、なんか話したくない事情があるみたいだから、あんまり詮索しないであげてくれる？」

一応、声を潜めて俺はそう言った。

「レンもそう思う？ どうも、何かあるみたいよね」

なんだよ、気づいてたのかよ。

「気づいていたんなら、唐突にお弁当のこと持ち出さなくてもいいじゃないか」

「あれは口が滑った……というか、別のこと言いかけたのよ。でも、それは訊くともっとまずいことになりそうだったから、咄嗟に違うことを言おうとして、そうしたら口から出てきたのが、さっきのだったの」

キャベツをざくざく刻みながら、そんなことを言う姉貴。それにしたって、もうちょっとどうにかならなかったんだろうか。

「しまったと思ったから、すぐに話を打ち切っただけ。とにかく、わかったから、もう戻りなさい。お客さんを一人にしておくもんじゃないわ」

へいへいと答えて、俺は居間に戻った。巡音さんがこっちを見ている。

「とりあえずブロッコリーを入れるのは阻止した」

俺がそう言つと、巡音さんは首を傾げた。

「嫌いななの？」

「ああ」

正直、どこが美味しいのかよくわからん。何故か姉貴は好きなん

だよな……。

「緑黄色野菜は身体に良いはずだけど」

「姉貴と同じようなこと言わないでくれよ。不味いもんは不味い」

一度料理にあれがでかいまま大量に入っていた時は、さすがに箸をつけるの躊躇ったぞ。姉貴がうるさいからなんとか食ったけど。

「パン粉とチーズをかけて、オーブンで焼くと美味しいと思うけど」

「絶対にパス！ それ、姉貴に言わないでくれよ。聞いたら試すから」

「そんなに嫌わなくてもいいのに」

呆れられてしまった。

「巡音さんだって、食べられないものの一つ二つぐらいあるだろ」

「それは、あるけど……」

「それと一緒に。ちなみに、嫌いなものって何？」

「納豆とか…… オクラとか……」

どうもネバネバ系が苦手らしい。オクラは俺もパスかなあ。姉貴が「雑誌に載っていた料理を試してみた」と言っつて、オクラとトマトにスパイスをどっさり入れて煮込んだ料理を作った時は、何の嫌がらせかと思っつたっけ。

「オクラは俺も苦手だけど、納豆は好き」

あ、固まってる。よほど嫌いらしい。納豆は美味しいと思うんだが、嫌いな人って多いよな。

「そんなに真面目な顔して考え込まなくてもいいっつてば」

それからしばらく、俺たちは食べ物に関する話をした。

「レン、こっち来て」

台所から、姉貴が呼ぶ声がする。どーせ支度を手伝えとか言うんだろうな。しょうがないか。

「ちよつと行ってくる」

立ち上がって台所に向かう。スパゲッティは茹で上がったようであるの中で湯気を立てていた。

「何？」

「後ちよつとだから、テーブル拭いといて」

姉貴が台拭きを投げてよこしたので、受け止める。姉貴、この癖直らないなあ。行儀悪いって言われてんのに。

「で、それが終わったらフォーク出しといて。後、飲み物のことだけど」

「俺は何でも」

「あんたじゃなくて、リンちゃんの話よ。あんたはどうせコーヒーでしょうが。とりあえず選択肢は緑茶、紅茶、コーヒーだから」

……はあ。……リンちゃんね。

「訊いてくる」

俺は居間に戻った。まずはテーブル拭きか……。でもって、飲み物の話ね。

「巡音さん、緑茶と紅茶とコーヒーと、どれにする？」

「あ……じゃあ、紅茶を……」

「紅茶ね」

台所に行って、紅茶だと言う。姉貴に渡されたフォークをつかみ、俺はもう一度居間へと戻った。そんなにしないうちに、姉貴が「お待たせ」と言っ、スパゲッティを盛った皿を乗せた盆を手に、居間にやってくる。

「はいどうぞ。飲み物を取ってくるから、ちよつと待っててね」

皿をテーブルに並べた後、姉貴はそんなことを言っ、また台所に戻って行った。……キャベツとベーコンか。まともな組み合わせで良かった。

巡音さんは鞆からお弁当箱を取り出して、テーブルの上に置いている。

「はい、リンちゃんは紅茶ね。」

姉貴が戻ってきた。巡音さんの前に紅茶の入ったカップを置く。

俺と姉貴はコーヒーだ。姉貴の分にはミルクが入っている。

「あ、それがお弁当？」

「ええ」

「見てもいい？」

姉貴、幾らなんでも図々しくないか？

「……………どうぞ」

巡音さん……………別にOKしなくてもいいと思うぞ。びしっと断つちやっても。とはいえ巡音さんが承諾しちゃったので、姉貴はお弁当箱を開け始めた。

「わ……………美味しそう」

姉貴がそんなコメントを発したので、俺はお弁当箱の中身に視線を向けた。小さめのお弁当箱の中に、お握りや色んなおかずが詰め込まれている。……………確かに美味しそうだな。

「他所のお弁当見るのってなんとというか、新鮮よね」

……………そういうもんか？ 俺には姉貴の考えていることがよくわからん。

「あの……………良かったら、少し食べます？ これ、全部はちょっとさすがに多くて……………」

巡音さんはそんなことを言い出した。

「そんなこと言うとうちの姉貴、図に乗るよ」

「なんてこと言うのよあんたはっ！」

姉貴にはたかれた。いや、はたかれたつつても、軽くだけど。

「あの……………本当に、食べてくれた方が助かるから。お弁当を残して帰ると、心配されちゃうし……………」

「リンちゃんもこう言ってくれていることだし。シェアしましょうか。取り皿持ってくるわね」

「だからさあ、姉貴……………」

俺の言うことを最後まで聞かずに、姉貴は台所へと行ってしまった。……………ああもう。

「巡音さんとこ、残すとつるさいの？」

「つるさいというか……………この前貧血で倒れたから、お母さんがちょっと過敏になってるの」

そういうことか。それは確かに心配するのも仕方ないかなあ。俺

も目の前で倒れられた時はびっくりしたし。

「鏡音君のお姉さんが作ってくれたパスタ、結構量があるし、これを食べるとお弁当を全部食べるのは無理だから。食べてもらった方がわたしも助かるの」

確かに「少し」なんて言っていた割には結構量があるな。姉貴、これを見越して最初から普通の量に盛ったんだっったりして。……結構ずさんなところがあるから、深い意味はないのかもしれないけど。そんなことを考えているところへ、取り皿を手に姉貴が戻ってきた。

「じゃ、食べましょうか」

とりあえずぐだぐだ考えるのは止めにして、飯に集中しよう。腹減った。

あるのはただ、今日という日（後書き）

めーちゃんとしては栄養バランスを考えながら料理を作るわけですが、レンには全然伝わってなかったりします。まあ、この年頃の男の子なんてそんなもんです

悲劇か喜劇か

巡音さんのお弁当箱の中身を、結局俺も分けてもらったが、確かに美味しかった。姉貴が「美味しい」を連発したので、俺は何も言えなかったけど。巡音さんのところって、運転手さんがいるぐらいだから、料理も専門の人がいるのかもな。ああいう生活は、俺には想像がつかない。今度クオに訊いてみるか。

食事が終わると、姉貴は空になった皿を下げに行った

「鏡音君のお姉さんって、いつもあんなに賑やかなの？」

巡音さんがおずおずと訊いてきた。

「姉貴？ まあね。大体いつも、うるさいくらいよく喋るよ」

それに詮索も好きだったりするし……。今日はお客さんも、後輩の妹 が来ているということ、ちょっとは自重してくれているみたいだけど。

そこへ、飲み物のお代わりを持って、姉貴が戻って来た。……やべ。今言ったこと、聞かれてないよな。

「はい、どうぞ」

「……ありがとうございます」

どうやら、聞かれてはいなかったらしい。助かった。俺はほっとして、姉貴が持ってきてくれたお代わりのコーヒーを一口飲んだ。

「ねえ、リンちゃんって、今の学校は、中学と高校、どっちから？」

何故か、姉貴は巡音さんにそんなことを訊き始めた。……何だよいきなり。そういや、うちの学校って中等部もあるんだよな。俺は高等部からだから、あんまり気にしたことなかったけど。

巡音さんは、多分中等部からだろうなあ。クオが前、初音さんは中等部からみたいなこと、言ってたし。

「中学からです」

あ、やっぱり。

「ふーん、知ってるだろうけど、レンは高校からなのよ。編入と持

ち上がりって、何か違いとかあったりする？」

姉貴は、今度はそんなことを訊き始めた。我が姉貴ながら、何がしたいんだ一体。巡音さんと言うと、姉貴の質問に首を傾げている。

「ちよつとわかりません……」

そりゃ、確かに答えづらいよな。俺だって、こんなこと訊かれても返事しづらいよ。強いて言うなら、一年次は持ち上がり組と編入組は、違うクラスになるってことぐらいか。

「中にいるとわからないものかしらね」

姉貴はそんなことを言っている。

「姉貴、何だつてそんなことを訊くわけ？」

「ただの好奇心よ」

そうか？ そうは思えないんだが……。

「あんまり質問責めになると、巡音さんが困るだろ」

「リンちゃん、困ってる？」

「え……いいえ」

ふるふると首を横に振る巡音さん。姉貴が胸を張る。

「ほーら、こつ言ってるじゃない」

「それは、巡音さんが姉貴に対して気を使ってるんだつてば。……」

巡音さん、姉貴に訊きたいことあるんだつたらなんでも訊いていいよ。

巡音さんばかり答えるのは、フェアじゃないから

さすがにちよつといらつと来たので、俺はこつ言ってみた。あ、でも、巡音さんの性格だと、姉貴を質問責めにするのは無理かな……。

俺にこつ言われた巡音さんの方かというと、例によって考え込んでいる。

「あの……」

しばらくして結論が出たのか、例によって巡音さんはおずおずと切り出した。

「うん、何？ スリーサイズと体重以外だつたら何でも訊いていい

わよ」

姉貴の方は余裕たっぷりだ。そんなこと巡音さんが訊くわけない
だろ。

……うーん、彼氏はいますか？ とか、訊いてくれると面白いん
だけど。訊かないだろうなあ。

ところが、巡音さんが口にしたのは、違う意味で意外なことだっ
た。

「……鏡音君から聞いたんですけど。お姉さんが、『ラ・ボエーム
のロドルフォのことを、ヘタレだって言っていたって。それで……」
「ちよつとあんた、リンちゃんになんてこと言ったの!？」

巡音さんを途中でさえぎり、姉貴は俺にそう怒鳴った。いや……。
「話のネタにちよつとよかったから、つい……」

「ついじゃないわよついじゃ！ 何考えてるの!？」

「だって本当のことだろ。姉貴が酔っ払ったあげく、ロドルフォを
ヘタレの甲斐性なして怒鳴りまくったのも、脚本にケチつけまく
ったのも」

「だからってハクちゃんの妹にそんなこと、言わなくてもいいでし
ようがつ!」

「その時は、巡音さんのお姉さんが姉貴の後輩だなんて知らなかつ
たんだよつ! わかるかそんなことつ!」

ここまでやりあったところで、俺と姉貴は、巡音さんが引きつっ
た様子でこつちを見ているのに気づいた。どう見ても怯えている。

……まずい。

「あ……えーと、その……」

「ああ、気にしないでリンちゃん。定例の姉弟喧嘩だから」

違うだろ。内心でそう突っ込みたいのを、必死でこらえる。そり
ゃ、この程度の言い争い、よくあるけど。

「で……『ラ・ボエーム』の話ね。確かに言ったし、今でもそう思
うわよ。あの主人公はどうしようもないヘタレの甲斐性なしだって
だって、生活力は無いし、つまらない理由で恋人を捨てるし　く

だらないこと画策してる暇があるんなら、バイトして薬代の一つでも作ればいいのよ。最後の時は恋人の手すら握ってあげられないんじゃないわ。へタレとしか言いようがないわ」

姉貴は開き直ったのか、そんなことを言い出した。……巡音さんは、まだ微妙に引いている。

「あの……すみません……」

「ああ、リンちゃんに怒ってるわけじゃないから、そんなに構えないで。怒ってるのはあの主人公に対してだから」

言いながら俺を横目で睨む姉貴。はいはい、俺にも怒ってるって暗に言いたいんだろ。

「……えっと……」

「何?」

「そういうこと言うのって……怖くないんですか」

巡音さんは、こんどは妙なことを訊いてきた。姉貴がきよとんとした表情になる。

「怖いって、何が?」

「その……プッチーニって、もともとイタリアオペラを代表する作曲家ですし、その中でも『ラ・ボエーム』は、彼の代表作で、最高傑作だつて言う人もいるし、『泣けるオペラ』と評判だつたりするし……」

「え、あれって『泣ける作品』だつたの」

姉貴、身も蓋も無いな。それにしても『ラ・ボエーム』って、泣ける作品って扱いなのか。そういう感じはあまり受けなかったが……。あ、でも、『RENT』を劇場に見に行った時は、劇場で泣いている人が結構いたから、『ラ・ボエーム』も発表当時は泣いてしまふ人がそれなりにいたのかも。

「一応そのはずです……」

「うーん、でも、あれじゃ泣けないわねえ。何せ主人公がボンクラすぎるし」

本当に容赦ないな。

「泣けるとか何とか云々以前に、姉貴その手の作品じゃ泣かないだろ。人を死なせて泣かせのシーンを作るのはあざとって、しょっちゅう言ってるじゃん」

高校時代、『ある愛の詩』を授業で見る羽目になって、すごく疲れたとか言っていたし。

「レンは黙ってて。あんたが口挟むと話がわき道に行くから」

姉貴は俺を肘で小突いた。

「で、リンちゃんは何が気になっているの？」

「あの……だから……高い評価を受けている作品に対して、そういうことを言っちゃっていいのかって……」

「そう言われてもねえ……実際に見ていてしらけちゃったわけだし。その、プッチーニって人には悪いんだけど、もうちょっと話の組み立て方を考えてほしいわ」

あ、それは俺も同意かも。なんとというか、話の展開が全体的に唐突すぎて、見ていてそれはないだろうって思えるところが結構あった。『RENT』を先に見ていたのあるだろうけど。ラーソンは後発だから、問題点がわかってそこを修正していったんだろうなあ。

……その割に、名作映画のリメイクってのは駄作ばかりだよな。なんでだろ。

「そうねえ……じゃ、ちょっと訊くけど、リンちゃんはあれ見て泣いたの？」

「……いいえ」

巡音さんは首を横に振った。

「結局、そこに帰結していくと私は思うのよね。例え世界中の九十パーセントの人が認めた名作だって、あわない時はあわないんだし。リンちゃんがその作品を見てどう感じたのか、どう思ったのかってことを、まずははっきり見極めない」と

姉貴は、らしくもなく真面目なことを言い出した。

「おかしくて笑っちゃうにせよ、逆に悲しくて泣いてしまうにせよ、自分がどう思うのかが大事でしょ。それがわからないんじゃ、自分

がどこにいるのかもわからないわよ。そして更に自分の立ち居地をはつきりさせて、自分の考えつてものを確立させて行く。そこが大事なんじゃないのかな」

明日は雨でも降るのかなあ。姉貴が喋っているのを眺めながら、俺はそんなことを考えていた。

「まあ、更に付け加えさせてもらうと、一言だけ『つまらない』だの『泣きました』なので、終わらせてしまつのも良くないと思うのよね。せめてどうしてそう思ったのかぐらい、自分でちゃんと説明できなくちゃ。少なくとも、私自身は、自分で自分の感情や考えを、説明できるようにしておきたいの」

まゝ確かに、映画とかの話をしていて「つまらない」や「泣きました」だけで終わられると、そこから先の話が続かないんだよなあ。「なんか、らしくもなく真面目な長話しちゃったわ」

なんだ、自覚はあったのか。

「いえ……色々、ありがとございました」

巡音さんは真面目な表情でお礼を言っている。姉貴は嬉しそうだ。……なんだろう。

……なんだか、面白くない。

「あの……もう一つ、いいですか？」

巡音さんはそう言つて、鞆からDVDを一枚取り出した。

「もしよかったら、これを見てもらいたいんですが……」

姉貴がDVDを受け取る。俺は身を乗り出して、姉貴の手元のDVDを見た。ドレスを着た女性がパッケージに映っている。

「……『タイス』ね。これもオペラ？」

「はい。このオペラの主人公のことを、どう思うのかが知りたくて……わたし、どうにもよくわからなくて」

なんで姉貴に訊くんだ？ 妙な意見を聞かせてもらえるサンプル扱いなのか？

「巡音さん、『タイス』って、どういう意味？」

話題が変わったので、俺は口を挟んだ。

「ヒロインの名前なの。このパッケージの女性がそう。彼女は遊女というか、高級娼婦というか、吉原の花魁みたいな人なのね。で、主人公はアタナエルという男性で、修道士。オペラの舞台は四世紀のエジプト」

さすがというか、巡音さんはすらすらとオペラの情報を喋った。

修道士と高級娼婦………という話だ、それ。

「変わった設定だな」

「でも結構面白そうじゃない。今見てもいい？」

姉貴はそんなことを言い出した。

「わたしは構いませんが……」

巡音さんがちらつとこつちを見た。

「俺もいいよ」

話の中身、気になるし。さすがの姉貴も昼間っから飲む趣味はな
いから、この前みたいなのは起きないだろう。

「じゃあ見ましょうか」

姉貴はそう言って、DVDをプレーヤーに入れた。オペラが始まる。今回は劇場の外観は出てこず、抽象的な映像が映って、それからメニュー画面になった。

オペラが始まると、砂漠の中（例によってセットが凝ってる）で、黒ずくめの修道士たちが歌っている。そこに、主人公のアタナエルとやらが帰って来て、ヒロインのタイスが都市を墮落させている。幾らなんでも、女一人で都市そのものが墮落するわけないと思うんだが。とか、怒りをぶちまける。態度のでかい奴だな。でもって、この人は、タイスを改心させたいらしい。それは余計なお世話のような気がするんだが。

主人公は思いつめすぎているのか、眠ると夢にタイスがでてくる。主人公はそれを、「彼女を改心させよ」という、神の啓示だと受け取る。大体その辺りまで見た時だった。突然、姉貴が笑い出した。

「あ、あの……？」

巡音さんがびっくりして姉貴を見た。そりゃ驚くよな。どう考え

ても今のは笑うシーンじゃないだろう。

「あ、ああ、ごめんごめん……気にしないで……」

言いながら姉貴は相変わらず笑っている。それで気にしないでって無理があるだろ。

「姉貴、何がそんなにおかしいわけ？」

「だって……この主人公、あまりにもわかりやすすぎるバカやってるんだもの。これが笑わずにいられますか」

訊いてみると、姉貴はそんなことを言った。確かに態度でかいけど、バカなのか、この主人公。

「バカって……」

姉貴、巡音さんがびっくりしてるよ。まあ、酔っ払ってクダ巻かれるよりは遥かにマシだけど……。

「バカって、どの辺が？」

俺は代わりに訊いてみることにした。宗教的盲信さをバカって思ってるのかもな。なんといっても俺の姉貴だし。姉貴はリモコンの一時停止ボタンを押して画面を止めると、説明を始める。

「いや〜だって、この主人公、アタナエルだっけ？ 要するにただ単にタイスのことが好きなのよ。タイスが墮落してるから救ってあげなければとか言ってるけど、結局のところ、彼女が自分以外の不特定多数の男と寝てるのが気に入らないってだけ。なのに、自分が身体売ってる女に恋をしてるってことを認めたくないから『タイスを救うのが神の与えた我が使命！』だなんて、必死こいて言い訳作って、そうやって自分の体面を保ってるの。いや〜、本当、笑えるわ〜」

そこまで話すと姉貴は笑い崩れた。容赦なくバツサリやったなあ。巡音さん、シヨック受けてないといいけど。

「周りの態度を見る限り、結構ランクが上の人みたいなんだけど、だから余計認められないんでしょうね。この立派な俺様が、あんな穢れた女になんか！ って感じで。援助交際やりまくってる女の子に恋をした優等生みたいなものって言ったら、わかりやすいかしら

？」

「うーん、わかるようなわからんような……。」

「大体、たった一人の女のせいで、都市全体が墮落するわけないでしょ。この男はそういう理屈でも作らないと、自分を騙せないのよでも、そうやって自分に嘘ついてごまかしたところで、どこかで限界来るわよ。まあ続きを見ましようか」

姉貴は余裕たっぷりにそう言うと、一時停止を解除した。オペラの続きが始まる。

主人公はアレクサンドリアに行き、貧乏くさい格好のせいで物乞いと間違われたりしながら　これは、作者流のギャグなんだろう　か　旧友のニシアスとかいう、遊び人っぽい男と再会する。この人は相当タイスに貢いでるらしく、タイスは現在彼の館に滞在中なんだそう。主人公は身なりがあまりにも汚いので、ニシアスの着替えを貸して貰い、宴の席でタイスと会って、改心せよと説き始める。冷静に考えると、かなりイタイ行為のような気がするぞ。タイスはまともに相手をしていないが、色々あって、場所を変えることになる。ここで、第一幕終了。ちなみに姉貴は、女性陣を見て「わ、衣装が素敵」と喜んでいた。一応アパレル業界にいるからなあ、姉貴。

第二幕では、舞台はタイスの館になっている。一人になった彼女は、今の生き方が空しいとか、年を取ったら自分は誰にも相手にされなくなるだろう、とか、そんなことを一人で歌っている。……なんか生々しいな。そこへアタナエルがやってきて、信仰による永遠の幸せを説くと、タイスは段々その気になってくる。えーっと……神経すり減らすような今の生活より、信仰による穏やかな生活を選ぶとか、そういうことなんだろう？　この辺りで、一度幕が下りてしばらく間奏曲のようなものが流れる。

「あれ、この曲って……？」

「どこかで聞いたことがあるような。」

「『タイスの瞑想曲』といって、これ単独で演奏されることのある

有名な曲なの」

へーえ。多分どこかで聞いたんだな。喫茶店とかのBGMにでも使われていたんだろう。ヴァイオリンの響きが特徴的な曲だ。この瞑想曲とやらの後で、タイスは唐突に改心を決意する。極端から極端に走ってるような気もするが……。アタナエルはタイスに不浄にまみれた身を浄化する為に、全財産を焼き捨てると命令する。本当に態度でかいな、こいつ。大体勿体無いだろ、それ。売ってお金に変えてどこかに寄付でもした方がいいんじゃないか？

タイスはそれを承諾するが、これだけは誰かにあげられないか、と小さな象牙の像を見せる。なんでも以前、ニシアスから貰ったらしい。瞬間「ニシアスからの贈り物だど！？」壊せ今すぐ！」と騒ぎ出すアタナエル。あっちゃ〜。姉貴の言うとおりだったよ。

姉貴を見ると、盛大に爆笑していた。

「ね？ 言ったとおりでしょ？」

「これは……確かにヤキモチ以外の何物でもないな」

しかし、十代ぐらいでこれをやるならまだわかんなくもないけど、この人かなりいい年だよな？ 色んな意味でイタいぞ。

「相手が自分の友達だから、なおさら許せないんでしょうねえ。でも、それを自分で自覚してない辺り、始末が悪いのよね……ああ、おかしい……」

確かになあ。宗教という言葉でくるんでしまっている分、余計厄介な気がする。

「あの……そうなんですか？」

巡音さんが姉貴に訊いている。姉貴は即答した。

「ニシアスからのプレゼントだって聞くやいなや、即激怒する辺り間違いないわ。それまで割と落ち着いて聞いていたのに、急にぶっつんしたでしょ。どう見てもこれは嫉妬ね」

巡音さんはまだよくわかっていないみたいで、首を捻っている。

オペラはまだ続く。ニシアスが、博打で儲けたから一遊びしようぜ〜とか言っつて、人を大勢連れてやってくる。タイスが改宗したこ

とを知らされて、騒ぎ出すその他大勢。下手すりゃ暴動が起きて二人とも殺されかねない大ピンチだったが、ニシアスが金貨をばら撒いて二人を助けてやる。……いい奴じゃないか、ニシアスって。こんなにひどく嫉妬されてるのに、こいつを助けるのか。第二幕はここで終わる。

第三幕では、アタナエルとタイスは砂漠を渡って旅をしている。ハードな旅に音をあげるタイスに、アタナエルは厳しい。このおっさん、もしかしてサディストの気でもあるんだろうか。結局タイスは倒れてしまい、アタナエルは慌てて介抱に走る。最初からそうしてやれよ。ここでちよつといい雰囲気になる。が、結局タイスは尼僧院に入って行き、アタナエルは淋しげに彼女を見送る。……例によつて姉貴はくすくす笑っている。内心でバーカバーカとでも思っているんだろう。

最初の砂漠に戻ってきたアタナエルだが、相変わらず夢にタイスが出てきて眠れない。……これが、姉貴が言っていた「限界」って奴か？ 相手が神様じゃ嫉妬するわけにもいかないもんな。姉貴は「遅いって！」と突っ込みを入れている。とかなんとかやっているうちに、タイスが死にかけていると知らせ 何があつたんだ、いたい が入って、アタナエルはタイスの許に駆けつける。

結局、二人はすれ違ったまま 何せ、アタナエルがようやく自分の気持ちを認めて「お前を愛している！」とか叫べるようになってたのに、タイスは「あなたのおかげで天国に行けるわ、ありがとう」としか言わないから タイスは死んで、オペラは終わる。うーん、なんというか……。最初から最後まで派手に主役二人がすれ違って終わったよ。すんごい皮肉に溢れたシナリオ。『ラ・ボエーム』とはえらい違いだ。誰だよこの話書いたの。

「ああ、おかしかった……オペラがこんなに面白いとは思わなかったわ」

結局、姉貴は最後まで笑っていた。……えーと、いいのかその反応。巡音さんが困ってるよ。多分これ、一般的には「悲劇」に分類

されるんだろうし。

「姉貴、今回は主人公がバカ入ってる割に怒らなかつたね」

反応としてはこっちの方が楽だけど、相手するのに。

「ん、ここまで道化に徹されると、笑えて来ちゃって怒るところじゃなくなるわね。かなり主人公を突き放した作りになってる辺り、作った人もわかってやってるんじゃない？ それにしても救いよりのない主人公だわ。傲慢と嫉妬のあわせ技抱えてる人が、神の道を説くんだから。まず自分を振り返りなさいって」

まーだ笑ってるよ。そんなにウケたのか。でもってあいかわらず容赦ない。けどなあ……。

「俺は、その辺りが皮肉だと思うんだよね。だってこの主人公、自分に嘘ついて誤魔化しまくっているのに、そんな奴の行動が、ある意味ではタイスを救ってしまうんだから」

途中の「壊せ今すぐ！」で、嫉妬のくだりは実にはつきりしてる。自分を騙すためにやったことが、結果的に彼女を自分の入れない世界に向かわせてしまうというのは、皮肉以外の何物でもないだろう。

「タイスは……幸せだったのかな」

巡音さんは、ぽつんとそう言った。……巡音さんはアタナエルよりも、タイスの方に思うところがあるらしい。

「俺は宗教の話はよくわかんないけど、幸せではあつたんじゃないかな？」

本人が満足なら、それでいいんじゃないだろうか。

「自分の心に素直に向き合った分、アタナエルよりは幸せな結末と言えるんじゃない？ 死ぬまでの日々は穏やかだったんじゃないのかな」

と、姉貴。巡音さんはしばらく考え込んでいたが、やがて姉貴に向かって「あの……ありがとうございます」と頭を下げた。えーと……。

「そんなかしこまらなくていいわよ。かなり言いたい放題だったしかなり？ 無茶苦茶の間違いじゃないのか？」

「面白い作品見せてくれて、こっちこそありがとう」

結局そういう感覚なんだな。

「『ラ・ボエーム』と『タイス』だったら、どっちが好きですか？」
「当然『タイス』ね」

即答してるよ。まあ、姉貴の好みからいったら『タイス』だろうなあ。ひねくれた話好きだから。でも、こんなこと言ったらほぼ確実に「レン、あんた人のこと言えるの？」って、返ってくるな。やめとこうつと。

巡音さん、なんか嬉しそうだな。……俺はちよつと複雑だ。

「あの……お話するのは楽しいんですけど、わたし、そろそろ帰らないと……」

巡音さんは時計を見た後で、申し訳なさそうにそう言い出した。

あ、結構遅い時間になっている。確か門限あるとか言ってたよな。

「そう？　じゃあ、気をつけてね」

姉貴はプレーヤーからDVDを取り出してケースに入れると、巡音さんに手渡した。巡音さんはDVDケースやお弁当箱を鞆に仕舞うと、もう一度丁寧に頭を下げた。

「それでは、失礼します。今日はありがとうございました」

「駅まで送ってくよ」

俺はそう言っただけで立ち上がった。一人じゃ駅まで行けないだろう。

「……ありがとう」

俺たちは連れ立って外に出た。姉貴が玄関口まで見送りに来た。

悲劇か喜劇か（後書き）

作中で上手に補足できなかったのでここに書きますが、『タイス』の原作者はアナトール・フランスという人で、ノーベル文学賞の受賞者だったりします。

ちなみに、オペラは原作に比べるとややマイルドな仕上がりになっています。原作はもっとと皮肉で、主人公（原作ではパニフィスという名前ですが）に対してもっと突き放した、容赦のない描写がされています。まあ……バカにしか見えない側面もあつたりしますが……。どう受け止めるかは読む人次第ですね。

トゥルー・カライズ

駅までへの帰りの道。巡音さんは来た時よりは落ち着いた様子だった。行きはがちがちに緊張していたもんなあ。何にせよ、打ち解けてくれるのはやっぱり嬉しい。

「姉貴の言うことは、あんまり真に受けない方がいいと思うんだよね」

歩きながら、俺は巡音さんにそう言った。

「どうして？」

「ん〜、滅茶苦茶言う人だし、思ったこと全部言わないと気が済まないようなところあるし、言い回しに容赦が無いし……巡音さん、びっくりしたんじゃない？」

巡音さんは歩きながら、軽く首を傾げた。髪と髪につけたリボンがあわせて揺れる。

「驚きはしたけれど……鏡音君のお姉さんは、嫌いになったら、はつきり『嫌い』って、言ってくれそう」

「まあ、そりゃなあ……」

巡音さんがどうしてそんなことを思ったのかはよくわからんが、姉貴はあんまりお世辞を言わない。まあ、あれで社会人だから、多少の建前は使ってるだろうけど。というか、使えないとまずいだろう。あ、駅に着いちゃったよ。巡音さんは帰りの切符を買って、こっちを向いた。

「送ってくれて、ありがとう」

なんか照れるな。

「これくらい大したことじゃないから」

「送ってくれたことだけじゃなくて……今日のこと全部、本当にありがとう。とても楽しかった」

巡音さんはそう言って、にっこりと笑った。あ……。

……巡音さんが笑ったとこ、初めて見た。今まで、表情が和らい

だり嬉しそうにしていたりすることは 回数はいくつもないけど あ
ったけど、こういう、満面の笑顔というのは初めて見る。俺はつい
まじまじと、巡音さんの顔を見てしまった。向こうがこっちの視線
に気づいて、怪訝そうな表情になる。

「……鏡音君、どうかした？」

「あ、いや……なんでも」

元に戻っちゃったか。残念だ。……もつと見ていたかったのに。

「それじゃあ、わたしはこれで。また明日、学校で」

「ああ、気をつけてね」

巡音さんは大きく手を振ると、改札を抜けて駅のホームへと去っ
て行った。なんで……淋しく思うんだろ。帰るのなんて当たり前な
のに。

「ただいま」

「あ、お帰り。ちゃんと駅まで送ってた？」

「当たり前だろ」

帰宅すると、姉貴は居間で何かを見ながら難しい顔をしていた。

……どうしたんだ、一体。俺は姉貴が見ているものを覗き込んだ。

「……アルバム？」

姉貴が見ていたのは、自分のアルバムだった。制服姿の姉貴が映
っている。あ……てことは、もしかして。

「姉貴、これって」

「これ見て」

俺の言いたいことを察したのか、姉貴は俺が言う前に、写真の一
枚を指差した。ユニフォーム姿でラケットを抱えた姉貴の隣に、同
じユニフォームを着た、髪の毛の長い大人しそうな女の子が立っている。

「この人が、巡音さんのお姉さん？」

「そう、ハクちゃん。私が三年の時に一年だったの」

姉貴は俺より六つ上だから、巡音さんとは四歳違いか。……それ

にしても。

「あんまり似てないね」

大人しそうなところは共通してるけれど、顔立ちは全然似ていない。

「兄弟だから似るってもんでもないしねえ。私とあんたも全然似てないし」

と、姉貴。まあ確かに俺らははっきりきっぱり似ていない。

「そりゃあ、俺は母親似で姉貴は父親似だし。じゃ、巡音さんともそうなのかな」

「うーん、どうかしらね……お母さんの方しか知らないし。リンちゃんにちよつと似てたような気がするけど」

ふーん。……って、あれ。

「会ったことあるの？」

「一度だけね。試合の応援に来てたの。リンちゃんも一緒だったわ」

「え、じゃあ、姉貴は巡音さんとは今日が初対面じゃないんだ。それ言わなかったね」

向こうも気づいてないみたいだったけど。

「あのねえ、会ったといつても、五年も前にたったの一度、それもごく短い時間よ。それにリンちゃんは、あの時まだ小学生だったのよ。私のことなんて、憶えてるわけないでしょ」

姉貴が高三だと、俺は小六か。確かにそれで憶えてるっていうのは無理があるな。

「それはそれとして、何だって姉貴、アルバム引っ張り出してため息ついてんの？」

「社会に出て働くようになるよね、この時代をしみじみ懐かしく思うようになるものなのよ。ああこの頃は良かったなって……。あんた、今ちよつどその最中なんだから、今のうちにしっかりと楽しんできなさいよ」

姉貴はそんなことを言い出した。……はっきり言おう、似合っていない。

「そんなもんなの？」

「そういうものよ。最中だと、わからないものだけだね」

相変わらずしみじみそんなことを言う姉貴。……本当にそれだけか？ どうもそれだけじゃないような気がするんだが……。とはいえ、詮索しても答えてくれそうにないなあ。他のこと訊くか。

「巡音さんのお姉さんってどんな人だったの？」

「ハクちゃん？ ん、大人しいけど、根気のある子だったわね。バドミントンって軽く見えても本格的にやるとハードだから、軽い気持ちで入って音を上げて辞めてく子って多いんだけど、ハクちゃんも頑張って続けてたし」

やっぱり大人しいタイプなのか。

「でもリンちゃんとは少し感じが違うかな？ ハクちゃんはなんていうか、ちょっとピリピリしたところがあつたのよね。とはいえ、綺麗な子だったから、共学だったら男の子からモテたかもしれないけどねえ」

姉貴の卒業した高校は女子高だ。高校時代、バレンタインデーにはチョコレートも抱えて帰って来たのを憶えている。なんで女同士であげたがるのか、俺にはよくわからないけど。巡音さんのお姉さんからも貰ったのかなあ。

「バレンタインデーにはチョコレート貰ったりした？」

「貰ったわね。ま、部活の子のほとんどがくれたんだけど」

あ、やっぱり。姉貴は引退後もちよくちよく部活に顔だして、後輩の面倒見ていたからなあ。受験しなかったから暇もあつたし。

「リンちゃんは、学校ではどんな感じ？」

「真面目で大人しくてよく勉強してる。趣味は読書と音楽鑑賞だった前に聞いた。人と話すのが苦手」

今日はよく喋ってくれたけど。ちょっとは慣れてきたのかな。

「なんか本当にいいところのお嬢さんって感じね……ところで」

姉貴は不意に真面目な顔で、俺の方を見た。……なんだよ。

「何？」

「リンちゃんのことをどう思う?」

どうしてそういうことを訊きたがるんだよ……。訊かれるだろうとは思ってたけど。

「どうって……友達だよ」

「本当にただの友達?」

しつこいなあ。どうしてこの手の詮索が好きなんだ。

「なんでそんなこと訊くわけ?」

「リンちゃんとは中途半端なつきあいをしてほしくないから」

だ〜から〜、そういう関係じゃないって言ってるのに。わかんない姉貴だな。

「別につきあってないってば」

「でも、友達でしょ?」

「そりゃあ」

友達なのは確かなので、俺は頷いた。

「友達づきあいもつきあいのうちよ。リンちゃんみたいな子は色々難しいの。中途半端に構うのだけはやめてちょうだい」

……なんだよそれ。俺には姉貴の言うことがさっぱりわからなかった。大体、なんで俺がそんなこと、言われなくちゃならないんだ。「なんだよ。姉貴、俺がユイとつきあってた頃はそんなこと言わなかっただろ」

節度のある年齢相応のつきあいにしておけ、とは言われたし、それについてくどいぐらいの説明も受けたが、つきあいそのものは反対しなかった。なのになんで友達である巡音さんに対して、こんなことを言ってくるんだ?

「ユイちゃんはリンちゃんとは違うから。それに、ユイちゃんとは全く接点がないけれど、リンちゃんはハクちゃんの妹だから間接的とはいえ、関わりがあるしね。傷つくのを黙って見てるわけにはいかないのよ」

「俺が巡音さんを傷つけると思ってるわけ!?!」

そんなことするもんか。やっとまともに話せるようになってきた

のに。

「あんたにその気がなくても、軽い気持ちで構っていたら、いつかはそういうことになるの。あんたも傷つくし、リンちゃんも傷つく。その場合、リンちゃんの方が傷が深くなるの」

いらついできたぞ。今は姉貴が俺の保護者かもしれないが、こんなことを言われる筋合いはない。

「俺の交友関係に口出さないでくれよ！」

「あんたにさっきのオペラの主人公みたいになってほしくないのよ」
むかつ。何だよその言い草は。

「それこそ余計なお世話だろ！ とうか、あのバカと俺を一緒にしないでくれよ！ ああなるわけないだろ！」

完全に頭に来た俺は、そう叫ぶと部屋を出て行った。これ以上姉貴の相手なんかしてられるか。何なんだよ、全くもう。

トウルー・カライズ（後書き）

レンが出てっちゃった後のめーちゃんの独り言。

「うーん、例えがまずかったかしら……」

いやそついう問題じゃないですが。とにかく完全に誤解されました、はい。

暗い表情の君を見たくない

折角巡音さんとまともに話せたと思ったのに、帰宅後に姉貴が余計なことを言い出したせいで気分がぶち壊しだ。その日の夕食の際、俺は姉貴と全くといっていいほど口をきかなかった。大体、この状況で話せることなんかあるわけない。姉貴も一言も喋らなかつたので、おそろしく寒々しい食卓となつた。

そして翌日。姉貴の方は前日のことを忘れたのか、普通に「おはよう」と言つて来たが、俺はそれを無視して、朝食を食べると学校に出かけて行つた。

学校に着いて教室に入る。多分もう来ているだろうなと思ひながら巡音さんの席の方に視線をやると、予想通り、そこに座っていた珍しく本を広げていない。考え事でもしているのだろうか。

姉貴に言われたことが頭を過ぎつたが、俺にそんなことに従う理由はない。そもそも、姉貴にあんなこと言われる筋合いだつてないんだし。

「おはよう、巡音さん」

声をかけると、巡音さんは振り向いてこっちを見た。

「おはよう、鏡音君」

あれ、元気が無いな？　一瞬こっちを見た視線は、すぐに下へと向けられてしまった。

「何かあつたの？」

そう訊くと、巡音さんはしばらくためらっていたが、やがておずおずと口を開いた。

「あの……鏡音君。ちょっと訊きたいんだけど」

「何？」

「昨日……わたしが帰つた後で、お姉さんから何か話を聞いた？」

俺は冗談抜きでその場に固まつた。なんでわかるんだよそんなこと。

「話つて、例えば？」

「その……わたしの姉のことか」

あ……そっちな。ちよつとほつとした。「巡音さんとの友達づきあいは考え直せ」と、姉貴に言われたことを感づかれたのかと思つたぞ。

「ちよつとはね」

「どんなこと？」

えーと……とりあえず、無難そうなところだけ話しとくか。

「姉貴が高校時代のアルバム引つ張り出してきて、巡音さんのお姉さんと映つてる写真を見せられた。姉貴が言うには、今が一番いい時代なんだつて。姉貴、まだ、過去を懐かしむような年でもないと思っただけだね」

なるべく、なんでもないような口調で喋る。

「そっなんだ……」

巡音さんは、それを聞いて安心したようだった。……何が引つかかっているんだろう？ 巡音さんのお姉さん、姉貴の二つ下ってことは、順当に行つてれば今は大学生か。外国に留学でもして音信不通にでもなつてるとか？ でもお姉さんのことは訊いてほしくないみたいだし、こちらから突付くのは気がひける。

「もう一つ訊いてもいい？」

「いいけど」

巡音さんがそう言ってきたので、俺は頷いた。

「鏡音君は、お姉さんがひどく酔つ払つた時つてどうしてるの？」

……また姉貴の話か？ なんで巡音さんは姉貴のことなんか気になるんだろう。気にしたつてしょうがないじゃないか、俺の姉貴のことなんて。

「放つとく」

と思いつつ、律儀に答えてる自分が何だか悲しい。

「放つとくつて……」

「だつてあんな状態の姉貴の相手なんてしてられないよ」

こつちの話なんて聞こえてやしないし。下手すると意味不明なこ
と言い出すし。

「酔っ払いつて理屈通じないし、そんなになるまで飲む方が悪いし。
まあ、姉貴も年がら年中そうなるわけじゃなくて、年に一度か二度
ぐらいだけ。寒い季節で寝てしまったってんなら、毛布ぐらいは
かけてやるけど、後は放置」

バケツで冷水でも浴びせたら目が覚めるかなと思うこともあるが、
実行したら後が怖い。よって思うだけで実行はしていない。

「それでいいの？」

「姉貴は別にアル中じゃないから、次の日になれば、酔いも醒めて
正気に戻ってるしさ。なんか話があるってのなら、その時にした方
が早いし」

酔っ払い相手に道理を説くほど、無駄なことはないと思う。いや
本当に。

「誰か潰れでもしたの？」

こんなことを訊いてくるということは、昨日家に帰った後で、誰
かが酔っ払ってたんだろうか。

「……ええ、まあ」

酔っ払いの対処には慣れてないのかな。……って、慣れてるのも、
それはそれで問題あるような。

「ありがとう」

「お礼なんかいいよ、別に。これぐらいのことだ」

そう言った後で、俺は、酔っ払ったのはお姉さんかもということ
に思い当たった。四つ上ならもう成人してるわけだし、順当に行っ
ていれば大学生だから飲み会ぐらいあるだろう。

「巡音さん。もしかして、酔っ払ったのってお姉さん？」

「あ……」

巡音さんは固まった。……凶星だったようだ。

「え、ええ……」

昨日巡音さんが家に帰った後で、酔っ払ったお姉さんが帰って来

たのかな。普段あまり飲まない人なら、巡音さんがびっくりして混乱するのも無理はないかも。

「心配なら、なんで飲んだのか後で訊いてみたら？ うさばらしとかなら問題だけど、単に楽しくて飲みすぎたってんなら、放つといて大丈夫だと思う」

「う、うん……ありがとう……色々と」

そんな話をしていると、教室に初音さんが入ってきた。真っ直ぐこっちにやってくる。

「リンちゃん、おはよう」

「おはよう、ミクちゃん」

「じゃ、俺はこれで」

邪魔になってもあれなので、俺は自分の席に引き上げることにした。それにしても、巡音さんのお姉さん、家にいるってことは行方不明とか入院してるとかじゃないんだな。じゃあ、一体何なんだろう？ 考えれば考えるほどわからなくなる。

来週から中間テストなので、部活は休み。授業が終わると、俺は真っ直ぐ家に帰ることにした。

家に帰りつく。姉貴は仕事なので、当然誰もいない。窓を開けて家中の空気を入れ替え、担当の家事をやってから、俺は机に向かってテスト勉強を始めた。

しばらくそうやって勉強に集中していると、不意に携帯が鳴り出した。かけてきたのは……クオだ。何の用だろ。この時期だから部活の連絡事項とかは無いはずなんだが。

「もしもし」

「もしもし、ちょっといいか？」

「ああ」

なんか、普段と声の調子が違う気がするなあ、こいつ。

「来週、中間テストだよな」

そんなことを言うクオ。わかってるよそんなことは。実際テスト勉強中なんだし。

「……だから勉強中だよ。クオ、お前も勉強しといた方がいいぞ」
電話の向こうでクオが沈黙した。……どうしたんだ？

「クオ？」

そう言つと、クオはようやく用件とやらを切り出した。

「……お前、中間明けに暇あるか？」

「あるけど。お前、遊びに行こうって誘いなら今じゃなくてもいいだろ」

「……か、このタイミングでそんな用件で電話してくるか？」

「じゃ、暇はあるんだな。つきあえ」

一気にクオの声が不機嫌そうになった。……ん？ なんか変だな。

「つきあえて、どこへ」

「遊園地」

「……お前と二人で？ 悪いけどそれはパス」

「俺とお前の二人のわけないだろっ！ ミクと巡音さんが一緒だっ！」

あゝ、そういうことか……。面倒くさい奴だなあ。

「今度はお化け屋敷に誘ってあわよくば抱きついてもらおうとか、そういう魂胆？」

またクオの首が絞まりそうだな、その場合。

「んなわけあるかあっ！ ミクが絶叫マシンに乗りたいてって言うてんだよっ！」

電話の向こうでクオが叫ぶ。ふーん、初音さんは絶叫マシン好きなのか。クオも好きだったよな、絶叫マシン。なら尚のこと二人で行けよ。

「遊園地に行きたいなら、初音さんと二人で行ってくればいいじゃん」

何も俺や巡音さんを巻き込まなくてもいいだろうが。

「ミクが先に巡音さんを誘ったんだよっ！」

「三人で行こうねって？」

確かに今日もずっと話をしていたし、本当に仲がいいんだろうが……。

「そんな感じだ。女二人に男一人だとバランスが悪いだろ。そういうわけだから、お前も来い」

三人でねえ……初音さんがそう計画してるんなら、俺がついてたら邪魔になりそうな気が。でも、自分とクオだけでもなく、自分と巡音さんだけでもなく、三人で行こうっていう意図は何なんだろう。

もしかして、初音さんは巡音さんとクオをつきあわせたいのか？自分の従弟なら信頼してるだろうし、親友を任せられるって思ってたのかな。けどクオが好きなのは、初音さんで巡音さんじゃないわけで……。

巡音さんの方は、クオのことどう思ってるんだろう。そういや聞いたことがなかったな。クオの方が巡音さんのことを快く思ってたけども、向こうは違うという可能性もある。

うーん……たまには、クオに協力してやるか。

「いいけど」

「は？」

気の抜けた声をあげるクオ。……ちよつとからかいすぎたか。

「だから、遊園地の件。俺も一緒に行くよ」

「そ、そうか……ありがとよ。恩に着る」

「いいって。それじゃ、俺はテスト勉強あるから」

「ああ、頑張れよ。俺も勉強しなくちゃな」

俺は通話を切って携帯を置くと、勉強に戻った。

暗い表情の君を見たくない（後書き）

レンの誤解が妙な方向に進んでしまいました。

……まあいいか。

次回はクオとミクのパートです。

ミクの奔走

月曜の朝、わたしが教室に入ると、リンちゃんが鏡音君と話をしていた。見た感じだと、前よりもリンちゃんは打ち解けてきているみたい。……やったわ！ クオにはお前の作戦全然効果なかったんじゃないかと言われたけど、なんだかんだで距離は縮まっていたのね。

わたしがリンちゃんにおはようと声をかけると、鏡音君は自分の席に戻って行った。もう少し話をさせておいてあげた方が良かったかな。でも、声をかけないと、それはそれで不自然に思われちゃうしね……。さてと。

「リンちゃん、鏡音君と何話してたの？」

多分まだ世間話の類だろうけれど、一応確認しておかなくっちゃ。

「あ……えつと……オペラの話」

リンちゃんからは意外な答えが返ってきた。オペラかあ……わたしは、バレエは好きだけど、オペラは苦手。出てる人が、やたら年くつてたり太つてたりするのが、ちよつとね。バレエの方が見ていて綺麗なもの。やたら横幅のあるおじさんが王子様つてのは、わたしには受け入れがたい。そのおじさんが、愛の苦悩を切々と歌うとなるともつと……。

「オペラ？ 鏡音君ってオペラに興味あったの？」

少なくともクオは、わたしがバレエを見ているも全然興味を示さない。だからこの答えは、わたしにはびっくりだった。

「鏡音君が好きなミュージカルが、オペラを現代劇に翻案したものであったの。だから、ちよつとその話を……」

「ふーん、そうなんだ……」

共通の話題があるのはいいことだわ。あ、そうだ。次の作戦、ここで実行しちゃえ。まずは怪我の状態の確認だわ。

「あ、ねえ、リンちゃん。そういえば、足はどうなの？」

「一週間後には全快するでしょうって、言われたわ」

一週間後ね。そういえば、一週間後には中間テストが控えている。ふむ、タイミングとしてはなかなかね。

「一週間後かあ……中間テストよね。勉強してる？」

頷くリンちゃん。リンちゃんはなんだかんだで、いつも学年十番以内には入っている。すごいと思うのだけれど、リンちゃんはそう感じていない。中間どころのわたしとしては、そうは思えないのだけれど。

さてと、作戦実行よっ。いい時はいい流れを引き寄せるものだから。

「ねえ、リンちゃん。考えたんだけど」

「何？」

「中間テストが終わったら、どこかにぱーっと遊びに行かない？」

リンちゃんと遊びに行くのは、実はかなり久しぶりだ。八月に、二人でバレエの公演を見に行って以来。もちろん、家にはもつとちよくちよく遊びに来ているんだけどね。リンちゃんのお父さんはやかましいので、行き先にも難癖をつけてくるのだ。

でもね、思うんだけど、黙っていればバレないわよ。まず、わたしの家に来てもらって、それからお出かけすればいいんだわ。お父さんには、一日わたしの家にいましたって言っておけばいい。仮にわたしの家に電話で確認を取ったところで、わたしのお父さんもお母さんも「一日、こっちで娘と一緒にいました」と言ってくれるわ。

「遊びに行くって、どこへ？」

「わたしは遊園地がいいな」

リンちゃんが訊いてきたのでそう答える。リンちゃんは困った表情になった。……このままだと断られる。そう思ったわたしは、リンちゃんの手をつかんだ。

「ねえ、行こっ。きつと楽しいって」

「えーっと……」

リンちゃんは悩んでいる。こっぴつ時は、押すに限る。

「わたし、リンちゃんと一緒に遊園地に行きたいなあ」
「……………」

リンちゃんは困った表情で視線をさまよわせているけれど、断りの言葉は口にしない。……つまり行きたいんだわ。もう一押し。
「高校生活の思い出作りにいいと思うの。リンちゃんは行きたくない？」

「あ……………ちょっと、考えさせて……………」

それが、リンちゃんの答えだった。もう少し言葉をかけようとした時、始業のベルが鳴る。ああもう、邪魔しないでよ。わたしはリンちゃんに「考えておいてね」と強く言って、自分の席に戻った。

昼休みや放課後、言葉を尽くして説得してみたけれど、リンちゃんから承諾の返事を引き出すことはできなかった。とはいえ、「一日考えさせて」と言ったという事は、脈があるということ。

わたしは家に帰ると、おやつを食べてから自分の部屋に戻った。テスト前だから、勉強しなくちゃ……………。

勉強を始めてすぐ、携帯が鳴った。手に取る。あ……………リンちゃんからだ。

「もしもし、リンちゃん？」

「あ、ミクちゃん。あのね……………遊園地のことだけど、行くことにしたから。お母さんが、行ってもいいって」

リンちゃん、お母さんに相談したのか。でもまあ、行ってくれる気になったのはいいいことだわ。やったやった。

あ、そうだ。リンちゃんの着る物をどうにかしなくちゃ。

「良かったあ！ じゃあリンちゃん、中間が終わったらまず服を買いに行こうね」

「え……………ミクちゃん、服って？」

電話の向こうから、リンちゃんのびっくりした声が聞こえてくる。だって、リンちゃんのワードローブって確か、そろそろ長い服ばかり

りだったはず。可愛いことは可愛いだけけど、はつきり言って機動的じゃない。

「リンちゃんの外出用の服って、動きやすいものが一枚も無いでしょ？ 特にボトムはスカート系しかなかったわよね？ 遊園地みたいなところに行くのには向いてないの！」

「……あのお父さんのことだから、きつとリンちゃんのスカート丈も規制してるんだわ。」

「心配しなくても、最近はパンツやジーンズだって、おしゃれなのや可愛いのがたくさんあるから。あ、靴もいるわね」

結構歩くから、しっかりした靴じゃないと辛い。ブーツかタウンウォーク用か。幸い、どっちも可愛いのが最近はたくさん出ている。「上から下までぜんぶ選んであげるから心配しないで。パンツ類よりミニスカートにタイツかレギンスの組み合わせの方がいいかな？ 絶対可愛いわよ」

一度くらい、リンちゃんにミニスカート履かせてみたかったのよね。

「あの……ちょっと、それは……」

リンちゃんの引きつった声が聞こえて来た。そんなに固くならないでよ。絶対似合うから。

「わかってるって。それはさておき、中間テストが終わったら、その足でショッピングに直行よっ！」

テストの日は午前だけだから、最終日なら買い物に行く時間はたっぷりある。わたしは明るくそう言って、電話を切った。最大の関門である、「リンちゃんを誘う」はクリアしたわ！ 次に進まなくちゃ。

わたしは自分の部屋を出て、クオの部屋へとダッシュした。「作戦はうまく行ったわっ！」と叫びながら、ドアを開けて中に飛び込む。机の前に座っていたクオが、びっくりした顔でこっちを見た。

「……あ、ノックを忘れてたわ。」

「作戦って、なんの」

気のない声でそう言うクオ。ちょっと、忘れたとは言わさないわよ。

「もちろん、例の遊園地作戦よっ！ 今日リンちゃんに持ちかけてみたら、中間テスト明けに一緒に遊びに行くことで話がついたわっ！」

クオは「で？」とでも言いたげな表情でわたしを見ている。自分の役割忘れてないでしょうね。

「そういうわけだからクオ、鏡音君を誘う方お願いねっ！」

「こついう時は、はっきり言うに限るわ。クオ、時々鈍いから。」

「そうかそうか。わかったから、それじゃあな」

クオはやる気のない口調でそう言って、こつちを追い払う仕草をした。もう！ これは、今すぐわたしの目の前でかけさせないと。

「クオ、今すぐ鏡音君に電話かけてってば」

「はあ？」

「だって、鉄は熱いうちに打って、昔から言うじゃない」
思い立ったらすぐやらないとね。

「お前、俺が今何やってんのかわかる？」

クオはそう言って、机の上のノートや教科書を指差してみせた。

あ、クオも勉強してたのね。

「テスト勉強？」

「わかってんじゃないか。あんな、俺はテスト勉強で忙しいの」

そう言ってまたしっしっしと手を振るクオ。うゝ、それはそうだけど、でも、電話かけて予定確認するのなんて数分で済むじゃないの。それにさっきも言ったけど、クオの勉強が終わるまで待っていたら、クオは頼まれたことを忘れてしまうわ。

「えゝ、だってクオ、やるって言うときながら、やってくれなかったりするし」

「俺がいつそんなことをした」

むっとした表情で、そう言うてくるクオ。ちょっと、それも忘れてるわけ？

「この前、クオが本屋に行ってくるって言うから一緒に雑誌頼んだら、『OK、買ってくるよ』って答えておいて、結局自分の分だけ買って来たじゃないの」

次の日に、自分で本屋に行く羽目になっちゃったわ。

「だから今度は目の前でやってもらおうの！ でないとクオ、やらないでしょ？ そうこうするうちに、鏡音君が他に予定入れちゃったら困るし」

「あくわかった、わかった！ かけりやいいんだろ、かけりや！」
クオは携帯を取り出して、電源を入れた。乱暴な言い方がちよつと引つかかるけど、かけてくれる気になったんだからいいか。そんなことを考えながらわたしがクオを見守っていると、クオは不意に携帯を操作する手を止めた。

「ミク、ちよつと出ててくれ」

「えゝ、なんで？」

「お前が聞いていると思うと話しづらいんだよっ！」
わたしは廊下へと追い出されてしまった。……クオ、意外と神経質だったのね。変なこと鏡音君に言わないといいけど。

しばらく廊下でクオの電話が終わるのを待つ。部屋の中からクオの「んなわけあるかあっ！ ミクが絶叫マシンに乗りたいつて言うてんだよっ！」って絶叫が聞こえてきたけど、何言われたんだろっ。ちゃんと誘い出してよね、クオ。

やがてドアが開いて、クオが出てきた。

「それでクオ、結果は？」

「OKだとき。その代わり、四人で行くことは事前に説明したぞ。男二人で遊園地なんざ行きたかねえって言われたから」

よしっ！ 作戦成功っ！

「それはいいのよ、来てくれれば！ これで絶対上手く行くわ！ クオありがとっ！」

わたしは感謝の意を込めてクオに抱きついた。あれ……クオ、赤くなってる。力が強すぎたかしら？

さてと、服のことも考えておかなくちやね……わたしとしてはミニスカートをお薦めしたいところだけど、リンちゃんのを性格を考えると難しいかなあ。下にタイツかレギンスでも履けば、下着が見えるようなことはないんだけどね。そもそもこの季節、何も履かなかつたら寒くて歩けないわよ。

わたしはあれこれと頭の中で計画を考えながら、自分の部屋へと戻った。

ミクの奔走（後書き）

ミクは、どうやらこれを見たらしいです。

<http://www.youtube.com/watch?>

[v=VOF1tOX8iEc](http://www.youtube.com/watch?v=VOF1tOX8iEc)

最初に映ってる人が「愛に苦悩する王子」です。え？ そう見え
ないって？ うーん、まあ、オペラ（特にイタリア物）だとよくあ
ることなんですよね。

ちなみに王子役をやっているのは、お亡くなりになられた世界三
大テノールの一人、ルチアーノ・パヴァロッティ氏です。

自分の道を行けばいい

姉貴との冷戦は、結局次の日にはなし崩しに無かったことになった。……いや、仕方がないよ。同じ屋根の下に住んでいるんだから、そうそういつまでも険悪ではいられない。色々と不都合も多いし。

とはいえ、あれ以来、二人の間で巡音さんの話題が出たことはない。要するに、お互いまた険悪になるのが嫌だから、意図的に持ち出さないようにしているってことだ。だから普段どおりに戻ったといっても、なんとなく不穏というか、張り詰めた空気はあったりする。

そうこうするうちに時間が過ぎて、中間テストがやってきた。姉貴と突っ込んだ話をしたくない、という理由で部屋にこもって勉強していたため、今回のテストはいつもよりも出来がいいぐらいだった。ちよつと複雑だ。

「中間テストも終わったことだし、俺、今度の日曜は出かけるからテスト最終日の晩飯の席で、俺は姉貴にそう言った。さすがに出かけるとなると、一応報告しておく必要がある。」

「出かける？ どこへ？」

当然、姉貴はそう訊いてきた。

「クオと遊びに行ってくる」

……嘘は言っていないぞ。クオと遊びに行くのは本当だ。それに初音さんと巡音さんも一緒ってだけで。

「気をつけて行きなさいよ。それと、日が落ちるのが早くなっているから、あんまり遅くならないようにね」

出かける時は大体いつもこんなことを言われる。多分、姉貴が今の俺ぐらいの年齢の頃に言われていたんだろうけど……俺は女の子じゃないってば。

「……あ、そうだわ」

「何だよ」

「その日は私も出かける用事があって、遅くなるかもしれないのよ。レン、夕食は一人で適当に食べてくれない？」

飲み会でも入ったのかな。たまにこういうことがある。姉貴も社会人だからつきあいとかが、色々あるんだろう。

「わかった。それじゃ、日曜はそういうことで」

そんなわけで、俺は姉貴に本当のことは言わなかった。いいんだよ、嘘はついてないから。全部話さなかったってだけで。

日曜日。俺は支度をして、クオの家に出かけた。何度見てもでないな、この家。インターホンを押すと、しばらくして、クオが出てきた。

「よう、悪いな」

「別にいいよ」

「巡音さんがまだ来てないんだ。中でちょっと待っていてくれ」

この前とは違う部屋に連れて行かれる。置いてある家具からすると、ここが居間らしい。この部屋には初音さんもいた。

「鏡音君、こんにちは」

「こんにちは」

そついや初音さんとまともに喋ったことって、ほとんど無かったな。同じクラスではあるんだけど。

とりあえずソファに座って待つ。そんなにしないうちに、またインターホンが鳴った。初音さんが立ち上がったって誰が来たのか確認すると、そのまま出て行く。どうやら巡音さんが来たようだ。

しばらくすると、初音さんが巡音さんを連れて戻って来た。今日はスカートじゃなくてズボンなのか。まあ遊園地だしな。巡音さんがこつちを見て、驚いた表情になる。ん？ どうかしたんだろうか。「じゃ、そろったことだし、出かけましょ」

初音さんの言葉を聞いた巡音さんは、初音さんの袖を引っ張った。「何？ リンちゃん」

「あの……」

「四人で行くって、言っただけ？」

「ちょっと待て。なんか妙な方向に話が行ってないか？ 巡音さんの困惑した表情を見る限り、俺とクオが一緒ということは聞いてないようだ。」

「人数多い方があいうところは楽しいのよ。さ、行きましょ」

そんなことを言いながら、初音さんは巡音さんを引っ張って出て行った。……初音さんという人が、わからなくなってきた。

「なあ、クオ」

「なんだよ」

「お前……初音さんと一緒に絶叫マシン乗りたいんだよね？」

一応確認。

「……そうだよ、文句あるか」

「ないけど、疲れそうだなと思って」

「うるせえ。それより行くぞ。出発が遅れると、ミクに怒られるからな」

クオのこともわからなくなってきた。……まあいいや。人の趣味にあれこれ口を出すのは止めておこう。

初音さんのところの車に乗っけてもらって、俺たちは遊園地に向かった。便利だな、こういうのって。クオには悪いが。

巡音さんはまだ混乱しているのか、車内ではほとんど喋らなかつた。俺とクオ、一緒に大丈夫だったんだろうか……。というか、初音さんの意図はどこにあるんだろう。やっぱり、クオのことはただの従弟としか思っていないのか？

とかなんとか考えていると、遊園地に着いた。一日フリーパスを買って、中に入る。

「中間も終わったことだし、今日は思いっきり楽しむわよ！ まずはやっぱり、あれに乗らないとね」

元気よくそう言つて、初音さんはジェットコースターを指差した。
……本当に好きなんだな、絶叫マシン。

「遊園地の華つて言つたら、やっぱあれだよな」
初音さんの隣で、クオがうんうんと頷いている。どうやら、クオの言つたことは事実だったようだ。映画の趣味は違つても、こつちの趣味は一緒らしい。

「ミ、ミクちゃん。あれに乗るの……？」

あれ？ 巡音さんが、こわごわとそんな声をかけている。
「うん」

初音さんがこれまた元気よく頷いている。一方、巡音さんは引きつっている。……もしかして、絶叫マシン苦手なのか？

「わたし、あの手のはちよつと……怖くつて……」

「えーっ、折角来たんだし、乗りましようよ」

おどおどとそういう巡音さんに、初音さんが無茶な注文をしている。……おいおい。それはないだろ、さすがに。

「ごめんなさい、ミクちゃん。わたし、コースターは無理……」

「うーん、でも……」

初音さんが残念げにコースターを見やっている。クオはちらつとこつちを見た。えーと、クオに協力してやるつて決めたんだよな。

「じゃ、初音さんはクオとあれに乗つて来たら？ 俺と巡音さんはここで待つてるよ」

巡音さんが驚いた表情でこつちを見た。一方で、クオが俺の言葉を後押しする。

「なんなら、しばらく別行動にしねえ？ 折角だし、俺は色々と絶叫系乗りたい」

初音さんと一緒に、だろ。

「俺はいいよ。初音さんは？」

「リンちゃんさえよければ、わたしもそれでいいわ」

あれ……意外なことに、初音さんはあっさり承諾した。そんなに絶叫系乗りたいのか？ それとも、俺の推測は外れていたんだろう

か。

「え……ええ」

そんなことを考えている傍で、巡音さんが頷いている。まあとにかく、そういうことで、ここから先は二手に分かれて行動することになった。

「じゃ、決まりっ!」

「そんじゃ、俺とミクは絶叫マシン連続記録作ってくる」

初音さんとクオは、嬉々としてジェットコースター乗り場へと向かって行った。俺と巡音さんが残される。

「あの……いいの?」

巡音さんが、おずおずと訊いてきた。

「何が?」

「コースター乗らなくて」

だって、クオと約束……はしてないけど、協力することになったんだよ。

「俺は別にいいよ。クオの邪魔はしたくないし」

とりあえず今日のところは初音さんと楽しんできてもらおう。本当に楽しいのかどうかはよくわからないけど。

「それより巡音さん、何に乗りたい?」

「えーっと……」

巡音さんは遊園地内を見回した。

「わたしは、あれがいいんだけど……」

巡音さんが指差したのは、メリーゴーラウンドだった。……ああ、こういうのが好きなのか。

「じゃ、行こうか」

俺たちは、連れ立ってそっちへと向かった。

巡音さんは最初のうちは緊張していたのか表情が硬かったが、段々落ち着いてきて、笑顔を見せてくれるようになった。……いいこ

とだよな、これって。姉貴の言ったことは当分忘れよう。大体、そんなにあてになりやしないんだよ、姉貴の考えなんか。

大人しめのアトラクションに幾つか乗った後、巡音さんはためらいがちにこう言い出した。

「あの……鏡音君」

「何？」

「わたし、ちょっとお手洗いに行って来るから、待っていてくれる？」

生理現象は仕方がないだろう。俺が頷いたので、巡音さんはトイレのある方へと行ってしまった。しばらく、その場でぼーっと待つ。そんな時だった。不意に強い風が吹いた。その風で、誰かの帽子が俺の足元に転がってくる。深い考えもなく、俺はそれを拾った。持ち主は……。

「あ、すみません。それ、あたしので……え？ レン君？」

聞き覚えのある声に、思わず相手を見る……え？

「ユイ……？」

そこにいたのは、ユイだった。ユイの他に、女の子がもう二人いる。片方は中学の時の同級生で、チカって子だ。確かユイとは仲が良かったっけ。もう一人の背の高い子は知らない。多分、高校に入ってから友達だろう。

「久しぶり……」

ユイはそんなことを言うと、俺の手から帽子を受け取った。確かに、一年前に別れてからずっと会ってなかったしな。ユイの家は学校を挟んで俺とは逆方向だったから、近所ではったり、なんてのも無かったし。

「……そうだな」

何をどう話したらいいのかよくわからず、俺はぶっきらぼつにそう言った。というか、何を言えればいいんだこの場合。ユイはユイで、気まずそうな表情でそこに佇んでいる。

「ねえユイ、知り合い？」

背の高い子がそんなことをユイに訊いている。

「鏡音レン君。中学の時の同級生」

まあ、元彼とは言い難いか。ユイの方から俺を振ったわけだし。

「へえ、結構かつこいいじゃん」

声に出して言うなよ。俺にも聞こえてるだろ。ユイは困っている表情で、視線を明後日に向けている。

「ね、ねえ……ユイ、マナ、もう行くよ」

ユイの袖をチカが引っ張った。……そういや、チカは俺とユイがつきあってたことを知ってるんだっけ。当然、別れたことも知ってるよな。確かこの二人は同じ高校に行っただけだし。

「え、なんで？」

マナという名前らしい、背の高い子がそう言う。空気読めないのか、こいつは。

「というか、そっちは一人なの？」

はあ？ 一人でこんなところ来るわけないだろ。

「連れがいるよ。今ちょっと外してるだけで」

早く戻って来ないかな。混んでるんだろうか。女子トイレって異常に混んでる時があるんだよな。前に姉貴がぼやいてた。

「実はユイ、失恋したばかりなんだよ」

マナって子が、俺に向かってそんなことを言い出した。え？ 失恋？

「おいユイ、お前、他に好きな奴ができたとか言い出して俺と別れたのが、大体一年前だろ。それなのにもうそっちも駄目になったわけ？」

あまりにびっくりしたので、俺はユイに向かって思わずそう訊いてしまった。ユイがびくつとした表情になる。あ……しまった。口が滑った。

「あ……悪い」

「ううん、いいの……」

げっ、泣きそうだ。参ったな……ややこしいことになってきた。

「え？ 二人って、前につきあつてたの？」

だ〜か〜ら〜、空気を読めと言つてるだろうが。

「うん。一年前にハル君のこと好きになつちやつて、レン君とは別れたの」

ユイがマナとやらにそう説明している。ハル君というのが、ユイが俺と別れた後につきあつていた奴らしい。

「へえ〜。それがこんなところで再会するなんて、何か運命を感じるよね」

はあ？ 何を言い出すんだこいつは。

「二人にもう一度つきあえつていう、神様の思し召しじゃないの？」
なんだそりゃ。何をどう考えたらそういう理屈が出てくるんだ。

「そんな……レン君に悪いよ。だって、あたしが振つたんだよ」

「ユイ、失恋の特効薬は新しい恋つて言うでしょ？ まあこの場合新しくはないけど、いい機会じゃないの。結構いい男だし」

あのなあ…… 思い切りこつちに聞こえてるんですが。というか、ユイ、友達選べよ。なんだよこの図々しい生き物は。

「というわけで、一緒に回らない？」

「俺、連れを待つてるところだつて、さっき言わなかつたっけ？」
大体、人見知りの強い巡音さんを、全然知らない人たちと一緒に連れ回せるかい。特にこんなのが混じつてちゃ。

「その人も一緒にいいし。ねえ、ユイのこと可哀そうだと思わない？ 一度はつきあつた仲でしょ？ まだ未練とかないの？」

ある意味賞賛に値するのかもな、この図々しさ。どうやったらこんなのできるんだろう。けどな、ユイとチカがお前の隣で困つてんのに気づけよ。それにしても巡音さん、まだ戻つて……あ。

少し離れたところに、巡音さんがいた。戻つて来たものの、俺がこいつらと話しているせいで、声をかけるタイミングを失つたらしい。そこで遠慮なんかしないでくれよ。……巡音さんの性格じゃ無理か。……あ、そうだ。

「リン、遅い！」

俺はそう叫んで、巡音さんの方へと駆け寄った。巡音さんが驚いた表情になる。

「ごめんなさい、お手洗いがひどく混んでて……」

俺は巡音さんの手を握った。

「じゃあ行こうか」

「……その子、誰？」

空気の読めない子がそう訊いてきた。ユイとチカの二人は、察したのか困っている。

「誰って、見りゃわかるだろうが」

思い切って巡音さんの肩を抱き寄せる。巡音さんが、驚いたのか、びくつと身をすくませるのがわかった。……ごめん。後でちゃんと説明するから。

「だから誰？」

あゝのゝな、ここまでされたら普通は察するっての！ なんなんだこの子。

「あの……鏡音君、こちらは知り合いなの？」

げっ、巡音さんの方まで訊いてきた。いや、不審に思うのはもっともなんだが……。

「中学の時の同級生だよ。……それじゃ、俺たちはこれで」

俺はそれだけ言うと、巡音さんを連れて立ち去ろうとしたが、空気の読めない生き物はしっこかった。

「ねえ……冷たいんじゃないの？」

なんでこんなに鈍いんだこいつは。

「マナ……もうやめてよ。気持ちは嬉しいけど、レン君は迷惑してるよ。だって……デートの最中なんですよ？」

ユイがそんなことを言う。巡音さんが「え？」とでも言いたげな表情でこつちを見た。ぎゅつと肩を抱き寄せ、その耳に囁く。

「悪いけど、今だけ話あわせてくれ」

……巡音さんが耳まで赤くなってる。悪いことをしてしまった。そう思いつつ、ユイたちに向かってこつち言う。

「そういつこと。だから、邪魔しないでくれ」
俺は巡音さんの肩を抱いたまま、ユイたちを残してその場を離れた。

自分の道を行けばいい（後書き）

この作品のレンは、頭がいいという設定ですが、意外と自分のことはわかっていなかったりします。

まあ、一から十まで最初から全部わかっているようだと、小説にならなかつたりするのですが。

なお、レンの元カノと友人二人はオリジナルキャラです。

青春の光と影

例のしつこい子も、それ以上後を追いかけてくるようなことはなかった。まともな感性の持ち主なら、この後はむしろ逆方向へ行くだろう。しつこい子はともかく、ユイとチカはまともなはずだし。

充分距離を取った辺りで、俺は巡音さんの肩を抱いた腕を外した。巡音さんはまだ顔が赤い。

「……………ごめん、変なことに巻き込んだじゃって」

「ね、ねえ……………何だったの、今の？ あの子たち、中学の同級生って言うってたけど……………それに、わたしとデート中って、どうしてそういうことになったの？」

巡音さんは、軽いパニックになっていた。えーと……………。

辺りを見回すと、すぐ近くにジュースとかを売っているスタンドがあった。テーブルと椅子も何組か置いてある。

「ちよつと座ろうか」

俺は巡音さんを引っ張って、椅子の一つにかけさせた。なんか飲む物でも買うか。スタンドの方へと向かう。

「巡音さん、何飲みたい？」

「あ……………じゃあ、オレンジジュースを」

俺はスタンドでオレンジジュースとコーラを一つずつ買って戻ると、巡音さんにオレンジジュースを手渡した。

「……………ありがとう」

受け取ってから、巡音さんははっとした表情になった。

「あ……………お金……………」

「いいよ、これぐらい。迷惑料ってことで」

そう言つと、俺は巡音さんの向かいの椅子に腰を下ろした。

「でも……………」

「だからいいって。で……………さっきのことだけど」

ジュース代ごときでもめるのが嫌だった俺は、強引に話を先に進

めることにした。

「さっきの子たちは、俺の中学の時の同級生。で……まあその、なんていうか……そのうちの一人と、俺、前につきあってたわけ」

巻き込んだじゃった手前、ちゃんと説明はしようと思ってたんだが……いざ話し始めてみると、非常に話しにくかった。なんでだろ。

「さっきずっと喋ってた、背の高い子？」

「いや、それじゃないよ。髪を垂らしてた子の方」

言うてから、「それ」は無いかと思った。……いやいいか、どうでも。

巡音さんは視線を落としている。また考え込んでいるらしい。こ
ういう時はせかさないう方がいいので、俺は黙って巡音さんがもう一
度話し出すのを待った。

「どうして……わたしとデートをしている振りをしたの？」

ようやく口を開いた巡音さんは、こんなことを訊いてきた。

「一緒に回らないか、って言われちゃってさ。ユイ あ、俺の前の
彼女の名前ね は嫌がってたけど、あの背の高い子、しつこく
って。デート中だって振りをしたら、諦めてくれるだろうと思っ
たんだよ」

異常に察しが悪くて苦労したけど。あれだけやったら、大抵はデ
ート中だと思っただろうに。

「え……別れたのに？」

怪訝そうな表情で、巡音さんが疑問を口にした。まあ、確かにそ
う思っただろうなあ。

「そっだよ」

「それなのに、どうして？」

えーと……多分、最初から全部話さないとわからないだろうなあ。

はあ……気が重いけど、やるしかないか。

「長い話になるけど、いい？」

巡音さんが頷いたので、俺は前提となる事情を話した。ユイとつ
きあってたことや、別れた理由についてだ。別れてからはずっと

会ってなかったのに、こんなところで再会してしまったことも。

「俺も気まずかったし、ユイもそうだったと思うんだけど、あの友達の子がえらく空気が読めなくてさ。なんかユイ、新しい彼氏とも最近駄目になっただらしくて。話の流れで俺たちがつきあっていたことがわかつちやっただもんだから、どうも、よりを戻させようと必死になつちやっただみたいなんだよね」

あの変な生き物につきまとわれたせいで、妙に疲れた気がする。

……まだ午前中だったのに。

「鏡音君の方は、それでいいの？」

「何が？」

「ユイさんのこと、まだ好きだったりとかしないの？ マルチエロやマークは、別れてもまだ相手を想っていたりするけれど、そういうのは？」

いや、幾ら俺が『RENT』が好きだからって、そこまでは……。正直言うと、ここしばらくは思い出しすらしなかったんだよね。一年経ってるし。

「別にそういうのではないよ」

巡音さんは暗い表情で俯いている。……余計な気使ってるのかな、これは。

「大体、うまく行くとは思えないんだよ。俺とユイは、高校入ってからぎくしゃくしだしたわけで。問題原因がそのままなのに、勢いでより戻したって、また同じことの繰り返しになるだけだと思う」

歯車が噛みあわないような感じが、ずっとあった。何がいけないのかは、よくわからないけれど。だからユイから「他に好きな人ができた」と言われた時も、むしろ「仕方ないか」と思ったのを憶えている。

「でも……」

「あのね巡音さん、俺、あの場から逃げるのに巡音さんを利用したわけ。未練があったら逃げるなんて行動取らないってば。むしろ俺に怒っていいぐらいだから、そんな風に思いつめた顔しないでほし

いんだけど」

何でこんなことになったんだよ。これもあの空気の読めない生き物のせいだ……多分。

巡音さんはまだ思いつめた表情をしている。えーっと……そもそも俺が巻き込んだわけだから、「この話はもう止めよう」って言うわけにも行かないよなあ。どうしたもんか……。

「あの……鏡音君」

俺が頭を悩ませていると、巡音さんの方が口を開いた。

「何？」

「恋をするのって、どんな感じ？」

この上なく真面目な表情でそう訊かれ、俺は返事に詰まった。……というか、それを俺に訊くか！？

「オペラにもバレエにも、恋を扱ったものってたくさんあるんだけど……わたし、実感が無いからよくわからないの。恋をするのがどういう感じかって」

まあ、そりゃあ……映画だって恋愛を扱ったものは多いし。それ以外の映画でも恋愛が出てくること多いし。ついでに言うなら学祭でやった舞台にも恋愛シーン、あったし。けどなあ……それを俺に訊かれても困るぞ。

「初音さんとはそういう話をしないの？」

女の子同士でする話じゃないのかなあ、そういうのは。初音さんは女の子らしい趣味だし、その手の話題が日常的に出ていそうだけど。

「ミクちゃん？ 少しはするけど、ミクちゃんもまだ誰かとつきあったことはないから……」

ふーん、そうなのか。じゃあ、クオにもチャンスはあるのかな。

あれ、ちょっと待て。

「初音さん、つきあった経験ないわけ？」

あんなにモテるのに。少なくとも、クオに「初音さんとの仲を取り持ってください」と頼みに来た奴が大勢いたのは確かだ。全員ク

才に「自力で告白できない奴に、ミクとつきあう資格はない！」って、断られたけど。

「ええ」

「告白されることなんてしょっちゅうじゃないの？ ほら、初音さんって目立つだろ。確か去年も今年も、学祭のミスコンで一位だったし」

巡音さんは首を横に振った。え？

「ミクちゃん、告白されたことなんて一度もないはず。前に言っていたもの。一度くらい、ドラマか漫画みたいな告白をされてみたいなあって」

うーん、初音さんの周りで何が起きているんだろう。まさかとは思うが、クオが影で何かやってるんじゃないか……。

「そういうわけだから、わたしの周りに、現実に恋愛した人っていないくって……」

俺が初音さんの周りの状況について考えている間に、話は元に戻ってしまっていた。

「お姉さんは？」

姉貴は恋愛に興味が無いのか、今のところ男つ気無しの日を送っている。が、ユイとつきあっていた当時、俺の方が相談を持ちかけたことならあった。お姉さんから、何か聞いたりとかはしないんだろうか。

「ハク姉さんは女子高だったし……ルカ姉さんは婚約してるし……」

巡音さんのところはお姉さん、二人いるのか。二人だから上に名前つけて呼んでるんだな。

「婚約者がいるんなら、恋愛したってことじゃ？」

「ルカ姉さん、お見合いなの」

「……………」

ひよっとして家と家の結婚って奴か！？ 今時、そんなことをやっているところが現実にあるとは……。

「で、でも、婚約したってことは、相手の人が気に入ったんだろ？」

「お父さんが強く薦めてたから……わたしのところは三人姉妹だから、長女のルカ姉さんには婿を取って会社を継がせるって、神威さんなら、申し分ないって」

もはや俺は話についていけない……。というか巡音さん、そういうことをなんでもないみたいない口調で話さないでくれ。いや、巡音さんのせいじゃないけど。」

「繰り返しになるけれど、わたしの周りには現実には恋愛をした人っていないの。だから、こういうことを訊ける人がいなくなって……恋って、どんな感じなの？」

巡音さんは相変わらず真剣なまなざしで、こっちをじつと見ている。参ったな……。どう答えたもんか……。

そもそも、俺はなんでユイとつきあってたんだっけ？

「うーん……。俺とユイは中三の時に委員会が一緒で、それで仲良くなって、秋頃にユイが『好きでした』って言うてきて、それでつきあおうかって話になったんだけど、何せ中三の秋だろ。受験に追われてるくにデートする暇もなかったんだよね」

「デートできないと恋ってできないものなの？」

うっ……。悪気は全然無いんだろうけど、なんだか痛いところを突かれた気がする……。

「できないってことはないだろうけど、継続に響くんだよ……。多分俺はともかく、ユイは淋しかったのかもしれないし。同じクラスだったから毎日顔はあわせてたけど、話題の半分は受験だったからなあ。出かける時も三回に二回は図書館で一緒に勉強してたし」

思い返してみると、ユイとの会話は勉強のことばかりだった。

ユイはもっと違うやりとりがしたかったのかな。

「受験が終わってからは？」

「……それが問題でさ」

俺はため息をついた。考えてみると、あれがケチのつきはじめだったのかも。

「俺とユイ、志望校が違ったんだよ。偏差値に差があったから仕方

がなかったんだけど。ユイの奴、無理して俺と同じ高校受けて、で、落ちたわけ」

巡音さんは一瞬目を見開いて、それから伏せた。

「……ユイさん、きつとすごく辛かったんでしょね」

ん……？ えらく声が暗いな。

「大泣きされたよ。……学校の先生にも塾の先生にも『無理』と言われていた勝負ではあったんだけど、ユイは奇跡を信じたかったみたいで。春休みの間は、一緒の高校に行きたかったのに、って、そんな話ばかりされてた」

「なんだか……悲しい話ね……」

しみじみとそう言われてしまった。……ごめん巡音さん、本音を言わせてもらうと、俺としてはそこまで悲しくないんだが。過ぎたことだし。

「鏡音君は、悲しくないの？」

真面目な表情で巡音さんが訊いてくる。う、うーん……。

「ごめん、俺はそんなに……」

「自分の恋が終わったのに？」

「巡音さん、現実の恋はオペラとは違うんだよ」

オペラの見すぎなんじゃないだろうか……。

「けど、鏡音君はユイさんのことが好きだったんでしょ？」

言われて俺は考え込む羽目になった。ユイのことか……。

「まあ、嫌いじゃなかったけど……」

嫌いだったら告白された時に承諾はしない。

「あの……鏡音君。『好き』と『嫌いじゃない』って、イコールで結べるものなの？」

……へっ？ 思ってもみなかったことを訊かれたので、俺は呆気に取られた。巡音さんは、俺をじっと見ている。

「えーとね……例えば、『クッキーは好きですか？』って訊かれたとするわよね。その時『嫌いじゃない』て答えるのと、『好き』って答えるのと、何だか同じとは思えないの……」

言葉が足りないと思ったのか、巡音さんは説明を始めた。

「わたしの手元にクッキーがあつて、誰かにあげるとしたら、『嫌いじゃない』って言う人より、『好き』って言うってくれる人にあげたいし……」

「うーん……確かに、そう言われるとその言葉は、イコールで結べない感じがするな……」

……じゃ、俺は、ユイのことが好きじゃなかったってことか？

いや待てよ、好きじゃない奴とつきあうほど、俺も暇じゃないぞ。

じゃあ、俺はやっぱユイのことが好きだったのか？ あれ？ あれれ？

変だよな、これって。つきあつてた相手のことを、こんな風に思うのは。俺がそんなことを考えていると、不意に賑やかな声が割つて入った。

「あゝっ！ 鏡音先輩だっ！」

げ、この声……。信じられない。こんなところで二度も知り合いに遭遇するか？

「グミヤ先輩、見てくださいっ！ 鏡音先輩が女の子と一緒にいますよっ！もしかして先輩方もデートかも!？」

相変わらず声が大いいなあ……。俺はため息混じりに振り向いた。

少し離れたところに立っているのは、演劇部のグミヤとグミだ。「も」ってことは……。こいつらデート中か。結局、つきあうことになつたらしい。

「鏡音君、あの二人は……」

「演劇部の子たちだよ。躍音グミヤと、活音メグミ」

巡音さんに訊かれたので、俺は簡単に説明した。グミヤとグミが連れ立って、こっちにやってくる。

「あゝ、レン、すまん。俺は声をかけない方がいいと思ったんだが……」

「いいよ別に。で、お前、グミとつきあうことにしたの?」

グミヤは明後日を向いて、頭を掻いた。顔が少し赤くなっている。

「それでーすっ！」

これはグミの方だ。グミヤの腕に抱きついている。

「それで鏡音先輩、そっちは先輩の彼女さんですかっ!？」

……頭が痛くなってきた。あの空気の読めない生き物も困るが、グミみたいなのも困る。男と女が二人でいたらカップルなのか!？
巡音さんの方を見ると、例によって困った表情をしている。

「初めましてっ! 演劇部一年の活音メグミ、みんなにはグミって呼ばれてますっ!」

俺が内心で頭を抱えている傍で、グミが巡音さんに自己紹介をしている。

「あ……初めまして。巡音リンです。鏡音君と同じクラスなの」

「そしてこっちが、演劇部部長の躍音グミヤ先輩ですっ! あたしの彼氏なんですよっ! 彼氏……いい響きですよねえ」

グミヤをみつめながら、グミはそう言った。俺としては、ため息しか出てこない。なんか、今まで以上にテンションが上がってないか？

「あの……活音さん……」

「あ、グミでいいですよ。みんなそう呼んでますし。『活音さん』なんて呼ばれると、あたしじゃないみたいで」

そっぴゃこいつ、演劇部に入部して初日には、全員に自分のこと「グミ」って呼ばせてたよな。ある意味すごい。

「あの……でも……わたしたち、初対面だし……」

「そんな他人行儀な呼ばれ方は嫌いなんです」

……他人だろ。はつきりきっぱり。

「じゃ、じゃあ……グミちゃん」

「はいっ、何ですか？」

グミを呆れつつ眺めている俺の傍で、巡音さんがグミに疑問を投げかけている。

「グミちゃんて確か、学祭の舞台で、愛に目覚めたロボットの役をやってなかった？」

あ、あの時の舞台、見てたのか。初音さんも一緒だったんだろうな。クオも出てたし。

「そうです、あれはあたしです。そして、あたしの相手役をやったのがグミヤ先輩です」

グミヤがやった役は、出番多くないから本当は一年の部員がやるはずだったんだよなあ。それなのにグミが「グミヤ先輩と舞台の上でラブシーンやりたい」とか、無茶なこと言い出して。なぜか演劇部の女子部員全員がグミに同調して、グミヤの役は変更になってしまった。本当はもっと出番の多い役をやるはずだったのに。そして……グミヤがやる予定だった役、よりもよって俺がやる羽目になったんだっけ。何なんだよみんなして、「ジジイの役は嫌」ってのは。

「舞台の上でもそういう役回りで、現実でも恋人同士なの？」

「恋人同士……いい響きですよね、グミヤ先輩」

あ……またトリップしてるよ。大丈夫なのか。

「あの……グミちゃん……」

「えへへ……あの時はまだあたしの片想いだったんですけど、学祭が終わってしばらくしてから、グミヤ先輩があたしとつきあうことをOKしてくれたんですよ。あの舞台がきっかけなのかも！」

楽しそうにグミはそう言っている。グミの頭の中で、あれは「ロマンティックな恋愛物」という位置づけになっているようだ。社会への警鐘を含んだブラッくな話のはずなんだが……。

「それで、巡音先輩と鏡音先輩は、いつからつきあっているんですか？」

え、という感じで固まる巡音さん。ああもう、訂正しとかないと明日には学校中に噂が広まりかねないな。

「別につきあってないって。一緒に遊びに来ただけで」

「こんなところに二人で遊びに来て、それでデートじゃないんですか？」

「二人じゃないし。クオと初音さんも一緒。二人とも絶叫マシンに

乗りに行ってるから、今ここにいないだけで」

「そっぴゃああの二人は、まだ絶叫マシンを堪能してるんだろうか。変な遭遇のせいで、二人のことを忘れかけていたぞ。」

「あれ、クオの奴も来てんの？」

「グミヤが訊いてきた。」

「ああ。さつきも言ったけど、絶叫マシンの連続記録作るって、初音さんと一緒に行っちゃったよ」

「俺がそうグミヤに言っている傍で、グミは巡音さんを興味深そうに眺めている。……嫌な予感。」

「巡音先輩は、鏡音先輩のことをどう思っているんですか？」

「え？ な、なにが？」

「だから、鏡音先輩のことをどう思っているのかって話ですよ。鏡音先輩、割とお得だと思いますよ。もちろんグミヤ先輩には負けますけど……」

「割と、つてのは何なんだよ。そりゃこいつの頭の中が、グミヤ一色なのは知ってるが……。俺は横目でグミヤを睨んだ。グミヤが申し訳無さそうな表情で、グミを引っ張る。」

「グ、グミ。そろそろ行こうか」

「え、あたしまだ話したいです」

「おい、グミヤ。お前、彼氏なんだからどうにかしろよ。俺の気持ちは通じたのか、グミヤはグミを引き寄せて、何やら耳に囁いている。グミは顔を赤らめ、急に大人しくなった。」

「それじゃ、邪魔して悪かったな。俺とグミはもう行くから」

「それでは、失礼します。先輩方も楽しんでくださいね」

「グミヤとグミは去っていった。……やれやれ。」

「しばらく脱力していると、今度は携帯が鳴り出した。あれ？俺のだけじゃないぞ。巡音さんのもの一緒に鳴っている。」

「とりあえず自分の携帯を取り出す。クオか。「ミクが昼と一緒に食おうって言ってるから、合流しよう。こっちは観覧車の近くにいらるか。もうそんな時間なのか。」

「ミクちゃんが、お昼ごはんにしないかって」

自分の携帯を確認した巡音さんは、そう言った。

「こっちもクオから、同じ内容」

メールを送るのはどちらか片方でいいような気がするんだがなあ。そんなことを考えていると、巡音さんが口を開いた。

「ねえ、鏡音君」

「何？」

「一緒に鳴るのって、『RENT』にあっただわよね。携帯じゃないけれど」

そう言っただけで巡音さんはくすつと笑った。AZTブレイクのシーンか。ロジャーとミミのつけてるタイマーが同時に鳴り出して、それで二人ともエイズだってわかるシーンだ。

やっぱり笑ってた方がいい。けど、巡音さんの笑顔はすぐに消えてしまった。

「……巡音さん？」

「あ……ごめんなさい。ちょっと考えちゃったの。ロジャーとミミを結びつけるのがエイズだっていうのは、何だか悲しいなって」

『RENT』のストーリーを思い出して、しみりってしまったらしい。二人を結びつけたのはエイズ……か。そういう風には、考えたことがなかったな。

「どうしてラーソンは、両方ともエイズにしちゃったのかな。先が無くて、悲しいのに」

「ラーソンの周りにはエイズで亡くなった人が大勢いたし……それに、両方がエイズだったから、あのラストに繋がるんじゃないのかな。多分、ロジャーとミミの間にある絆は、ロドルフォとミミにあったものより強かったんだよ」

巡音さんは真面目な表情で、また考え込んでいる。こうやってこっちの言うことを、一つ一つきちんと受け止めてくれるのが、なんだか嬉しい。

「悲しいことと嬉しいことが、たくさん同時にあった人だったのか

「な
「だるっね
……」

青春の光と影（後書き）

全員横並びに同じ年というのもちょっと淋しい気がしたので、グミは一つ下に見ました。

レンの方も今回はあれこれ悩んでいます、まあ、悩んで人は成長するものだと思うのです。……ある程度まではね。

ここにいるよ忘れないで

昼は初音さんとクオと合流して、四人で取った。二人とも午前中ずーっと絶叫マシンに乗っていたらしく、なんとというか、ハイになっていた。人はあの手のものでもハイになれるらしい。

ついでなので、クオにグミヤたちと会った話もしておく。クオもあの二人がつきあっていたのは初耳らしく、驚いていた。

「へえ、グミヤとグミがねえ……今度グミヤに会ったら、これをネタにからかってやるか」

……俺がそれをやったら、巡音さんとはどうなんだって訊かれて藪蛇になるな。クオと初音さんは従姉弟だから、一緒に遊びに行っても誰も変に思わないだろうけど。まあ、そのせいで、クオは初音さんに「ただの従弟」としか思われてないわけだが……。

「お前、午後はどうするの？」

「もちろん、絶叫マシン連続記録更新に挑むに決まってるだろ」

そうですか。何なんだその記録。まあいいか。俺はちらっと隣に目を向けた。初音さんと巡音さんが、楽しそうに話をしている。話題は……あれ、あっちもグミヤとグミのことみたいだ。

「初音さん、巡音さん。午後はどうする？ クオは絶叫マシンの連続記録更新に燃えているみたいだけど」

俺は念のために、二人に声をかけてみた。女の子たちがこっちを向く。

「ミク、お前、当然逃げたりしないよな」

初音さんに向かって、クオが言う。何やってんだお前。

「受けて立つに決まってるじゃないの。クオこそ、途中で音を上げないでよね」

賭けでもやってんのか、この二人は。……まあいいか。それが楽しいって言うんなら

あ………てことは、俺は午後も巡音さんと二人つきりか。巡音さん

の方に視線を向けると、向こうも同じことを考えていたのか、視線があつてしまった。巡音さんはそのまま、下を向いてしまう。……一応、確認しておこう。

「巡音さん、午後も俺と一緒にいい？」

断られたら嫌だなあ。状況的に断られたりはしないだろうけど。

「わたしはいいけど……鏡音君は、それでいいの？ わたしと一緒にだと、コースターとかには乗れないし……」

それを気にしてたのか。大したことじゃないから構わない。

「別にいいよ。コースターだけがこういふとこの楽しみじゃないしさ」

俺がそう言うと、巡音さんは見るからにほつとした表情になった。そこまで気を使わなくてもいいのにな。

昼を食べ終わると、クオと初音さんはまたしても絶叫マシン巡りに行ってしまった。食後三十分ぐらいはあの手のものは止めた方がいいと思うんだが。まあ、食べ終わった後も、しばらくあそこで喋つてたから、大丈夫か。

俺は巡音さんと一緒に、大人しめのアトラクションを回っていた。午後はこのまま、何事もなく過ぎてほしいもんだ。間違つても、また、妙なのに遭遇するという事態だけはやめてほしい。

遊園地の中を移動中、ショッピングの前を通りかかった。巡音さんがその前で立ち止まる。

「鏡音君、ちょっとショッピングに寄つてもいい？」

「いいよ」

俺たちはショッピングに入った。巡音さんは棚に並ぶお土産を、手に取つて眺めている。……長くかかるかな、こりや。大体、女の子の買い物は長いと相場が決まっている。うちの姉貴ですら、かなり長い。ユイはもつと長かった。……まあいいか。今日はこっちにつきあうって決めただから。

巡音さんは、ピンク色をしたうさぎのぬいぐるみを手に取って、じっと眺めている。……何だか淋しそうな顔してるけど、あのぬいぐるみがどうかしたんだらうか。

「買うの？ それ？」

気になった俺は、声をかけてみた。

「……ううん、いい」

巡音さんは首を横に振ると、ぬいぐるみを棚に戻して、レジに行ってしまった。そんなにしないうちに、戻って来る。

ショップを出て、また歩く。すぐ近くに、ミラーハウスがあった。「入ってみる？」

お化け屋敷みたいにどぎつくないから、多分平気だろう。巡音さんが頷いたので、俺たちは一緒に中に入った。

このミラーハウスは外の光が入ってこない作りなので、中は全体的に薄暗い。あちこちに色のついた明かりが点っているので、歩くのに支障があるわけじゃないけど。幻想的というか、そういう感じを出したいんだらう。

「綺麗ね……」

巡音さんはそう言って、鏡に映る光を眺めている。ここが気に入ったようだ。

そついや『鏡』って映画あったな。映像は独特で綺麗だったけど、話の中身は難しすぎてよくわからなかった。

「巡音さんは、鏡って言われると、何を思い出す？」

「子供の頃に読んだ童話かな」

それが巡音さんの答えだった。童話か……。

「『鏡の国のアリス』とか？」

さすがにこれくらい有名な作品だと、読んだことぐらいはある。

「それもあるけど、真っ先に思い出すのは、わがままなお姫様の出てる話」

お姫様とか、その手が出てくる話は守備範囲外なので心当たりが無い。巡音さんはそついうのが本当は好きなのかな。

「卵みたいな形の部屋が出てくるんだけど、鏡と良く似た何かできてるの」

鏡でできた球体の部屋？ 一瞬『鏡地獄』が頭に浮かんだが、そのイメージを頭から追い払う。多分そういうのじゃないだろう。

「鏡と良く似た何かって？」

「というか、鏡じゃないわけ？」

「そうとしか書かれてなくて……」

具体的に何なんだろう。ただのガラスってわけでもないみたいだし。ファンタジー系の童話みたいだから、「とにかく不思議な素材」ってことなのかな。

「何か見えたりするの？」

「……怖くて恐ろしい何か」

悪戯っぽい笑顔を浮かべて、巡音さんはそう言った。こんな表情、することもあるんだ……。巡音さんのことが、わかるようでわからない。

「あ……わかりにくかった？」

つい無言になってしまったのを、勘違いされてしまったようだ。

何か喋らないと。

「いや、そうじゃなくて……巡音さんって、そういうおとぎ話みたいなのが好きなんだ」

「……本当はね。オペラだって、プッチーニやヴェルディよりも、ロッシーニの方がずっと好き」

前にこういう質問をした時、巡音さんは黙り込んでしまっただけで答えなかった。巡音さんが口を閉ざしていた理由はよくわからないけれど、喋ってくれるようになったのは嬉しい。

「……ありがとう」

不意に、巡音さんはこっちを真っ直ぐに見て、そう言った。

「急にどうしたの？」

「色々、してもらっちゃったから」

えーと……そんな大したことじゃないんだから、かしこまらなく

てもいいんだが。

「そんな気にしなくていいよ。友達だろ？」

俺がそう言った時だった。急に室内の明かりが消えて、真っ暗になった。何だ？ アトラクションの演出……なわけないよな。停電だろうか。停電なんて珍しいな。遊園地全体ってことは考えにくいから、この建物のブレイカーでも落ちたのかな。

「え……？ な、何！？ 何なの！？ 何が起きたの！？」

すぐ近くから、巡音さんのひどく慌てた声が聞こえてきた。

「巡音さん落ち着いて。多分停電か何かだと思う。しばらく待ってればまた明るくなるって」

配電盤でも壊れていたら別だが、その場合にしたらって、係員が懐中電灯でも持ってきて誘導を始めるだろう。向こうだって大事は避けたいだろうし。

「なんで真っ暗なの！？」

「だから、停電……」

「いや……暗いの怖いの！」

まずいな……パニックを起こしかけている。何がそんなに怖いのかよくわからないけど……真っ暗闇ってのが駄目なのかな。今の世の中、どこも街灯だの何だので、完全な闇ってのに遭遇することそんなに無いし。それにしてもちよっと激しすぎるような気がするけど。

とにかく落ち着かせないと……俺は巡音さんのいる方向に手を伸ばした。手が温かい何かに触れる。……肩かな、こりゃ。

「巡音さ……」

俺がそう声をかけようとした時、巡音さんが俺に抱きついてきた。

「えっ……」

驚きのあまり、声が途切れる。いや、そりゃ驚くだろ、誰だって

！何が一体どうなっているんだ。

「……………」

俺にしがみついた状態の巡音さんは、がたがたと震えていた。ひ

どく怯えていることだけは確かなようだが……震えを止めるには、どうしたらいいんだろう。

どうしたらいいのかを考えていたはずだったが、気がつくと、俺は自分の腕を巡音さんの背に回して、ぎゅっと彼女を抱きしめていた。……腕の中の身体は、温かくて柔らかい。

「……大丈夫だから」

答えはなかったけれど、そうしていると、少しずつ巡音さんの震えは治まってきた。それでも、こちらにしがみつく力は緩まない。

どれだけそうしていたのかは、よくわからない。時計とかが見えるわけじゃないし。ただそうやって巡音さんを抱きしめていて……気がつくと、明かりが戻っていた。それもさっきまでのような幻想的な雰囲気じゃなくて、いわゆる普通の明かり。遊園地側が照明を変えたらしい。暗くてはつきり見えない状況では気にならなかったことが、明るくなると急に気になりだす。俺と巡音さんは抱き合っている状態だということが。

「あ……」

すぐ近くに、巡音さんの顔があった。至近距離で、一瞬瞳と瞳があつ。我に返った巡音さんは、真っ赤になって俺から離れた。

「う、ごめんなさい……わたしったらなんてことを」

「いや……その……」

腕の中の温もりが無くなったことが、妙に淋しい。ずっとこのままでも、良かったのに。……て、俺は何を考えているんだ!?

「……出ようか、こい」

気恥ずかしくなった俺は、何とかそれだけを言った。巡音さんが無言で頷く。俺たちは連れ立って、ミラーハウスを出た。なんか、明かりが消えた原因を解説するアナウンスみたいなのが流れていたが、かけらも耳に入って来ない。

外に出ても、巡音さんはまだ赤くなって下を向いていた。全くこっちを見ようとしてくれない。参ったな……。何でこんなことになった。

「巡音さんて……暗いところ駄目なの？」

「こくと巡音さんが頷いた。やっぱり顔は上げてくれない。

「苦手なものなんて誰にだってあるしさ……あんまり気にしなくていいよ」

相変わらずうつむいたままだ。

「もしかして……俺に怒ってる？」

今度は勢い良く首を横に振った。どうやら、嫌われたとかじゃないらしい。単に恥ずかしがっているだけか。

「じゃ……行こうか」

俺たちは連れ立って歩き始めた。巡音さんはこっちを見ないようになっているせいか、歩き方が微妙におぼつかない。妙なところにそれて行きそうになる。俺は巡音さんの手をつかんだ。巡音さんがびつくりした様子で顔を上げる。

「え……」

「そつちじゃないって」

俺は巡音さんの手を引いて、歩き続けた。巡音さんはまた下を向いてしまったけれど、繋いだ手を離そうとはしなかった。

それから帰るまで、俺たちはずっと気まづいままだった。なんでこんなことに……って、停電のせいか。しかしたった一日の間に、どうしてこんなに色んなことが起きなくちゃならないんだ？

折角近くなつた巡音さんとの距離がまた開いてしまったようで、俺は面白くなかった。

車でまた初音さんの家まで送ってもらった後、初音さんと巡音さんは、家の中に入ってしまった。俺とクオが、家の外に残される。

「なあ……お前、どうかしたのか？」

クオが訊いてくる。

「……何が」

「だって……なんか変だぜ、お前ら」

ちなみに、クオは今日一日絶叫マシンに乗り倒したらしい。……
実に満足そうだ。良かったな。

「何でもない」

「嘘をつけ。……なあ、もしかして、巡音さんと何かあったのか？
変なところで鋭い奴め。とはいえ、クオに話すには内容に問題があ
りすぎる。……もう退散するか。色々ありすぎて疲れた。」

「俺はもう帰るよ。じゃあな、クオ」

クオがなんかごちゃごちゃ言ってたけど、俺はそれを無視して、
家に帰ることにした。

飯を作るのが面倒だったので どうせ一人だしな コンビニ
で弁当を買って帰宅する。当然、家には誰もいない。姉貴は遅くな
るって言ってたもんな。洗濯物は姉貴の担当だけど、取り込むとこ
ろまではやっておいてやるか。いつまでも下がってるのもみっとも
ないし。

買ってきた弁当を食って風呂に入り、明日の時間割をチェックし
て必要なものを通学鞆に入れる。やっとなすべきことはこれで終わっ
たが、寝るにはまだ時間が早い。いつもなら何か読むかネットでも
やるんだが、今日はどれもやる気になれない。

ベッドに寝転がって、天井を見上げる。頭に浮かぶのは巡音さん
のことだ。……同じクラスだし、当然明日になればまた顔をあわせ
るわけだが、果たしてまともに話せるんだろうか。

巡音さんの身体、柔らかかったな……柔らかくて温かくて、なん
だかよくわからないけどいい匂いがした。女の子って、抱きしめると
あんな感じなのか。……ユイとはせいぜい手を握るぐらいのつき
あいだったしな。……しょうがないだろ。つきあいだした時はまだ
中学生だったし、高校入ってからはずいぶんしゃくしだしてそんな雰囲気
じゃなかったんだから。

これじゃ『ラ・ボエーム』のロドルフォを笑えない。暗闇で手と

手が触れ合った後、ロドルフォは手を離そうとしなくて、図々しい奴だなんて思ったけど。正直あの時、俺は巡音さんを離したくなかった。

はあ……それにしても、明日からどうしたもんか。巡音さん話すのは楽しいし、関係が以前に逆戻りということになるのは嫌だ。けど、今日のことを無かったことにはできないし……。

1111にいるよ忘れないで（後書き）

5500字なので、こっちはなんとか一つのファイルに納まりました。やれやれ。

今回のエピソードを書きながら、デフォルトの”Count On Me”を聞いていました。

`http://www.youtube.com/watch?v=CD0JYpDbiJ4&ob=av2e`

なんとなくこの章のイメージというか。ちなみに”Count On Me”というのは「頼りにしてくれ」という意味です。

いい曲だと思っただけど、イマイチ人気がないような……。

遊園地でのミク

わたしの立てた作戦は、概ね成功したと言えるわ。リンちゃんも鏡音君も、遊園地に行くことをOKしてくれたし。クオは相変わらず「上手くいくわけないだろ」って態度だけど、それは教室の二人を見てないからよ。ちゃんと仲良くなってきたらだから、後もうちょっとで、いい感じになれるわ。間違いない。

リンちゃんの服を買うという名目で、わたしは久しぶりにリンちゃんとシヨツピングに出かけた。ミニスカートも薦めてみたけれど、残念ながらこれに関してはOKしてもらえなかった。うーん、残念。可愛いのに。

日曜日、わたしは支度をして　髪は今回は全部結い上げた。機械とかに絡まったら危ないしね　リンちゃんたちが来るのを待った。ちなみに、リンちゃんにクオと鏡音君が一緒ということは話していない。だって、事前に話したら逃げられかねないもの。

やってきたリンちゃんは、鏡音君とクオが一緒という事実にびっくりしていたけれど、混乱している間に、わたしはリンちゃんの手をつかんでさっさと車に乗り込んだ。鏡音君とクオも後からやってくる。さ、行くわよ。

遊園地に着くと、わたしは予定どおり、ジェットコースターに乗ると言い出した。リンちゃんはおそらく嫌がるだろうから　あの手のものは苦手なのだ　そうしたら、クオにコースターに乗りたいと、強く主張してもらうことになっている。え？　クオを悪役にするなって？　だって、クオが言った方が威圧感が出ると思うのよね。わたしが言うよりは。

でも、結局、クオが主張するまでもなかった。鏡音君の方が早々と、リンちゃんと一緒にいると言い出してくれたおかげで。……思ったよりも事態は進行しているみたい。いいことだわ。

というわけで、首尾よくわたしたちは別行動をすることになった。

……お二人さん、楽しんできてね。

「予想以上に上手くいったわ」

コースターの列に並びながら、わたしはクオにそう言った。クオは面白くなさそうな表情をしている。ちよつと、作戦が成功したんだからもつと喜んでよね。

「……良かったじゃねえか」

仏頂面のまんまでそう言うクオ。ねえ、わたしと一緒に喜んでくれる気はないの？ まあいいわ。

「本当は一緒にコースターでも乗ってくれともつといいんだけど、リンちゃん、絶叫系ダメなのよね。せめてお化け屋敷でも入ってくれないかしら」

緊張で胸がドキドキするような体験をすると、恋が加速するって前に読んだ本に書いてあったのよ。だから仲を進展させたいカップルは、絶叫系に乗るのがお薦めなんだって。でもリンちゃんは、さつきも言ったように絶叫系がダメ。となると、後、緊張でドキドキしそうなところって言ったら、お化け屋敷よね。鏡音君ホラー好きみたいだし、リンちゃんを連れてってくれないかしら。

あれこれ考えていると、順番がやってきた。クオと並んで座席に座って、安全バーをセットする。いよいよだわ。作戦も上手くいったことだし、思い切り楽しませよう。

「うーん、わくわくするわね」

クオも楽しくなってきたみたいで、前より明るい表情になっている。

「とりあえず、コースターは全部乗るぞ」

「賛成！」

ここ、コースターだけでもたくさんあるのよね。まずは順繰りにコースターに乗って行きましょ。それが済んだらフリーフォールがいいな。遊園地って本当、幾つになっても楽しいわよね。

ずっと放っておきっぱなしというのも良くないので、クオと相談の末、お昼だけは合流して一緒に食べることにした。午後の予定を訊かれたら、午後も絶叫系に乗る予定だと答えるつもり。多分、これで鏡音君は、リンちゃんと午後も一緒にいるだろう。

リンちゃんは何だか落ち着かない様子だったけど、鏡音君と揉めたりとか、そういうのではないみたい。なんでも、演劇部のカップルに遭遇しちゃったんだそうだ。もしかしたらわたしたちも会うかもね。

話は予定どおりに運び、午後も二手に分かれて行動することになった。わたしとクオは二人で、遊園地をたっぷり楽しんだ。うーん、この作戦は大当たりだわ。ずっと絶叫系に乗っていたけど、さすがにちよつと疲れたので、最後は観覧車にした。

「今日は楽しかったわね」

観覧車の中で、わたしはクオにそう言った。クオがにっつと笑う。

「……だな」

なんだかんだで、クオも今日は楽しんだみたい。

「クオは、絶叫系だったらどれが好き？」

「やっぱ、ジェットコースターだな」

絶叫系の王様って言ったら、やっぱりあれよね。

「ミクは？」

「わたしもジェットコースター」

観覧車はどんどん登っていく。じきに日が暮れるから、空の色も変わってきている。

「あ、そろそろ一番高い位置に来るわよ」

わたしは、窓から下を見下ろした。クオが隣に来る。

「おー、みんな点にしか見えないな」

そんなことを言うクオ。もうちよつと色気のある台詞、無いの？

正直不満だけど、ここは我慢してあげるわ。

観覧車が下に下りるまで、わたしとクオは黙って外を眺めていた。外に出ると、名残惜しいけれど、待ち合わせ場所のゲート前に向か

う。

リンちゃんと鏡音君はもう来ていて、わたしたちを待っていた。

……あら？ なんだか、雰囲気がおかしいわね。並んで立っているけれど、二人とも全然視線をあわそうとしない。かといって、険悪ってわけじゃない。何というか…… 上手く説明できないわ。

帰りの車の中でも、二人は全然喋ろうとしなかった。ますますもって気になるわ。これは追求の必要があるわね。

家に帰ると、わたしはリンちゃんと一緒に家の中に入った。リンちゃんの家からのお迎えが来るまでは、まだ少し時間がある。

「ミクちゃん、今日はごめんね。折角誘ってくれたのに、一緒に回らなくて」

リンちゃんはそんなことを言っている。それは別にいいのよ。作戦どおりなんだから。

「わたしの方も絶叫マシンに夢中になりすぎちゃったから、お互い様よ」

まずはこう言うしておく。さてと、何があったのか聞き出さなくちゃ。

「ねえ……ところでリンちゃん、今日、何かあったの？」

「……何かって？」

「さっきから様子が変わだから」

こういう時は、すぱっと訊くに限る。リンちゃんは、わたしの目の前で悩み始めた。

「鏡音君に、迷惑かけちゃったから……」

俯き気味に、リンちゃんはそう言った。迷惑ねえ。

「迷惑って、今日リンちゃんにつきあったこと？ あれは鏡音君の方から言い出したんだから、リンちゃんが気にすることないわよ」

はつきりきっぱりそう宣言する。リンちゃんは、まだ困った表情のままだ。

「いえ、それじゃなくて……」

そうよね。それだと、鏡音君の方の様子がおかしいことの説明が

つかない。リンちゃん、何かやっちゃったのかしら。えーと、服は汚れてなかったから、転んでジュースかけちゃったとかじゃなさそうね。喧嘩したとも思えないし。うーん、何だろう。

「ねえ、リンちゃん。まさかとは思うけど……」

「何？」

「お化け屋敷とかで、びっくりして抱きつきでもしたの？」

わたしの前で、リンちゃんが固まった。え？ そうなの？

「え……今の、正解？ うわーっ……びっくり……」

リンちゃんは真っ赤になって下を向いている。まさか本当にそうなるとは……。って、ものすごく美味しいシチュエーションじゃないの！

「それなら全然迷惑じゃないって！」

「え……だって……いきなり抱きつかれたら……その……」

「リンちゃん、わかってないなあ」

クオも前に言ってたものね。「きゃーっ怖いって抱きつかれたら、どんな男だって悪い気はしないっ！」って。

「それは絶対、向こうは迷惑だとは思ってないって。驚きはしただらうけど、迷惑じゃないことだけは確かだから」

リンちゃんみたいな可愛い子に抱きついてもらえるなんて、むしろ喜ぶべき状況だものね。肝心の本人はわかってないみたいだけど。とにかく、作戦は上手くいきすぎるくらい上手くいってるわけだ

わ。これから祝杯 未成年だからジュースだけだね あげよう
つと。

リンちゃんが帰宅した後、わたしは自分の部屋にジュースを瓶ごと持ち込んで、祝杯をあげることにした。ジュースつてのがちよつと締まらないけど、まあ、仕方がないわ。

わたしがジュースを飲んでみると、クオがやってきた。わたしを見て、驚いた表情になる。何？

「……どうしたんだお前。ついに壊れたのか？」

「はあ……相変わらず失礼ねえ。どこが壊れたのよ。まあいいわ。今はとても機嫌がいいから、見逃してあげる。」

「あ、クオ！ 作戦大成功を祝つてるところなの。クオも飲む？」

「クオは理解できないという表情になつたけれど、自分の分のコップを取りに行った。コップを取つて戻つて来たので、ジュースを注ぐ。」

「かんぱ〜いっ！」

「わたしがそう言つてコップを掲げると、クオもコップをあわせてくれた。そしてジュースを一口飲むと、クオはこんなことを訊いてきた。」

「なあ、おい。何が大成功なんだ？」

「今日の作戦」

「クオの質問に答えるわたし。クオがむすつとした表情になる。」

「おい、あれのどこが大成功だ。二人とも帰りの車の中で、一言も喋らなかつたぞ」

「あら……こんなことを訊いてくるってことは、クオの方は、鏡音君に全然情報をもらつてないのね。ダメじゃないの。」

「それがねえ……クオ、聞いたら驚くわよ」

「もつたいつけてないでさっさと喋れよ」

「こつという時はノリとか余韻とか、大事なものがあるのに……クオつたら、せつかちなんだから。」

「もう……いい話なのに。まあいいわ。あのねえ……リンちゃん、お化け屋敷で鏡音君に抱きついちゃつたんですって」

「クオが啞然とした表情になる。まあねえ。ここまでの大成功は、わたしとしても予測してなかつたし。あ、そうだね。クオに釘刺しとかないと。」

「あ、この話、鏡音君にしちゃダメよ」

「なんでだよ」

「クオは鏡音君から何も聞いてないんでしょう？ 自分が喋つてな

いことが知られている、っていうのは、気持ちのいいものじゃないの。最悪信頼関係が壊れるし、今後の作戦に支障が出るわ」

喋ってない事情が駄々漏れなんてバシたら、色々とややこしいことになっちゃう。

「まだ続ける気か!？」

「当然でしょ。二人がちゃんど名実と共にカップルになるまでやりますからね」

「なあ、ミク。余計なお節介って言葉、知ってるか？」

「何言ってるの。これは余計なお節介なんかじゃないわ。わたしの使命よ」

クオはわたしの前で大きなため息なんかを、これ見よがしにしている。……悪いけど、これだけは譲れないのよ。絶対にね。

遊園地でのミク（後書き）

ミクの認識が微妙にズレてますが「抱きついた」のは事実なので、その辺りはいいのです。

真実はいつも少し苦い

四人で遊園地に行った翌朝、俺は落ち着かない気分が目覚めた。今日は月曜だ……。そういや、『憂鬱な月曜日』って歌、あったなあ。断つとくけど、死にたいわけじゃないぞ。

ベッドから抜け出して一階に下りる。洗面所に行つて顔を洗い、居間へ行く。台所では、姉貴が朝食の支度をしていた。

「おはよう、姉貴」

「おはよう、レン」

そついや昨日は姉貴が帰ってくる前に、寝ちゃったんだよな。姉貴、何時頃帰つて来たんだろう。

「姉貴、昨日の帰宅はいつだったの？」

「ん、確か午前様だったかしら……」

いいのか、若い女がそんな遅い時間に出歩いて。俺より、姉貴の方が心配だよ。

「姉貴、あんまり遅くならないようにしてくれよ。世の中物騒なんだから」

「わかつてるわよ。ただ、昨日はちよつと色々あつて……」

そんなことを言う姉貴。……多分飲んでたんだろうな。やれやれ。俺は台所へ行こうとして、サイドボードの上に置いてあったノートを引つ掛けて落としてしまった。……朝から何やってんだ、俺は。ため息混じりにノートを拾おうとしゃがみこむ。

あ……これ、何かと思つたら姉貴がつけてる家計簿じゃないか。挟んであったレシートが、落ちたはずみに飛び散っている。まずいな。これ全部拾い集めとかなないと。

「レン、何やってるの？」

台所から姉貴の声が飛んできた。

「家計簿を落としちまったんだよ。わかつてる。俺の不注意。元に戻しとくから」

「ちゃんとレシート全部拾つといてよ。挟んである奴、まだ整理してないんだから」

へいへいと答えつつ、レシートを拾う。近所のスーパーにコンビニに……珍しくもないな。あれ？このレシート……。俺は手にしたレシートを、見間違いかともう一度確認した。しかし間違いなくそれは……。

「ラブホテル？」

日付を見る。昨日の日付だ。ちよつと待て。昨日？姉貴……昨日、どこで何してたんだよっ！？

「レン、何か言った？」

「……いいや何も」

俺は家計簿に拾い集めたレシート　ラブホテルのも一緒にを挟むと、サイドボードの上に戻した。見た時はさすがにぎよつとしたが、考えてみたら姉貴は成人した社会人なわけだから、そういうところに行くのも別に变じゃない。何かあつたつて、自分で責任ぐらい取れるだろうし。

ただ姉貴のそういう面は、考えたくない。姉貴はあくまで姉貴なんだ。

俺が居間で混乱していると、台所から姉貴が声をかけてきた。

「レン、あんたもツナトースト食べる？」

「ああ、うん。食べる」

珍しく作ってくれるらしい。我が家のルールでは、基本的に朝食は各自で、となっている。……賞味期限が切れかけてて、使つちまいた材料でもあるんだろう。まあいいや、作ってくれるんだから。姉貴がツナトーストを出してくれたので、それと牛乳とバナナで朝食を取る。メニューは姉貴も同じだ。量は俺の方が二倍ぐらい多いけど。

あ、そうだ。

「姉貴、ちよつといい？」

「何よ？」

「『好き』と『嫌いじゃない』って、イコールで結べると思う？」
どうせだから姉貴にも訊いてみようつと。何か面白い答えが返ってくるかも。

「変なこと訊くわねえ……」

言いながら、姉貴は考え込んだ。

「私の見解だと、イコールで結ぶのは無理ね」

あ、そうなるんだ。

「なんで？」

「『嫌いじゃない』ってのは、逃げを打つ時に使う言葉だから。本当に好きなら、ストレートに『好き』って言えるだろうし。『好き』という本音を言うのが恥ずかしくてごまかしたいか、本当は好きではないけれど、嫌いと明確に言うのは棘が立つか、あるいはそこまでの悪感情は抱いてない、けれど、『好き』というほどの感情もない……そういう時に使う言葉が、『嫌いじゃない』」

えーと……なんだか、トドメを刺されたような気がするぞ……。
姉貴に悪気が無いのはわかってるが……。

「レン、あなた、なんでそこで固まるわけ？」

「……なんでもないよ」

つまり、俺のユイに対する感情は最初から「その程度」だったってことか？ 参ったな……。言われてみれば納得できるものがあるような無いような……いやいや待てよ。

俺が頭を抱えていると、姉貴が突っ込みを入れてきた。

「嘘おっしやい。なんかあったんでしょ？」

どうしてこういう時だけ勘が働くんだろつなあ。ああ、面白いな
い。

「……実は昨日、出先でばったりユイに会って」

しょうがないので、一部話すことにする。巡音さんのことは伏せておかないと。

「ユイちゃんに？」

「そう。で、クオにまあ、当時のことちょっと訊かれたりして……

で、思わず『嫌いじゃなかった』って言っちゃって、そこをクオに突っ込まれたわけ。『嫌いじゃない』と『好き』って同じなのかって」

昨日はクオと遊びに行ってた　実際、遊びには行ったんだよ。ほとんど一日巡音さんと一緒だったとはいえ　ことになってるの
で、訊いてきた相手はクオということにしておく。幸い、姉貴はその辺は疑ってないようだった。

「で、それからその言葉の意味を考え続けて、今に至る、と」
「そんなとこ」

姉貴のにやにや笑いが、微妙に癪に障るなあ。

「ユイちゃんとのつきあいは軽いものだったって、やっと気がついたわけか」

「だから、嫌いじゃなかったんだよっ！」

あ、これじゃ余計ドツボにはまるだけか。言ってから気づく。姉貴は俺の前で笑うのをこらえてる。もつといらつくから、やめてくれ。

「まあ、別にそんなに深刻になることはないわよ。あんたまだ若いんだし、当時はもつと若かったわけだし。つきあうってどういことなのか、わかってなくても仕方がないしね。そういうミスを何度か繰り返して、人は成長していくの。これに懲りたって言うんなら、次につきあう相手は『明確に好き』って思える子にすればいいんだし」

正論なのはわかってるが、非常にいらつく。

「姉貴に言われても信憑性ってもんが全く無い」

「あのねえ、これでもあんたより六年長く生きてるんだけど？」

「たった六年じゃん」

だから嫌なんだよ、弟って立場。こういふ偉そうな姉貴の態度に耐えなくちゃならないし。

「じゃあ、お母さんに報告しておいてあげるから、そっちからアドバイスをもらおうか？」

「やめてくれっ！」

そんな恥ずかしいことされてたまるか。……ああもう。

「……恥のかきついでに、もう一つ訊くけど」

「何？」

「俺、ユイに謝った方がいいと思う？」

その程度の好意で、つきあいなんぞを承諾したのがまずかったのかもしれない。ちゃんと話して、謝った方がいいような気がしてきた。

「……私が見たところ、ユイちゃんの方はあんたより先にそのこと理解してるわよ。自分の恋が、おままごとレベルだったってことをね。終わった恋のことなんて、もう昔のことよ。女の子って、そういうものなの。だからそつとしときなさい。大体、謝ったってあんたの自己満足にしかならないわよ。あんた、ユイちゃんを今の彼氏から引き離してまでやり直す気、ないでしょう？ そんなことされても向こうは迷惑なだけ」

かなりグサツと来たぞ……。確かに、ユイとやり直したいという気には全くなれない。別に俺の方が捨てられたからとかそういうことじゃなくて……。うーん、何だろう。

「なんで、俺たちうまく行かなかつたんだろう……」

そんなに喧嘩とかしなかつたよな。それなりに普通のつきあいだったはずだし。ぎくしゃくはしてたけど、原因がわからない。

「あんたたち根本的にあわなかつたのよ。あつていたら、最初はわずかな好意でも、時間と共に大きくなった可能性もあつたんでしょうけどね」

「はあ？」

「だから、いろんな意味で違いすぎたの。違つてても上手くやれる人もいるけど……あんたには、無理でしょうね」

姉貴が何を言いたいのかさっぱりわからない。違いすぎると言われても……。

「ところでレン」

悩んでいる俺には構わず、姉貴は唐突に話を変えた。

「何だよ」

「あんたが持ってたSF小説、貸してくれない？」

「どれ？」

SF小説だけでわかるわけないだろうが。何冊も本棚に並んでるのに。

「それがタイトル思い出せなくって」

「わかるかっ！」

それでどの本かわかる奴、いたら超能力者だよ。姉貴、時々こういうよくわからないボケ、やるんだよな。

「えーと……確か『敵のゲートは下だ』って決め台詞が出てくる奴さすがにまずいと思ったのか、そんなフォローを入れる姉貴。…

…ああ、あれか。オースン・スコット・カードの傑作だ。

「……『エンダーのゲーム』？」

「ああ、そう、それ」

どうやら間違いなかったらしい。ま、「敵のゲートは下だ」なんて台詞、そうそう出てこないし。でも。

「姉貴、カードは嫌いって言ってなかった？」

前に「面白いから読んでみて」て渡した時、かなり手厳しいこと言ってたような気が。

「嫌いだけど、読みたくなる時もあるの」

相変わらずわけのわからん理屈だ……まあいいか。

「ふーん……別にいいけど。読みながらむかついたとか言って、本に当り散らさないでくれよ。俺のなんだから」

「するわけないでしょうがそんなこと」

……まあ、幾ら姉貴でも、酔っ払った状態で読書はしないか。朝食を食べ終わったので、俺は「ごちそうさま」と言って、学校へ行く支度の為に自室に戻った。あ、そうだ。『エンダーのゲーム』出しておかないと。

姉貴に『エンダーのゲーム』を渡して、俺は学校へ向かった。学校に着いて教室に入ると、いつものように自分の席で本を読んでいる、巡音さんの姿が目に入った。……どうしたもんかなあ。向こうは本に集中しているので、俺のことには気づいてない。けど、ここで声をかけないのは、それはそれで「昨日のことを気にしています」って言ってるようなもんだし。

「おはよう、巡音さん」

結局、俺は声をかけることにした。巡音さんが驚いて硬直し、本を取り落とす。……えーと。

「……何もそんなに驚かなくても」

俺の目の前で、巡音さんは下を向いた。頬が微かに赤くなっている。参ったな……。何をどう話そう。やっぱり、このまま戻った方がいいんだろうか。

だが俺が次の行動を決める前に、巡音さんは向きを変えて、身体の方はこちらへ向けてくれた。視線の方は下を向いたままだけど。

「ごめんなさい……それと、おはよう」

どうやら、話をする意志自体はあるらしい。……良かった。

「あの……巡音さん」

俺は、そんなにかしこまらなくてもいいと続けようとして、止めた。巡音さんだって、それくらいわかっているはずだ。

「……昨日のことだけど」

だから、そこで固まらないでくれよ。……俺だって恥ずかしいんだよ、ミラーハウスでのことは。

「例の『好き』と『嫌いじゃない』はイコールで結べるのかって話」
巡音さんは少し身体力を抜いたようだった。俺はそのまま話を続けることにする。

「今朝姉貴にその話題振ってみたら、姉貴、それをイコールで結べはしないってさ。姉貴が言うには、『嫌いじゃない』ってのは、逃げるための言葉なんだって。好きということをごまかしたいか、好

きではないけど明確に嫌いとは言いつらい時か、無関心に近い感情の時に出てくる言葉なんだって。……俺もまあ、それでなんとなく納得はしたんだけど」

そのせいで、俺は自分のユイに対する感情が「その程度」だったことを認識してしまって、一人頭を抱える羽目になったりもしたが……。いや、少しは好きだったと思うんだよ、多分。

巡音さんの方は、ちょっとこつちが怖くなるくらい真剣な表情で考え込んでしまった。え、えーと……所詮は俺の姉貴の見解に過ぎないんだから、そこまで真剣に受け止めなくてもいいんじゃないか？ そっついう考え方もあるんだ、ぐらいでさ。

「鏡音君のお姉さんってすごいのね」

しばらくしてから、巡音さんは感心した口調で、そんなことを言った。確かに姉貴の答えは鋭いところを突いてると思うが……なんだか面白くないぞ。……なんで姉貴のことばかり。

「……ねえ、鏡音君」

あ、ようやく顔を上げてくれた。

「何？」

「『好き』って感情が無い人って、イメージできる？」

こつちを真つ直ぐ見てくれるのは嬉しいんだが……急にどうしたんだろう。とはいえ、こんな真剣な瞳で訊かれると、真面目に答えないといけない気になってくる。「好き」という感情が無い人間か……うーんうーん、イメージしづらい。だって、大抵の人は何かしら好き嫌いあるだろ。食べ物とか、娯楽とか。……それ、人間か？ 人間じゃないよな？

「……巡音さん、学祭の舞台見たって言ってたよね。あれの最初の方に出てくるロボットみたいな感じになるんじゃない？」

あれは労働の為に作られたロボットだから、そういう機能は最初から無い。感情も何もなく、命令に従うだけだ。

って、巡音さん、青ざめてるけど……大丈夫なんだろうか。

「巡音さん、大丈夫？」

「うん……平気。考えすぎて、ちょっと怖くなっただけ」

あんまり真剣に考え詰めるのも良くないんじゃないかなあ。というか、何を考えていたんだろう。そう考える俺の前で、巡音さんはやや無理した笑顔になった。

「『好き』って感情が無い人は、『嫌い』って感情も無いのかな？」
「なんだか謎々みたいになってきたな。」

「無いんじゃない？ ロボット状態なのだとすればね 生きることに執着せず、楽しむことを知らず、雑草以下の存在 ー」

俺は台詞を一部引用した。この台詞は、俺のやった役じゃないけどね。台本に手を入れたから、メインの台詞は何となく憶えている。しかし改めてこの台詞見ると、自分たちで作っという「雑草以下」は無いだろうって気がしてくる。

巡音さんは、また考え込んでしまった。一体、何をそんなに悩んでいるんだろう？

俺が巡音さんのことで頭を悩ませていると、初音さんがやってきた。……えーっと、初音さんの邪魔は、しない方がいいよな。俺は巡音さんに「あんまり悩まない方がいいと思う」とだけ言って、自分の席に戻った。

……なんだかよくわからないことになったけど、さっきの話題で、巡音さんとは話すことができた。気まずさもそんなに感じなくなっ
たし……。これ、やっぱり、姉貴に感謝しないとイケないのかなあ。
したくないけど。

今日は部活の活動日。部室に行ってみると、グミヤとグミが女子のほぼ全員に取り囲まれて「おめでと〜」と言われていた。結婚式はいつ？ とか訊いてる奴もいるが、幾らなんでも気が早すぎるだろ。俺らまだ高校生だぞ。ちなみにグミヤは真っ赤になっていて、訊かれることにろくに答えられずにいる。

「……心の底からグミヤに同情したくなるな」

思わずクオに向かってそう言ってしまう。何の罰ゲームだよ、これ。ほとんどさらし者状態じゃないか。

「同感」

クオは頷いて、グミヤを気の毒半分、面白がってるの半分といった表情で見やった。

「ところで、クオ。お前、他の奴らにグミヤとグミのこと喋ったの？」

「いや、俺じゃない。どうもグミが自分から、昨日デートしたって喋ったらしくて。俺が来た時は、もうこんな感じだった」

グミのことだから、グミヤがいかに素敵だったとか、延々喋り倒したんだろうなあ……そんな話、されても困りそうな気がするんだが。

しばらくそんな様子をクオと、一年の男子部員たちとで眺めていたが、ちなみに、演劇部の二年男子は俺とクオとグミヤの三人だけである。やがて、グミヤが我慢の限界を超えた。

「お前らしい加減にしろっ！ 活動を始めるぞっ！」

さすがに女子連中も悪ノリしすぎたと気づいたのか、大人しくなった。そんなわけで、普段通りの部活が始まった。要するに体力づくりやら筋トレやらストレッチやら発声練習やらってことだけだ。

「ねえ、鏡音君」

ストレッチをやっている最中に、二年の女子部員である、蜜音リが俺に声をかけてきた。

「何だよ」

「グミちゃんから聞いたんだけど、鏡音君が昨日女の子連れで遊園地にいったって……」

あゝいゝつゝはゝっ！ 何余計なこと喋ってんだよっ！

「言つとくけど、デートじゃないぞ。俺とクオと、クオの従姉の初音さんと、初音さんの友達の巡音さんで遊びに行つて、クオと初音さんが絶叫マシン乗らないと我慢できないとか言い出すから、俺と巡音さんが二人でクオたちを待ってたってだけ！」

「……そうムキにならなくてもいいじゃない」

「蜜音は呆れ果てた様子でそう言った。……はっ。俺は何をやってるんだ。」

「いや、昨日グミに散々『デートですか』って訊かれたもんだから、つい過剰反応を……ごめん蜜音」

「別にいいけど」

「蜜音はあまり気にしていないようだった。助かった。」

「というかグミの奴、そんなことまで喋り倒してんの？」

「ええ」

「うげ……後でグミヤに言っところ。既に手遅れのような気もするけど。巡音さんの耳に入ったらどうしてくれるんだ。」

「その後の部活は滞りなく終わった。終了後、グミヤに話をしようとする、驚いたことに、グミヤの方から俺に声をかけてきた。」

「レン、ちよつといいか？」

「何だよ」

「グミヤの表情を見る限り、グミとのことじゃなさそうだなあ。」

「そろそろ、来年の四月の公演の演目を決めようと思うんだ」

「四月……新入生歓迎公演か。まだ先のような気がしてたけど、確かにそろそろ作品を決める時期だ。けど、なんでこんなところで俺に言うんだ？ ミーティングで決める話だろ、それ。」

「そういうわけだから、レン、適当な作品探しておいてくれ」

「俺に丸投げかよっ！」

「グミヤの言葉に、俺は思わず叫んでしまった。」

「だってこの前の、お前のアイデアだぜ」

「俺のアイデアって……」

「確かにあれをやるうって言い出したのは俺だけど。最終的にはかなりの奴が賛成したじゃないか。」

「俺、文学なんて普段読まないんだよ。他の連中にも聞いてみただ、みんなそんな読まないって言うしさ」

「頭を抱える俺の前で、グミヤはそんなことを言い始めた。あのな」

あ。

「……俺だつて別に詳しくないぞ。まともにしたことがあるのは、チャペックとシェイクスピアぐらいで」

後は何読んだっけ？ 幾つか読んだのはあるけど、ぱつと出てきやしない。

「あ、そうだ。顧問がチャペックはやめてくれってさ」

「チェコを代表する偉大な作家に喧嘩売ってんのか顧問は……」

そもそも顧問が「文学作品をやれ」なんて言い出すから、こんなややこしいことになったんだが。大体、チャペックは禁止。シェイクスピアには無理がある（衣装とかセットとか）のに、どうしろって言うんだ。

「SFは顧問のお気に召さないんだろ。まあとにかく、そういうわけだから任せたぞ」

チャペックはSFだけの作家じゃないぞ。

「グミヤお前部長だろっ！ 俺に丸投げするなよっ！」
「うん、俺は部長だよ。部長として、この役目はお前がベストだと判断したから、頑張ってくれ。ああ、それと、できたら明るい奴にしてくれ。新入生歓迎公演だからな。新入生がこの舞台に参加してみたいって、思えるような奴じゃないと。じゃあな！」

俺が何か言う前に、グミヤはさっさと背を向けてしまった。そんなグミヤの腕に、グミがしがみついて「一緒に帰りましょう」とか言っている。……全く、あいつらは。

ため息つきつつ、俺も帰り支度をする。なんか最近、妙に色々あるな……。それにしても、次回作の決定か……。グミヤの奴、何が任せただ。いっそできないような難しいのを「これがお薦めだと思う」とでも言っただろうか。ゲーテの『ファウスト』とか。

……でもそんなことをしたら、新入生歓迎公演がお流れになちまうよなあ。やっぱりちゃんとした奴、選ばないと。うーん……。

大体顧問が「文学作品をやるように」なんて言い出すから、ややこしくなるんだよ。普通に図書室に置いてある、高校生用の戯曲集

使えばいいだろ。何が「格調の高いものを……」だ。格調って言葉の意味、わかってんのか。

で、どうするか。チャペックは駄目って言われた、シェイクスピアは演出が大変。ゲーテは論外。あんな面倒くさい脚本、やれるかってんだ。

……こんなの、俺一人で決めるのは無理だ。誰か相談に乗ってくれる相手、探さないと。

真実はいつも少し苦い（後書き）

『憂鬱な月曜日』と『暗い日曜日』が、ごつちやになってないか？
ちなみに『暗い日曜日』は、それを聞いた人が大勢自殺したとい
う日くつきの曲です。いや、なんぼなんでも都市伝説だと思いま
すが……。

蜜音リリ＝リリイさんです。名字は例によって私の創作です。

シヨウほど素敵な商売はない

「巡音さん、ちよつといい？」

水曜日の放課後、俺は巡音さんにそう声をかけた。

「……鏡音君、どうしたの？」

とりあえず、また以前のように話せるようにはなっている。……

これでいいんだよ、これで。……多分ね。

「実はちよつと相談に乗ってほしいことがあって」

「え……わたしに？」

心底驚いたといった表情で、巡音さんはそう訊き返してきた。何もそんなに驚かなくてもいいと思うんだが。

「そうだよ。多分、巡音さんが一番適任だと思う」

俺が答えると、巡音さんは軽く思案する表情になった。

「それ、長くかかる？」

「……かもしれない」

「わかったわ。……少しだけ待ってて」

携帯を取り出すと、巡音さんはメールを送信し始めた。俺は手もち無沙汰の状態で、メールを送信する巡音さんを見ていた。

「お迎えを遅らせてもらったから、しばらくは大丈夫」

メールを送信し終わった後、巡音さんはそう言った。……もしかして分刻みでスケジュール、決められているんだろうか。ありそくな話だ。

「それで、相談って何？」

「あ、うん、それなんだけど……巡音さん、文学に詳しいだろ。だったら、戯曲とかも詳しくあったりする？」

顧問やらその他の先生に相談するのは真つ平だし　どうせわけのわからないことを言われて、趣味を一方的に押し付けられるに決まっている　姉貴は趣味がズレすぎてて相談するのには不安が残る。演劇部の連中は頼れないし……結局、巡音さんしかない。

「少しは……詳しいってほどじゃないけど」

「例えば、どんなの読んだ？」

「シェイクスピア、チェーホフ、メーテルリンク、カルデロン、イブセン、ブレヒト……あ、後ギリシア悲劇とかも読んだけど、それくらいよ。それに全部の作品に目を通したわけじゃないし……代表作ぐらいしか読んでないわ」

俺よりずっと色々読んでるじゃないか……知らない名前も混じってるし。

「それだけ知ってりや充分だよ。少なくとも、俺よりずっと詳しいだろうし」

ああ助かった。俺と同じぐらいのレベルだったらどうしようかと思っただぞ。

「実は今、演劇部の来年四月の新生歓迎公演でやる作品探してんだよ。グミヤの奴、部長のくせに俺に全部任せたとか言いやがって俺は相談の本題を話し始めた。巡音さんが首を傾げる。

「そういうのって、専門があるんじゃないか？ 図書室で見かけた記憶があるんだけど」

……誰でもそう思うよなあ。

「普通はね。だけど顧問が、『どうせやるなら文学作品を』って、無茶なこと言い渡してきてさ」

「なんだか大変そう……」

しみじみとそう言われてしまった。いや、全くとってそのとおり。

「実際、大変だよ」

ため息の一つも出てくるってもんだ。なんでこうなったんだか。

「ねえ、鏡音君。学祭の時の公演は？ あれ、未来のお話でしょ？」

巡音さんはそんなことを訊いてきた。うーん、あれ、そんなに文学に見えないのか。

「ああ、あれは作者がチャペックってことで、強引に押し切ったんだよ。チャペックなんだから充分文学のカテゴリに入るだろ。噂じゃノーベル文学賞の候補になったこともあるっていうし」

「え……あれ、チャペックだったの？ チャペックって、『ダーシエンカ』や『長い長いお医者さんの話』書いた人よね？」

びっくりした表情で、巡音さんはそう言い出した。チャペックの作品、ちゃんと読んだことがあるんだ。

「あ……知ってたんだ。そうだよ」

「小さい頃、『郵便屋さんの話』好きだったの……同じ人が書いたとは思えないわ」

「ああ、まあ、そうかもね」

かたや童話、かたやSF戯曲だもんなあ。他にも色々書いてるけど。俺からするとチャペックって古典SF作家なんだけど、巡音さんからすると童話作家なのか。

「あ、でも、『マクロプロス』を書いたのもチャペックよね……」

「よくそんなの知ってるなあ……」

どう考えても『ロボット』より『マクロプロス』の方がマイナーだぞ。

「見たことはないの。ヤナーチエクの作品リストに入ってたから知ってるだけで」

そんなことを言い出す巡音さん。また聞いたことのない名前が出てきた。誰だろう。

「ヤナーチエクって誰？」

「チエコの有名な作曲家。『マクロプロス』をオペラにしたの」

「ああ……なるほど」

巡音さん、オペラ好きだもんな。それにしても、チャペック作品ってオペラになってたのか。結構意外な感じがする……って、話がズレてるよ。

「チャペックについて語りだすと際限無くなりそうだから、話戻すよ」

巡音さんが頷いたので、俺は話を続けた。

「とまあ、そういうわけで戯曲を探しているんだけど……巡音さん、好きな戯曲とかある？」

やれそうなら巡音さんの好きな奴にしておもう。どうせみんな文学には詳しくないんだし。

「……メーテルリンクの『青い鳥』」

それが、巡音さんの答えだった。え……『青い鳥』？

「兄妹が幸せの青い鳥を探しに行く話だよな？」

巡音さんは頷いた。『青い鳥』って、小さい時に読んだ記憶あるけど……何せ昔のことなんで細かい部分はほとんど忘れてしまった。探していた青い鳥は、結局自分の家にいたってのは憶えているんだがなあ。

「それ、絵本だか童話だかじゃなかったっけ？」

「絵本としてリライトされたものが出てくるけれど、もともとは子供に見せるための戯曲として書かれたものなの」

巡音さんはそんな話をしてくれた。確かに、大人向けの本を子供向けに直したもので結構あるよな。

「メーテルリンクという人は、なんでもない日常から宝石を見つけ出せる人だったと思うの。『青い鳥』を読むと、細かい描写からそういうことを感じられるの。それとね、この戯曲は衣装の設定一つ一つにも夢があるのよ。光の精や水の精の衣装が『ロバの皮』っていう、別のおとぎ話の衣装だったりするの」

すまん、そのおとぎ話は聞いたことがない。というか、光の精に水の精ね……。衣装が大変なことになりそうだ。

巡音さんがこの話を、どれだけ気に入っているのかはよくわかったけど。というか、巡音さんの言い回しが詩人みたいだ。

「……ちよつと話がズれるけど、探していた青い鳥って、確か自分の家にいたんだよね？」

気になったので、俺はその辺りを訊いてみることにした。

「ええ」

「結局幸せは自分の家にいるってこと？」

子供向けとはいえ、落ちがちよつと安易過ぎないか？

「……違うと思うけど」

それが、巡音さんの答えだった。……ん？

「とうとう？」

「だって、鳥を探していたのは自分たちのためじゃなくて、病気の女の子のためだもの。目的を果たせなかったことを残念に思う二人の気持ちを受けて、元々家で飼われていた鳥が、青く変わったんじゃないかしら」

あ、そんな前提あったのか。昔のことだから細かい部分忘れてた。……なるほどね。

「それに、最後、青い鳥は飛んで行ってしまつて、泣き出す女の子にお兄ちゃんの方が『また見つけてあげるよ。ここに来た人、鳥が飛んできたら、捕まえておいてください』つて言うところで終わるの。劇場に来た人たちに『青い鳥が自分のところに飛んで来るかも』と思わせる為に、そうしたんじゃないかしら。このお芝居から、希望を持つて帰つて下さいって」

巡音さんは軽く首を傾げて、夢見るような瞳でそう語つた。……綺麗な瞳だな。俺じゃなくて、窓の外を見ている。青い鳥はさすがに飛んでいないようだが……。

「兄妹以外にどんなキャラクターがいるんだっけ？」

くだいようだが細部は憶えてないのだ。

「主人公の兄妹の他に、兄妹と一緒に旅をするのが、犬の精、猫の精、光の精、パンの精、砂糖の精、牛乳の精、火の精、水の精。それから二人の両親とか、妖精のおばあさん　お隣さんと一人二役だと思つただけ　とか、行く先々の国で出会つ不思議な存在とかがいるけど」

巡音さんは説明を始めた。良く憶えてるな……つてあの話、そんなにキャラクターいたの？　確か行く場所も一箇所じゃなかったよな。

「旅するのは？」

「思い出の国、夜の国、森　木々と動物たちが出てくるの、
幸せの国、未来の国よ」

うーん……それだけのキャラクターが一緒に旅をして、で、先々で出てくるのも一人ってこと無いんだろ？……。駄目だ、人数が足りない。それに、セットと衣装の問題がどうしても……。犬とか猫とか、やっぱり着ぐるみなのか？

『ロボット』はその点、楽だったよな。何せほとんどスーツと白衣と作業着で済んだんだから。

「……ごめん、そいつをやるのは無理。一幕しか出て来ないのは使いまわすにしても、必要なキャストが多すぎる。セットとか衣装とか、そつちのこともあるし」

俺がそう言つと、巡音さんは少々残念そうな表情になった。本当に好きなんだな、『青い鳥』

「演劇部って、部員は何人なの？」

巡音さんはそんなことを訊いてきた。人数から、やれそうな戯曲を探すつもりなんだろう。

「二年が八人、一年が七人、合計十五人。ただ、照明や音楽を担当する奴も必要だから、全員が舞台上に上がるのは無理。あ、半分以上は女子だけど、男役をやるのに抵抗のない奴が多いから、男女比は気にしないでいいよ」

巡音さんはしばらくの間視線を伏せ、考え込んだ。

「じゃあ、チエーホフの『桜の園』は？」

チエーホフの『桜の園』……あ、ちよつと前に読んだ。確か、バカな貴族のご夫人が破滅する話だっけ。タイトルの綺麗さに騙されると痛い目を見る話だ。

「何一つ自分で決めることのできない主人公が、決断を先延ばしにしたあげく自滅する話だよな？」

確認のつもりでそう口にする。巡音さんが傷ついた表情になった。……やばっ。何やってんだ俺。もうちよつと他に言い方あるだろ。

「没落した名家の女性が、生家を売らざるを得なくなる話」とかさ。口に出す前にもう少し考えろよ。俺にはバカなご夫人の話でも、向こうには思い入れのある話かもしれないんだから。

「あ……あの……巡音さん……」

声をかけようとして、それから先の言葉に詰まる。一度出た言葉は取り返しがつかない。

「……平気」

巡音さんはそう言って、顔をあげてくれた。

「確かにあの話にはそういう側面もあるのよね。ただ……わたし、最後に桜の園が無くなってしまおうというのが、とても悲しくて。だって、そこにずっとずっとあったのよね。広い土地に生えたたくさん桜の木。春になると一面が真っ白な花で埋まるの。無くなったら、もう戻って来ないのよ」

……巡音さんには、「桜の園」が見えているのか。作中では登場人物の台詞でしか出てこない場所なのに。

巡音さんが「桜の園」の持ち主だったら、絶対に手放さないんだろうな。

「……ラネーフスカヤのようにはなりたくないの」

そんなことを巡音さんは言った。あのご夫人、そんな名前だったよな。えーっと……そもそも似てないんだが。巡音さんをあんなバカと一緒にしたらバチが当たるよ。

「巡音さんなら大丈夫でしょ？」

「……ありがとう」

あ……笑ってくれた。良かった。

「あの……で、話戻すけどさ。『桜の園』は、確かに上演するのは問題無さそうんだけど 新入生歓迎公演でやるには、ちょっと話の中身が暗すぎる気が……明るい話の方が、興味を持ってもらえそうなんだよ」

暗いっつーか、ブラックなんだよな。いわゆるブラックコメディって奴。まあ正直言つと、さすがに俺でもちよつと笑いどころがわからない。バカをやらかしておいて「仕方ないわよ、私バカなんですもの」っていう、ラネーフスカヤを笑えばいいんだろうか。でもキツすぎてちよつとなあ。

「……生きた人間が出てこないお芝居は演じにくい？」

巡音さんはそんなことを訊いてきた。ああ、あれか。

「人生を描くには、あるがままでもいけなくて、かくあるべきでもいけなくて、自由な空想に現れる形じゃないといけないんだよ」

確かこうだったよな。

「お芝居には恋愛が必要なのよ」

そう言つて、巡音さんはくすくす笑い出した。やつぱり、笑つてた方がずっと可愛い。

「で、戯曲の話だけ……文学つて、暗いものの方が多いのよね」

笑いが収まつた後、巡音さんは真面目な口調でそう言った。まあ、そうだろうなあ。

「シエイクスピアとかは無理でしょうし……」

「まあね……俺だつてやれるものなら『テンペスト』とか、やつてみたいけど、さすがにああいうのはなあ……」

セットを考えただけで気が遠くなる。これに魔法の演出まで加わるとなると……。

「バーナード・ショーの『ピグマリオン』は？ 確かキャストは十人ぐらいだったはずよ。パーティーのシーンがちよつと難しいかもしないけど」

うん？ 『ピグマリオン』？

「それつて、ギリシャ神話の話？」

あつたよな。自分の作つた彫刻に恋をした彫刻家が、神様に祈つて彫刻を人間にしてもらつて話だ。ギリシャ神話だと例によつて衣装が……ああ、こんなのはつかだ。無理矢理現代にでもして「演出です」とでも言つてやろうか。

「違うわ。あのね……『マイ・フェア・レイディ』つて映画、知ってる？ あれの原作なの。映画はミュージカルだけど、原作は普通のお芝居だから、やれるんじゃないかと思つただけど」

「え？ 『マイ・フェア・レイディ』つて……あの、オードリー・ヘップバーンが主演してる奴？」

確かアカデミー作品賞受賞作だったよな。うちの母親のオールタイムベストで、しつかりDVDも持っている。意外なことに、姉貴も好きだったりする。

「ええ」

巡音さんは頷いた。原作が戯曲というのには驚かないけど、文学なのか？

「それ、文学に入れて大丈夫？」

「バーナード・ショーはノーベル文学賞受賞者だから、大丈夫じゃないかな」

へーえ。それなら顧問も文句なんか言えないだろうな。現代だから、男性陣はスーツで何とかなるだろう。厳密に言えばもつと前の時代だけど、高校演劇にそこまでの正確性なんて誰も求めないだろうし。

「……それならやれるかも。あ、でも、俺読んだことないんだよな」
最終判断はちゃんと作品を読んでからにしないと……。

「わたし、原作持つてるから、鏡音君さえ良ければ明日持つてくるわ」

「あ……じゃあ、頼んでいい？」

「ええ」

頷く巡音さん。明日巡音さんに本を貸してもらったら、その日のうちに読んで、やれそうかどうか考えよう。……色々と助かった。

シヨウほど素敵な商売はない（後書き）

演劇部が学祭で上演した戯曲って何よ？　と思う人へ（そういう人いるのかという突っ込みはやめてね）

これです（抄訳ですが）

<http://www.aiz.jp/221b/aozora/rur.html>

1920年にこんな話を書いたチャペックは、色々な意味で先見の明があったと思うのです。

完訳は岩波文庫で出ていて今でも普通に本屋で売られていますので、興味を持った人は探してみてください

自分はあるふれた人間

巡音さんが言葉どおり『ピグマリオン』を貸してくれたので、俺は休み時間や、部活が始まるまでの短い時間に、最初の方を読んでみた。……映画を見た時はそこまで感じなかったけど、ヒギンズ教授って相当性格イタくないか？ まあ、そこがギャグとして機能してるんだろぅが……。お前はただっ子かよ、と突っ込みたくなる部分がかかなり多いぞ。まあ、説明書きにもはつきりきっぱり「ガキくさい人」と書かれていたりするが……。

部活が終わると、俺は本を鞆に入れて下校した。今日は俺が晩飯当番の日なので、駅前のスーパーで買い物してから家路に着く。ちよぅど自宅の前まで来た時だった。

「あら、レン君。今帰り？」

あ、お向かいの岩田さんのおばさんだ。

「こんにちは、岩田さん。はい、今帰って来たところですよ。頭を下げて挨拶する。」

「ちよぅど良かった。今、お宅に回覧板持って行くこと思っていたところなのよ。」

岩田さんはそう言って、手にした回覧板を掲げて見せた。

「姉に渡しておきます」

俺は回覧板を受け取った。だが岩田さんは自宅に戻ろうとはせず、何か言いたそうにしている。

「どうかしたんですか？」

「やっぱり、言っておいた方がいいでしょうね」

何かあったんだろぅか。

「何かあったんですか？」

「あつたつて言うか……最近、この辺りを不審者がうろついているみたいなのよ。」

岩田さんはそんな話を始めた。

「お宅は若い娘さんと未成年の男の子の二人暮らしでしょ。だから心配で」

まあ、確かに……。特に姉貴、帰りがえらく遅い時があるしなあ。「お気遣いありがとうございます。姉にも言っておきますから」俺がそう言うと、岩田さんは重ねて「気をつけてね」と言っ、自分の家に戻って行った。不審者か……。気のせいだといいいけど、最近色々怖いニュースが世の中をにぎわしているからなあ。

通学鞆、スーパーのビニール袋、回覧板、郵便受けの中身を持って、家の中に入る……。持ちにくいな。分けりや良かった、ということに、家の中に入ってから気づく。まあいいか。一度自分の部屋で制服から私服に着替えてから、下に下りる。

夕飯……。時間のかかるものは面倒だから、今日のメニューはうどんにしたんだよな。茹でるのは姉貴が帰宅してからにするか。下ごしらえをすませた後、俺は居間の座布団に座って『ピグマリオン』の続きを読み始めた。教授がイライザに最初着せる衣服が日本の着物というのがびっくりなんだが……。上演するんだったらここは変えよう。いきなり着物姿でイライザが出てきたら、見る側は衣装が気になって話の筋がどこかへ行ってしまう。

「ただいま」

そこへ、姉貴が帰って来た。

「お帰り、姉貴」

俺は本を置いて、立ち上がった。

「ご飯できてる？」

「今日はうどんにしたから、これから茹でる」

「そう、じゃ、お願いね。私は着替えてくるから」

姉貴は二階へと上がっていった。俺は台所に立って、残りの作業を始めた。

食事ができあがって、居間へと持って行くと、姉貴は俺がテーブルの上に置きっぱなしにしていた『ピグマリオン』を読んでいた。

……。うら。

「姉貴、それ、俺が友達から貸してもらった本なんだから、勝手に読まないでくれよ」

「別にいいじゃない」

「良くないっ！ さっき言っただろ、借り物だつて！」

俺はテーブルの上にお盆を置くと、姉貴から『ピグマリオン』を取り上げた。

「それ、誰から借りたの？」

巡音さんから貸してもらったとは言いつらいなあ。というか、なんで姉貴は巡音さんとの友達つきあいにも否定的なんだよ。

「……クラスの友達」

「『マイ・フェア・レディ』の原作でしょ？ あんたにしちゃ珍しい選択ね」

一々細かい突っ込み入れなくてもいいじゃないか。

「来年四月の公演の候補にどうかと思つてんだよ。顧問は文学をやれつてうるさいし、グミヤは明るい奴がいいつて言うし」

「来年か……考えてみれば、もう十一月なのよね。時間の経過が早いわ」

突然浸りだす姉貴。どうしたんだ急に。……いや、放っておこつと。

俺はテーブルの上に、うどんの入ったどんぶりと箸を並べた。とつと飯にして、食べ終わったら部屋へ引つ込もう。

「いただきます」

「いただきます……あ、そうだ姉貴。回覧板来てるよ」

俺は、サイドボードの上の回覧板を指差した。

「じゃ、後でチェックしておかなくちゃ」

「それと、岩田さんが言うには、最近この辺を不審者がうろついているんだつて」

「不審者？ 物騒な話ね」

それに関しては同意見だ。

「姉貴、気をつけてくれよ。時々帰りが遅くなるだろ」

「ん〜、でも、仕事だしねえ……。向こうに泊まってもいいんだけど、あんたを一人にするのも、それはそれで心配だし」

「いや、俺としては泊まってくれた方が安心なんだが。一晩二晩くらい一人でも大丈夫だよ。」

「俺より姉貴の方が危ないだろ」

「念のために護身グッズは持ち歩いてるわよ。用心に越したことは無いしね」

「防犯ブザーとかかな？ 姉貴も、一応考えてはいるらしい。」

「……ところでレン、あんたに『ピグマリオン』を貸してくれたのって、もしかしてリンちゃん？」

「姉貴はいきなり、そんなことを訊いて来た。俺は呆気に取られてその場に固まる。……なんでわかった!？」

「やっぱりそうだったのね」

「姉貴は俺の前で納得して頷いている。ごまかすのは無理そうだったので、俺も認めることにした。」

「……そうだよ。なんでわかった」

「最近の一般的な高校生は、こんな本読まないのよ。それにその本、結構お値段が張るでしょ？ そうなると、そんな本を持っているのはリンちゃんぐらいじゃないかなって」

「どうして本を見ただけで、そこまで推測が働くんだらうなあ。俺は姉貴を睨んだが、姉貴は涼しい表情をしている。ああ面白いくない。クオヤ初音さんから貸してもらったとは思わなかったの？」

「初音さんは本を借してもらえるほど、あんた仲良くないでしょ？ ミクオ君は、そういう本を買うお金があるのなら、ゲームかDVDに使うでしょうし」

「全くもってそのとおりなんだが……。見透かされてるといのが実にいらつく。」

「あのさ姉貴、俺はグミヤから四月の新入生歓迎公演の演目決めを任されてるんだよ。で、顧問が文学文学ってうるさいから、顧問を黙らせるようなしっかりした文学作品があるわけ。そうなると、詳

しい人に相談に乗ってもらうのが一番だろ。俺の周りにはそういう相談ができるような人が、巡音さんしかないの」

「私は？」

姉貴は自分ってものがわかってないんだらうか。

「姉貴に相談したらろくでもない回答が来るだろ。何薦める気だよ」

「そうねえ……『機織りたち』とか？」

タイトルは普通に聞こえるが……どうせろくな話じゃないだらう。

「念のため訊くけど……どういう話？」

「搾取される一方で、働いても働いても貧しくなるばかりということに怒った労働者たちが、暴動を起こして……」

「もういい……訊いた俺がバカだった」

プロレタリア文学って奴なのかもしれないが、新入生歓迎公演でそんな誤解されそうな話やれるか。

「ちゃんとした話よ？」

「暗い話は止めてくれってグミヤに言われてんだよっ！」

「あら……それは残念ね」

ちっとも残念じゃない。そんなのやるぐらいなら、『桜の園』やる方がまだマシだ。

「で、『ピグマリオン』にするわけ？」

「第一候補ってとこ。まだ途中だけど、結構面白いよ、これ」

教授がかなり嫌な奴だったりするけど。まあいいか、これぐらいなら。

「ふーん、まあ、『マイ・フェア・レディ』の原作だしねえ」

「姉貴がその映画好きってのが、俺としては実に意外なんだけど」

俺としては素直な感想を口にしたただけなのだが、姉貴はむっとしたようだった。

「あんたにはわかんないでしょうけど、この時代の映画はファッションを語る上において外せないのよ。マイコ先生もいつも言っているわ。六十年代こそがファッションにおいて黄金期だって」

ちなみにマイコ先生というのは、姉貴を雇っているファッション

デザイナーで、まあ、なんていうか……『RENT』のエンジェルのような人だ。姉貴に言わせると、エンジェルはドラッグクイーンで、マイコ先生はトランスヴェスタイトなんだそうだが。俺にはそういう細かい違いまではよくわからん。

「それはさておき、あんた、ヒギンズ教授と同じ轍踏まないようにしなさいよ」

姉貴はなんでいちいち俺に喧嘩売らないと気が済まないんだ……。

「どついう意味だよ」

「ヒギンズ教授とあんたって、ちょっと似てると思うのよね」

「俺はこんなに性格悪くないっ！」

それにこの人、重度のマザコンじゃないか。姉貴は俺がマザコンだとも言いたいのかよ。

その姉貴は、何故か俺の前でため息をついている。

「自分がわかってないって、怖いわねえ」

それは俺が姉貴に言いたい台詞だよ。全く。

「まあ……とにかく、ガラテアかイライザかわからないけど、逃げられないようにしなさい。……やっぱりイライザかしら」

意味不明な話をしないでくれよ。なんで姉貴はこうなんだ。

食事が終わったので、俺は食器を下げると、『ピグマリオン』をつかんで自分の部屋に戻った。続きを読みたかったし、これ以上姉貴と話を続けていると、さすがの俺もキレそうだったから。食事当番は俺だから、後片付けは姉貴の仕事だ。

部屋のベッドに寝転がって、俺は『ピグマリオン』の続きを読んだ。半分ぐらいは読んでいたから、全部読みきるのにそんなに時間はかからなかった。

読み終わると俺は本を傍らに置き、天井を眺めた。……映画とラスト、違うのか。映画だと、一度飛び出したイライザは教授のところに帰って来る。でも原作では帰って来ない。教授が「イライザはフレディと結婚する」と言うところで終わっている。なんだか……すっきりしない終わり方だ。そりゃ、ヒギンズ教授は性格悪いしま

ザコンだし、あまり一緒にいて楽しい人とは言えないだろうが……。
だからってフレディみたいなバカっぽい役立たず選ばなくても。

とにかく、この原作の結末は俺にはひどく不満だった。どうして
不満に感じるのかはよくわからなかったけれど、嫌なものは嫌なん
だ。

……一人で考えていても埒が明かないな。明日学校で巡音さんと
話してみよう。

自分がありふれた人間（後書き）

つくづく、自分のことになると鈍いですね……。

望むのはどこかの部屋

金曜の朝、俺が登校すると、巡音さんはやっぱり自分の席で本を読んでいた。

「おはよう、巡音さん」

声をかけると、巡音さんは本を置いてこっちを向いてくれた。

「おはよう、鏡音君」

あれ……また表情が暗いな。何かあったんだろうか。とはいえ、こっちを向いてくれるようになったのは、進歩だよな。

……自分で考えといていうのも何だが、進歩ってなんだ？

「早速貸してくれた『ピグマリオン』を読んでみたんだけど、かなりいい感じだと思うんだ」

「じゃあ、『ピグマリオン』にするの？」

「俺としてはこれを推すつもり。まあ、他のみんなが嫌がったら無理だけど、でも、多分大丈夫だと思う」

「ごちゃごちゃ言ってくる奴がいたら」「じゃあ、お前にはもっとマシな案があるわけ？」とでも言ってみよう。

「あの……ところで巡音さん、『ピグマリオン』って、映画と結末が違うんだね」

「ええ」

巡音さんは頷いた。

「それ……どう思った？」

「どちらの結末がいいかということ？」

訊かれたので頷く。巡音さんが思案する表情になった。

「あの……鏡音君。鏡音君は、今日は時間、空いてるの？」

珍しく、巡音さんの方がそう訊いてきた。今日ねえ……今日は部活の活動日だ。とはいえ、演劇部のためにわざわざ巡音さんに協力してもらっているんだよな。この話だって、演劇部の公演のための話し合いなわけで。つまり、部活に行くのを遅らせて巡音さんの話

につきあつたところで問題は無い。むしろ俺の義務だ。

「大丈夫だよ」

「じゃあ……放課後に話してもいいかしら？　少し時間をかけて考えをまとめたいの」

「いいよ」

俺は巡音さんと放課後に話することに決めると、自分の席に戻ってグミヤにメールを送信した。公演の作品選定の為に、今日は部活に行くのが遅れる、という内容だ。しばらくして、返信が来る。「何がどうなっているのかわからないけど、遅れるのはわかった」か。何がどうなっているも何も、お前が俺に頼んだんだろうが。

そして放課後。巡音さんはしばらく、初音さんと何か話をしていたが、やがて初音さんは帰って行った。

「巡音さん、考えはまとまった？」

初音さんが帰ったので、俺は巡音さんのところに行ってそう訊いてみた。巡音さんがすまなそうな表情で、口を開く。

「ごめんなさい。考えてみたけれど、よくわからないの……」

うーん、巡音さんでもよくわからないのか。

「イライザは貧しい花売り娘で、お母さんはもう死んじゃって、お父さんは機嫌が悪いとイライザを叩くような人で、夢や希望とは縁のない人生を送っていたのよね。……だから、イライザは幸せになりたいんだと思うんだけど」

そう言われると、何だかものすごく暗い話に見えてくるな。……でもこれ、確かにそのとおりなんだが。

俺の前で巡音さんは、両手を組んで瞳を閉じた。そのまま、じつと考えに沈んでいる。声をかけるのもためらわれたので、俺はそのまま巡音さんを眺めていた。

「イライザは綺麗になって、幸せになりたかったのよ。そういうものが何一つ無い人生だったから。泥にまみれたりしない幸せがほし

かったの」

不意に瞳を開けると、巡音さんはしつかりした声でそう言った。綺麗になりたいねえ……。確かにあの映画のオードリーは、最初ひどい格好で出てくるけど……。

「どんな格好していても、綺麗な人はもともと綺麗なものじゃない？」

幾ら顔を泥で汚してもオードリーは美人だよな。

「女の子にとっては違うのよ。ドレスを着るのとぼろを着るのでは全然。それに、その場所にふさわしい服装って、あるじゃない？華やかなパーティー会場に、ぼろを着て入るわけにはいかないわ。一度くらい綺麗なドレスを着て、飾り立てられたパーティー会場で、多くの人たちの視線を集めてみたい……。イライザがそう夢見てしまったとしても、それは無理のないことだと思うの」

「うーん……。そういうことなのかな？俺にはまだちょっとピンと来ないけど……。でも巡音さんの話の方が、姉貴の話よりわかりやすいよな。」

……。巡音さんがドレス着たら、どんな感じになるんだろう？

「巡音さんもドレス着てみたいと思うわけ？あ、でも、巡音さんだったら、ドレス着てパーティーに出たことくらいあるよね？」
「何せ筋金入りのお嬢様だもんなあ。会社関係でパーティーくらいあるだろう。」

「自宅で催されるものになら……。わたし、まだ高校生だから、外の会場には出たことがなくて」

「自宅でパーティーって……。まあ、でも、巡音さんのところも初音さんのところと同じくらいでかい家なんだろうな。じゃあ、家でパーティーくらいできるか。」

あれ？巡音さん、えらく憂鬱そうだな。

「パーティー、嫌いななの？」

「……。あんまり好きじゃないの。おとぎ話に出てくるような、楽しいパーティーじゃないから。お客さんもお父さんの会社関係の人ば

かりだし」

それは確かに退屈だろうなあ。会場ですーっと仕事の話ばかりされてそうだ。お姫様もいいことばかりじゃないってことか。

「イライザの気持ちに関してはおわかったけど……結末に関しては？」
話がそれってしまったので この話はこの話で興味深かったが
元に戻すことにする。

「この作品を『シンデレラストーリー』として考えると、イライザが結ばれるべき相手はヒギンズ教授じゃないんじゃないかしら」

巡音さんは今度ははそう言った。うん？

「つまり……フレディと結ばれるべきだと？」

「ええ」

あいつヘタレの役立たずじゃないか。あんなのどこがいいんだ。
「なんで？」

ついきつい声が出た。巡音さんが驚いた表情になる。

「え？ だって、ヒギンズ教授はドレスを着せてくれる人でしょう？ シンデレラにドレスをくれたのは、お母さん代わりの妖精か、死んだお母さんの魂だわ。……だから、教授は彼女の保護者だと思うの。年齢だって離れてるし……」

巡音さんはそんな説明を始めた。……保護者？ 確かに年齢離れてるけど、でもなあ。

「だってフレディって、何の役にも立ちそうにないじゃないか。確か定職ついてなかっただろ、あいつ。そんな甲斐性なしと一緒になつても、幸せにはなれないんじゃないの？」

あんな奴と一緒にすることなんか無いのに。

「でも……好きって言うてくれたわ」

それが巡音さんの答えだった。そんな言葉だけで？

「それがそんなに大事？」

「大事なよ……少なくとも、イライザにとっては」
巡音さんにとってはどうなんだろう？

「ずっと腐ったキャベツと同じ扱いなんて、わたしだったら耐えら

れないわ。どんなに頑張っても、ちゃんとした褒め言葉すらもらえないんだもの」

巡音さんは視線を伏せ、淋しそうな声でそう言った。……そんな表情しないでくれ。巡音さんが腐ったキャベツだなんて思っていないから。

それにしても、確かにそこはヒギンズ教授の問題点ではあるな。もうちょっとかける言葉を選べよ、おっさん。そんなだから逃げられるんじゃないか。

「でもさ、ずっとイライザを見てくれたのは教授の方だけ。イライザが汚い言葉づかいだった頃からさ。フレディなんて、綺麗になったイライザが広場で出会った花売り娘と同一人物だって、気づいてすらいなさそうだし。そんな上辺しか見てないような奴はやめておいた方がいいと思うんだ」

絶対気づいてないよな、あいつ。まあ、たいした話をしたわけじゃないから仕方ないかもしれないが……。

「でも、腐ったキャベツって言われるのは嫌なの!」

泣きそうな声で巡音さんはそう言った。いやだから、誰も巡音さんを腐ったキャベツ扱いはしてないって。……イライザに同調しすぎちゃったみたいだ。

「だからそんなこと言わないって」

「教授はずっとやめてくれないじゃない!」

えーと……俺はそんなこと言わないけど、確かにあの教授、やめないよな。……なんであんなことばかり言ってるんだ、あの人。どう考えても敵ばかり作るタイプだよな……。頭すごくいいし、独特の優れた才能だって持っているってのに。

……そう言えば、イライザも決して頭は悪くないんだよな。最後の方では教授を理詰めで言い負かすし。ちゃんとした教育を受けてないからわかりづらいたいで、実質的な知性は教授と互角なんじゃないのか? 教授が言うところによると耳もいいらしいし。

教授は、イライザの能力自体はわかってんだよな。すごい子だった

てことも。けど、ああいう態度しか取り続けられない。ガキくさい人……というか、ガキだよな。説明書きにもそう書いてあるわけだし。

「しょうがないよ、あの人ある意味じゃお子様なんだから」

「お子様って……」

「だからさ、ヒギンズ教授って人は大人になりきれてないの。多分どこかで成長が止まってるんだよ」

あ、そうか。要するに、あの人好きな女の子にイタズラする小学生のレベルなんだ。……小学生ならギリギリ可愛く見えなくもないけど、あの年齢でやられるとイタいな。

「ついでにさ、あの人は変なところでプライドが高いから、目の前にいるイライザのことをちゃんと認めてあげられないんだよ。イライザのことをいつまでも花売り娘ってバカにしてるけど、家のあれこれを任せてたつてことは、本当は信頼してたつてことだろうし」

ただの花売り娘だったら、あんな短時間でちゃんとした貴婦人になるのは無理だよな。教授は自分だけの手柄にしたがってるけど、素材が良くなけりゃあそこまで行かないよ。

「言いたいことはわかるけれど……じゃあ、この後はどうしたらいいの？」

巡音さんはそんなことを訊いてきた。どうしたら……ねえ。教授は結構いい年だから、今更自分が変わるのは無理だろうな。えーと、つまり……。

「イライザの方が大人になるしかないんじゃない？ ああ、この人はお子様なんだ、わたしが世話を焼いてあげなくちゃ、って感じで、教授の首に手綱でもつけてしっかり握るしか」

それだと今度は教授がマヌケに見えてくるな。ま、仕方ない。才能のありすぎる人はどっか子供みたいなもんだって、何かに書いてあったつけ。それにそんな自体を招いちゃったのは教授なんだし、ここは我慢してもらわないと。

「イライザはずっと我慢しなくちゃならないの？」

「我慢とはちょっと違うと思う。要するに、イライザの方が主導権握って上に行くってことだから。案外あの人、甘やかされると弱いんじゃない？」

マザコンだしね。まあ、マザコンの割りに、ヒギンズ教授の母親はえらくまともだったりするが……。あの母親に育てられて、どうしてああなるんだか。

巡音さんは、淋しそうな表情で首を横に振った。

「……わたしだったら、やっぱり耐えられない」

ラブレターを書くしか能の無い男なのに？ そんなことやってる暇あるんなら仕事の一つでも探せよ。

「なんで？ フレディなんてやめようよ。あんなおつむの軽い男と一緒にになったら、一生、中身のある話はできないぜ。将来性も無いし」

イライザの知性がもつたじゃないじゃないか。将来をどぶに捨ててどうするんだよ。

「イライザは愛されたいのよ。話がどうのとかの問題じゃないわ」

「そんなもつたいたい」

「愛をほしがったらそんなにいけない？」

参ったな……平行線になってきた。どうやってこの話を落としたりいいんだろ。そう思った時だった。不意に、俺の携帯が鳴り出した。

「ごめん、ちょっと待ってて」

俺は携帯を取り出した。グミヤからメールか。開くと、「今どこにいる？」と表示される。何だよ、所在確認か？ 俺は今取り込み中だつてのに。「自分の教室」と打ち込んで返信。何なんだ一体。「急用？」

「いや、大した用事じゃないよ。それで、話戻すけどさ、教授が駄目だからフレディってのは、やっぱりちょっと違うと思うんだよ。それって逃避だろ」

それはやってはいけないことのような気がする。うん。

「そんなのわからないわ。だってフレディはイライザに長いラブレターを送っているもの。イライザはそれでフレディを好きになったのかもしれないじゃない」

それは全くもってそのとおりなんだが……。ああもう、なんでこんなにいらいらするんだ。フレディの肩なんか持たないでくれよ。

「それに、演出一つで、フレディをもっと感じ良くすることもできるんじゃないかしら？ オペラとかでも、時々そういうことがあるのよ」

言ってることは実に正論だが……そんな演出は考えたくないっ！

「それなら逆も可能だろ？ ヒギンズ教授をもっと感じ良くするとだって」

「それは……そうだけど……」

困った口調でそう言う巡音さん。そんなに教授が嫌なのか？ 例によって、下を向いている。俺も何を言えいいのかかわからず、しばらく沈黙が続いた。

そんな気まずい時間をぶち壊したのは、教室のドアが開く音と、その後に続いたでかい声だった。

「あーっ、いたいた！ って、鏡音先輩、どうして巡音先輩が一緒なんです！？ もしや部活サボってデートですか!？」

グミだ……なんでここに来るんだよっ！ というか、部活はサボったんじゃないし、デートでもないっ！ お前の頭の中にはそれしかないのか。

啞然とする俺の目の前で、グミは教室に入ってきた。後ろにぞろぞろと、演劇部の連中が続いている……。クオとグミヤもいるな。何しに来たんだよお前ら。

「鏡音君、部活サボったって……」

巡音さんが目を見開いてこっちを見ている。げ……。巡音さんには黙っておこうって思ったのに。これも全部口の軽いグミのせいだ。「いや、グミヤに遅れるって連絡はしておいたんだよ。演劇部の為の話し合いなんだから、こっちを優先しただけ」

「でも……」

巡音さんは俺の目の前で困り果てている。まずいな……絶対気にしてるぞ。巡音さんのせいじゃないのに。一方で、演劇部の連中はこっちを興味津々と言った目で見ている。

「おい、グミヤ。これは一体何の真似だ。俺は、演劇部の次回公演の決定の為に話し合うから、部活に行くのは遅れるってメールしたよな。なのになんで押しかけて来たんだ」

俺はグミヤに訊くことにした。変な答えだったら、幾ら俺でも怒るぞ。

「いや、それがさ……」

「鏡音先輩っ！ 次の演目はあたし、もっと純粋なラブストーリーがいいですっ！ もちろんヒーローはグミヤ先輩でヒロインはあたしでー！」

「ちよつとグミ、部を私物化しないで。それはそうと鏡音君、次は笑えるコメディにしない？ そういうのが一番気楽に見てもらえると思うのよ」

「俺は次はアクション物がいいと思う。そういうのだったら、もっと男子を増やせると思うんだ。断じて俺が恋愛物嫌いだからじゃないぞ。大体うちの部は男手が少なすぎる」

演劇部の連中は、こぞつて勝手なことを言い出した。あーのーな！。戯曲の一冊も読まないでいるのに、なんでそういう主張ばかりしてくるんだよっ！ せめて条件にあう戯曲を探してからにするつての！

「いい加減にしるお前らっ！ 次の作品はほぼ決定済みなんだよっ！」

怒鳴ると、演劇部の連中は静かになった。

「あ、決まってるの？」

部を代表してなのか、グミヤがのほほんとした口調でそう訊いてきた。つたくもつ。

「何にしたんだ？」

「『マイ・フェア・レディ』だよ。ただし原作だから、ミュージカルじゃないぞ」

ミュージカルをやるのは大変すぎる。しばらくして、クオから抗議の声があがった。

「なんでラブコメなんだよっ!？」

「色々考えてこれがやりやすそうって結論に達したんだよ。というかクオ、お前、何かもっとマシな案あるわけ？」

俺がそう訊くと、クオは悔しそうな表情で黙ってしまった。やっぱり代案は無いんだな。

一方で、女子のほとんどは喜んでいる。昔の映画なのに人気あるな、『マイ・フェア・レディ』って。競馬場のドレスがどうの、と言っている奴がいるが、原作には競馬場のシーンは無い。後でこれが原因で何か言われなきゃいいんだが。

「みんな、『マイ・フェア・レディ』でいいか？」

グミヤが訊いている。女子は全員手をあげた。一年の男子二人は、反対というより、作品自体を知らないらしい。とはいえ、過半数が承諾したんだから、これで決定か。

「あの……鏡音先輩、いいんですか？」

不意に、グミが俺にそう訊いてきた。

「『マイ・フェア・レディ』に決めたのは俺なんだから、いいに決まってるだろ」

「いえ、作品のことじゃなくて……巡音先輩、帰っちゃいましたけど」

「へっ?」

俺はびっくりして振り向いた。巡音さんの席は空になっている。

……まずい。

「放っておかれて淋しかったんでしようねえ。鏡音先輩、女心つてもんがわかってないですよ」

うっ……グミの言うことは真に受けない方がいいとは思うものの、なんだかグサツときたぞ……。

「いちいちいらんこと言わなくていいよ。……というか、出て行つたのっていつ？」

「ついさっきですよ。ちなみに巡音先輩はちゃんと鏡音先輩に『帰るから』って言って言っていましたよ。鏡音先輩聞いてなかったみたいですけど。巡音先輩、もしかしたら、無視されたって思っちゃったのかもしれないですね」

聞いてなかったんじゃないかって、聞こえなかったんだよっ！ グミ、お前、聞こえていたんなら、その場で俺に教えてくれればいいだろっ！

「おい、レン。どこ行くんだ」

教室の出口へ向かおうとした俺に、グミヤが声をかけた。

「巡音さん探しに行つてくる。多分、まだ追いつけると思う」

「なんで？ 放っておけばいいじゃん。話は終わったんだろ」

これはクオだ。あのなあ。そんな真似できるか。

「演出について相談してたところで、その話はまだ終わってないんだよっ！」

「そんなの部員みんなで話しあえば済むだろ。あの子部外者なんだし」

何故かしつこくクオが絡んでくる。……うるさい。

「俺の方から頼んだんだぞ。途中で放り出すわけにはいかないだろっがっ！」

俺はみんなを置いて、教室から飛び出した。

望むのはどこかの部屋（後書き）

どうしてフレディに腹が立つのか、いい加減に気づいたらどうな
んでしょうね……。

それと演劇部の皆さん、空気読みましょうか。

君は特別な人

廊下を走ってはいけない。それはわかっている。だが、今の俺にそんなことを気にしている余裕は無かった。校舎の出口に向かって走る。巡音さんの性格上、寄り道するとは考えにくいから、この途中にいるはずだ。校舎の外に出てしまっていたとしても、校門の辺りで迎えを待たせよう。

下駄箱のところまでいくと、見慣れた後姿が見つかった。ああ良かった。

「良かった……まだいたんだ」

「え……？」

巡音さんがびっくりした表情で振り向いた。

「……鏡音君、どうして？」

「勝手に帰らないでくれよ」

俺の言葉に、巡音さんはうつむいて視線を伏せた。

「……ごめんなさい」

いや、別に謝ってほしいわけじゃ……。参ったな。そもそも、演劇部の連中が押しかけてきたせいで、遠慮しちゃったんし。

「でも、わたし、部外者だし……あの場に残っていたらおかしいかと思って」

巡音さんの人見知りする性格を考えると……追い払うべきだったな、あいつら。誰かが「で、この人はなんでここにいるの？」なんて訊こうものなら、巡音さんはひどく傷ついただろう。俺の方が頼み込んだのに。

「そんな気回さなくていいから。押しかけてきた向こうが問題なんだし」

巡音さんはまだ下を向いている。……気にしてるんだな。うつむいた肩が微かに震えている。

……不意に、目の前の細い肩を抱きしめたい衝動にかられた。巡

音さんの身体の柔らかさや温かさは知っている。何せこの前……つて、俺、今、何を考えたんだ！？ そんなことしたら、巡音さんが怯えるだろ！

「でも……部活があるんでしょ？」

自分のよくわからない思考に自分で突っ込みを入れていた俺は、巡音さんのその言葉で我に返った。

「いやだからさ、部活動を円滑に進める為には、次の作品を早く決定することが大事なんだよ。でもって、内容をちゃんと理解していない状態で、上演の準備なんてできないだろ。だからこの話し合いは大事なことなんだ。なんか、グミヤに上手く伝わってなかったみたいで、妙なことになっちゃったけど」

……実は、半分ほど自分でも何を言っているのかよくわからなかったりする。

「そういう話なら、演劇部の人たちとした方がいいと思うの。何もわたしじゃなくても……」

クオと同じようなことを巡音さんは言い出した。いや全然違うんだよ。他の奴に訊いたって、多分俺が求めているような答えは返って来ない。

「巡音さんじゃないと駄目なんだよ」

「どうして？」

「……どうしても」

我ながら、答えになってないな。とにかく、ここで逃げられたら困るんだ。

「あの、わたしさつき、お迎えを頼んじやったの。だからそんなに時間無いけど……それでもいい？」

巡音さんは、おどおどとそう言い出した。う……もっと早く教室を出りゃ良かった。クオの奴め。

「……いいよ」

短時間でも話せないよりましだ。

「じゃ、中庭でも行こうか」

あそこなら座れるしな。巡音さんが頷いたので、俺たちは連れ立って中庭へと移動した。そこにあるベンチに腰を下ろす。

「……話を整理しようか。イライザは愛がほしい。だから愛をくれない教授ではなくフレディを選んだ。けど、フレディはヘタレで、イライザを幸せにできるような甲斐性があるとは思えない。そういうことだったよね」

「……ええ」

巡音さんは頷いた。

「一方、教授はガキだから、面倒を見てくれる人が本当は必要。けど、優秀すぎる上にプライドが高いから、並のレベルの相手だとたき出されてしまう。イライザは頭がいいから、教授が相手でもやりこめることも可能で、教授の相手としては理想的。でも、教授は変人だから気持ちを素直に口に出せない」

俺がそういうふうにまとめると、巡音さんはまた考え込んだ。

「わたしは、イライザを選ぶのはフレディだと思う。魂を手に入れたガラテアは、もうピグマリオンのものじゃないのよ」

……そんなに教授が嫌なのか？ なんだかまたいらいらしてきた。

巡音さんは、頭上の空を懂れるような瞳で見上げている。

「だってもう自由なもの。どこへだって飛んでいけるわ」

うん？ あれ？ 何か気になるな……。

「けどさあ、やっぱりフレディじゃなくていいんじゃない？」

「どうしてそんなにフレディが嫌なの？」

「ヘタレの役立たずは嫌いなんだよ」

そう答えてから、俺はあることに気がついた。

「巡音さん……フレディと一緒にになったら幸せにはなれないよ」

「え……どうして？」

「巡音さん、フレディのことを『シンデレラ』における王子のようなものだっけ言ったよね。でも、作者の意図がそうなら……もつといい男にするんじゃない？ ヘタレの役立たずじゃなくってさ」

別にもっとできる設定でも問題はないはずなんだ。なのにあんな

ボンクラにしたってことは、浮わつた感情で相手を決めるなつて意味なんじゃないのか？

「で、でも……じゃあどうして、フレディを選ぶエンディングなの？」

「うーん、そう来たか……。けど、物語が常にハッピーエンドで終わるとは限らないよな。どこの映画監督だつて……。」

「一見ハッピーエンドに見えて、実のところそうではない……そういうラストを演出したかつたんじゃない？」

この戯曲、何気に毒気、強いもんな。その可能性も充分あるんじゃないだろうか。

とはいえ、俺としてもすっきりしないんだよな。『マイ・フェア・レディ』になった時、帰って来る結末にしたのは、その辺りが影響してるんじゃないだろうか。客が入らないと困るし。」

「けど、大掛かりな舞台になると、そういう毒気って受けられないだよな。だからミュージカルにする時に、結末を書き換えたんじゃないかな」

そこまで喋って、俺は、巡音さんが今にも泣きそうな表情をしていることに気がついた。

「あの……巡音さん？ 大丈夫？」

「ごめんなさい。イライザのこと考えていたら、のめりこみすぎちゃったみたい」

……何というか、すーっと物語の世界に入ってしまったんだな。

ちよつと羨ましいかもしれない。俺だつて本を読んだり映画を見たりして、その世界に没頭することはあるけれど、こんな風になることはない。

「結局、イライザに幸せは来ないのかなと思つていたら、悲しくなつてきちゃつて」

「うーん、そういう風に考えるのか。俺としては物語の結末が不幸でも仕方ないと思うけど……。」

「幸せ不幸せなんて気の持ちよう一つなんだからさ。フレディを選

ぶにせよ教授を選ぶにせよ、イライザの頑張り一つで案外何とかなるかもしれないよ。どうせそこから先は書かれてないんだし」

巡音さんを元気づけたくて、俺はそう口にした。実際のところ、フレディを選んで欲しくはなかったりするけど。これ以上巡音さんを落ち込ませたら、確実に泣かせてしまう。それだけは避けたい。

「……ありがとう」

ちよつとは元気になってくれたのかな？

「それで、結末のことだけ……」

俺が結末についてももう一度話をしようとした時だった。巡音さんの携帯が鳴り出した。げ……これって、多分……。

「ごめんなさい、携帯が鳴ってるの」

巡音さんはそう言っ、鞆から携帯を取り出した。表示を見たその表情が、さっと曇る。

「……お迎え？」

俺が訊くと、巡音さんはすまなそうな表情で頷いた。

「ええ。……ごめんなさい、話の途中なのに。でも、わたし、もう帰らないと」

色々と無理を言っているのはこっちだ。

「いや、いいよ。『ピグマリオン』のこととか、今日のこととか、色々助かった」

「あの……鏡音君、明日は時間ある？」

巡音さんの方からそう言い出したので、俺は驚いた。確かにまだ結論は出てないから、俺としてもまとめたいが……明日は学校は休みだ。

「巡音さん、明日は第二土曜だから、学校は休みだよ」

基本的に土曜も授業はあるが、第二土曜だけは休みののがうちの学校のシステムだ。巡音さんがしまったという表情になる。

「俺としては、外で会って話してもいいけど……巡音さんは大丈夫？」

明日は部活も無いしな。でも、巡音さんは俺と違って色々忙しい

んじゃないだろうか。

巡音さんは俺の前で、ためらいがちに頷いた。いいってことだよな。

「……どこで会うの？ また鏡音君の家とか？」

あ、まずい。姉貴は土曜は仕事だ。姉貴がいない時に、巡音さんを家にあげるわけにはいかない。

「ごめん、俺の家は無理。姉貴は土曜は仕事なんだよ。あれでも一応俺の保護者だから、姉貴の留守中に勝手にお客さん呼ぶわけにはいなくって」

姉貴のいない時に巡音さんを家にあげたなんてバレたら……下手をすると半殺しにされるな。

「鏡音君、柳影公園って知ってる？ 大きめの都立公園なんだけど」「知らないけど、調べられると思う。そんな大きい公園なら、簡単にわかるだろ」

ネット検索で大抵のことはわかる世の中だ。携帯で簡単に地図も見られるし。行くのはそんなに難しくないだろう。

「そこがいいの？」

「……ええ。その公園、ボート乗り場があるの。その前に朝の十時でいい？」

柳影公園のボート乗り場ね。

「わかった。じゃ、朝の十時にそこで待ってるよ」

「ありがとう。それじゃあ、わたしはもう行かなくちゃ」

それだけ言っただけで、巡音さんは去って行った。……なんか妙なことになったけど、明日も話せるんだからよしとするか。

巡音さんと別れた後、俺は部活に戻った。演劇部の連中はよってたかってあれこれ訊いてきたが、適当な返事をしばらく続けていると、うんざりしたのか何も訊いて来なくなった。意外と使えるな、この手。

やがて部活が終わり、着替えて帰り支度をしていると、クオが不機嫌そうに俺に話しかけてきた。

「なあ……なんであの子なんだよ」

「何の話だよ」

何が言いたいのかがよくわからず、俺はクオに尋ね返した。

「四月の公演のことだよ。なんで巡音さんが相談相手なんだ？」

なんだよ、俺の決断に文句があるのかお前は。

「他に文学に詳しい知り合いがないから」

「お前の姉さんは？」

あんなあ。俺の姉貴がどういう人間か知ってるだろうが、お前。

「姉貴に相談すると、プロレタリア文学とか、そういう変なのを薦めて来るんだよ。労働者が暴動を起こす話なんか、新人生歓迎公演でやれるわけないだろ」

「だからってラブコメか？」

結局不満はそこか。

「明るい話にしるってのがグミヤの注文なんだよ」

「俺がどうしたって？」

やりとりを聞きつけたのが、グミヤが割って入ってきた。

「グミヤ、クオに説明してくれよ。クオの奴、俺の決定に不満があるみたいで」

「四月の公演でやる演目の話か？俺もお前も文学には縁のない人間だろ。他の奴もそうだしさ。一番詳しいのがレンなんだから、レンに任せるのがベストなんだよ」

「だからって部外者に相談することは……」

「そのレンが、さっきの子を相談相手に選んだんだったんなら、その判断は尊重するもんだろ」

なんか回りくどくないか、その説明。クオはというと、未だに不満そうな表情をしている。

「……ラブコメってのが気に入らない」

そこまでラブコメを嫌わなくてもいいじゃないか。それに、『ピ

「グマリオン」は、一筋縄じゃいかない毒気のある話だったのに。

「クオ、不満に思ってたんのはお前一人ぐらいだぞ」

「グミヤ、お前はいいのかよっ！」

「文学作品読むなんて俺のガラじゃないしさあ。『マイ・フェア・レイディ』でいいよ」

駄目だこりゃ、とでも言いたげな表情で、クオはグミヤを見やっ
た。そこへグミヤが駆け寄ってくる。

「グミヤせんぱ〜いつ！ か〜え〜り〜ま〜しよ〜っ！」

そう叫ぶと、グミヤはグミヤの首に勢いよく飛びついた。……つく
づく、こいつのノリにはついていけない。

「じゃあな。ああ、そうだ。クオ、どうしても嫌だつて言うんなら、
一週間以内に『これがやりたい』っての、見つけて来い。そうした
らもう一度話し合いをやるから」

グミヤが首にしがみついたまんまの状態で、グミヤは部屋を出て行
った。……器用な奴だ。

……俺も帰るか。

君は特別な人（後書き）

最後のグミヤ、どういう状態で歩いているんだろう……。謎だ。

最初にストーリーラインを考えた時は、レンの行動がもっと暴走していたんですが、どう考えてもリンが怯えて話が続かなくなるよね、ということまで却下しました。

ミクの要望

リンちゃんと鏡音君は順調に仲良くなっているようで、わたしは今日、リンちゃんに「放課後に鏡音君の相談に乗りたいから、またミクちゃんと一緒にいたことにしてもらえる？」と頼まれてしまった。わたしの返事は「もちろんいいわよ」に決まっている。

ついでに何を相談するのも訊いてみたんだけど、鏡音君の相談というのは、演劇部の次回の公演についてのことだった。残念ながら、まだ色っぽい話題とまでは行かないみたい。とはいえ、こういう話が出るのは相手を信頼している証拠よね。

それにしても、毎回アライバイ工作が必要というのも考えものよね。どうしてリンちゃんのお父さんって、あんなに詮索したがるのかしら。普通じゃないと思うのよ。わたしの家に電話をかけて「本当に一緒にいたのか」と確認したがるなんてね。あ、もちろん、毎回つてわけじゃないわ。でも、不定期とはいえ突然訊いてくるから、リンちゃんはいつもお父さんの影に怯えている。

まあ、あのお父さんが訊いてきたところで、わたしの返事は決まっている。「はい、一緒にいました」よ。たとえリンちゃんが根回しを忘れたって、本当のことなんか言わないわ。仮にわたしを疑わしいと思ったところで、それ以上追求する材料なんて無いしね。ざまあみなさいっての。ついでにわたしのお父さんとお母さんにも、根回し済みだもんねっ。

さてと、あの二人をもっと仲良くさせるにはどうしたらいいかしらね……しばらくのところは、静観でもいいかな。こういう時は、下手につつかない方がいいだろうし。状況を観察しながら決めることにしましょ。

その日、部活を終えて帰宅してきたクオは、えらく不機嫌だった。

わたしは居間のテレビで、最近のお気に入り動物もののドキュメンタリーを見ていたんだけど、クオの様子があまりにもあれだったんで、思わずテレビの音量を下げてしまったぐらい。

「あ、お帰りクオ。……どうしたの？」

「……別に」

それが、クオの返事だった。ちよつと！ わたしが心配してるのにその返事はないでしょ？

「部活で何かあったの？」

わたしがそう訊くと、クオはわたしの隣に腰を下ろした。どうやら、話す気はあるみたい。話す気がなければ、クオはさつさと自分の部屋に行っちゃうしね。

「演劇部じゃさ、四月に新入生歓迎公演をやるんだよ。うちの部、今年から顧問が変わって、新しい顧問つてのが変な趣味で、『どうせやるなら格調高い文学作品をやれ』とか言い出しやがって」

その辺の話は知ってるわよ。クオから大分前にも聞いたし、今日はリンちゃんからも聞いた。

「で、うちの部でまともに文学作品を読んだことがあるのってレンぐらいで、それでグミヤが作品探してくれてレンに頼んで、そうしたらレンの奴、作品を決めるのを巡音さんに相談しちゃまって」

クオ……それ、機嫌が悪い理由にならないわよ。鏡音君がリンちゃんに相談したのって、わたしはいいことだと思っわ。

「それでレンの奴、新入生歓迎公演の作品を『マイ・フェア・レイデイ』に決めやがったんだよ」

クオは腹ただしそうにそう言った。あゝ、そういうことかあ……リンちゃん、『マイ・フェア・レイデイ』を薦めたのね。あれが文学だったとは知らなかったけど。

あの映画はわたしも大好き。オードリーは綺麗だし、音楽も明るくて楽しいし、ドレスも素敵だしね。競馬場で着ている白と黒のドレスが有名だけど、わたしはラストシーンでオードリーが着ているピンクのドレスがお気に入り。あんなの着てみたいな。

あ……でも、うーん……。

「『マイ・フェア・レディ』になったんだ……ちよつと残念かも」
わたしがそう言うと、クオはびっくりした顔になった。

「お前、残念って……」

そんなに驚かなくてもいいじゃないの。

「だって『マイ・フェア・レディ』って、男性キャラクターがあんまりかっこよくないでしょ？ 主人公の教授とその友人の大佐はいい年したおじさんだし、若いお坊ちゃんも頼りなさ過ぎてかっこよさとは無縁なんだもの」

この分だと、クオはまたかっこよくない役だろうなあ……。折角舞台上上がるんだから、かっこいい役をやってほしいのに。

「どうせならかっこいい男の人がでてくる舞台を見たいのよねえ……」

ヒーローでも好青年でもなんでもいいから、そういう役は無いのかしら。

「お前は演劇部の舞台に何を期待しているんだよ」

「クオがかっこいい役をやってくれること」

わたしがそう言うと、クオはぽかんとした表情になった。……どうしちゃったのかしら。

「クオだって、かっこいい役やりたいでしょ？」

「学祭の時はかっこよかっただろ」

クオはそんなことを言い出した。え……。クオの感覚だとあれがかっこいいんだ。わたしには理解できないなあ。

もし、この次もリンちゃんも鏡音君に相談されるようなら、「男役がかっこいい作品」を推薦してもらえよう、言ってみようつと。

ミクの要望（後書き）

男役がかっこいい戯曲といわれても、私がピンと来ません。戯曲
じゃないですけど、オペラとかでも大体テノールはヘタレだしねえ
……。

未知との遭遇

金曜日は姉貴が食事当番なので、俺は買い物はせずに自宅に帰った。十一月なので、もう辺りは真っ暗だ。これからどんどん暗くなるのが早くなるのかと思うと、毎年のこととはいえちよつと気が滅入る。

自宅の前まで来た辺りで、俺は家の前に誰か立っているのに気がついた。……ん？ 誰だあいつ。シルエツトからすると男みたいだが……。俺は電柱の影に隠れて、様子を伺った。

誰だかわからない奴は、俺の家の様子を伺っている。……まさかお向かいさんが言っていた不審者？ ひよつとして空き巣か何かか？ 空き巣だったら、今のうちに声をかければ逃げるはずだ。

「何やってんだ」

俺は電柱の影から姿を現して、男に声をかけた。男がぎよつとした表情になる。

「あ……えーと……君、誰？」

「それはこつちが訊きたい。人の家の前で何してんだよ」

「え？ いやその？」

男はうろたえながらも逃げようとしないう。空き巣のくせに。

「僕はただこの人の帰りを待つてるだけで……」

「はあ？ 誰のだ。俺の知り合いにこんな奴いないぞ。」

「俺んちだぞ！ そんな言い訳通用するか！」

俺が怒鳴ると、相手は飛び上がった。返答しだいによっては靴で殴ってやる。

「言い訳じゃなくて……あの、その……」

「レン君何騒いでるの？」

「あーっこいつよこいつ！ 私がみかけた不審者って！」

声を聞きつけたのか、お向かいの岩田さんとお隣の河合さんが出てきた。あ、やっぱり不審者ってこいつだったのか。

「岩田さん早く通報！」

「違います！ 僕は不審者じゃありません！ 僕はただメイコさんが帰ってくるのを待っていただけで……」

「まあ、メイコちゃんのストーカーですって！」

「嫌だわ、最近こつこつというの多いらしいわよ。警察に突き出しましよ
う」

逃げ出そうとする男の首ねっこを、俺は引つつかんだ。そのまま引きずり倒して地面に押さえつける。こつこつのはきっちりお灸を据えて置かないと。

「レン君そのまま捕まえといて。今警察呼ぶから」

「止めてくださいあいつ！」

「黙れストーカー！」

「……なんの騒ぎ？」

少し離れたところから聞こえてきた姉貴の声に、俺は驚いてそつちを見た。スーパールのビニール袋を提げた姉貴が立っている。どうやら、今帰って来たところらしい。

「メイコちゃん大変よ！ あなたへのストーカーが出たのよ！」

「あ、メイコさん！ 説明して！ 僕は不審者でもなんでもないと！」

同時に叫ぶ岩田さんと不審者。姉貴が小走りにこつちにやってきて、不審者を見て驚いた顔になる。

「……カイト君！？ どうしたの！？」

「姉貴、知り合い？」

「メイコ先生の弟さんよ。レン、離してあげて」

姉貴の雇い主の弟？ 余計怪しいじゃないか。

「姉貴、こいつストーカーだぜ。家の様子伺ってたんだから」

知り合いならますます危険だ。姉貴に変な真似される前に、警察に突き出そう。

「……というかカイト君、何しに来たの？」

「メイコさんに訊きたいことがあって……それで、家の前で帰りを

待ってたんだけど……メイコさん、この子は？」

「弟のレンよ」

「あ、メイコさん、弟がいたんだね。どうも、初めまして。始音カイトです」

のほほんとした口調で、カイトとやはらはそんなことを言った。状況わかってんのかこいつは。

「黙れストーカー」

「僕はストーカーじゃないっ！」

締め上げると、奴はストーカーの癖に文句を言い出した。

「じゃなんで俺の家の前うるうるしていたんだよ！」

「だから、メイコさんの帰りを待ってたんだってば」

……理由になってないぞ。

「姉貴に用があるんなら職場に行けば済む話だろ！」

お前の姉さんが姉貴のボスなんだから。

「マイト兄さんに会いたくなかったんだよ！」

「カイト君……姉さんって呼ばないと、メイコ先生怒ると思うわ」

姉貴……突っ込むところはそこかよ。

「生まれてこの方ずっと兄だと思っていた人に、突然『姉になりました』なんて言われたって、受け入れられないんだっ！」

「そんなことを言われてもねえ。メイコ先生はメイコ先生なんだし」

「メイコさんっ！ 君だってそこにいるレン君が、ある日突然妹になって帰って来たら対応に困ると思うよ」

もうちよつとまじな例えは無いのかあんたは。

「え……男でも女でも、レンはレンよ」

姉貴も乗っからないでくれ！

「とにかく……ちゃんと話をしましょう」

言いながら、姉貴は携帯を取り出した。どこに連絡する気なんだ？

「姉貴、携帯なんかどうするの？」

「メイコ先生に連絡しようと思って」

姉貴の言葉に、ストーカーカイトの顔が引きつった。

「そ、それはやめて！ マイト兄さんの職場の子につきまತ್ತたなんて思われたら、僕、マイト兄さんに殺されるよ！」
「だからって、このままってわけにはいかないでしょ？ あ、もしもしメイコです。メイコ先生、実は今、帰って来たら私の弟がカイト君を取り押さえていて、なんでもうちの様子を伺っていたって言うんです。ご近所さんまで来ちゃって今大騒ぎで……え？ こつちに来る？ 道分かります？」

三十分ほどで、メイコ先生とやらは自家用車でやってきた。その間、俺と姉貴は家の前で立っていた。だってこの、カイトとかいう奴を家にあげるのは俺が嫌だったし。岩田さんと河合さんにはわけを説明して、それぞれの家に戻ってもらった。何かあったら呼んでねとは言われている。

「めーちゃん！ ごめんなさいね、バカな弟が迷惑かけて」
車から降りるやいなや、メイコ先生とやらはそう言って、カイトの頭を一発殴った。

「痛っ！ マイト兄さん、何するんだよ！」
「お黙りっ！ それにあたしはマイト兄さんじゃなくてメイコ姉さん！ 何度言えばわかるの、バカイト！」

……なんかすごいな。カイトは恨めしそうな表情で、メイコ先生を見上げている。
「このせいでめーちゃんが辞めたりしたら、どうしてくれるのよ！？」
あたしのノリにつきあってくれるパタンナーなんて、なかなか見つからないんだからね」

どういう理屈なんだろう。姉貴は苦笑している。
「大体めーちゃんに話があるんなら、あたしのアトリエに来ればいいだけの話じゃないの。めーちゃんの家の前でうるうるするなんて、変質者だと言っているようなものだよ」

それに関してはそのとおりだ。格好の割に だってこの人、す

「ごい派手な格好してるんだよ。ついでに言うなら、メイクもケバい
中身はまともなんだな。」

「叱られたカイトの方はしゅんとしている。……幾つだ、あんた。
どう見ても俺より年上のはずなんだが……。」

「ただ僕は、メイコさんにどうしても訊きたいことがあって……」
「何よ!？」

「マイコ先生はカイトに詰め寄った。カイトがしどろもどろになる。
「い、いや、マイト兄さんの前で話すのはちょっと……」
「姉さんって呼びなさい!」

「どうやら、そこは譲れないポイントらしい。俺にはよくわからないけど。」

「あの……寒いんで、良かったら家に入りませんか?」

「これは姉貴である。寒いのは確かなんだが、マイコ先生はともかく、このカイトとかいう奴まで連れて家にあがる気が?」

「いえ、めーちゃん。そういうわけにはいかないわ……でも、ここで立ちっぱなしってのもないわね。……あなたたち、夕ごはんは?」

「まだです。帰ってから作る予定だったんですけど、レンとカイト君がもめていたんで、それどころじゃなくて……」

「じゃあみんなどこかのお店にでも食べに行きましょうか。お詫びに今日の払いはこっちが持つから」

「先生、そんな……悪いですよ。私とレンの分は払いますから」
「俺まで勘定に入ってるのか。なんか妙なことになるってきたな。」

「いいっていいって。半分はバカイトに払わせるから」

「マイト兄さん! 僕、貧乏学生だよ!？」

「カイトの叫びをマイコ先生は綺麗に無視して、結構高いヒールで弟の足を踏んだ。カイトがぎゃつと悲鳴をあげている。……怖っ。」

「めーちゃん、この辺で美味しいお店とかある?」

「洋食屋さんがありますけど……ちょっとレトロな感じなお店なんです」

「あらいいじゃない。そこにしましょう」

というわけで、何故か洋食屋まで移動して、全員で食事をするこ
とになってしまった。あ、さすがに一度家に入って着替えたぞ。制
服のまままで食事に行きたくない。

「さてと……カイト、とつとと白状しなさい。なんでめーちゃんの
家の前をうろろしていたの？」

テーブルに座り、ウェイトレスに注文を告げると、マイコ先生は
怖い口調でカイトに詰め寄った。カイトの方は完全に縮み上がって
いる。そんなにマイコ先生が怖いのか。

「マイコ先生、そんなに睨んだらカイト君が怯えちゃいますよ」

姉貴の言葉に、マイコ先生は何故かため息をついた。

「女の子に変な真似するような弟に育てた憶えはなかったのに、な
んでこうなったのか……」

「マイト兄さ……いや、姉さん。だから僕は、別に変な真似をして
いたわけじゃなくて、めーちゃ……マイコさんに訊きたいことがあ
ったから、帰って来るのを待っていただけなんだ」

「じゃ、なんで何度も目撃されてんの」

思わず俺は突っ込んでしまった。マイコ先生が、ぎろつとカイト
を睨む。

「あんた、やっぱりめーちゃんに対してストーカー行為を……！」

「そんなんじゃないっ！ なんとというか、デリケートな話題だから、
訊こう訊こうと思いつつも、後一步が踏み出せなかったっただけ
で……」

なんなんだ、こいつは。ヘタレか？ ヘタレでストーカー気味っ
て……最悪だ。

「言い訳はいいからとつとと話しなさいっ！」

「だ、だから……見ちゃったんだよっ！ この前の日曜日につ！」

「日曜……？ 日曜なら、めーちゃんはあたしと一緒に新宿二丁目
にいたわよ。それが何か？ めーちゃんとあたしが飲みに行くのな

んで、変なことでもなんでもないでしょうが」

あ、だから姉貴は帰宅が遅かったのか。ボスのお供で飲み会ね……大変なんだな。

「新宿二丁目ってことは夜だよな。僕が見たのは昼間の話なんだよ。メイコさんが……その……女の子と一緒にラブホテルから出てくるところを見かけちゃって……」

……女の子と一緒にラブホテルから出てきたあ！？ そういや確か月曜の朝、家計簿にラブホテルのレシートが挟んであったが……。「姉貴まさか……」

俺は思わず姉貴を見た。姉貴は女子高の出だし、高校時代はバレンタインデーにたくさんチョコレートもらってたけど、まさか本当にそういう趣味とは……。

「メイコさんっ！ もしかしてメイコさんもそっち系の人なの！？ マイト兄さんと仲良くやれるのは同類だから！？」

「ちよつとバカイト、そっち系ってどういう言い草！？ それに、めーちゃんの性的嗜好がどうであれ、それはあんたがどうこう言うことじゃないわっ！」

姉貴はぼかんとしていたが、やがて得心がいった表情になって笑い出した。

「やだもっ！ カイト君ってばそんなこと気にしてたの！？」

「そんなことってなんだよそんなことって！ 僕にとっては大事なことなんだよ！」

どう大事なんだよ、バカイト。あ……移っちまった。まあいいかバカイトで。

「というか姉貴、女の子とラブホテルに行ったの？」

「行ったけど、色っぽい話じゃないから。単に昔の友達と会ってたら、その子が途中で気分悪くなって今にも倒れそうになっちゃったのよ。しばらく横になってれば治るっていうから、休憩取るためにラブホテルに入ったってだけ」

うわ、本当に色気の無い話だ。

「なんでラブホテルに？」

「だってあそこならベッドがあるからゆっくり休めるし、時間単位だからその日のうちにチェックアウトできるでしょ。個室だし防音だし、受付に人もいないから気楽だし」

姉貴は軽い口調で説明した。言われてみれば納得がいくが……。やっぱりそれでラブホテルに入るってのは、なんか間違ってる気がするなあ。

「じゃ、じゃあ……ただの友達なんだね？」

バカイトが妙に必死な表情で、姉貴にそんなことを訊いている。

「やーね、私はストリートよ」

「そ、そうなんだ……良かった……」

おい、なんでお前がほつとしてるんだよ。

「ああ、そうか。あの子ね……あのとんでもない格好の子」

これはマイコ先生だ。……うん？

「そうですよ」

「そう言えばめーちゃん、例の話はどうなった？」

「それが、なかなか踏ん切りがつかないみたいで……いい話だし、

私も言葉を尽くして説得してるんですけど……」

姉貴とマイコ先生は何やら話を始めた。モデルがどうの、サイズがどうの、という言葉が出てくる辺り、仕事に関する話らしい。

ちようどそこへ頼んだ料理が運ばれてきた。話を適当に聞き流しながら 姉貴の仕事に関する話を、俺が真面目に聞いてもしようがない 食事をする。

大体半分ぐらい食べ終えた時だった。不意に、姉貴が俺にこう訊いてきた。

「あ、そうだ。レン、演劇部の次の公演、結局『マイ・フェア・レイディ』に決まったの？」

なんだよ急に。

「それになったよ。でも姉貴、正確には、原作の『ピグマリオン』だから。ミュージカルをやるのは無理だし」

「『マイ・フェア・レディ』！ 素敵よねあの映画」

突然、マイコ先生が割って入った。そういや姉貴が、マイコ先生はあの時代の映画が好きだって言ってたな。

「オードリーは永遠の銀幕の妖精よ。誰が何と言おうとこれだけは譲れないわ」

うつとりした表情で、マイコ先生はそんなことを言った。えーと……。どう返事すればいいんだこついう場合……。

「……マイト兄さん、レン君が返事に困ってるよ」

あ、初めてカイトがまともなことを言ってるのを聞いたぞ。

「姉さんと呼びなさい、バカイト」

カイトがマイコ先生をむっとした表情で見ている。マイコ先生の方は涼しい表情だ。

「ところでレン君、衣装はどうするつもりなの？」

衣装ねえ……。そう言えば考えてなかった。ま、適当なのでいいんじゃないだろうか。

「まだ演目が決まったばかりで配役も決めて無くって、だから衣装の話までは出てません。男性はスーツで何とかして、女性は適当にパーティードレスでも借りてくるとか……」

映画のようにはいかないよ。高校生の演劇なんだから。

「そんなもつたい無いわ！」

「いやでも、予算の都合もありますし、俺たち高校生ですし……」
「何ならドレス、作ってあげるわよ」

……へ？ 俺は言われた言葉が信じられなかった。作ってあげるって……。いいのをおい。この人本職のファッションデザイナーだろ？ 高いんじゃないのか？

「先生、仕事たくさん入ってましたよね？ そんなことしてる暇、あるんですか？」

姉貴が訊いている。

「ああ、めーちゃん……。それが最近、あたしスランプ気味なのよ。同じようなのばかりデザインしていたから、飽きちゃったんだと思

うわ。だから何か違うものをやって、感性を取り戻したいのよね」
「どういう理屈なんだろう。姉貴はため息をついている。」

「レン……どうする？」
「いや、どうするって言われたって……俺一人で決めるわけには行かないよ」

さすがに演劇部の連中と話し合わないと。着るのは俺じゃないんだから。」

「それもそうよねえ……。レン、話はどこまで進行してるの？」

「どこまでも何も、演目が決まったところだよ。これからみんなに話を見てもらって、台本に手を入れるかどうかを考えて、配役を決めて」

あのままだとちょっと長いよなあ……。カットできそうなところはカットしよう。ラストもできれば変えたいし。映画があるから、映画の台詞を参考にすればいいか。その前にもう一度巡音さんと相談して……。

「公演は四月だし、衣装はそれまでにできればいいのよね？」

「まあ、そうだけだ」

「じゃあ、必要かどうかを、十二月の終わりまでに決めてちょうだい。OKなら、冬休み中にドレスの採寸をするから」

ちよつとちよつと姉貴！ 姉貴が決めていいのかよっ！

「それって姉貴が決めることじゃないんじゃない……」

「スケジュールの調整はめーちゃんに任せてるのよ」

これはマイコ先生だ。あの……姉貴がそつちへ就職したのって、確か去年のはず……。

「マイト兄さん……仕事のスケジュールは自分で調整するもんだと思っよ？」

「あたしそういうの苦手なのよねえ。それとバカイト、姉さんと呼べと何度言ったらわかるの？」

カイトは頭を抱えてため息をついている。さすがの俺もちよつとだけ同情しなくなった。

「あの……いいんですか？ 俺たちただの高校の演劇部ですけど」
「そこが面白いのよ。なんか逆に斬新なアイデアとかが湧いてくれ
そうで」

……そうですか。こういう人の発想は、俺にはよくわからん。

「だから、場合によってはデザインを他所に流用するかもしれない
けど、構わないでしょ？」

「それはもちろん……」

作ってもらえるだけで滅茶苦茶有難いもんなあ。それ以上の贅沢
なんて言えないよ。演劇部の連中もね。

というわけで、何だかよくわからないうちに、姉貴の雇い主のフ
アッションデザイナーが、女性キャラクターのドレスを製作してく
れる、という話がまとまってしまったのだった。

未知との遭遇（後書き）

クリプトン家の中でカイトだけ出番が無いのもどうかと思ったんで、出すことにしたんですが……。この出番だと出て来ない方が良かったかも（汗）

折れた翼であの子は歌う

金曜の夜、なんだかよくわからない食事会の後で帰宅した俺は、自室のPCで柳影公園の場所を調べた。そこそこ距離があるな。巡音さんはよく知ってるみたいだから、彼女の家からすると行きやすいんだろう。

翌日、普通の時間に起きだした俺は、朝食を取って身支度をするのと、ポケットに財布と家の鍵と携帯を突っ込んで、家を出た。姉貴は仕事なので既に家にいない。

電車に乗って、目的地に向かう。公園までは道に迷うこともなくあっさり辿りついた。ボート乗り場つてのは……あ、あれか。時計を見る。九時五十五分。ちょうどいい時間に着いたな。このまま待つてよう。

俺はボート乗り場の前で、巡音さんが来るのを待った。……ところろが、十時になっても、肝心の本人が現れない。あれ、おかしいな？ 巡音さんて、割ときつちりしてる性格だと思ったんだけど。

まあ、五分ぐらいの遅刻は遅刻に入らないよな。俺はそのまま待った。だけど、十分が経過しても、やっぱり巡音さんは現れない。念のために携帯をチェックしてみたが、着信も来ていない。

うーん……まさかとは思うが、約束を忘れたんだろうか？ それとも、何か不本意な事態でも発生したとか？ 連絡してみようか。でも、巡音さんの親って異常にうるさいんだっけ。

俺は携帯をしばらく眺めた後、仕舞いこんでもうしばらくだけ待つてみることにした。かけてみるのは最後の手段にしよう。

俺は水鳥が泳いでいる公園の池を眺めながら、そのまま待ち続けた。このまま現れなかったら、俺がマヌケだよな……と思いつながら。そうして、どれくら経過したんだろうか。

「う……ごめんなさいっ！ 遅刻、しちゃって……」

聞こえてきた声に振り向く。顔を真っ赤にした巡音さんが、そこ

にはいた。それだけ言うと、後はせいぜいと荒い息を吐いている。どうやら、ここまで走ってきたらしい。

「あ……巡音さん」

寝坊でもしたんだろうか……。うわ、髪がぐしゃぐしゃだよ。いつもきちんとしているのに。……でも、なんだか可愛いな。

「髪がすごいことになってるけど……」

俺は何気なく手を伸ばして、巡音さんの顔にかかっている髪をかきあげた。弾みで、俺の指が巡音さんの頬に触れる。瞬間、巡音さんが今まで以上に赤くなって硬直した。

「え……」

巡音さんの瞳が、じっとこっちを見ている。その瞳から視線を逸らすことができない。俺たちはしばらく、そうやってみつめあっていた。

「ああああの……本当に、ごめんなさい……」

巡音さんは赤くなったままで、ようやく口を開いた。そのまま視線を伏せてしまう。

「……寝坊でもしたの？」

俺の問いに、巡音さんが頷く。……なんだか巡音さんのイメージとあわない気がするんだが。

「夕べ夜更かしでもした？」

「え……ええ。そんな感じ……」

口ごもりながらそう答える巡音さん。様子がおかしいような気がする。

「なんかあったの？」

俺はなるべく軽い口調で訊いてみた。

「あつたっていうか、その……」

巡音さんは下を向いてしまった。……話したくないようだ。でも、なんだか気になるな……。俺は辺りを見回した。少し離れたところに、ベンチがある。

「巡音さん、あつちにベンチがあるから座って話そうか」

頷いてくれたので、俺たちは連れ立って、池の向かいにあるベンチまで移動した。

ベンチに腰を下ろすと、巡音さんは無言で目の前の池に視線を向けた。少しぼんやりとしている。……大丈夫だろうか。

「巡音さんって、この公園にはよく来るの？」

俺は、なるべく無難そうな話題から振ってみることにした。

「……小さい頃にはね。最近はあるまり……わたしも忙しくて」

淡々とそう答えて、巡音さんはまた池をみつめていた。その瞳から、涙が一筋零れ落ちたのに気づいて、俺は愕然とした。

「巡音さん……」

「……平気だから」

全然平気そうには見えない表情で、巡音さんはそう言った。……参ったな。

「あ、あのさ……なんか悩みがあるんだったら、俺でよければ話を聞くよ？」

このままにはしておけないよ。俺にそう言われた巡音さんは瞳を伏せ、考え込んだ。

「あの……」

やがて、巡音さんはおずおずと口を開いた。

「うん？」

「あのね、これから話すこと、誰にも話さないでもらえる？ ミクちゃんにも話してないことなの。だから、鏡音君のお姉さんにも、ミクオ君にも、話さないでいてほしいの」

意を決した口調で、巡音さんはそう言った。初音さんにも話さないって……。

……つまり、それだけ信頼されているということだ。

「わかった。誰にも言わないよ」

「わたしね……前にも話したと思うけど、姉が二人いるの。上の姉がルカ姉さん。わたしより七つ上で、何でもできる完璧な人なんだけど……何ていうか……完璧すぎるのよ」

七つ上つてことは、俺の姉貴より一つ上か。完璧すぎる？

「どういうこと？」

「えーとね……わたしたちが今通っている高校に、ルカ姉さんはやっぱり中学の頃から通っていて、中高六年の間、ずっと学年トップの成績を取り続けていたの」

ちよつと待て。俺たちの通っている学校で、中高六年間トップの成績って……桁外れだな。ランクの高い進学校だから、トップを維持するのはかなり大変だ。俺だってこれでちゃんと勉強はしてるんだよ。

「それはただ単に勉強が得意なだけなんじゃ……」

「ルカ姉さんはね、絶対に間違つたことはしない人なの。お作法も立ち居振る舞いも完璧で、どこに出しても褒められる人なのよ。言いつけはいつもきちんとして、寄り道なんてしないし、門限もしつかり守るし、服装だつて一筋の乱れも無いし……」

俺は自分の姉貴が、そんな人間だつたらどうだつたかと想像してみた。成績がものすごく優秀で、いつも真面目に机に向かっていて、家事をパーフェクトにこなしていて、なんでもちゃんとやれる姉貴だ。……まず間違いなく息が詰まるな、姉貴がそんな人間だつたら。「寝転がってテレビ見ながらおせんべい齧つてたりとかは……」

「そんなお行儀の悪いこと、絶対にしないわ」

俺は生まれて初めて、自分の姉貴が適度にいい加減な人間であることを感謝したくなった。あ、言うておくけど、仕事とかはちゃんとやってるよ。ただまあ、寝転がってテレビ見ながらおせんべい齧るのはよくやってる。仕事が忙しい時期だと家事も手抜きになるし……ま、俺もただけどね。うるさいな、いいんだよ。綿埃程度で人間死んだりしないって。

「わたしの記憶の中のルカ姉さんって、いつも机に向かっているの。お勉強をしているか、本を読んでいるかのどつちかで。その本も、小説とかじゃなくて、何かの専門書みたいなの難しい本ばかりだし……」

「そのお姉さん、趣味は？」

「……多分、無いわ。趣味だけじゃない。わたし、ルカ姉さんが友達と一緒に出かけるところも、友達が遊びに来たところも、見たことがないの。出された食事はなんでも残さず食べるけど、ご飯の好き嫌いを言ったこともないわ。着る物はファッション雑誌のコーディネートそのままって感じだし」

い、異常だ……そのお姉さん、本当に人間か？ 姉貴はちゃんと友達がいるし、今はともかく、学生の頃は結構友達が遊びに来ていた。さすがに食事を残すような真似はしないが、好物はちゃんとある。着る物にはこだわりがあつて、結構うるさい。

「人間というよりロボットなんじゃ……」

俺は思わずそう口にしてしまい、それからはっとなった。以前、巡音さんは「好きや嫌いという感情のない人間って想像できる？」と訊いてきた。あれは、そのお姉さんのことだったんだ。

確かにロボットだよなあ。情熱も無ければ魂も無く、だ。……でも、作られたロボットじゃなくて、巡音さんの血の繋がったお姉さんなわけで。そりゃ、巡音さんじゃなくても頭が痛いよ。

「確かにちよつとそんな感じがするの。……完全にロボットってわけでもないみたいだけど」

巡音さんは沈んだ口調でそう言った。う、うーん……俺にはかける言葉がみつからない。そんなハードなお姉さんがいるとは思わなかった。

でもポイントは、お姉さんのことじゃなくて、巡音さんのことだよ。

「それで、お姉さんが異常なのはわかったけど……巡音さんは何を悩んでるの？」

「……わたし、ルカ姉さんが何を考えているのかが知りたいの。だから、それを訊いてみようとしたんだけど……何だか全然ちゃんとした話にならなくて」

どうも状況がわかりにくいなあ。

「どういう感じ？」

「わたし、ルカ姉さんになったつもりで返事するから、鏡音君、何か話しかけてみて」

巡音さんはそんな提案をしてきた。何か話しかけてって……何でもいいのかな。俺は辺りを見回した。景色についてでも話してみよう。

「うーん……じゃあ、木の葉が赤くなってるね」

「……そうね」

淡々と返事する巡音さん。……うわ。

「紅葉は好き？」

「……嫌いじゃないわ」

「そこに鳥がいるよ」

「……そうね」

「多分キジバトだと思うけど……」

「……キジバトなんだ」

「キジバトって首のところ縞模様があるんだよ。あれで見分けがつくんだ」

「……そう」

「あの……俺と話すのそんなに嫌？」

「……いいえ」

「じゃ、なんでさっきから返事全部一言なの」

「……さあ」

「じゃ、俺と話していて楽しい？」

「……」

げ……全然話が繋がらないぞ。ああ、なるほどね。こりゃ本当にロボットだ。

あれ？ でも考えてみたら、巡音さんもこんな感じになる時があったよな。ここまでではないけど、近いっちゃん近い。いつの間にかそういう対応はしなくなっていたから、以前のことは忘れかけてたけど。だって、嫌なことよりいいことの方が、思い返してて楽しい

しさ。

「ストップ。シミュレーションはもういいよ。なんとなくわかったから」

これ以上、ロボットの真似をしている巡音さんと話すと疲れそう
だ。

「本人を見ないでこういうことを言うのは、本当は良くないんだけど……そのお姉さん、多分、何も考えてないと思う」

学年トップを維持していたってことは、頭自体は良いんだろうなあ。おそらく、機械的に何も考えずに勉強していたんだろう。

「やっぱり……そうなのかな……」

巡音さんは淋しそうにそう言った。……多分、巡音さんにも答えはわかっていたんだろう。でも、自分の姉がそんな状態だったのを、認識するのが嫌だったんだろうな。それは仕方がないかもしれない。

あ、でも……。

「あの……巡音さん、ちょっといい？」

俺は気になっていることを訊いてみることにした。

「あ、うん。何？」

「多分これ、ひどく失礼な質問だと思うんだけど……巡音さんも、時々、さつきみたいな状態になってたことがあったんだよ。自覚があるのかどうかはわからないし、最近はそんな対応しないから、言わない方がいいような気はするんだけど……やっぱり気になって……」

つまり巡音さんは何も考えずに喋っていたんだよ、あの頃は。

「……わかってる。わたし、考えるってことから逃げてた」

あ……気づいてたんだ。

「自分の考えを持って、それを否定されるのが怖かったの。私自身が否定されているみたいだし……」

おいおい、それは幾らなんでもネガティブすぎるぞ……。あ、でも、それにはもう気づいているし、自分の考えを持って話もするようになったんだよな。

「でも、結局、自分の考えとか意見を持つようになったんだよね？
きっかけは？」

それがわかれば、お姉さんもどうにかできるかも。

「多分、鏡音君がわたしの問題点を指摘したからだと思う」

「え？」

意外な答えが返ってきた。俺がきっかけなの？

「鏡音君、わたしに言ったわよね。『自分の意見ってものがないの？』って。あれ、そのとおりで、わたし何も言えなくて、シヨックでわたし、頭の中が真っ白になって……でもその後で気がついたの。わたし、考えることから逃げていたんだって」

あ……確かに言った。あの時の巡音さんは、まさにロボット状態がひどくて、俺は結局頭に来て、きつい口調でそう言っちゃったんだっけ……。その直後に巡音さんが倒れてしまったから、俺としては言ったことを悔やむはめになったが……どうやら、一種のシヨック療法になっていたらしい。

「同じことをお姉さんにやってみたら？」

「もうやってみたわ。でも……駄目だったの」

気落ちした表情で、巡音さんは肩を落とした。沈んだ様子を見ると、俺としても胸が苦しくなってくる。かといって、気軽に「元気出せ」とも言えないしな……。

「……巡音さん、もう一人のお姉さんのこと、訊いてもいい？」

確かもう一人お姉さんいたよな。姉貴の後輩だったって人。こっちのお姉さんのことも、巡音さんはあんまり話したくないみたいだけど……。とはいえ、姉貴が懐かしんでるぐらいだから、ロボットってことはないだろう。

巡音さんは頷いた。訊いてもいいのか。

「もう一人のお姉さん……ハクさんだっけ。その人はロボットじゃないんだよね？ ロボットだったら、俺の姉貴と話なんかできないだろうし……」

ロボット状態の人間を前にして、姉貴が黙っていられるとは思え

ない。絶対修羅場になる。

「ハク姉さんはロボットじゃないけど……三年前から部屋に引きこもって出て来ないの。わたしが部屋に行けば入れてくれるけど、他の家族は無理。絶対に入れようとしないし、話もしていないわ」

部屋に引きこもってるって……。巡音さんが話しながらなかった理由はそれか。しかし、上の姉はロボット、下の姉は引きこもりって……。何をどうしたらそんな状態になるんだ？

「何だってまたそのお姉さんは引きこもりを？」

「……それがわからないの。ハク姉さん、何も話してくれないし」
巡音さんは暗い表情で首を横に振った。

「でも……もしかしたら、わたしのせいかも。」

おいおい……幾らなんでもそれはないよ。考えすぎだって。
「巡音さんのせいってどういうこと？」

「うちの学校、お父さんの母校でもあるの。お父さんはわたしたちを全員、あそこに行かせたかったんだけど……ハク姉さんだけ、受験に失敗してしまったの」

あ……だから巡音さんは、ユイが落ちたって聞いた時に暗い表情してたのか。お姉さんが落ちた時のことを思い出しちゃったんだな
「わたしとハク姉さんは四つ離れているから、ハク姉さんが高校受験に失敗した次の年、わたしは中学受験することになって……わたしの方は受かったのよ。ハク姉さん……もしかしたら、それがストレスになったのかも……」

えーと……それは要するに「自分より優秀な妹は欲しくない」ってことか？ あったよな、『エンダーのゲーム』にそういう台詞が。あれは両方男だから正確には妹じゃなくて弟だし、ピーターが一番上だけど。参ったな……どうなってんだ。というか、優秀に生まれつくのなんて、その人のせいでもなんでもないじゃないか。それにあの本読んだら、大抵はピーターの方に腹を立てるぞ。ま、それ以前にピーターは性格破綻者だけだ。

あれ？ でも待てよ。何か変だ……。

「巡音さん、お姉さんが引きこもったのは三年前からって言ったよね？」

「ええ。三年前の冬だったわ」

「じゃ、巡音さんは中学二年だよな？」

「ええ」

「じゃあ、原因は巡音さんじゃないよ。時間が開きすぎて。巡音さんが合格したことが原因なら、もっと早く引きこもってると思う。一年以上も経ってから、それが原因で引きこもるなんておかしいよ。」

「姉貴の話だと、高校生活自体は結構楽しんでたみたいだし、受験の失敗が引きこもりの原因とは考えにくいよ」

楽しんでなかったらバドミントン部なんか、とっくにやめてるよな。姉貴の話だと結構ハードだそうだし。」

「え……そうなの？」

「姉貴はこの手の話で嘘つかないよ。巡音さんのお姉さんより二年上だから、引きこもった原因までは知らないだろうけど」

巡音さんは、多少ほっとした表情になった。とりあえず、気がかりの一つは消えたか。……大本の問題がまだ残ってるけどな。

でもこれ、巡音さんが一人で悩んでも仕方がないんじゃないかなあ。俺だったら、姉貴がこんな状態になって、話しても話しても埒が明かないってことになったら、多分諦めて放っておくだろう。……

まあ、そんな状態になる姉貴ってのは、想像がつかなかったりするが。

俺は巡音さんを見た。やっぱり思いつめているみたいだな。言葉を選ばないと。向こうは俺と違って繊細にできている。

「あのさ……巡音さん、お姉さんのことは、あんまり悩んでもしょうがないと思うよ。兄や姉って立場の人は、弟や妹に弱みを見せたくないって思うみたいなんだよね。俺の姉貴だって、あんまりそういうこと言わないしさ」

それ以前に姉貴に悩みはあるのだろうか。……まあいいや、嘘も

方便だ。

「でも、鏡音君のお姉さんはわたしの姉とは全然違うわ。仕事もしてるし、鏡音君と毎日話もしてるんでしょ？ わたし一週間前にハク姉さんと揉めちゃったんだけど、それからずっとハク姉さんとは話してないの。ルカ姉さんとは、昨日話したんだけど全然埒が明かないし」

それが、巡音さんの答えだった。これじゃ堂々巡りだ。どうするか……もういつそのこと姉貴に頼み込んで、ハクさんって人と話をしてもらおうか。片方だけでもカタがつけば、巡音さんだってもう少し落ちつけるかもしれない。

「あの……巡音さん、さつき『誰にも言わない』って約束しちゃっけど、ハクさんって人のことを、姉貴に話したら駄目かな？ 実は姉貴、ずっと心配してるんだよ。何かあったんじゃないかって」

……嘘だけどさ。ま、後輩が引きこもってるって話聞いて、黙ってる人じゃないよ。俺の姉貴はね。だからいいんだよ。

「この前に巡音さんが家に来た時の受け答えで、『なんかおかしいな』って勘づいたみたいで……あれで結構勘がいいんだよ。姉貴はハクさんの先輩なわけだから、無関係じゃないしさ」

巡音さんはしばらく考え込んでいたが、やがて頷いた。……よし、じゃあ、後で姉貴に話しておこう。巡音さんと会ってたことをあれこれ言われたら……いや、会ってたなんて言う必要はないか。昨日聞いたことにおけばいいんだ。昨日はあのカイトとやらのせいだ、そんな話す暇無かったって言えば、姉貴も疑わないだろう。

俺があれこれ考えていると、いきなり右の肩にずしっと重みがかかった。……何だ？ 見ると、巡音さんが俺の肩にもたれかかって瞳を閉じている。

「……巡音さん？」

返事はなかった。

「巡音さん？ 巡音さんってば」

やっぱり返事が無い。……眠ってしまったようだ。ここは公園な

んだが……こんなところで無防備に寝ちゃっていいんだろうか。十一月の割に今日は暖かいけど、天気が崩れるかもしれないし……起こした方がいいような。

そう思ったのだが、俺は巡音さんを起こす気になれなかった。今日寝坊したっていうのも、ひよっとしたらお姉さんのことで悩みすぎて眠れなかったのが原因かもしれないし。少し寝かせてあげた方がいいのかもしれない。

……なんていうか、本当に無防備だな。ちょっと手を伸ばして、頬に触れてみる。……柔らかい。そっと指を滑らせてみたい気もするけれど、そんなことをしたら起きちゃうだろうな。……もうよそう。

よそうと思ったのに、なんで俺はやっているんだ！？ いい加減にしるよ。相手は眠ってるんだぞ。眠ってる女の子にちよっかい出すなんて……。

俺の頭に、いつぞやの夢が甦った。巡音さんが眠り姫になっていて、キスしたら目を覚ました夢だ。だから、なんでそんなこと思いつくんだよ。これは夢じゃなくて現実なんだから、巡音さんにキスしたら……まあ、起きはするだろうな……そして俺は築き上げた信頼を失うだろう。巡音さんは以前、ガラスに閉じ込められるとどうのと言っていたが、むしろ巡音さん自身がガラス細工だ。

……このまま巡音さんの寝顔を見ていたら、また妙なことを考えてしまいそうだ。俺はため息をついて、目の前に広がる公園の池に視線を向けた。水鳥が水面を漂っている。……あーあ、のんきそうだな、あいつら。

折れた翼である子は歌う（後書き）

肩にもたれての居眠りの構図を想像すると、東京メトロのマナーポスターが真つ先に頭に浮かぶんですが……。あのポスター色んな意味でインパクトありすぎました。

どんなポスターか知りたい方はこちら。九月のポスターです。

<http://www.tokymetro.jp/corporate/csr/society/manner/index.html>

全て同じというわけではないけれど

俺の肩にもたれて眠っていた巡音さんが、不意に身動きした。…
あ、目が覚めたのかな？ 見守っていると、巡音さんが目を開けて身体を起こした。二、三度まばたきをして、ぼんやりと辺りを見ている。寝起きで頭がはつきりしていないらしい。

「あ……巡音さん、起きた？」

声をかけると、向こうは弾かれたみたいにこっちを見た。あ……真っ赤になっちゃってる。

「ああああの、わたし……」

「俺の肩を枕にして気持ち良さそうに寝てたから、起こすのもなんかかわいいそう……」

そう言うと、巡音さんは今まで以上に真っ赤になってうるたえた。無防備に寝てたよ、なんて言ったら、パニックになりかねないな。やめておこう。というか……既にパニックを起こしかけている。…話を变えるか。

「ところで巡音さん、昼食はどうする？ 今日はお弁当用意してないみたいだけど」

バッグの類を持っていないところからすると、弁当を持ってきてはいないようだ。まあ俺も手ぶらだけどね。この手の公園なら、公園内に売店ぐらいあるだろう。

「あ、あの……今何時？」

訊かれて、俺は自分の時計を見た。そろそろ一時だ。

「一時になると。で、俺、ここは初めて来たんだけど、売店とかある？」

「ええ、ボート乗り場の近くに」

「じゃ、そこで何か買おうか」

俺の目の前で、巡音さんがしまったと言いたげな表情になった。

「どうしたの？」

「お財布……忘れて来ちゃった……」

財布忘れたって……どれだけ慌てたんだ。思わず笑い出しそうになり、俺は必死でそれを押さえ込んだ。ここで笑うのはまずい。

巡音さんはまた恥ずかしそうな表情で下を向いている。自分でもドジ踏んだと思っっているんだろう。……結構可愛かったりするんだが。

「じゃ、俺がおごるよ」

だからって昼を抜くのは健康によろしくない。

「え……そんな……」

予想どおりの返事が返って来た。……やれやれ。

「あのね巡音さん、俺、空腹の人間前にして、自分だけ食事できるほど神経太くないんだけど」

巡音さんがきょとんとした表情になる。言われた意味がよくわからなかったようだ。

「だからね、俺が代金払うから一緒に何か食べるか、それとも二人して昼飯抜くか、どっちかってこと。で、俺としては腹減ってるからちゃんと食べたいの」

言いたいことは伝わったようだが、今度は俺の目の前で悩み始めた。ああもう。結論が出るまで待つてられない。

「そういうわけだから、食べるもの買いに行こうね」

俺はそう言うと、巡音さんの手をつかんで立ち上がった。当然、引つ張られる格好になった向こうも立ち上がる。俺はそのまま、手を引いて歩き出した。

売店まで移動すると、俺は適当にサンドイッチやら飲み物やらをまとめて購入した。巡音さんは終始申し訳無さそうにしている。

売店の近くには、椅子とテーブルが幾つか置いてあった。暖かい日の昼食時ということではほとんど埋まっていたが、幸運なことに、目の前で一つテーブルが空いたので、そこに向かう。椅子に座ると、

俺はビニール袋の中からサンドイッチと紅茶を取り出して、巡音さんの前に置いた。

「あの……本当にごめんなさい」

「それも正しいから、食べなよ」

巡音さんはしばらく迷っていたが、俺が食べずに見守っていると、おずおずとサンドイッチを手に取った。包みを開けるのにしばらく手間取っていたが、食べたことないのか、もしかしてやがてなんとか包みを開けて、サンドイッチを食べ始めた。……じゃあ俺も食うか。

「……そう言えば巡音さん、『ピグマリオン』のことだけど」

無言で食事をするのも淋しいので、俺は話を始めた。というか、もともと『ピグマリオン』の話をする為に会ったんだよな。

俺の言葉を聞いた巡音さんの表情が、例によってすまなそうなものになる。俺は気づかなかつたふりをして、話を続けることにした。こういう時は、なんでもない態度の方が良さそうだ。

「あの中で、イライザが着物を着るシーンがあったじゃない？ あれ、どう思った？」

巡音さんは思案する表情になった。

「作者は時代性とか、異国情緒とか、そういう雰囲気を出したかったんだろうとは思うの。もしかしたらあの時代のイギリスでは、日本のことが流行の話題だったのかもしれないし。でも、わたしからすると、ちよっとついていけなかったわ」

あ、やっぱり、そう思うわけね。

「着物って、着るのすごく大変なもの。わたしもお母さんに手伝ってもらわないと着ることなんてできないし……外国の人がいきなり見ても、そもそもの着方がわからないと思うわ。それなのに『見事に着付けした』なんて、どう考えても無理だと思うの。羽織って出てくるのならわかるけれど」

へえ、そうなんだ。そういや姉貴も着物着たのなんて成人式の時ぐらいだよな。帰って来るやいなや「あゝ苦しい！ 私結婚する時

は絶対洋装にする！　こんなにギューギューに締め付けられるなんて、耐えられないわ！」って絶叫してたっけ。

「巡音さんって、着物着たりするの？」

「ええ、お正月にね」

……ちよつと見てみたいかもなあ。どんな感じなんだろう。

「着物って、そんなに苦しいの？　成人式の際に姉貴が悲鳴あげてたんだけど」

「基本紐で締めて着る衣服だから……しっかり着付けないと緩んできてしまうの。慣れもあると思うけど、お正月ぐらいしか着ないから、どうしても慣れなくって……」

だから和服って廃れたんだろうか。いや、廃れたって言うと思いで。でも、誰だって楽に着られる方がいいだろう。

「上演する時、このシーンを換えようかなと思うんだよね。うちの部員に着物を着ろって言うのは無理があるし」

「変えちゃったりしていいの？」

「いいんだよ。高校の演劇部で全部を完璧にやるなんて無理があるし、柔軟に対応しないと。『ロボット』の時も、回りくどい台詞とかは結構削ったんだ」

使ったのはネットで見つけた抄訳版なんだが、それでも長すぎる台詞とかがあったので縮めたりした。もちろん削った奴をみんなに見せてチェックはしてもらったぞ。

「でも、着物を着ないとしたら、どうするの？」

「何か適当に服を着せることにしようと思ってるけど……何なら自然だと思う？　独身男の家に若い女性用の衣類があるっての、変だと思うんだよね」

だから作者は「日本土産の着物」ってことにしたんだろうか……。日本人の感覚からすると、着るのは無理だよ。今、巡音さんもこう言ったし。

「家政婦のピアス夫人の若い時の服とかは？　あの人って住み込みよね？」

巡音さんはそんな提案をしてきた。なるほどね……使えそうだ。

「それなら良さそうだ。巡音さんってやっぱり頭いいね」

俺の目の前で、巡音さんは頬を赤らめて俯いてしまった。……照れているらしい。

「台詞の変更とかに関しても、一緒に考えてほしいんだけど、いいかな？」

俺が一人で考えるより、巡音さんと一緒に考えた方がいいものになるだろう。

「あ……ええ」

赤くなっただままで、巡音さんは頷いた。あ……良かった。

全て同じというわけではないけれど（後書き）

目の前にいる相手に気があるから「おごる」という行動になるんだよなあ……。

これがクオだったら、レンはお金を貸して「月曜に返せよ」と言っていたでしょう。

疑問は多くあれど答えは少ない

それからしばらく、俺たちは戯曲の話をしたり、公園を散歩したりして過ごした。巡音さんも午後になると多少は気分が上向いてきたらしく、笑ってくれるようになった。

三時になると、巡音さんは淋しげに「もう帰らなくちゃ。今日はありがとう」と言ってお帰って行った。……本当のことを言うと家まで送って行ってあげたかったけれど、向こうの家の事情を考えると無理だな。

俺も帰ることにする。何気なく携帯を取り出して確認すると、メールが一件入っていた。姉貴からか。チェックすると「昨日買ってきた食材を無駄にしたいくないから、今日と明日の夕飯当番変わってくれない？」と書かれていた。そっぴや明日は姉貴が当番だったわけ。俺としても別に異存は無いので「いいよ」と書いて、メールを送信する。

家に帰ると、姉貴はまだ帰っていなかった。ま、そんなにしないうちに帰って来るだろう。日が暮れるのが早いので、カーテンを閉めて明かりを点け、洗濯物も外しておいてやる。風呂も洗つところ。やっといた方がいいことを全部終わらせると、俺は自分の部屋で、姉貴にどう話せばいいかを考えた。

「あのさ、姉貴」

そして夕食の時間、俺は姉貴に巡音さんのことを話すことにした。

「大事な話だから、真面目に聞いてほしいんだ。その……昨日、巡音さんから聞いたんだけど」

「リンちゃんから？ 何を聞いたの？」

「……姉貴の後輩だつていう、巡音さんのお姉さん。その……なん

でも、部屋にずっと引きこもっていて、もう三年になるんだって
俺がそう言くと、姉貴は箸を置いて考え込んでしまった。

「レン、それ、リンちゃんの方から教えてくれたの？」

しばらくしてから、姉貴が口にしたのはそんなことだった。……

俺が問い詰めたんじゃないのかわりたいらしい。

「……ああ。まあ、その前に俺の方でも『悩みがあるんなら話してくれ』とは言ったけど」

それを聞いた姉貴は、難しい表情でため息をついた。……変なことを言い出さなきゃいいんだが。いやでも、姉貴だって後輩のことぐらい心配だよな。

「リンちゃんは、その他には？」

「お姉さんと全く話ができないことを悩んでた。なんでも喧嘩して一週間近く喋ってないとかで。どうして自分は話ができないのかって」

姉貴は更に難しい表情になって、額を押さえた。ちゃんと考えてくれるのは嬉しいんだが……同時にちょっと怖い。

「あんたとしてはどう思うの？」

「俺としては正直、巡音さんが一人で悩んでも仕方のないことだと思う。いくら巡音さんがお姉さんと話したいと思っても、お姉さんの方にも話をしたくなって気持ちが無いと、どうにもならないんじゃないかって。でも、あんなに深刻な表情されると、そんなこと言えないし」

俺だったら確実に放置するんだが。巡音さんにそれを薦めるわけにもいかない。

「つまり、私にハクちゃんを説得しろと？」

「……ご明察。姉貴、どうにかできない？」

上のお姉さんの方はどうしようもないだろうが、下のお姉さんの方なら、まだ何とかなるんじゃないだろうか。なんか姉貴慕われてたっぽいし。使えるものはなんでも使え、だ。

「姉貴だって気になるだろ。後輩が引きこもりだなんてさ」

「あゝ、そのことだけ……実は私、知ってたのよね」

姉貴の爆弾発言に、俺は文字通りその場に固まった。どういうことだ？

「知ってたって……」

「ハクちゃんが引きこもってること」

しれっとそう答える姉貴。ちよっと待て。姉貴そのことを知ってたわけ？

「……知ってたんなら、なんで俺に教えてくれないんだよっ!？」

「ハクちゃんから、このことは黙っていてくださいって言われていたから。でもまあ、リンちゃんから教えて貰ったんなら、もういいわね」

普段どおりの口調で姉貴は言った。……何だか面白くない。そりゃ、その、ハクさんって人が話すなって言っただから、姉貴が黙っていたのは当然のことではあるんだが……。

「いつから知ってたの？」

「リンちゃんがこの家に来た時、態度が変わったからハクちゃんに連絡取ってみたの。それからまあ、色々あってね……引きこもってるって教えてくれたのは先週よ」

確かに……姉貴は「黙っていられる」タイプじゃない。しかし、俺に何も言わず、さっさと連絡を取っていたとは……盲点だった。

あれ……てことは、ハクさんって人と話したんだよね？

「姉貴……もしかして、引きこもってる理由も聞いた？」

「聞いたけど、あなたには教えてあげられないわよ。ハクちゃんのプライベートに関わるしね」

予想どおりの返事が返って来た。しかし……妹にも話してない事実を話してもらえる辺り、姉貴はよほど信頼されているらしい。

「理由自体は言わなくていいから、一つだけ教えてくれ。ハクさんの引きこもりの理由は、巡音さんじゃないよね？」

多分違っただろうとは考えているけど、ここで確認を取っておこう。「リンちゃん？ 全然違うわよ。何、まさかリンちゃん、自分のせ

いって思ってるわけ？」

俺は頷いた。

「そこだけは全力で否定しておいてあげて。リンちゃんは無関係だから」

どうやら、巡音さんの懸念は完全に杞憂のようだった。姉貴がここまで断言する以上、間違いはないだろう。

でも……だとすると、お姉さんはなんで引きこもりやってるんだろう？ 俺は目の前の姉貴を見た。……絶対に教えてくれないよな。姉貴はそういう人間だ。仕方ない。

「話戻すけど、姉貴、ハクさんって人のこと、説得できない？」

「リンちゃんと話をしろって？」

「ああ。正直、あの状態の巡音さんを見てられないよ。お姉さんのことで滅茶苦茶悩んでるんだぜ。あのままじゃ心労で倒れると思う。ちよつと大げさすぎるかなあ……いや、いいや。これくらい言うてしまえ。」

姉貴はというと、また思案する表情になった。

「……やってはみるけど、保証はできないわよ。ハクちゃんは家族に対して、強い不信感を抱いているし。正直、私に色々と話してくれる気になっただけでも驚きなのよね」

そんなにひどい状態なのか。まあ、ひどいから引きこもりなんてやってるんだらうが……。

「リンちゃんには、年単位で蓄積された負のエネルギーをどうにかするのは大変だから、しばらく時間くれって言うつといてちようだい」

「……わかったよ」

こりゃしばらく様子見か……。巡音さんをお姉さんのことで安心させることは、当然無理なようだ。

……じゃあ俺は戯曲の方に集中するか。他に考えることがあれば、巡音さんだつて気が紛れるだろう。

疑問は多くあれど答えは少ない(後書き)

ハクが引きこもってる理由は外伝【シンデレラごっこ】参照。
次回は荒れる予定。

見てもいいが触るのはいけない

日曜日を一日使って、俺は『ピグマリオン』をPCのテキストデータへと移した。かなり面倒だし時間がかかったが、ネットに公開されているフリーの訳とかが無いんだから仕方がない。これで、後はこのデータのどこに修正をかけるかを決めて、決定稿になったらプリントアウトしてからコピーしてみんなに配ればいい。

巡音さんのお姉さんのことは、姉貴に任せとこう。俺は全然接点が無いから動きようがないしな。……姉貴が上手くやってくれることを祈ろう。

そして次の日、俺は普段どおりの時間に登校した。校舎に足を踏み入れようとした時、聞き覚えのある声が聞こえて来た。

「待ってくださいっ！ 僕のどこが駄目なんですか？」

「いやだから、さつきも言ったけど、わたしは全然あなたのことを知らないもの。それでつきあってくれて言われても無理よ……というか、手、離して……」

へ？ 驚いて声の聞こえて来た方を見る。巡音さんと、演劇部の後輩のコウだ。何やってんだこんなところで。大体、一年の下駄箱ってここじゃないぞ。それにコウの奴、なんで巡音さんの手をつかんでんだ。

「これから知ってくればいいんですっ！」

「はい……？」

「僕は巡音先輩が好きなんですっば！」

コウはそう言うやいなや、巡音さんに抱きついた。巡音さんが悲鳴をあげる。あの野郎！

「何やってんだバカ！ 巡音さんから離れる！」

俺はコウの肩をつかむと、力づくで巡音さんから引き剥がして突き飛ばした。弾みでコウが派手な音を立てて、下駄箱に激突する。

巡音さんというと、床にぺたんこ座り込んで震えていた。顔が

蒼白になっている。よほどショックだったらしい。……そりゃ、ろくに知りもしない男にいきなり抱きつかれたら、どんな女の子でもショックだろう。増してや巡音さんは箱入りだ。

「巡音さん大丈夫？ 立てる？」

大丈夫かなと思いつつ手を差し出すと、巡音さんはその手をつかんでくれた。そのまま引つ張って、助け起こす。

「鏡音先輩いきなり何するんですかっ!？」

突き飛ばされたコウが、そんな文句を言っている。お前……どの面下げて、そんなこと言ってたんだ!？」

「それはこっちの台詞だっ! 巡音さんに何やってんだよ!」

「僕はただ、巡音先輩に告白をしてただけです」

「お前が今やったことは、告白じゃなくて痴漢って言うんだ、バカ!」

全く……こいつが妙に惚れっぽいのは知ってたが、たったあれだけの遭遇で巡音さんに目をつけるとは。多分一言も話してないだろうに。

「何やってんの？」

俺がコウを締め上げようとしていると 二度と巡音さんにちよつかい出さないように、きついお灸を据えておいた方がいいだろう

別の声がかげられた。そっちを見る。……蜜音だ。

「あ、蜜音。今このバカが」

言いながら、俺はコウを指差した。

「巡音さんにいきなり抱きついたから締め上げてるとこ」

まだ真っ青な顔で震えている巡音さんを見た蜜音は、気の毒そうな表情になった。それからコウを見て、今度は呆れ返った表情になる。そっぴやコウって、入部した当初は蜜音を追い掛け回していたんだよな。でもって張り倒されたんだっけ。

「……あんた、バカ？ 何だってまたそんなことやったのよ？」

冷たい口調で蜜音はそう訊いた。

「蜜音先輩……もしかして、ジェラシーですか？」

蜜音は何も言わずに、自分の通学鞆でコウを殴った。コウがぎゅと叫んでうずくまる。

「ったくどんだけバカなんだか……。鏡音君、このバカどこかに埋めてきて」

「そうだな、そうするか」

普段ならジョークと聞き流すんだが、今回はかりは本気で頭に来た。

「あの……さすがにそれはかわいそうだと思うの……」

巡音さんがおずおずと口を挟んだ。いや、このバカに情けはかけなくていいから。何故かっていうと……。

「巡音先輩っ！ 僕を気遣ってくれるんですかっ!？」

言わんこっちゃない。コウは感激したのか、凄じ勢いで巡音さんがけてダツシュしようとした。もちろん抱きつく前に張り倒した。これ以上こんな奴を近づけられるか。

「いい加減にしるよお前は!」

「巡音さん、バカに情けはかけるもんじゃないわ。つけあがるだけだから」

蜜音が巡音さんにそう言っている。全くもってそのとおりだ。特にこいつ。

「あれ、どうしたんだお前ら、そんなところに集まって」

「おはよう……リンちゃんどうしたの!?! 真っ青じゃない!」

あ、クオと初音さんだ。初音さんはさっさと巡音さんの傍に駆け寄って、心配そうにその顔を覗きこんでいる。

「ここにいるバカが」

俺はもう一度コウを指差した。

「巡音さんにいきなり抱きつくというふざけた真似をしたから、締め上げてるんだよ」

クオと初音さんは、どっちも唾然とした表情になった。そりゃそうか。

「とりあえず埋めた方がいいと思うのよね。その方が世の中の役に

立つと思うから」

淡々と言う蜜音。コウに向けられる視線は、当たり前だがひどく冷たい。

「いやそれは……さすがにまずいだろ。法に触れるぞ」

これはクオだ。えらく弱気だな。コウがクオを見る。

「初音先輩っ！ 僕は初音先輩のアドバイスに従っただけなんですよ！ 何か言ってくださいよ！」

その場にいる全員の視線が、クオに集中した。クオが思わず後ずさる。

「クオ、お前……このバカに巡音さんに抱きつけて言ったのか？」

返答によつては、クオであつてもただじゃおかない。

「そんなこと言つてねえよっ！」

「初音先輩、嘘ついて自分だけ責任回避する気ですか！？」

「何が責任回避だ、俺はただ、グミを見習つて積極的にアタックしてみたらつて言っただけだぞ。それがどうして抱きつくことになるんだっ！？」

「グミはいつも躍音先輩に抱きついてたじゃないですかっ！」

「グミとグミヤは以前からの知り合いじゃねえかよ！ お前とは全然状況が違うし、女が抱きつくのと男が抱きつくのとは意味合いが違うんだ、バカ野郎！」

クオがコウの頭をばしつとはたく。コウは涙目でクオを見上げた。

「初音先輩ひどいです……」

「うるさいこのたわけ！」

「あの……ちよつといい？」

初音さんが大きな声を出した。みんなそつちを見る。

「わたし、リンちゃんを教室に連れて行こうと思っただけ。そつちの方が落ち着くと思っし」

あ……確かに、いつまでもここに立たせておくのもよくないよな。

「その方がいいかもね……巡音さんだっけ？ 平気？ 教室まで行く？」

「あ……うん」

蜜音が巡音さんを気遣っている。巡音さんはまだ青ざめていたけれど、頷いた。

「じゃあ初音さん、巡音さんのことお願い」

「わかったわ。リンちゃん、行こっ」

初音さんは巡音さんの手を取って、行ってしまった。俺とクオと蜜音とコウが残される。と、そこへ……。

「よっ、どうしたんだ雁首揃えて」

「先輩がたおはようございまーす！ コウ君もついでにおはよう」

グミヤとグミがやってきた。腕を組んでいたりする。……はあ。

俺はため息混じりに、グミヤたちに事情をざっと説明した。途端に、二人とも呆れた表情になる。

「お前は一体何考えてんだ……」

「コウ君今度は巡音先輩にちよっかい出したの？ 懲りないねえ」

よってたかつて責められたせいか、さすがにコウも少々反省した表情になりだした。といっても、許す気にはなれないんだが。

「あ、おい、グミヤ。こいつどうする？ レンと蜜音は埋めてしまえって言うんだけど」

クオが困ってますと言いたげに、グミヤにそんなことを訊いた。

「あたしはそれに賛成です。コウ君は一度埋まった方がいい」

「賛成三、反対一、というわけで埋めることに決定」

「ちよっと待て蜜音、グミヤがまだ何も言っていないぞ」

「関係ない。躍音君が反対しても三体二だから」

「だからってなあ！ グミヤ、お前部長なんだから何とかしろよ」

「都合のいい時だけ部長扱いするなよ。……まあでも、これは問題だなあ」

グミヤはのほほんとした口調で言って、コウを見た。コウが怯えた表情になる。……と言っても、正直こっちは苛立ちしか感じない。どれだけ巡音さんを怖がらせたと思ってるんだか……。

「コウお前、自分が何やったかわかっているのか？」

「だから僕は愛の告白を……」

蜜音はコウのすねを蹴った。……素早い。俺が蹴ろうと思っただのに。

「あんたのやったことで、巡音さんがどれだけ怯えてたか理解してるの？」

「でも怒ってはいませんでしたよ」

「シヨックで怒る気力が湧いてきてないだけだ、このバカ！」

俺は怒鳴った。怒ってなけりゃ許してもらえろと思ってるのか、このバカは。どういう理屈だ。

「レンも蜜音も落ち着け。俺の話はまだ終わってない。とにかくコウ、お前のやったことは警察に通報されても文句は言えないことなんだ。告白するぐらいならまだしも、なんで抱きついたりしたんだ」
「こんこんと、グミヤが諭すような口調で言う。コウはというと性懲りも無く、同じ言い訳を始めた。

「だからそれはグミを見習ったからであって……」

「あのねえコウ君、あたしとグミヤ先輩は中学時代から同じ学校で部活も一緒に、気心の知れてる仲なの！ 状況が全然違うんだってば！」

「……だからって、挨拶代わりに抱きつくもんじゃないと思うが。つくづくこいつはよくわからん。」

「あのな、コウ。俺とグミじゃ基本的な腕力が違うだろ。グミが全力で抱きついてきたって、俺が嫌ならグミを振りほどくぐらい簡単にできる。けど、俺の方がそれをやったらグミは逃げられない。どういふことかわかるか？」

「えーと……？」

肝心のコウは首を傾げている。……お前、グミヤからこれだけ丁寧に説明されてもわからないのか？

「男が本気で抱きついたら女の子が逃げられないから、そういうことはするなっただことなんだが……お前、わからないわけ？」

「あたし、グミヤ先輩になら幾らでもぎゅーってされたい」

横からいらんことを言うグミ。黙ってるお前は。

「うんうん、グミって柔らかくて抱き心地いいんだよな。髪もいつもふわふわでいい匂いがするし……」

……それは惚気か？ グミヤの奴、グミとつきあうようになってから、段々壊れてきたような気がする。

「そう言えば巡音先輩も抱き心地が良かったです。……で、どうやったらグミみたいに言ってくれるようになるんですか？」

コウの奴は、全然状況がわかってないという表情で、そんなことを言った。……お前という奴はっ！

「もういいこいつは埋める！」

「あ、手伝わわ」

「レン、落ち着けっ！ 蜜音も煽るんじゃない！」

クオが俺の制服をつかんだ。なんで止めるんだよ。こいつは埋めた方が世の中のためだぞ。

「あのなあコウ、好きでもない男に抱きつかれて喜ぶ女の子なんかいないんだよ。グミがああ言うのは、グミが俺のことを好きだからだ。お前どうしてそこら辺が理解できないんだ？」

グミヤは深いため息をついて、処置なしと言いたげにコウを見た。だから埋めようぜ。

「コウ……反省の色が無いようなら、今から先生がたのところにお前を連れて行って、全部話すぞ。女子生徒に抱きついたなんて知れたら、お前、下手したら停学かもな」

コウは青ざめた。ようやく状況が多少は理解できたらしい。これで理解できたというのが謎なんだが。

「ああああの、僕はどうすれば……」

グミヤはぐるっとその場にいる全員を見回した後、こう言った。

「レンと蜜音は埋めちまえて言うが、それはさすがに犯罪だから却下。……そうだな、部室の掃除を一ヶ月で勘弁してやるよ」

「僕一人ですかあ!？」

「その程度で済んだんだぞ。感謝しろ、バカ！」

クオがコウの後頭部をはたいた。コウがまた涙目でクオを見る。
「それと巡音さんであれ、他の女子であれ、今度また同じことをやったら、その場で退部だからな」

グミヤが付け加える。もう退部でいいと思うけどな。俺はコウの襟首を引つつかんだ。

「コウ、お前は二度と巡音さんに近づくな」

「えっ……？　ただ話をするだけでも？」

「いいから近づくなって言うてんだよ！」

こいつを近づけるのは、巡音さんの精神衛生上よろしくない。しつかり釘を刺しておかないと。

「鏡音先輩がどうしてそんなことを言うんです？」

コウはむっとした表情になった。どこまでこいつはバカなんだ。

「お前、巡音さんにトラウマ級のシヨックを与えたってこと、理解してないの？」

「鏡音先輩、巡音先輩とつきあってるわけでもなんでもないじゃないですか。なのになんでそんなこと言われなくちゃならないんです」

あ、そう。そういうこと言うわけね、お前は。……ふざけるな。

「じゃあ訊くけど、お前、巡音さんのどこを気に入ったわけ？」

「え……綺麗な人ですよね」

「……それだけ？」

冷たい口調で訊くと、コウは気色ばんだ。

「それだけって……あ、後、なんというか、大人しそうで上品な感じがしますよね」

大人しそうだから迫っても張り倒されなと思ったのか、こいつは。どれだけ俺を怒らせたら気が済むんだ？

「あんな人とつきあえたらいいなあと思って……」

「お前は結局、巡音さんのこと何も知らないし、わかってないじゃないか。そんな浮ついた気持ちで告白したのか？」

あんな子は他にいないんだよ。お前が思ってるより、巡音さんはずっと真面目で繊細なんだ。それを理解できそうにない奴を近づけ

られるか。

「浮ついてなんかいませんよっ！」

「ちよつと可愛い子を見れば」わあ、あの子可愛い、好きになっちゃった』って、ふらふらふらふらしてるお前に言われても説得力ないよ。お前がそんなふうにはひたすらついてんのは、中身つてものがないべらっぺらな人間だからなんだろ」

「僕にだって中身ぐらい……」

「俺が見たところ、お前には中身もなければ主体性もない。でなきや一週間単位で違う女の子にときめけるもんか。蜜音に張り倒された一週間後に、涼音先輩に迫ったのどこのどいつだよ。お前の気持ちなんて、吹けば消える口ウソクみたいに儂いんだ」

「そんなことないですよっ！ 僕は真剣ですよっ！」

「じゃあどうして向こうを思いやってやれないんだよ!? 巡音さんの気持ち、一度だって考えてみたのか!? そんな軽い気持ちでるくに知らない奴から告白されて、あげくにつきあってくれって言われて、巡音さんが承諾するわけないってことになんで気づかないんだよ!? それだけならまだしも、巡音さんが断ったら抱きつきやがって。全然知らない奴からいきなりそんなことされて、向こうがどれだけ怖い思いをしたと思ってるんだ!? ずっと真つ青な顔で震えていたじゃないか。賭けてもいい、向こうは二度とお前の顔なんて見たくないって思ってるよ。その辺りわかってんのか!？」

俺が一気にまくしたてると、コウは気押された表情で黙り込んでしまった。

「あ、あの……… すいませんでした。僕もう行きます」

それだけをぼそぼそと言うと、コウは去っていった。さすがに少々言い過ぎただろうか。……いや、あれくらいはやっつくべきだ。これでもう巡音さんにちよっかいは出さないだろうし。

張本人が去っていったので、その場にいた皆もてんでんばらばらに去っていった。あ、そっぴや靴を履き替えてなかつたぞ。俺は自分の下駄箱に向かった。

「なあ」

俺が下駄箱から上履きを取り出してしていると、クオが声をかけてきた。お前の下駄箱はもう少し向こうじゃなかったっけ。

「なんだよ」

「お前、さっきはなんであんなにムキになってたわけ？」

「何が訊きたいんだ？」

「コウに近づくなつてすごんでただろ。なんであんなことしたんだ？」

「なんでって……巡音さんに近づいてほしくなかったからに決まっている。」

「あいつがまたちよっかい出したら、巡音さんがシヨックで倒れるかもしれないだろ」

綺麗だけど繊細で壊れやすい、ガラス細工みたいな心の持ち主だ。コウが謝罪にでも行って、巡音さんが「気にしなくていいから」なんて言つて、感極まったあいつがまた抱きついたりしたら……それこそ本当に寝込みかねない。

「だからさ……どうしてお前がそんなことまで気にするんだよ。コウも言つてたけど、お前、あの子の彼氏でもなんでもないじゃん。俺からすると、お前の方がよくわかんねえよ」

「はあ？ クオの奴、急に何を言い出すんだ。」

「……お前、これが初音さんだったらどうする？ コウの奴が初音さんに抱きついたら？」

「その場で張り倒して、簀巻きにしてから川に放り込む」

クオの返事は素早かった。結局お前も同じようなもんじゃないか。「そういうことだよ」

「答えになってねえよ！ 俺とミクは従姉弟だし、俺は今ミクの家に厄介になつてるから、ミクになんかあつたら守つてやるのは俺の義務だ。でも、お前とあの子は違うだろ」

「そりゃ、血の繋がった親族じゃないが……だからって庇つていけないって理由はない。」

「うるさいな、別にいいだろ。それに、もとはと言えばお前があのバカに余計なこと言うから、こんなことになったんじゃないか」

わざわざバカをけしかけやがって。調子に乗せたバカってのはとにかく厄介なんだ。

「抱きつくなんて思ってたんだよっ！」

そう答えるクオ。ふーん……抱きつくとは思ってなかったねえ。

それはまあ、そうだろう。でもなクオ、お前があのバカけしかけたのは別の理由があるだろ。

「でもお前、巡音さんが困ったらいいって思ってただろ？ お前、巡音さんのこと嫌いだもんな」

俺がそう言つと、クオは呆然とした表情になった。……やっぱりそうかよ。

「なっ……？」

「それは別にいいよ。お前の好悪にまであれこれ言う程、俺も暇じゃないし。でも、だからってバカをけしかけるような真似はやめろ。さっきも言ったけど、巡音さんは心底怯えてたぞ。大体あいつがバカで昇降口でこんな真似したからこの程度で済んだけど、あいつが巡音さんを、人気のないところに呼び出してたらどうなってたと思う？ 巡音さんの心には、一生消えない傷が残ったかもしれないだぞ。それをちよつとでも考えてみたのか？」

……改めて考えてみると、つくづくあいつがバカで助かった。

「幾らなんでもそこまでは……」

「女の子をじかに抱きしめるのがどういふことなのか、お前全然わかってないだろ。想像するのよりずっと刺激的なんだぞ」

ミラーハウスの中で巡音さんを抱きしめた時、俺は巡音さんを離したくないと思った。……あれから時々、巡音さんをまた抱きしめたい気持ちに駆られる時がある。

「とにかく、もう二度とああいうことはやるな」

それだけ言つと、俺はクオに背を向けて、自分の教室へと向かった。

自分の教室に入った俺は、巡音さんの席の方を見た。あれ……蜜音がいるぞ。巡音さんと初音さんと何か話している。蜜音はB組だから、多分様子を見に寄ったんだろう。

とにかくさっきのこと、話しとくか。俺は三人に近寄ると、声をかけた。

「巡音さん、もう平気？」

巡音さんがびくりした表情でこっちを見る。俺をみとめると、恥ずかしそうに下を向いてしまった。昇降口にいた時と比べると、大分落ち着いたみたいだな。頬に血の気が戻ってる。

「え、ええ……さっきは本当にありがとう」

「あのバカには、二度とちょっかい出すなってきつく言っておいたから。だからもう近づいて来たりはしなないと思う」

俺がそう言うと、巡音さんは安心した表情で大きく息を吐いた。初音さんが巡音さんに向かって「良かったね、リンちゃん」と言っている。

「きつくってレベルじゃなかったけどね」

「なんだよ蜜音……何が言いたいんだ。」

「あれぐらい言っただってバチは当たらないだろ」

「それは私も思うけどね。これであのバカも懲りて、ちょっとは成長してくれるといいんだけど。どうかしらね。バカは死ななきゃ治らないって、昔から言うし」

相変わらずきつくないなあ……。蜜音って結構見た目と中身のギャップが凄いなよな。後、あいつの場合は死んでも治らないような気がする。

「あいつの場合は死んでもじゃないか？」

「……そうかもね。ああ、私はもう自分の教室に戻るわ。それじゃあね、巡音さん、初音さん」

蜜音はそう言うと、教室を出て行った。

「じゃあ、俺も自分の席に戻ってるから」

そう言っただけで自分の席に向かおうとすると、珍しく巡音さんが俺を引きとめた。

「あ……待って！」

「何？」

巡音さんは俯き気味に、視線をさ迷わせている。……せかさな
方が良さそうだな。

「あ……その……あ、あの……放課後に戯曲の話の続き、できる？ その、無理にとは言わないけど……」

戯曲の話ね。一応今日も部活なんだが……。いや、引き受けよう。今度は押しかけてこないように、グミヤにしっかり念を押しておかないと。

「あ……戯曲ね。今日は……」

言いかけた時、携帯が鳴り出した。……誰だよこんな時に。

「ちよつと失礼」

俺は携帯を取り出して確認した。グミヤからだ。見ると「コウがあの状態なので、冷却期間を置くことにする。よって今日と明日の部活はお休み」と書かれている。そういうことにしたのか。「了解」と書いたメールを送信する。衣装の話は……次の部活の時でもいいか。グミヤだけに話しても仕方ないしな。

「メール、誰から？」

巡音さんが訊いてきた。

「グミヤから。今日と明日は部活を休みにするって。……そういうわけで暇ができたから、戯曲の話しようか」

休みになったってはっきり言っていた方が、巡音さんも安心するだろう。

「あの……休みになったって、さっきのことのせい？」

「そうだけど、悪いのはコウだから巡音さんが気にすることないよ」

俺はきっぱりとそう言い切った。あのバカのこと巡音さんが悩むことなんかない。

「あ……うん。そ、そうするね。じゃあ、放課後に」

巡音さんがそう言ったので、俺は今度こそ自分の席に戻った。自分の席に着いて後、巡音さんの方を見ると、初音さんと何か話している。初音さんはえらく嬉しそうだが……何かいいことでもあったんだろうか。

あまりそつちばかり見るのもあれなので、俺は真っ直ぐ前を向いた。……けど、気になるんだよな。色々……。……。

見てもいいが触るのはいけない（後書き）

この「コウ」という男子生徒はオリジナルキャラで、バカって設定（我ながらひどい）なんですけど……書いているうちに拍車がかかってしまいました。

ここ一応進学校なんですよね。多分、勉強だけ是可以のでしょう。

馴染んだ君の姿に

巡音さんは同じクラスなわけだから、何かとというとその姿は俺の視界に入る。授業を受けているところや、初音さんと話しているところ。俺は何度となく、その姿を目で追ってしまっていた。……いったい何をやっているんだ、俺は。下手をしたら俺の方が危ない奴だぞ。

そうこうするうちに放課後になった。初音さんが手を振って帰って行く。俺は巡音さんに声をかけることにした。

「……巡音さん」

巡音さんが弾かれたように顔をあげる。俺が近づいていたことに気がついていなかったようだ。何だか落ち着かない様子だけ……。

あ、そうだ。戯曲の話の前に姉貴からの話をしておかないと。朝のうちに言っておこうと思っていたのに、コウが起こしたごたごたのせいですっかり忘れていたぞ。

「先にちよつとお姉さんの話をしてもいい？」

「え……ええ」

「姉貴にハクさんのことを話してみたら、話をしてみるとは言ってくれた。……やっぱり姉貴も心配らしくって。ただ、難しいケースだから、いい結果が出るとは限らないとも言われちゃったんだよ」
姉貴が既に知っていたことは伏せておくことにする。……説明するとややこしくなりそうだし。肝心なことが伝わればいいんだ。

「……良かった」

巡音さんは安心した表情で、そう呟いた。えーと、まだ、上手く行くと決まったわけじゃないんだから……。

「巡音さん、さっきも言ったけど、まだ上手くいくって保証はないんだよ。姉貴もできる限りのことはしてくれるだろうけど、やっぱり限界とかはあるだろうし……それに時間もくわって言われた。年単位で溜め込んでいる負のエネルギーをどうにかするのは、大変な

んだって」

「ハク姉さん、引きこもってからはわたし以外の人とはほとんど話をしていないの。だから、誰か他の人と話せるだけでも、いいことなんじゃないかなって……」

確かにその状況だと、話せる相手ができただけでも進歩かもなあ。引きこもりの理由とやらも喋ったみたいだし。

俺がそんなことを考えていると、巡音さんは自分の鞆の中から何かを取り出した。

「あの……これ、良かったらお姉さんと食べて。土曜日のお礼と、ハク姉さんのことのお礼のつもりで焼いたの」

目の前に置かれたのは、クッキーの入った袋が二つ。え……今、巡音さん、「焼いた」って言ったよな？　じゃ、これ、手作りか？

「……巡音さんが焼いたの？」

俺はびっくりしてクッキーの袋を手を取った。……いや、こんなことを言うのもなんだが、俺の周りにこんなものを手作りする奴はいなかった。母親も姉貴も料理はできるが、こういうものを作ったことはない。

目の前で、巡音さんは赤くなって頷いた。

「器用なんだね」

最初に見た時は売ってる奴かと思ったぞ。……というか、わざわざ焼いてきてくれたのか。うーん、それって……。

「お母さんがお菓子を作るのが好きで、わたしに作り方を教えてくれたの。お母さんみたいには作れないけど、ちゃんと食べられるから」

赤くなって下を向いたまま、巡音さんはそんなことを言った。……

……そう言えば、姉貴が巡音さんはお母さん似だと言っていたような

「ありがと。帰ってから姉貴と食べることにするよ」

姉貴と分けるのがもつたいないような。俺はそんなことを考えながら、クッキーの袋を自分の鞆に仕舞いこんだ。

巡音さんからクッキーを受け取った後、俺たちはコンピューター室に移動した。『ピグマリオン』のテキストデータをUSBメモリに入れて、持ってきておいてあったので、それを見ながら話をしようと思ったのだ。

学校のコンピューター室は、基本的に自由に使える。ネットを閲覧するには制約があるが、今回はデータをいじるだけだからネットはいらない。俺はPCの一つの電源を入れると、持ってきたUSBメモリを差し込んで、ファイルを表示した。

「鏡音君って、自分のパソコンを持っているの？」

「ああ。姉貴のお下がりだけだね。巡音さんは？」

「わたしは持っていないの。お父さんが、高校生の間は駄目だって」
巡音さんの場合、経済的な事情じゃないのだけは確かだな。うちの学校はコンピューターの授業があるし、あった方が便利だとは思うけどね。

「とりあえずこのままだと長いから、削れそうな場所は削ろうと思うんだよね」

「最初のイライザのお部屋のシーンとか？ 無理に入れなくても、モノローグとかを語らせたら話は通じるんじゃないかしら」

ああ、確かに。あそこはセットの設定が細かい割に、出てくるのはワンシーンだけだから、削った方が楽そうだな。俺はデータの中に「削る」と書き込んだ。

「データ、いじっちゃって大丈夫？」

「ちゃんとバックアップは取ってあるよ」

テキストファイルは軽いから楽なんだけど、細かい装飾とかがでないんだよな。まあ、見りゃわかるからいいか。

「あの……鏡音君」

「何？」

「ラスト……どうするの？」

そうだ、その問題が残ってたんだっけ。うーん……原作を貸して

くれた上に協力してもらってる巡音さんにこんなこと、言うのは何なんだが……。

「……俺としては映画の方がいいと思うけど」

くどいようだけどフレディと一緒になられるのは嫌なんだよ。巡音さんは俺の目の前で考え込んでいる。

「じゃあ映画の方にする？」

しばらくして顔をあげた巡音さんは、そんなことを言った。あれ？

「いいの？ 原作どおりの方がいいって言ってなかった？」

「色々考えてみたんだけど……映画の方が、お客さんが想像する余地があるんじゃないかって気がしてきたの。それに、フレディと一緒にになるにせよならないにせよ、教授とあのままさようならって良くないと思うし」

巡音さんにどういう心境の変化があつたのかはよくわからないが、強引に俺の意見を押し通すのは嫌だったので、こう言ってくれてちよつとほつとした。

「じゃあ映画の方ということで」

俺は終盤に「結末は映画の方にする」と書き加えた。

とまあこんな感じで、俺は巡音さんと『ピグマリオン』に修正を加えた。やっていて気がついたんだが、巡音さんは言葉に関する感性が図抜けていた。舞台の演出に関しても、劇場に通っている経験からか、細かいアイデアを出して来たりもした。

……コウの奴さえいなけりゃ、巡音さんを演劇部に誘ったんだがなあ。あいつがいるんじゃ、無理だ。

「演劇って、夢を形にすることなのね」

作業の最中、巡音さんが不意にそう言った。

「どういうこと？」

「作家が頭の中で描いた夢を、形にして見せてくれるのが演劇なんだって思ったの。戯曲は、上演されて初めて命を吹き込まれるんだ

るつって」

うーん……俺は中高とずっと演劇部で、もちろん演劇が好きだからやってるわけだが、こういう風に考えたことはなかったな。

「巡音さんって……時々詩人みたいなことを言うね」

普段から文学ばかり読んでるところこういう風になるのかな。……いやそれは違うか。読むだけではきつと、こっちはならない。

「好きな詩とかあるの？」

「ディッキンソンとか、ヒメーネスとか……」

……全く聞いたことがない。もともと詩とかには詳しくないから仕方がないんだが。小説は結構読んだが、詩には縁が無かったしな。

「どんな感じの詩？」

巡音さんは視線をやや上に向けて、こっぴどに口にした。

「希望は羽根のある小鳥

魂の中の止まり木に止まって

言葉のない歌を歌う

歌い止むことはない 決して

優しく響くその歌は 嵐が吹き荒れる中 聞こえたの

嵐の中は苦痛に違いない

小さな小鳥は迷ってしまうだろう

多くがその歌で心温まるというのに

その歌を聞いたのは凍える北の地

そして見知らぬ海の上

けれどもいかに辛い時でも

この小鳥は餌を求めない わたしからは「

……可愛い詩だね」

俺がそう言うと、巡音さんは照れたように微笑んだ。

「ディッキンソンの詩は可愛らしいのだけれど、でもそれだけじゃない感じがするの。ぎゅっと胸がしめつけられるような……淋しさというか、切なさというか……そんなものを感じることがあるのよ」「こっぴどいう「好きな作品」について語っている時の巡音さんの瞳は、

とてもきらきらしていて、どこか遠くの見えない世界を見ているみたいだ。それを綺麗だなと思う一方で……苛立ちに近いものを感じてしまう自分がいた。

「巡音さん、明日は時間取れる？ 俺はさつきも言ったけど、明日も部活休みになったから暇なんだよね」

色々話し合ったりなりなだりしていたこともあり、今日一日で全部終わらせることはできなかった。それは仕方がない。学校はもうちよつと後まで開いてるけど、巡音さんは門限がある。

「わたし……明日は部活があるんだけど……」

巡音さんはすまなそうな表情でそう言った。そう言えば、巡音さんって何の部活やってるんだっけ。

「あ、そうなんだ。何部なの？」

「英会話よ。火曜と木曜が活動日なの」

英会話だったんだ。英語で喋ったりするのかな。

「明日、部活休んじゃってもいいけど」

巡音さんはそんなことを言い出した。さすがにそこまでしてもらうのは……。

「いやそれはまずいでしょ」

自分がこの前部活を休んだことは、棚に上げる俺であった。

「大丈夫、忙しい部じゃないから。部長はミクちゃんだから、話せばわかってくれると思うの」

英会話部の部長って初音さんだったのか。初めて聞いたぞ。

「そうしてもらえると俺としてはありがたいけど……無理はしないでくれよ」

これが原因で、巡音さんと初音さんの仲にひびが入ったら申し訳ない。

「うん……そうするね。あ……もし、ミクちゃんも参加してみたいって言ったら、一緒でもいい？」

へっ？ 初音さんも一緒って？ 初音さんも交えて話し合いをするってことか？ どうしてそんな発想になったんだ。そもそも、俺は初音さんのことはよく知らないし……。

反射的に「それは嫌だ」と言いそうになり、俺は必死で言葉を押し殺した。こんなことを言うのはまずい。

「あの……ミクちゃんだけじゃ気を遣っちゃうって言うんなら、ミクオ君も一緒でも……」

俺の沈黙をどういう意味に取ったのかはよくわからないが、巡音さんはそんなことを言い出した。クオが一緒なら俺が気を遣わずに済むと思ったようだ。えーと、参ったな……。

「船頭多くして船山に登るって昔から言うし、人数は増やさない方がいいと思う」

「三人寄れば文殊の知恵とも言わない？」

首を軽く傾げて、巡音さんはそう言った。肩の辺りで切りそろえられた髪がふわっと揺れる。

「……クオは恋愛物嫌いだから、多分、呼んだら脇でぎゃーぎゃー不満を言い続けると思うんだよ。だから俺としては、こういう作業をクオと一緒にやるのはパスしたい」

実際、あいつを呼んだらうるさいだろう。

巡音さんもそれで承諾してくれたので、この話はここまでになった。データを保存して、USBメモリを抜く。

「校門まで一緒に行く？」

俺はそう持ちかけてみたけれど、巡音さんは首を横に振った。

「けど、もう暗いよ」

「一緒にいるところを運転手さんに見られたくないの。男の子と一緒にって報告されたら、わたし、多分外出禁止にされてしまうわ」

……つくづく、巡音さんの親は異常だと思う。ちよつとでも目を離したら娘がグレるとでも思っているんだろうか。でも、もし巡音さんがグレたとしたら、グレた巡音さんってのは想像できないが、それは目を離れたせいじゃなくて、この厳しすぎる監視のせい

だと思っぞ。

巡音さんは淋しそうな表情で下を向いている。細い肩に手を伸ばしかけて、俺ははっとなった。今ここで触れるのはまずいんじゃないのか？

でも……ちよつとぐらいなら……。肩に触れるぐらいなら……。

俺は悩んだあげく、巡音さんの肩に自分の手を置いた。巡音さんがはつと顔をあげる。驚いていた表情がふつと和らいで、それから巡音さんは自分の手を俺の手に重ねてくれた。俺の手よりずっと小さくて華奢な感じのするその手は、体温が低いのか、少しひんやりとしている。冷たい手、か……。

「……今日は色々ありがとう。じゃあ、わたし、帰るね」

巡音さんは微かに微笑んで、コンピューター室を出て行った。

馴染んだ君の姿に（後書き）

さすがにロドルフォみたいな真似はできなかつたようです。
まあ、冷えてるわけじゃないからそういつわけにもいきません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5419v/>

アナザー：ロミオとシンデレラ

2011年12月10日00時48分発行